

국제학술대회

이화사학연구소 제33회 정기학술대회

동아시아의 관점에서 본 청사(靑史) 연구

— 청사공정(靑史工程)을 중심으로 —

일시: 2008년 11월 14일

장소: 이화여대 박물관 시청각실

주최: 이화여대 이화사학연구소 · 사학과

후원: 동북아역사재단 · 이화여대 인문학(HK)연구단

일 정

■ 일 시: 2008년 11월 14일(금) 10:00~16:30

■ 장 소: 이화여대 박물관 시청각실

10:10~11:50 [오전발표] 사 회 鄭秉峻(梨花女大)

[제1주제] 1609年 日本의 琉球 併合 以後 中國·朝鮮의 對琉球 外交
- 東아시아 4國의 冊封, 通信 그리고 杜絶 -

발제 : 夫馬進(日本 京都大)

토론 : 李薰(東北亞歷史財團)

[제2주제] 最近 15年間 中國學界의 清朝와 朝鮮關係史에 대한 研究 論評

발제 : 陳尙勝(中國 山東大)

토론 : 韓明基(明知大)

[제3주제] 東아시아 三國의 朝貢制度研究 比較

발표 : 鄭惠仲(梨花女大)

토론 : 李永玉(誠信女大)

13:30~15:10 [오후발표] 사 회 金英美(梨花女大)

[제4주제] 朝鮮의 對淸關係 認識과 外交體系

- 朝鮮後期 外交文書의 整理를 中心으로 -

발제 : 金暎綠(空軍士官學校)

토론 : 白玉慶(梨花女大)

[제5주제] 最近 10年間 臺灣의 淸史研究 動向

발제 : 葉高樹(臺灣 師範大)

토론 : 李俊甲(仁荷大)

[제6주제] 1990年代 以後 中國 淸史學界의 社會史 研究 動向

발제 : 兪長根(慶南大)

토론 : 趙永憲(弘益大)

15:20~16:30 [종합토론] 사 회 咸東珠(梨花女大)

目 次

一六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の対琉球外交 — 東アジア四国における冊封、通信そして杜絶 — …………… 夫馬 進 1	翻譯 41
近十五年中国学术界关于清朝与朝鲜关系史研究述评 …………… 陈尚胜 75	翻譯 95
동아시아 삼국의 조공제도 연구 비교 …………… 정 혜 중 117	
조선의 대청관계 인식과 외교체계 — 조선후기 외교문서의 정리를 중심으로 — …………… 김 경 록 133	
最近十年(1998—2008年) 臺灣清史研究的動向 …………… 葉 高 樹 167	翻譯 199
1990년대 以後 中國 清史學界의 社會史 研究動向 …………… 俞 長 根 231	

一六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の 対琉球外交

－ 東アジア四国における冊封、通信そして杜絶 －

夫馬 進(日本 京都大)

はじめに

東アジアあるいは東アジア世界という概念は、それを単なる地理的な概念としてではなく、歴史的なものを含み込んだものとして用いる場合、それはどこまで有効なのであろうか。たとえば十七世紀以降という時代を取ってみたとき、この概念をもって国際構造を理解することは、はたしてどこまで有効なのであろうか。

東アジアあるいは東アジア世界という概念が歴史概念としてここまでよく用いられるに至ったのには、フェアバンクが提唱した朝貢システム (tribute system) 論と西嶋定生が提唱した冊封体制論の果たした役割が大きい。ともにかつての東アジアにおいては、中国が圧倒的な影響力を持っていたとしてこれらの概念が構想されているからである。日本ではこれら朝貢システム論と冊封体制論とはしばしばドッキングして語られてきた。個々に結ばれる朝貢関係や冊封関係を越えた朝貢－冊封関係という抽象概念は、早くから存在した¹。現今では、朝貢－冊封体制という概念もしばしば用いられるところである。

しかしこれら朝貢－冊封関係あるいは朝貢－冊封体制という抽象概念を用いて国際構造を理解しようとする論者を含めてほとんど共通しているのは、たとえば最も問題にされることの多い清代において、はたして清朝はいくつぐらいの外国

¹ 坂野正高『近代中国政治外交史』（東京、東京大学出版会、一九七三）頁七十六。浜下武志『朝貢システムと近代アジア』（東京、岩波書店、一九九七）頁二十二。

を冊封国と見なしていたのか、あるいは中国とそれぞれ個別に結ばれる朝貢関係と冊封関係とは、具体的にどのようにして形成され維持されたのか、という認識の根本となるはずの歴史事実にはなほだ無頓着なことである。また日本人にとって最も身近な国際関係、すなわち中国・朝鮮・琉球そして日本というただ四ヶ国の関係に過ぎない国際関係をもってして、それを東アジア全体の国際関係に拡大する議論もしばしば見受けるところである。

本稿の目的の一つは、すくなくとも一六〇九年に日本が琉球を併合してから以後は、東アジアに冊封体制などというものは存在しなかったことを言うにある。あるいはまた、当時の国際構造を理解するために、冊封体制などという概念を用いることが有効でないばかりか、しばしば誤った認識を導くことを言うにある。しかしある概念が実際の歴史を把握するのに不適切だと言うだけなら、それだけでしかない。問題は、では当時の国際構造をどう見るのが最も適切か、ということであろう。ただ、東アジアあるいは東アジア世界という歴史的な概念が有効かどうかを疑問視する我々にとって、考察の対象とされる歴史的な場は当然に限られる。ここで取りあげるのは、わずかに中国・朝鮮・琉球・日本という東アジア四国の国際構造である。この構造が当時の世界全体の国際構造にどのように組み込まれていたのかは、今後の課題にまかされるであろうし、冊封体制という概念が一六〇九年以前にあっては有効なものであるかどうか、今後の課題にまかされるであろう。

本稿のもう一つの大きなねらいは、前近代においては正式な国交が杜絶した状況にあることが、当時の国際構造を成り立たせるうえでいかに重要であったかを言うにある。明末以降では、中国と朝貢関係や冊封関係を持たなかった国々があったということこそ、当時の国際構造を生み出し維持する重要な要因であった。それはここでは、ヨーロッパ諸国がすでに東アジアという場に参入しており、国際構造を形成するのに重要な要因となっていたことを言うのではない。当時の日本の位置と意味を言うのである。これまで朝貢システム論や冊封体制論を援用するか、それと名は出さないものの大きくそれらの影響を受けていると見なすほか

ない歴史叙述において、日本は東アジアの国際秩序から離脱していたから云々、という表現はしばしば見られるところであった。しかし日本が中国と正式な国交をもたなかったこと、それらの論述によれば、「東アジアの国際秩序から離脱していた」ことこそが、逆に中国が個別の冊封国との関係を維持し、また冊封国どうしの関係を生み出すうえで重要な契機であったことを論じてみたい。

本論に入る前に、ここで用いる用語について簡単に説明する。まずここで「日本の琉球併合」と言うのは、普通日本では薩摩の琉球侵攻などと呼ばれるものである。これを日本の琉球併合と呼ぶのは、当時の中国人や朝鮮人は最も多くそのように書き記し、この認識をもとにして琉球と日本を眺め、外交政策を立案していたからである。また、この事件を日本史としてではなく世界史における一事件として見た場合、我々もそう呼ぶ方が適当だからである。

次にサブタイトルで「冊封、通信そして杜絶」としたのは、当時の東アジア四国の国際構造を考えるのにあたり、本稿では貿易と文化の構造を論ずることなく、さしあたり外交構造のみを論ずるからである。このうち「通信」とは、朝鮮通信使などという時のそれであって、国書を通ずることであり、これによって両国の国交が正式に成り立っていることを意味する。これに対して、「杜絶」とは、冊封関係も通信関係もない、簡単にいえば、両国に国交がないことを意味する。これに類した語として「断絶」があるが、それは一般に関係が絶たれるある瞬間を表現するのに適するようであり、たとえば日本と中国が十六世紀から十九世紀までの数百年間、一貫して正式な国交がなかった状態を表現するのに適さない。したがって本稿では、断絶状態が続くこと、あるいは国交が樹立されない状態が続くことを「杜絶」と表現することにしたい。

第一章 清朝の「冊封国」は何ヶ国だったか

東アジア四国の国際構造を見る前に、まず明らかにしておかねばならぬことが

ある。それは清朝にとって「冊封国」とは何ヶ国であったか、そしてここで問題とする東アジア四国の国際構造とは、東アジア全体から見てどのような特色をもつものと位置づけられるか、ということである。

この問題にかかわることとして、西嶋定生は次のように述べたことがある。彼によれば、「清王朝になると、朝鮮国をはじめ、東アジアや南アジアの諸国はほとんど冊封国とされ、そこに空前の冊封体制が出現した」、そしてこの冊封体制に加わらなかったのは「日本とムガル帝国のみ」であったという²。東アジアや南アジアのほとんどの国が冊封国とされていたのかどうかはともかくとして、われわれも冊封体制という言葉を書く時、中国王朝はその周囲に少なくとも十ヶ国程度は冊封国を持っていたのだろう、と何とはなしにイメージしているのではないか。

この問題を検討するための最も簡便な方法は、各時代に編纂された『大清会典』を見てみることである。そのうち『嘉慶大清会典』（嘉慶二十三年＝一八一八編纂）巻三十一、礼部、掌四裔職貢には、「凡そ外国を冊封するのに、云々」と題する項目があり、そこでは、朝鮮、越南（安南）、琉球の三ヶ国が記される。そしてさらに、これら三ヶ国に対しては「封使」つまり冊封使を派遣すると記している。「封使」を派遣して冊封することを「頒封」と呼ぶことがある。

『嘉慶大清会典』ではこの頒封による三ヶ国を記したのち、さらに相手国の使節が中国へ派遣されてきた時、彼らに勅と印を持ち帰らせて冊封したことにする方法が述べられる。これを「領封」と呼ぶことがある。勅と印を使節に領けとらせ冊封したこととするからである。ここでは暹羅つまりタイが一六七三（康熙十二年）と一七八六（乾隆五十一年）年に、緬甸（ミャンマー）が一七九〇（乾隆五十五年）年に、南掌つまりラオスが一七九五（乾隆六十）年にそれぞれこの「領封」をされたと記す。すなわち『嘉慶大清会典』が編纂された十九世紀初頭では、清

² 西嶋定生「冊封体制と東アジア世界」（西嶋定生東アジア論集第三巻『東アジア世界と冊封体制』東京、岩波書店、二〇〇二）頁一〇一。同論文はもと一九八九年に公刊。

朝はかろうじて六ヶ国を冊封したことがある国として考えていたのであって、東アジアと南アジアのほとんどの国が清の冊封国であったというのとまったく異なっている。しかも冊封国として横並びにそれらを見ていたのではなく、すくなくとも二層からなるものと見ていた。さらに問題なのは、領封によって冊封を受けたとされる東南アジア三ヶ国が、実際どのようにそれを受けたかである。

まず緬甸である。『清実録』によれば、一七八九（乾隆五十四）年に始めて緬甸国王が冊封を願い出てきた、との記事が見える。これより先、一七六〇年代に清と緬甸はその国境付近で戦争をおこない、清の勝利に終わった。長らく途絶えていた緬甸からの朝貢が再開されたのは、一七八八（乾隆五十三）年のことである。一七八九（乾隆五十四）年五月、乾隆帝が突然、緬甸との国境に近い雲南省の永昌府知府がある情報を彼にもたらしたと言いだした。それは、この朝貢使節の一人が帰国する途次に、緬甸は冊封を願い出るために来年使節を送りたいと言っているというものであった。乾隆帝は、この緬甸人はこの永昌府知府と面識があるのだから、冊封してもらいたいと緬甸国王が言っているというのは「当然にもとづくところがあるはずだ」とし、これまでこれを報告してこなかった地方官をしかりつけるとともに、「冊封を願い出るのは、当然よいことだ」として緬甸の使臣を北京に送らせよ、と命じている³。

乾隆帝はこの年の閏五月にも、緬甸が冊封を願い出ているとの消息があるのであれば、これのために準備せよと命じ、翌年二月になると、緬甸国王が冊封を求めているとの各地方官からの上奏を受けて、これを冊封すると決定している⁴。実はこの年の八月十三日、乾隆帝は八十歳の誕生日にあたり、彼は国都北京と離宮熱河で盛大な祝賀行事をおこなうことを計画していた。緬甸からもこの年、北京と熱河に向けて祝賀のための使節が送られた。その年の六月十三日に乾隆帝は緬甸国王を緬甸国王に封ずるとの詔勅を発しているが、実はこの時なお緬甸の使節は北京まで到着していなかった。彼らが一「冊封国」の代表として入観したのは、

³ 『清実録』乾隆五十四年五月丁丑。

⁴ 同前書、乾隆五十四年閏五月辛亥、五十五年二月癸丑。

やっと七月九日のことであつた⁵。

このように見てくるなら、一七九〇年における緬甸国王の冊封とは、八十歳の誕生祝いを一層盛大にするために乾隆帝一人の都合でなされたものと断じて、まったく誤りないであろう。誕生日のちょうど二ヶ月前に、手まわしよく冊封国を一つ増やしておいたのである。永昌府知府からもたらされた「緬甸国は冊封をしてもらいたいらしい」という実に不確かな情報が突然取りあげられ、中国官僚のみならず緬甸人もが動員され、すべて新しい「冊封国」実現のため動いたのである。この動きは乾隆帝が安南（ベトナム）で篡奪があつたとの情報をとらえて大軍すなわち「問罪の師」を派遣し、ハノイの地で大敗したと聞くや篡奪者を逆に安南国王に冊封したうえ、彼を北京、熱河での祝賀行事に参列させた動きと完全に軌を一にする⁶。清代に緬甸国王が冊封を受けたのは、この一回だけである。とすれば、この時の冊封とは、乾隆帝八十歳の万寿式典を盛大にするために、緬甸国を「臨時の冊封国」とするためになされたと考えるべきである。われわれはこのような「臨時の冊封国」をも、清朝の冊封国の一つと考えるべきであろうか。清朝自身、このような「冊封国」を朝鮮、安南、琉球と同等なそれと見なしていたとは、どうてい考えられないところである。

次に南掌である。すでに述べたように『嘉慶大清会典』には一七九五（乾隆六十）年に南掌国王を冊封したと記され、これは次の『光緒大清会典』にもそのまま踏襲される。『清実録』によれば、この年七月二十六日に南掌国の使節が入謁し乾隆帝が会見したとあり、八月五日に南掌国王召温猛に勅諭している。その勅諭は、乾隆年号が始まってちょうど六十年と一周し、自分が八十五歳の誕生日を迎えたと述べたあとで「龍章を用いて錫^{たま}い、南服^{しず}を奠^ため王封を荷^おわしむ」と述べ、

⁵ 同前書、乾隆五十五年六月壬戌、同七月丁亥。

⁶ 拙稿「明清中国による対朝鮮外交の鏡としての対ベトナム外交－冊封問題と“問罪の師”を中心に－」紀平英作編『グローバル化時代の人文学－対話と寛容の知を求めて－』〔下〕、京都、京都大学学術出版会、二〇〇七）頁二四六～二四八。（FUMA Susumu, “Ming-Qing China's Policy towards Vietnam as a Mirror of Its Policy towards Korea: With a Focus on the Question of Investiture and Punitive Expeditions”, *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, No.65, 2007, pp.24～26).

また「請う所をゆるす」とも述べる⁷。どうやらここに言う「請う所」こそ南掌国王による請封があったことを示し、「王封を荷わしむ」というのが国王として冊封したことを示すものらしい。ただこれが奇しくも、乾隆周期六十年という記念すべき年のものであること、しかも八月十三日に迎えることになっていた彼の八十五歳の万寿節の直前におこなわれたものであったことは注目に値する。すなわち緬甸国王に対するものと同様、南掌国王へのそれも、万寿式典をもりあげるために作為された、極めて臨時性の強いものであった可能性が出てくるのである。

南掌国王に対するこの時の冊封がいかに臨時的なものであり、しかも恣意的になされたものであったかは、それから十数年を経た一八〇九（嘉慶十四）年、奇妙な事件が起きたことによって白日の下に曝されることになる。この年、越南国王阮福映が南掌国王召温猛を清朝地方官に護送するとともに、彼がかつて乾隆六十年に頒給されたという勅と印とを送ってきたのである。その後の調査で判明したところでは、一七九五（乾隆六十）年から一八〇五（嘉慶十）年に至るまでの十数年間、南掌国が召温猛の名を用いて清朝に上ってきた蒲葉の表文には、一度としてこの印章が用いられてこなかったし、彼が一七九四年に請封した時、彼はすでに逃亡生活の中にあり、勅印を受けた後もその国都へ帰ることができず、越南国境で流浪していた⁸。ベトナム史料『大南正編列伝初集』によれば、実は召温猛は一七九四（乾隆五十九）年の頃は雲南省へ逃亡中であった⁹。どうやら清朝は一七九四年あるいは一七九五年の段階で、「臨時の冊封国」をあと一ヶ国作り出すため、「南掌国王」と称する人物が逃亡してきており、その使節という者が北京へ来たのをこれ幸いと、冊封の要請をさせて冊封に及んだものらしい。このようにして冊封を受けた南掌をまともな「冊封国」の一つとして清朝人が数えていたとは、これまた考えられないところである。

⁷ 『清実録』乾隆六十年八月癸未。

⁸ 同前書、嘉慶十四年八月乙卯、十五年正月庚午。

⁹ 木村宗吉「ラオスの王子、召温猛について」（『史学』第三十三卷第二号、一九六一）頁一一一。

最後に暹羅については、たしかに『清実録』によって一六七三（康熙十二）年に国王が冊封を受け、その後緬甸によって国を滅ぼされて後、一七八六（乾隆五十一）年に再び冊封を受けている。

以上によって、清朝が冊封国と見なしていたのは、『嘉慶大清会典』が編纂された頃には頒封による朝鮮、越南（安南）、琉球の三ヶ国に加え、かろうじて暹羅を加えた合計四ヶ国であると言いうる。しかも暹羅は他の三つの冊封国とは、位相を異にするものとして見ていた。とすれば、朝鮮、越南（安南）、琉球の三ヶ国のみが名実あいともなう冊封国であったと考えてよいであろう。われわれ日本の研究者、あるいは朝鮮史や琉球史を研究する者は、ともすれば中国・朝鮮・琉球・日本からなる国際構造をもって、東アジア全体がそうであったと考えてしまう傾向にある。ところが、以上見たところから明らかなように、この東アジア四国の国際関係は、全冊封国三ヶ国あるいはせいぜい四ヶ国のうち二ヶ国を含むという、東アジアでは極めて異例なものだったのである。

第二章 一六〇九年、日本の琉球併合直後における明朝の対琉球外交

次に、中国と琉球との国交に話を進めよう。

薩摩の軍勢が琉球国首里城を陥したのは、一六〇九（慶長十四、万曆三十七）年四月一日のことである。国王尚寧は捕虜となり、島津家久とともに駿府、江戸へ向かった。一六一〇年八月八日、尚寧は家久とともに駿府城にて徳川家康に謁見、八月二十八日には江戸城にて将軍徳川秀忠に謁見した。九月二十日、尚寧は家久とともに江戸を出発し帰国の途についた。尚寧が那覇に帰ったのはその翌年一六一一年十月十九日のことである。

琉球が薩摩の侵略を受けたとの知らせは、遅くともその翌年、一六一〇（万曆三十八）年正月二十日付の礼部あて文書、および正月三十日付の福建布政司あて

文書によって、琉球使節毛鳳儀らを通じて明へ通報された¹⁰。両者とも、琉球国王が薩摩の捕虜となり日本へ連行されたと直截には記さないが、後者には敗戦によって「冊封の国王が他国に出奔した」あるいは「国王は日本からまだ帰らない」などの表現があったから、琉球国王が捕虜となって現に日本にあることは、誰もが十分に読みとることができた。また後者には、「まだ倭君（徳川家康・秀吉）に会って講和を請うていない」「来年（一六一〇年）二、三月に自分は関東に行く」と言っていることから、今後さらに江戸へ行って講和することを暗に伝えていた。

これらの文書は、遅くとも一六一〇（万曆三十八）年二月初めには福建福州の布政司にもたらされたと考えられるが、これに対応する中国側の史料は、『明実録』三十八年七月辛酉（十八日）になってやっと登場する。しかもそれは、福建巡撫陳子貞からの上奏をうけ、関係官庁で議論した結果、「続けて貢職を修むるを許す」、つまり貢物を従来どおり受けつける、というものでしかない。言い換えればそこには、冊封国の国王が捕虜となって日本へ連行されたい、これにどう対処すべきかとの提言はまったく見られないのである。

『明実録』にこの対応策が全く見られないだけではない。当時北京で内閣大学士であったのは李廷機と葉向高であったが、李廷機は何度も退職を請うて政治にはほとんど参与せず、葉向高が実質上の首輔大学士つまり宰相の地位にあった。彼は福建省沿岸の福清県出身である。彼にはその文集『蒼霞続草』があり、その中の知人あるいは福建駐在の官僚に与えた手紙には、郷里福建で横行していた「通倭」つまり日本との密貿易にかかわるものが、数多く収められている。ところが、これら手紙の中で琉球に直接かかわるものは、後に述べるように一六一二（万曆四十）年になって琉球をどう処遇したらいいのか、今度は真剣にとりくまざるを

¹⁰ 『歴代宝案』（那覇、沖縄県教育委員会、一九九四・一九九七）訳注本、一一一八—〇四（第一冊、頁五四三）、一一一八—〇五（同、頁五四五）、一一三二—一七（第二冊、頁二一六）。なお『歴代宝案』には、これより前万曆三十七年五日付で福建布政司へ送った咨文が残っている（一一一八—〇三）が、これは福建布政司へ渡らなかったようである。

えなくなってから始めて登場する。一六一〇（万曆三十八）年とその翌年に書かれたと思われる手紙には、琉球について一切触れていない。琉球といえば、これまで歴代の国王が明朝によって冊封され、しかもそれは領封ではなく北京から特別に官僚を現地へ派遣するという方式をとっていた。ところがこの忠順な琉球が日本によって侵略され、その国王が捕虜となって連れ去られたらしいと伝えられても、その宗主国の実質上の宰相にして、かつ福建省沿岸地方の出身者にして何らか対応をとろうとしたようがない。

『歴代宝案』によれば、この一六一〇年十二月十六日付で、万曆帝が琉球国中山王尚寧にあてて下した勅諭が残っている。しかしこれも、琉球国王が倭乱にあいながら、わざわざ入貢の時期を違えて申し訳ないと言ってきたのは「^{あわれ}惻である」、と述べるだけのものであった¹¹。このような明朝政府の冷淡ともいえる対応を見るとき、あるいは福建巡撫の陳子貞は琉球王国が日本の捕虜となって連行されたという重大なことも、明確には伝えなかったのではないかとの疑念すら起こさせる。

ところがそうではなかった。これに関連した史料が朝鮮燕行録にいくつか残っているからである。その一つは一六一〇（万曆三十八）年に千秋使正使として燕行した黄是の記録である¹²。これによれば彼が七月二十九日に明朝の官報である通報を読んだところ、福建巡撫陳子貞の上奏文が載っており、琉球が倭奴（日本人）の攻撃をうけ、琉球国王が捕虜となって日本へ連行されたと記されていたという。ここにおいて我々の疑念は完全に氷解する。すなわち国王が捕虜となり日本に連れ去られたことを陳子貞が間違いなく中央に報告していただけない、そのニュースが官報に載せられ公開されていたのであるから、誰もが知りうるも

¹¹ 同前書、一一〇一一三一（第一冊、頁三十三）。

¹² 黄是『朝天録』（林基中編『燕行録全集』ソウル、東国大学校出版部、二〇〇一、第二冊、頁五一五）。なお、林基中がこの燕行録を黄士祐撰とするのは誤り。

〔万曆三十八年〕七月二十九日、見通報、福建巡撫陳子貞一本曰、上年四月、倭奴入寇琉球国、大肆攻殺、虜中山王尚寧及国戚三法司等官、一併随往日本。王弟及（法）司馬良弼等、今守其国云。

〔九月十八日〕是日、琉球国使臣毛鳳儀等十一人来舍、於副使庁奔告其国倭寇之变也。

のとなっていたのである。さらに九月十八日の日記では、この日に琉球使臣の毛鳳儀ら十一人が朝鮮使節の宿舎へわざわざやってきて、日本の侵略を受けたと言ったという。ワラをもつかむ思いで同じ冊封国に何とか救ってくれないか、と訴えたのであろう。

さらにその一ヶ月余り後、今度は冬至使副使として北京を訪れた鄭士信もこの毛鳳儀と会見した。十月三十日、会見は朝鮮側の倭訳官つまり日本語通訳を介してなされ、互いの意志はよく通じたという。会見は以下のものであった。

さらに琉球国王が倭(日本)に捕虜となった大事件について尋ねたところ、「去年(一六〇九年)四月、倭人は名目の立たない軍を起こしたため、国王は出奔した。今年九月に講和がなだったので、国へ帰ることになり無事である、云々」との答えであった。

流伝する話しをおおよそ聞いたところでは、琉球は倭と講和し、毎年一回使節を派遣することになったという。むかし戊申の年(一六〇八年)に、家康は琉球に春と秋の二回貢物を納めさせようとしたが、琉球王は従わなかった。家康は薩摩に命じて、軍を起こしてこれを伐たせた。琉球王は「罪はわが身にある。わが罪のない人民に迷惑をかけてはいけない」と言い、かくて軍前に赴き、薩摩は捕えて連れ去った。家康は「自分自らその難に当り、人民のことを考えた。天下の義主である」と言い、ついに帰還することにさせた、とのことである¹³。

¹³ 鄭士信『梅窓先生朝天録』頁五十一(林基中編『燕行録全集』第九冊、頁三三六。鄭士信『庚戌朝天日録』〔同、第二十冊、頁五六五〕)。

〔万曆三十八年十月〕三十日辛丑、晴。与琉球国使臣相会、伝授国咨及礼单。琉球亦有正副使。語用倭語、訳官不解倭語、故招管押使之倭訳官金孝舜伝語、然後始得歛然相接。仍問其国王為倭所擄之變、答曰、去年四月、倭人興無名之師、国王越在草莽。以今年九月講和、還国無事、云々。略聞流伝之言、琉球与倭講好、歳一遣使。往在戊申(万曆三十六年)、家康使之春秋修貢、琉球王不従。家康命薩摩島興師伐之。琉球王曰、咎在予身、不可以累我無辜之民。遂詣軍前、薩摩執之以去。家康曰、身当其難、而志在愛民、天下之義主也。遂遣還云々。相与啜茶而罷。

ここで鄭士信が彼の方から琉球国王が倭（日本）の捕虜となったとの事件を話題にしているのは、先に毛鳳儀らと会見した黄是が帰国の途次、これから北京へ向かおうとする鄭士信らと出会っているから、この時に伝えられたからかもしれない。あるいは、彼はソウルを出発する前にこの事件について聴いていたからだとも考えられる。『朝鮮王朝実録』万曆三十八年（光海君二年）四月二十日の条によれば、慶長の役（丁酉倭乱）の時に捕虜となった朝鮮人が日本・朝鮮間で和議になった結果、帰国した。その一人が、薩摩州に連れていかれたところ、「上年（一六〇九）五月、薩摩島主が琉球に入攻し、その王を捕虜にして連れてきた。また数千人を派遣して、琉球の田土を量らせた」との情報をもたらしていた。鄭士信がソウルを出発して北京へ向かったのは八月六日のことであるから、この段階で琉球国王が薩摩軍の捕虜となり、鹿児島まで連行されてきていたことを知っていた可能性が大きい。

毛鳳儀がこの会見で、「今年九月に講和がなった」と特に九月と限定して言っているのは、この会談が十月三十日になされたことを思えば、驚くほど早く江戸の情報が北京にまで届いていたことを示している。あるいはこれは、九月三日將軍秀忠が中山王尚寧を伴って江戸城へ伺った島津家久に対して、琉球は今後とも尚家を国王とすべきであると命じたことを指すのかも知れないし、あるいは九月十六日、秀忠が家久と尚寧を招き、帰国することを許したことを指すのかも知れない¹⁴。

鄭士信が記す琉球使臣との会談にかかわる記事で最も興味深いのは、彼が「流伝の言」つまりウワサ話として記した部分である。これによれば琉球は倭（日本）と講和し毎年一回使節を派遣することになったとする。これがその二年前、家康が春と秋に二回入貢すべきことを求めたのに対し、琉球国王が従わなかったことの結果であったこと、つまり「朝貢」にほかならなかったことは、鄭士信を含め流言を聞いた者たち誰もが認めたことであったに違いない。

¹⁴ 『通航一覧』巻三、頁三十～三十一。紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』（東京、校倉書房、一九九〇）頁二十五。

この「流伝の言」が中国のどの範囲で流れていたのか明らかでないが、北京の官庁街がその中心であったと見るのが最も自然である。この十月末の段階で、葉向高ら北京在住の当局者たちが、琉球が日本の侵略を受けたのちすでに講和がなり、そして「朝貢」することになったらしいということ以上に確度が高く、しかも豊富な情報を手にしていたことは、これから見て間違いないところである。ところが彼らは、「冊封国」琉球をどう処遇すべきか、あるいは日本に対してどのような態度をとるべきかは語らない。

李日華『味水軒日記』一六一一（万曆三十九）年正月四日に載せる浙江省海塩県知県の喬拱璧が語ったという言葉は、当時の中国官僚たちが琉球問題について語ったものとして残る数少ない記録の一つである¹⁵。喬拱璧はこの日、李日華に対して「日本が琉球を併合した」ことを話した。彼によれば、明朝は歴代にわたって琉球の朝貢を受けてきたのだから、これを処置しないのはよくない、たとい軍隊を動かす余裕がないとしても、琉球国王を海島付近のところに移して安置し、その先祖の祭祀を続けさせるべきである、と語ったという。また彼は福建巡撫と広東巡撫が口を噤んで何も言わないのはよくない、こんなことをしておれば遠夷をして中国を侮らせることになる、と言ったともいうから、北京の官僚たちだけでなく、現場を担当する福建巡撫陳子貞たちもやはり何も言わなかったようである。さらに言えば、李日華自身が官報（邸報）を読んでいたこと、その日記にしばしば見えるところであるから、彼も琉球が日本に併合されると早くから知っていたはずである。ところがこの日に喬拱璧と会話するまで、彼は琉球について何も語らない。李日華はこのような直言をする喬拱璧を偉然たる丈夫であると評す

¹⁵ 中砂明德『江南—中国文雅の源流—』（東京、講談社、二〇〇二）頁一七八。『味水軒日記』（上海、上海遠東出版社、一九九六）頁一五七。

海塩喬令君来顧。談日本併琉球事、言中朝既累世受其朝貢、不宜置之不理。即力不暇勤兵、亦宜于海島附近處稍安插之、令奉宗廟血食、以俟琉球臣民之忠義興復者、而為之策應。是在督責閩広二撫臣、不宜噤不發聲、使遠夷謂中国不足倚也。

ただし簡体字による出版物で「談日本并琉球事」と記すところ、木版本では「談日本併琉球事」と記される（北京図書館古籍珍本叢刊第二十冊、北京、書目文獻出版社所収）。喬拱璧については『天啓海塩県図経』巻九、官師篇。

るが、彼が「日本が琉球を併合した」ことを前提で語っている以上、琉球国王を海島付近に移して安置すべきだとの主張は、やはり書生論というべきものである。

謝肇淛『五雜俎』には次のように言う。「琉球は国が小さく貧しく弱いので、自立不可能である。中国の冊封を受けているとはいえ、倭（日本）に臣服し、倭（日本）の使者の至る者は絶えず、中国からの使者と入り混じっている。思うに倭は琉球と領土が繋がり、これを攻撃するのは至って簡単である。中国は大海を越えて琉球を救援したりできるであろうか¹⁶。」

謝肇淛によるこの琉球記事が正確にいつ書かれたのか明らかではない。この書の中には一六一四（万曆四十二）年のことも書かれているから、あるいはこの数年後の記事かもしれない。逆にまた、日本の使者と中国の使者が琉球では入り混じっているというのは、一六〇六年に尚寧を冊封しに赴いた夏子陽らによってもたらされた情報によるであろう。夏子陽は帰国後、「琉球はゆくゆく日本にやられてしまうであろう」と秘かに知人に話していたともいう¹⁷。とすればこの記事は一六〇九年における薩摩の侵攻以前に書かれたものである可能性も否定できない。しかし、日本がこれを攻撃するのは容易だが、中国は遠い海を越えて救援に行けないと記す点から、やはり攻撃を受けて以後に書かれたと考える方が順当であろう。謝肇淛も福建省沿岸長楽県の人であり、しかも一五七九（万曆七）年に琉球国王冊封副使となった謝杰は比較的近い親戚であった。謝杰は極めて詳細な琉球に関する史料を残している¹⁸。謝肇淛は琉球に対して非常な関心を寄せていたと考えられる。彼が論ずるように、たとえ琉球が日本の攻撃を受けたとしても、中国が大海を越えて救援に赴くのは不可能であるというのが、当時多少とも琉球の実情を知り、道理をわきまえた知識人の共通認識であっただろう。だからこそ

¹⁶ 『五雜俎』卷四（瀋陽、遼寧教育出版社、二〇〇一、頁八十六）。

琉球国小而貧弱、不能自立、雖受中国冊封而亦臣服于倭、倭使至者不絶、与中国使者相錯也。盖倭与接壤、攻之甚易、中国岂能越大海而援之哉。

¹⁷ 拙稿「夏子陽撰『使琉球録』解題」（拙編『増訂使琉球録解題及び研究』宜野湾、榕樹書林、一九九九）頁五十七。

¹⁸ 岩井茂樹「蕭崇業・謝杰撰『使琉球録』解題」（同前書所収）頁四十三。

葉向高以下、福建巡撫から郷紳李日華にいたるまで、何も発言できなかったのである。

以上によって理解できることは、第一に当時の中国人と朝鮮人の認識にあつては、琉球は薩摩によって侵攻を受けたとすることよりも、それが日本に併合されたということの方がはるかに重要であったことである。この認識はその後も続き、その後の事態の進展によってより強くなること、以下に述べるであろう。

第二に、明朝の琉球に対する外交政策は、同じく冊封関係にあつた朝鮮に対するそれとはるかに異なつて冷淡であつたことである。琉球が日本にやられる危険性があることは、明朝人も事前に知るところであつた。冊封国が危機存亡の時にあつたにもかかわらず、明朝は全く無策であつた。それが真剣に琉球問題に向きあわざるをえなくなるのは、次に見るように明確な日本問題となつた時であつた。

第三章 一六一二年、琉球入貢以後における明朝の対琉球外交

一六〇九年から一六一一年の段階で明朝が琉球に対して何もできなかったこと、以上のとおりであるが、一六一二（万曆四十）年になるとこれが大きく違つてくる。というのは一六一二年に琉球が進貢してきた時、今度はこれが日本の差しがねによるものであることは、誰にもわかつたからである。琉球の朝貢使節は中国側の入国検査も経ることなく、またあらかじめ入貢するとの連絡もなく、突然福州へやってきたからであり、貢物には日本の産物が混ざつていたのである。また、その朝貢使節の中に日本人が多く含まれていたともいう。今回の朝貢が日本が琉球を陰で操つてさせたものであることは、誰の目にも明らかであつた。

一六一二（万曆四十）年正月、琉球国王は入貢のために使節を派遣し、あわせて「夷酋」「倭君」が明朝の「天威」に恐れをなしたため自分は無事帰国できたこと、そして自分はこれまでと同様に領土を平定していることを報告した。この報告に対する明朝側の対応が『明実録』に現れるのは、これまたやつとこの年の

七月になってからである¹⁹。『明実録』によれば、琉球が新たに入貢してきた、国王は無事帰還したと通報してきたとの情報は、福建巡撫丁繼嗣によって北京に届けられた。彼はここで国王は帰国したと言っているが、琉球が日本の支配下にあることは疑いない、これを「(独立) 国とは見なしがたいこと明らかである」と述べ、今回の入貢も、琉球が「倭夷に駆られてやっている」と述べている。彼が得ていたであろう前後の情報から見て当然ではあったが、今回の琉球による入貢が実質的に日本による「入貢」であること、偽装されているだけにかえって琉球の「平日恭順の意」を疑わせるものであることを述べていた。琉球問題はここにおいて明確に日本問題とならざるをえず、従って明朝当局において始めて大問題となったのである。

同月上奏された兵科給事中李瑾らの認識もこれとほとんど同様であった。琉球が殺戮を受けた直後に国王が釈放されたからといって、急に日本の威力を忘れて遠く中国の義を慕って入貢してくることなどありえないとし、やはり「倭(日本)が指示してやらせていることは明らかである」とした。李瑾らは「琉球が弱いことは心配なことではない」という。では何が心配かと言えば、このように琉球の入貢を許しておれば、日本人が国内の姦民と結託して中国の内情をスパイし、「倭(日本)に近い境域が、琉球に続いてその領域になってしまう」ことであった²⁰。

兵部の認識も、これらとまったく同じである。数十年来、倭(日本)が垂涎しているのは中国へ「貢する」ことである。であるから、琉球を獲得した上、さらに中山王を釈放して帰国させ、通貢の道となそうとしているのである、と兵部は認識していた²¹。

先に述べた福建巡撫丁繼嗣は、日本が陰で琉球を操ってさせている今回の入貢について、使節の正使ら何名かを留めて処分を検討するとしたほか、他の者はすべて帰国させ、あわせて通常の貢物のみ受納し、通常ではない貢物、簡単に言え

¹⁹ 『明実録』万曆四十年七月己亥。

²⁰ 同前書、万曆四十年七月己酉。

²¹ 同前書、万曆四十年八月丁卯。

ば日本人が貢物として入れ込んだ日本の産物はすべて持ち帰らせよとの対応策を提言し、この提言が是か否か皇帝から検討するように命ぜられた礼部も、このとおりでよいとして上奏した。これが七月七日のことである。ところがこの礼部から皇帝への上奏は宮中に留め置かれたままになり、皇帝による最終決定は下されなかった。これを留中という。葉向高は当時、実質上の宰相の地位にあり、しかも福建省出身者であったから、琉球問題いやより端的に言えば日本問題に対して強い関心を持っていた。彼は現地福建で今回の琉球問題に対応している丁継嗣に対して、北京の状況を次のように手紙で伝えている。

琉球が入貢してきたことについて、これまで礼部が回答した上奏文の中で、このようにされてはどうかという原案を皇帝に上ったが、皇帝の判断は下っていない。その後また兵部が箇条書きで述べた倭（日本）についての上奏文の中でも、このようにされてはどうかと原案を上ったのだが、やはり皇帝の判断が下されていない。

皇帝が何をお考えなのかかわからないが、二つの理由があろう。その一つは、二百余年にわたり恭順であったその琉球について、一旦に貢物を拒絶する（一旦絶之）のは服遠の化を明らかにするやり方ではないからである。一つには倭（日本）がもたらした貢物（倭中貢物）が遠方から来ている以上、つき返すことが必ずしもよくないと考えられるからである。そうでなければ、どうして何度も原案が提出されながら、何時もそのまま沙汰やみとなってしまうのであろうか²²。

当時、万曆帝は政務を怠り、自分のところに届けられてくる大量の上奏文を留中

²² 葉向高『蒼霞統草』卷二十、答丁撫台（福建叢書第一輯之二『蒼霞草全集』揚州、江蘇広陵古籍刻印社、一九九四、第七冊、頁一七〇七）。

琉球貢事曾于礼部覆疏中、擬上而不下。後又于兵部条陳倭事疏中擬上而又不下。聖意不可知、度之殆有二端。其一則以二百余年恭順之邦、一旦絶之、非所以昭服遠之化。一則以倭中貢物既自遠来、不必却還。不然何以屢擬而屢寢也。

したままにして指示を出さなかった。琉球入貢問題についての上奏文が留中されたのも、この一例にほかならないが、ここに示した葉向高の言葉から窺うならば、この問題はほかと違って、なかなか皇帝やその取りまきには決断できない重要案件であつたらしい。それは冊封国にして朝貢国でありながら、突如として恭順ではなくなった琉球の貢物につき、冊封や朝貢の理念に従ってこの行為を非礼であるとし、本来ならばこれを拒絶しつき返すべきであるという考えが、彼らの大前提にあつたからである。しかしこの場合、当然に国交が断絶してしまうことも視野におさめねばならなかった。

決断を遅らせる要因として葉向高が挙げているあと一つは、その表現から見てさらに興味深い。彼は本来「琉球貢物」というべきところを「倭中貢物」と誤つて、いや実のところ直截にしかも正確に表現したのである。しかも本来であれば決して受納してはいけないはずの「倭中貢物」を「必ずしもつき返すべきではない」と考えていた。それは何故なのか。

琉球入貢問題が留中によって決着しないことを憂慮した葉向高は、十一月十二日に掲帖という形式で上奏し、事態を打開しようとした。掲帖とは軍事機密にかかわる重要案件や朝廷における大問題につき、理念と現実のギャップや官僚のきびしい議論のため皇帝がなかなか決断できないとき、内閣大学士が文淵閣の印鑑を用いて封印して上奏し、皇帝の左右近臣でも内容を窺うことができなくすることを目的とする形式である²³。葉向高のこの掲帖は、彼の奏議集だけでなく『明実録』万曆四十年十一月壬寅でもほぼ全文が掲載されて載っている。

彼がここで示している認識は丁継嗣らと同じく、「琉球はすでに倭奴（日本人）に併合されてしまった。今回入貢に来た者も半ばは倭人（日本人）である」とし、「倭は琉球に檄文を飛ばし、互市してくださいと琉球に強制し代りに願い出させている」というものであつた。そして彼は早く決断しなければ、福州に滞在している日本人らがスパイ活動をはたらくかも知れず、ゆくゆくはかつての嘉靖大倭

²³ 徐復祚『花当閣叢談』巻一、密掲。

寇のごとき大事件を巻き起こすことになる、と警告するものであった。

この問題について決着を見るのは、その三日後、すなわち十一月十五日であった。『明実録』万曆四十年十一月乙巳では、礼部からの回答を皇帝が承認したとしてこのことを記す。礼部は「琉球がいったいどうなっているのか、実情は測りがたい。貢物を拒絶するのが適当である（宜絶之便）。しかし進貢を名目としているのに、こちらが急につき返せば、あちらに口実を与えることになり、柔遠の体をなさないであろう」とし、琉球が日本の侵略を受けて国力が衰えているから、「十年の後を待ち、国力がやや充実してから」再び入貢させても遅くはない、とするものであった。明朝側はここにやっと十年間は入貢させない、十年後に入貢して来ることは認めると決断し、日本からもたらされた産物は受納せず持ち帰らせることにしたのである。

ところでこの「十年の後を待ち、国力がやや充実してから」再び入貢するのを許すとの決定について、学界ではおおよそそれまでの二年一貢が十年一貢に改定されたと考えられている²⁴。

しかしこの礼部の決定およびこれが琉球へ通知されたことを伝える『歴代宝案』所収の文書によるかぎり、どこにも二年一貢から十年一貢に改めたなどとは記されていない²⁵。礼部が決定したのは、簡単に言えば十年間は入貢してくるな、ということである。この明朝側の意図をさらに明確に教えてくれるのは、やはり葉向高が福建布政使であった袁一驥に書き送った手紙である。その一節にいう。

琉球の貢物については、すでに礼部が回答した上奏文の中で、その常貢は受けつけるがその倭の産物については返却することとする、琉球使節らに訓

²⁴ 前注 14、紙屋著書、頁三十二、上原兼善『幕藩制形成期の琉球支配』（東京、吉川弘文館、二〇〇一）頁一〇九、真栄平房昭「琉球貿易の構造と流通ネットワーク」（豊見山和行編『琉球・沖縄史の世界』日本の時代史十八、東京、吉川弘文館、二〇〇三、頁一二一）、豊見山和行『琉球王国の外交と王権』（東京、吉川弘文館、二〇〇四）頁二七三。概説として『新琉球史・近世編（上）』（那覇、琉球新報社、一九九〇）頁七〇、一二四。

²⁵ 『歴代宝案』一一〇七―六（第一冊、頁二七〇）、一一〇七―一八（第一冊、頁二七二）、一一一八―〇八、（第一冊、頁五五二）、一一三九―二二（第二冊、頁三六七）。

論して以後来ないようにさせ、琉球が平穩になるまでずっと待ち、その後再び処置することにはいかがか、と皇帝に原案を提出してある。これは福建巡撫・巡按の意図でもある²⁶。

明朝側の本音を言えば、「以後来るな」というのであって、入貢問題をも含めて、琉球との関係についてはしばらくして落ちついてから再度検討したいというものであった。つまり十年間とは、そのための時間かせぎにほかならなかったのである。

このように一六一二（万曆四十）年になると、一六一〇年の時とうって変って、明朝当局者たちは琉球問題にもまともに向きあわざるをえなかった。しかしそれは、琉球が二百年にもわたる恭順な朝貢国であり冊封国であったからではない。彼ら当局者たちは、逆説的ではあるが琉球が「平日恭順の意ではない」ところを見せたからこそ、つまり日本にあやつられて偽りの入貢をしてきたと知っていたからこそ、琉球とまともに向きあわざるをえなかった。彼らは、一旦に貢物を拒絶する（一旦絶之）可能性をも思い、貢物を拒絶するのが適当である（宜絶之便）とも考えた。立前上は朝貢とは礼の表現であったから、偽りの入貢に対してこのように考えたのは当然であった。現にまた、明初に朱元璋が高麗に対して、非礼であるとして何度も何度も入貢を拒絶した事例もあった²⁷。

ではなぜ明は琉球の貢物を拒絶できなかったかと言うと、言うまでもなくその

²⁶ 『蒼霞統草』卷二十、答袁希我（頁一七〇九）。

琉球貢事、已于部覆疏中、擬受其常貢而卻其倭物、論其来使、以後勿来、直俟彼国平定、然後再処。蓋亦即兩台疏中之意也。

袁希我とは、当時福建布政使であった袁一驥である（『閩書』卷四十五、文蒞伝、福州、福建人民出版社、一九九四、頁一一二九）。

袁一驥はその後、福建巡撫に昇進する。そして『明実録』万曆四十三年三月乙卯によれば、この十年後を待って入貢せよと命じてあったにもかかわらず、琉球は四十一年にも四十二年にも入貢してきたことをとりあげ、「琉球違四十年題准十年一貢之限、云々」と述べている。しかしここで言う「十年一貢」とは「万曆四十年には十年後に一貢することを許した」というにすぎず、今後十年ごとに一回入貢する制度を定めたというのでは決してない。

²⁷ 拙稿「明清中国の対朝鮮外交における“礼”と“問罪”」（拙編『中国東アジア外交交流史の研究』京都、京都大学学術出版会、二〇〇七）頁三二〇。

バックにひかえる日本が怖かったからである。礼部提案のなかで、貢物を拒絶すれば「あちらに口実を与えることになる」とは、暗にこれを言うであろう。

これについてもさらに葉向高の考えを聴こう。彼はその文集に「答董吏部」と題する手紙を残している。董吏部とは当時吏部文選司員外郎であった董応挙である。董応挙もまた福建省閩県つまり福州の出身であり、日本問題に強い関心を持っていた。琉球入貢問題が北京で持ち上がり、ちょうど礼部の上奏文が留中されていた一六一二年十月、彼は「嚴海禁疏」を上奏した²⁸。それは嘉靖年間に倭寇に大弾圧を加え、そして自殺してはてた朱紘を顕彰しつつ、通倭つまり日本と密貿易をする者に嚴罰を科し、海禁を嚴にすべきことを主張したものである。彼もまたこの上奏文において、「琉球はすでに倭（日本）の属となった」と書いていた。その彼に対して、葉向高はまさしくこの海禁問題について次のような手紙を書き送っている。

福建人のうちただ士大夫で先の先のことまで考えるものだけが、海禁すべきだと言うだけで、その他の者はみな禁じてはいけないという。……かつ、一旦これとの関係を絶ってしまえば（一与之絶）、倭は必ず速くやって来て、かえって被害をもたらすことになる。だから政府の当局者もこの説に迷い、海禁せんと固く決心することができないのである²⁹。

ここに見られるように、通倭問題に対する方策と琉球入貢問題に対する方策には、まったく同じ思考様式が見られる。彼らの理念にしたがって、琉球からの貢物、

²⁸ 董応挙『崇相集』（四庫禁燬書叢刊集部一〇二、北京、北京出版社、頁十七）疏一、嚴海禁疏。彼は後に「答項聽所年兄」（万曆四十五年）、「答黃撫台」（同年）においてこの「嚴海禁疏」が日本へ伝わり、倭人はこれを書いた自分を痛めつけてやろうとしている、といささか自慢して記している。

²⁹ 『蒼霞統草』卷二十、答董吏部（頁一七一三）。
閩人惟士大夫之有遠慮者、言其当禁、其余則皆以禁為非。是其說之所以易惑人者、謂我以繪絮雜物、而得倭之金錢、利莫大焉。且一与之絶、倭必速來、反以致害。故當道亦狐疑于此、難以堅決、此乃吾閩人之自誤耳。

実は日本からの「貢物」を「一旦に拒絶して」しまうならば、外夷に「口実を与える」、つまり今後さらにどのような強硬な手段をとって「通貢」を迫ってくるかもしれないと考えたのと同様に、海禁を嚴重にし、「一旦これとの関係を絶つてしまえば」、かえって被害をもたらすことになると考えていた。葉向高は福建巡撫丁繼嗣への別の手紙で「琉球はすでにやられて倭（日本）へ併入されてしまった。倭が寇（侵略）にかりて通貢せんとするの、必然の勢である」と述べていた³⁰。完全に琉球からの通貢を遮断するのは、嚴重に海禁するのと同じように極めて危険であった。

彼らが最も恐れたのは、琉球がすでに日本に併呑されてしまった以上、次は台湾の鷄籠・淡水を占拠されることであった。琉球を完全に日本のものにしてはならない。やはり丁繼嗣に対するもう一つの手紙で次のように言う。

福建人は多く倭（日本）の目的は通市つまり自由貿易にあり、入寇つまり侵略にないという。その情況と道理から見ればほぼそのとおりであろう。しかし通市は決して行いえない説である。誰がこの任にあたりえよう。今心配するのは、日本がすでに琉球を併呑し、次第次第に鷄籠・淡水を占拠してしまい、わが国を去ることいよいよ近く、これを駆逐しようとしてもできず、これを防ごうとしても備えがたいことである³¹。

琉球が併合されたら次は台湾の鷄籠・淡水であるとは、当時明の当局者あるいは福建人のほとんど共通した認識であったらしい。これより先、琉球国王尚寧は、自分が薩摩の軍勢の捕虜となり、薩摩まで連行されたと婉曲に通報した文書の中で、自分は倭（日本）とともに鷄籠を占拠しに行くよう強制されたが、これに従

³⁰ 同前書、卷二十、答丁撫台（頁一六八九）。
琉球既折而入于倭。倭之借寇以通貢、亦必然之勢。

³¹ 同前書、卷二十、答丁撫台（頁一七二五）。
閩人多言、倭之志在于通市、不在入寇、拋其情理、似亦近之。然通市是決不可行之説、誰敢任此。今所慮者彼既吞琉球、漸而拋鷄籠淡水、去我愈近、驅之則不能、防之則難備。

わなかつただけでなく薩摩にこれを止めるよう説得して聴きいれられた、と書いていた³²。それから数年後の一六一六（万曆四十四）年、尚寧は一使節を中国へ遣わした。彼は日本の状況を報じ、いま日本は戦船五百余隻を造り、鶏籠山を取ろうとしていると報じた³³。

先に挙げた董応挙も日本による鶏籠占拠を怖れた一人であった。村山等安らが台湾に出兵したこの一六一六年、彼はその「籌倭管見」において「倭（日本）が鶏籠に垂涎することは久しい」とし、「鶏籠は福建を去ることわずか三日である」、鶏籠を取られたら、福建はかつて倭が朝貢問題をめぐって殺戮事件を起した寧波のようにならないならば、朝鮮平壤のような修羅場となると論じている³⁴。歴代の使琉球録（琉球冊封使録）によれば、琉球から福州までは当時おおよそ十日から二週間ほどかかっていたから、わずか三日で到達されてしまうというのは確かに脅威であったにちがいない。董応挙は一六一六年になるとかつての海禁論を放棄したかのごとくである。そしてこのような情勢判断を踏まえて、鶏籠を日本との出合い貿易の地としてしまえば、ここを占拠されることになるかも知れず、それよりは琉球による朝貢貿易を拡大し、「外寨」を市場として設け、これをここで交易させる方がよい、と主張する。彼にあっても琉球問題は日本問題であった。

明朝側は、日本が通貢のために琉球を利用していることを明確に知っていた。たとえば琉球入貢問題が起こったさなか、兵部は「数十年来倭（日本）が垂涎するのは“貢”だけである。ゆえにすでに琉球をその支配下におさめ、また中山王を縦して帰国させ、通貢の路としようとしている。日本は中国が日本の貢は絶対

³² 『歴代宝案』一一一八—〇三（第一冊、頁五四〇）、一一一八—〇四（頁五四四）、一一一八—〇五（頁五四六）。

³³ 『明実録』万曆四十四年六月乙卯。また十一月癸酉。

³⁴ 『崇相集』議二（集部一〇二、頁一九〇）籌倭管見、また卷二、中丞黄公倭功始末（集部一〇二、頁二〇四）。

倭垂涎鶏籠久矣。……鶏籠去閩僅三日、倭得鶏籠則閩患不可測、不為明州、必為平壤。……今開琉球之市于外寨交易、則外貨流通、奸人牟利者、近亦得售、不得生心于鯨鯢之窟、而勾引可潜消。……且与其以鶏籠市也、孰若以琉球市、与闌出而釀勾引也、孰若開一路于琉球。

入れないが、琉球の貢については絶対に逆らわないと考えている³⁵」、と述べていた。今ここで完全に琉球の貢物を受けいれず、今後この方針を堅持するなら、どのようなことになるか。日本はもはや琉球を何の利用価値のないものと見なし、琉球国王をも退位させ、完全に自分の領土とするであろう。そうすれば次は鶏籠・淡水であるとは誰の目にも明らかであった。

このように考えてくるなら、礼部が最終的に下した判断、すなわち国力が回復するまで入貢は十年間待てとは、実に見事な外交的判断であったと言ってよい。この時、この判断をした礼部の中心人物は、翁正春であった。『明史』卷二一六の翁正春伝には、彼は当時礼部左侍郎として礼部尚書を代理しており、「貢物を拒絶するのが適当である（絶之便）」と主張したと伝える。翁正春もまた福建省侯官の人、すなわち福州人であった。葉向高・董応挙そして翁正春ら福建人にして、日本、琉球の実情に通じた人物たちが連繋して、琉球と朝貢関係を断絶することなく、また日本への密貿易を完全に絶つことなく、こうして日本の侵略を未然に防ぐという実に見事な外交政策を立案したと言うべきであろう。

琉球は十年後を待つことができず、翌一六一三年、翌々一六一四年と明の命令を無視して入貢をくりかえした。ところが、このような非礼にもかかわらず、貢物を受納し、朝貢関係を絶つことはなかった³⁶。さらに一六一四（万曆四十二）年、琉球側は十年間の入貢停止は耐えがたいとして、礼部あて常貢の回復を願う文書を提出した。それは、一方では朝鮮には救援の大軍を差し向けたのに、わが琉球に対しては「国王が捕虜となるままにして」何も救援してくれなかった、と明朝へうらみの文句をならべるとともに、このまま入貢を許さず、「もし日本の狡猾さを絶とうとして、琉球の忠順さをも一概に絶とうとするのであれば」、「順を駆りて逆につかせることになる」という脅し文句をならべたものであった³⁷。これはおそらく島津さらにその奥にひかえる幕府の圧力を受けて書いたものであ

³⁵ 『明実録』万曆四十年八月丁卯。

³⁶ 同前書、万曆四十三年三月乙卯。

³⁷ 『歴代宝案』一一一八—〇八（第一冊、頁五五二）。

る。入貢を従来どおりのものに回復しなければ、自分は明朝を見限って完全に日本につくぞ、と脅迫するのは、恭順な朝貢国・冊封国にあるまじき非礼であり、明朝の側から国交を断絶しても当然であった。しかしすでに見たとおり、明朝はこの時もこれを叱りつけることも使節を追い返すこともなく、貢物もつき返すことなく受納した。明朝は朝貢関係を絶って断交したくも、それができなかったのである。いうまでもなく、国交のない日本の動きに規制されたからである。

明朝が琉球の加えてくるこのような圧力を一部受けいれ、「十年間は待て」としていた命令を撤回し、五年一貢と改めたのは一六二三（天啓三）年のことである。さらに一六三四（崇禎七）年にはさらに三年二貢とした³⁸。ここに形の上では琉球の中国への朝貢は、一六〇九年以前と同じようなところに回復したかに見える。しかしそこに重大な変化があったこと、言うまでもない。五年一貢とした段階で、日本が琉球を併合しているという情報に何らかの変化がないかぎり、琉球の入貢とは実質的に日本の入貢にほかならないこと、明朝の当事者は誰もが理解できたはずである。三年二貢とした段階でも同じである。実際には日本の入貢であるのに琉球の入貢であると読み替え、これを拒絶できないような朝貢、われわれはこれを「虚構の朝貢」と呼ぶことが許されるであろう。

琉球が新たに冊封を願い出るのは一六二二（天啓二）年、そして実際に尚豊が冊封を受けるのは一六三三（崇禎六）年のことである。この頃、琉球からなされていた朝貢を虚構のそれと呼ばざるをえないとすれば、このようにしてなされる冊封も「虚構の冊封」と呼びざるをえないであろう。かつて我々は、明朝による安南（ベトナム）国王に対する冊封を虚構の産物であるとした³⁹。なぜなら明はその建国当時から一貫して、明王朝は現地ベトナムでは大越皇帝と称する別の皇帝がいることを知っていたからである。それを知っていながら知らぬこととして、大越皇帝を「安南国王」とこれまた読み替え、朝貢を受けつけ冊封していたから

³⁸ 同前書、一一〇四—〇九（第一冊、頁一六九）。

³⁹ 前注 6 拙稿、頁二三九、二四九（英訳本、p.15,27）。

である。

一六〇九年を境として、中国はまた一つ「虚構の朝貢国」「虚構の冊封国」を生んだことになる。もちろんこれは中国側が望んだものでなく、強いられたものであった。一見すればそこでは以前と同じような国際構造が続いたかのごとくである。しかしここに新たに生れた国際構造においては、中国と国交が杜絶している一国家、すなわち日本が決定的な契機として組み込まれていた。琉球を従来と同じく朝貢国、冊封国とできたのは、中国と日本の国交が杜絶していることを前提として、はじめて生み出されたものであった。また隠れた日本があるからこそ、琉球と朝貢関係・冊封関係を続けるほかなかった。逆説的な言い方をすれば、これまで言われているように「日本が東アジアの国際秩序から離脱していた」からこそ、それら論者の言う「東アジアの国際秩序」が存続したのである。このような国際構造が維持されるためには、中国側は事実を知らないことにし続けるか、その事実を忘れ去る必要があった。

このこと、すなわち日本が中国と国交関係において杜絶しながら、琉球を介してその実、全体として一つの国際構造を形づくっていたことは、以下の朝鮮、琉球の関係を見ることによって、一層明らかとなるであろう。

第四章 朝鮮・琉球外交の杜絶

日本と中国が外交的に杜絶関係にありながら、琉球を介して構造上密接な関係にあったことは、朝鮮－琉球関係にも決定的な変化をもたらした。両国の外交を杜絶させることになったからである。

琉球が一六〇九年に日本に併合される以前、朝鮮と琉球は明朝からともに冊封を受ける国として咨文をとり交わす関係にあった。咨文をとり交わす関係とは、たとえば北京へ送られた使節が儀式に参加したとき、朝鮮側が上位の席に着くなどの違いはあれ、基本的に対等な関係であったことを意味する。両国はたがいを

友邦と呼び兄弟と呼びあった。両国の使節はしばしば北京玉河館で会見し、国王の代理として咨文とプレゼントを交換した。かつて朝鮮と琉球は、海を越えて通信使（信使）を往来させ、国書を交換していた。それは十六世紀初頭までは続いたようであり、たとえば一五〇〇年（弘治十三年、燕山君六年）に朝鮮を訪れた琉球使臣は、国王に代って咨文をわたしている⁴⁰。この意味で北京での咨文の交換は、この通信関係の延長であった。

さて、琉球が日本に併合された、さらにその国王が捕虜となった後に講和となり、国へ帰ることが許されたとのニュースは、極めて早く朝鮮に伝えられた。ここに朝鮮側は琉球が日本の支配下におかれたことを知ったが、琉球とはそれまでとまったく変らぬ関係を持ち続けた。朝鮮側は明朝が琉球と絶交したわけではなかったから、こちらにも日本に併合されているという事実を知らぬことにすればよかつたのである。両国における咨文の交換が少なくとも一六三四（崇禎七）年まで続いていたことは、『歴代宝案』に残る文書から見て明らかである⁴¹。

朝鮮がホンタイジ率いる満州族の侵略（丙子胡乱）を受けるのは、その二年後の一六三六年、清の冊封を受けるのはさらにその翌年の一六三七（崇徳二、仁祖十五）年のことである。

その後、清が北京に遷都し、やがて琉球もその冊封を受けると、両国使節は再び北京で見えることになった。ところが今度は、両国使節はあい見えながら、決して宿舎を互いに訪問したり、国王の代理として国書を交換することはなかった。両国における国交の杜絶は、今度は日本が「正式に」琉球を併合するまで、すなわちいわゆる琉球処分によってこの国が消滅するまで、一貫して続いた。

『朝鮮王朝実録』『承政院日記』『備辺司謄録』など国家の記録あるいは燕行録には、琉球人を見た、あるいは彼らと会ったとの記述が数多く残っている。ところがそのいずれもが奇妙なほどによそよそしい。とくに燕行録では、琉球人を見たというのは珍しいことを体験したかのごとく、彼らの着ていた衣服などにつ

⁴⁰ 『朝鮮王朝実録』燕山君六年十一月丁卯。

⁴¹ 『歴代宝案』一一三九—二三（第二冊、頁三六八）。

いて詳しく記されることがある。

考えてみれば奇妙な光景である。というのは両国使節が同じく北京に滞在している時には、しばしばともに礼部の命令で鴻臚寺へ呼びだされ、一緒にリハーサルとして儀式の練習をしていたからである。儀式や宴席にも礼部は同様な朝貢国であり冊封国と見なして、両国使節を同じく列席させた。あるいは、皇帝が紫禁城から出る時あるいは帰る時、礼部は両国使節に命じてその門外に跪座させ、皇帝が来るのを待ちうけさせた。このように同じく跪座し列席しているにもかかわらず、両国使節はほとんど会話をかわすことがなかったらしい。国交がないからである。正使や副使は国王の代理として北京に来ていたから、歓談できなかった。十九世紀になると、朝鮮燕行使の随員として北京に来た者の中には、琉球人に遭遇して「友邦」の人であると記す者もあった。一八二六（道光六）年に北京へ行った洪錫謨がその一人である⁴²。彼らは筆談を交すこともあった。ところがある燕行録には、その筆談で琉球側の者が次のように書いたと伝えている。

貴国朝鮮はかつて我が国と通交していた。咨文が今に至るまで存在しているということだ⁴³。

ここに見られるように、十九世紀に入っても両国で咨文の交換はなされていなかった。朝鮮側で筆談をしたのは、金命喜（山泉）すなわち金正喜の弟である。時に一八二三（道光三、純祖二十三）年の正月元旦、紫禁城でおこなわれた正朝の儀に参加した時のことであった。儀式の合間におこなわれるのだから、その筆

⁴² 洪錫謨『游燕藁』（林基中・夫馬進編『燕行録全集日本所蔵篇』ソウル、東国大学校韓国文学研究所、二〇〇一、第一冊、頁六〇八）。

琉球来遣使、萍水遇奇縁、航梯重三訳、衣冠共一天、声音雖未曉、文字喜同伝、各処東南海、那知会日辺。

⁴³ 撰者未詳『燕行雑録』癸未正月初一日（林基中編『燕行録全集』第八十一冊、二〇〇一、頁一一八）。なお、林基中は徐有素撰『燕行録』とする。

山泉方与琉球使臣筆談、其応対頓不窘。…貴国曾与我国通好、咨文至今尚在云。我朝、琉球嘗入貢、想其事也。

談は当然あわただしい。この燕行録の作者は、この筆談を記したあと、「琉球はかつて入貢していた。そのことを言うのである」と感想を記す。しかし、琉球が「入貢」してきていたのは、海路での通信がなされていた十六世紀初頭までのことである。この記録者は十七世紀中頃まで両国が北京で咨文の交換をしていたことをすでに知らなかったらしい。

このような状態が何の原因によって起こったのかについては、管見のかぎりあるいは明の滅亡以後、両国で「私交の礼」がなくなったからであるとか、朝鮮はこの時代、清との冊封関係にさほど意味をおかず、新たな脱中華の独立的な交隣体制を樹立したからである、などの解釈がなされるが、いずれも説得力にとぼしく、説明に具体性が欠けている⁴⁴。

この問題については、一七一七（康熙五十六、肅宗四十三年）に一度だけ、朝鮮政府で琉球との間で国書を交換すべきだという議論がなされたことが、示唆するところ最も大きい。『備辺司謄録』肅宗四十三年正月二日には、おおよそ次のように記す⁴⁵。

この日、提調の閔鎮厚が次のように国王に述べた。明代の万曆丙申の年（一五九六年）に朝鮮側が琉球漂着民を送還したところ、琉球は感謝の意を表す咨文を我が国に送ってきた。昨年（一七一六年）はたまたま丙申にあたり、この年に琉球が朝鮮漂着民を送還してくれたのは、偶然ではあるまい。今回、朝鮮の方から感謝の咨文を琉球に送るべきではないか。

この発言を受けて都提調の金昌集も同調し、次のように言った。琉球に漂着し救助された朝鮮人の言によれば、彼らは「昔、朝鮮人が漂着した時、こちらから北京に転送したことがあるが、彼らは朝鮮本土まで帰還したかどうか」と琉球人

⁴⁴ 李薰「朝鮮王朝時代後期漂民の送還を通してみた朝鮮・琉球関係」（『歴代宝案研究』第八号、一九九七）頁二十六、孫承喆「朝・琉 交隣体制의 구조와 특징 [朝・琉交隣体制の構造と特徴]」（同『近世朝鮮의 韓日關係研究』ソウル、国学資料院、一九九九、頁一九一。同文は、하우봉 [河宇鳳]等『朝鮮과 琉球 [朝鮮と琉球]』ソウル、아르케、一九九九、頁七十四）。

⁴⁵ 『備辺司謄録』第七十冊、肅宗四十三年正月二日。『承政院日記』同日の条も、ほぼ同じ。（提調閔鎮厚曰）、万曆丙申、琉球国以漂人還送事、順付謝咨於我国云。……謝咨古事、既甚明白、則今番亦宜有送咨申謝之道。……既有前例、礼部亦似無持難不從之事矣。

に尋ねられ、まったく知らなかったのが大いに気がとがめたとのことである、琉球が努力して送還してくれたからには、たとえ明朝とは時代が違うとはいえ、咨文を送って報告すべきが道理ではないか。

閔鎮厚はさらに、明代に前例がある以上、北京の礼部も難癖をつけて反対するようなことはないようだ、と意見を述べた。

ところが礼曹判書である宋相琦が反対意見を上奏し、結局琉球へ咨文を送ることは取りやめとなったということである。

さて、一五九六（万曆二十四）年に琉球漂流民を朝鮮側が送還したというのは、実のところ一五八九（万曆十七）年に漂着した琉球人を朝鮮側が明朝の遼東都指揮使まで送り届けたものを言うであろう。『明実録』によれば彼らは遼東都指揮使に渡されたのち、明朝側によって北京まで転送され、さらに福建まで送られた。琉球側はこれに対して感謝の意を表す咨文を北京で朝鮮側に手渡し、さらにこの感謝の咨文に対する回答を朝鮮側が書き、同じく北京で琉球側に手渡している。これは、一五九七（万曆二十五）年八月六日付の咨文として、『歴代宝案』に収録されている⁴⁶。

遼東から福建福州までは明朝が一貫して護送しているから、琉球は明に対しても当然上奏文あるいは咨文によって感謝の意を表したと考えられる。明代にはこのように宗主国である明を介して、朝鮮と琉球とは漂着民を送還していた。『同文彙考』によれば、清朝になると一六九八（康熙三十七）年に琉球が朝鮮漂流民を福州まで送り中国側がこれを北京まで送り、たまたまこの時北京に来ていた朝鮮の官員に引き渡した。この時、朝鮮側は清朝に対して、「謝漂人出送表」と題する上奏文など、数多くの感謝を表す文書を書き送っている。ところが、漂着地点から福州まで護送してくれた琉球国に対しては、感謝の咨文を書いたようにはまったくない。これを明朝の時のように北京で手渡したようにまったくない。国

⁴⁶ 『歴代宝案』一—三九—一八（第二冊、頁三六〇）。この咨文と一部同文の咨文が『朝鮮王朝実録』宣祖二十九年（万曆二十四年）八月甲寅に記されている。閔鎮厚が万曆二十四年の時のこととしたのは、このためであろう。また『明実録』万曆十七年十一月庚戌。

家の人民を送還してくれた相手国に対し、感謝の意を表すのは礼儀として当然であろう。しかも両者はともに同じ宗主国を戴く朝貢国であり、冊封国であった。一体、何を憚って咨文の交換をしなかったのであろうか。礼曹判書宋相琦の反対意見を聴いてみよう。

宋相琦によれば、皇朝（明朝）の時には国家間の交際に拘束は少なかった。今、朝鮮と琉球が同じ「藩服の国」であるとして互いに文書を通ずれば、「外交の戒」を犯す、つまり宗主国を通さずに私的な交際をすることになる。どうしても清朝を通して咨文を送る必要があるが、北京の礼部は「明朝の時は琉球と咨文を取り交わしていた」という弁解だけで、はたして説得に応じるであらうか。そもそも明朝の時には礼部を中立ちとして琉球に咨文を渡してもらおうということなどなかった。さらに一六九八（康熙三十七）年に琉球が朝鮮漂流民を送還してくれてきた時でも、このような感謝の咨文はこちらから送らなかった。

また清朝中国は朝鮮が日本と通信使を通じて交際をしているのを知っており、問題にしない。ところが琉球とは通信関係にない。万暦以来、百年近くも両国で書信の交換がないのに、今急に琉球と通信しようとするれば清朝の疑惑を招くであらう。したがって咨文の交換はおこなわず、北京へ齎咨官など事務レベルの朝鮮官僚が行った時、琉球側に感謝の意を伝えればよい。以上がおおよそ宋相琦の反対意見である⁴⁷。

しかしこの議論を仔細に検討するなら、反対意見としてこれは極めて説得力に乏しいことがわかる。と言うのは同じ「藩服の国」であるからといって朝鮮と琉球の間で文書を通ずれば、私的な交際をすることになる、これを礼部に説得でき

⁴⁷ 宋相琦『玉吾齋集』卷十、請勿送琉球国咨文疏（『韓国文集叢刊』第一七一冊、頁四一八）。
但念皇朝時則視我国猶一家、凡於朝聘交際之間、不甚拘禁。……若以藩服之國、自相通書、以犯外交之戒、而又要我以伝云爾而或有嘖嘖之言、則其將以皇朝時亦有此事為解、而可以杜彼之說耶。……頃於戊寅年、琉球亦有解送漂人之事、而其時未聞有謝咨、豈亦拘於事勢難便而然耶。……蓋我國之於日本、則壤地相接、信使往來、即彼人之所知、無可諱者。而琉球則不然、隔以重溟万余里、万暦以後近數百年、曾無通問之事。今忽修書齎幣、以示相好之意、則彼之不致怪持難、臣不敢必也。
答曰、……茲事不無意外之慮、予意則不如不為之為愈也。

るであろうかなど難点をいくつか挙げるが、これはこの提案をおこなった閔鎮厚が「礼部も難癖をつけて反対するようなことはないようだ」との観測を述べるように、このような観測が十分に可能であったからである。実際、礼部の許可をえて、あるいは礼部を通して咨文を交換するのであれば、清朝としては宗主国の下に「藩服の国」が仲むつまじく交際していることを示すことになり、王朝の威徳を一層輝かせうる絶好の事例と判断した可能性が大きい。ところが実際に肅宗がとった判断はこの反対意見を支持するものであり、結果として国書を取り交わすことはついにおこなわれなかった。宋相琦の上奏文を読んだ肅宗は「この問題には意外な心配事があるかも知れない」と言って、彼の意見を採用したという。

では一体、どのような原因が両国を再び通信の国とするのを妨げたのであろうか。ここでは宋相琦が挙げた別の反対理由を見てみよう。それは、この康熙五十年代にいたるまで、約八十年間すでに両国は通信を断ってきた、との事実である。そしてこの前回に琉球から朝鮮漂流民が送還されてきた一六九八（康熙三十七）年の時には、感謝の咨文を書かなかったという先例である。宋相琦が万暦以来百年近くというのは明らかな誇張であり、事実は崇禎以来約八十年であるが、この時すでに八十年間、国交が杜絶した状態であったことは事実である。

結論を言えば、この時期朝鮮が琉球に咨文を送ることができなかったのは、陰に日本があったからである。さらに明確に言うなら、第一には一六九八（康熙三十七）年に琉球が朝鮮漂流民を福州―北京経由で送還してくるまで、琉球―薩摩―長崎―対馬という日本ルートで送還してきていたからである。そして第二に、朝鮮はほぼ一貫して、琉球が日本に併合されたままであることを知っていたからである。

まず第一の問題である。

外交史料集『同文彙考』付編、卷二十九以下には、朝鮮人が日本へ漂着したのち送還された時に交わされた文書を数多く載せる。多くは長州や対馬など「日本」諸藩に漂着したものの記録であるが、中に三件、琉球へ漂着した時のものを載せる。一六六二（寛文二）年、一六六三（寛文三）年、一六六九（寛文九）年の年

号が入ったものである。対馬島主から朝鮮に送られた送還にかかわる文書には、いずれも「琉球」→薩州→長崎そして対馬まで転送されてきたことが記載される。これは、たとえば長州へ漂着した時、長州→長崎そして対馬へ送還されたと記されるのと同じ形式である。これらに対する謝状は朝鮮礼曹から出され、いずれも「礼曹参議答書」と題される。ここでも「琉球」→薩州→長崎へと転送されたと記される。注意すべきは、そのいずれも対馬島主から送られた文書に対応して、琉球は薩州や長州という一藩と同格のごとく記され、「琉球国」という一国として記されないことである。

一方『同文彙考』原編、卷六十六以下には、朝鮮人が中国から送還された時に交した文書を収録する。やはり多くは中国へ漂着し送還された時のものであるが、なかにかくつか琉球から中国の福州―北京を經由して送還されてきた時のものが含まれる。すでに明らかにされているとおり、清朝が海禁令（遷海令）を解いた一六八四（康熙二十三）年以降になると、琉球は中国人漂流民を日本薩摩へではなく、直接福州へ送り届けるようになった⁴⁸。これにともない、朝鮮漂流民についても、日本經由ではなく、中国經由で送還することになる。『同文彙考』によるかぎり、始めて福州經由で朝鮮漂流民の送還がされたのは、一六九八（康熙三十七）年のことである。この場合、礼部が朝鮮に送還について通知した文書において、「琉球国」→福州→北京と書かれていたのに従い、朝鮮から皇帝に提出した謝意を表す上奏文、あるいは礼部への咨文でも「琉球国」と書かれている。

琉球から福州まで送還を担当したのは琉球国であったが、「琉球国」へ謝意を表す咨文が朝鮮から送られたようにはまったくない。これは「礼義の邦」をもって自認する朝鮮としては、はなはだしく非礼であると国政担当者にも思えたであろう。だからこそ、閔鎮厚や金昌集のような主張が生まれたのである。

一六九八年の時に感謝の咨文を書かなかったのはおそらく、つい三十年前まで朝鮮漂流民は日本經由で帰還されていたからである。それまで礼曹は、対馬に送

⁴⁸ 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京、東京大学出版会、一九八八）頁一三六、前注 24 豊見山著書、頁八十一。

った礼状において、琉球をあたかも長州などと同様の日本の藩のごとく一地方名として記すのみで、「琉球国」とは記していなかった。「琉球」に感謝の文書を送るのであれば長州や薩州にも送らねばならないであろう。しかも日本経由で送らねばならなかった。一六九八年、北京の礼部から送られた咨文には、今度は「琉球国」から福州まで漂流民が送還されてきた、と記してあった。ソウルの礼曹は若干の戸惑い、あるいは齟齬するものを覚えたであろうが、三十年ほど前に「琉球」に謝状を送らなかった以上、実態としては同じ「琉球国」への咨文を送りにくかったであろう。宋相琦の反対意見の一つは、前回一六九八（康熙三十七）年に琉球→福州→北京の経由で送還された時には、琉球には感謝の咨文を出さなかった、という先例があるというものであったが、その先例とはこのような歴史的経緯によって生まれたものだったのである。

宋相琦はもう一つ、琉球に対しては百年近くも咨文を出してこなかったことを反対理由として挙げた。これが第二の問題である。何故、両国は咨文の交換をしなくなったのであろうか。それはやはり日本にかかわることが原因であったと考えられる。一六三六（崇禎九、仁祖十四）年以降、日本に通信使を送りはじめたことがおそらくそれである。

豊臣秀吉による朝鮮侵略の後、朝鮮と日本とは長く国交を断つたままであった。国交回復により積極的であったのは、日本の方である。徳川幕府は国交の回復を望み、何度も朝鮮に通信使（信使）を送ってくれるように要請した。しかしこの要請に応じながら、一六〇七年、一六一七年、そして一六二四年間と三回朝鮮が送った使節は、いずれも通信使という名称をあえて避け、回答兼刷還使と称するものであった。これは朝鮮側が日本と通信関係に入ること、つまり正式な国交を回復することに極めて慎重な態度を持っていたことを意味するものである。一六三六年に通信使が派遣されたということは、朝鮮側から見て、ここに始めて戦争以前に類した正式な国交を結んだことを意味していた。

現在確認できるかぎりでは、朝鮮と琉球は一六三四年まで咨文の交換をしていたこと、すでに述べた。『歴代宝案』に収録する朝鮮国王から琉球国王への

咨文及び琉球国王から朝鮮国王への咨文には、ともに「交隣」の文字が見え、両国が共に交隣関係にあると認識していたことは明らかである。さらに「交隣」とは改めていうまでもなく、朝鮮が対外関係として設定した「事大」と「交隣」のそれであり、その代表が日本であった⁴⁹。日本も琉球も同じ明朝の冊封国であるときは、両国をともに交隣国と位置付け通信関係をもつことに、何ら問題なかった。ところが、一六〇九年以後、琉球は日本に併合されてしまった。もっとも一六三六年までは、日本と正式な国交がなかったから、明と同様に朝鮮も琉球の実情を知らぬことにしておけばよかった。ところが、一六三六年には、日本と通信関係を樹立してしまった。このように国際構造が変わってしまった時、琉球が日本に併合された状況にあることを知らぬこととして、琉球とも通信関係を維持し続けることができるであろうか。しかも朝鮮へは中国と違い、琉球が日本に服属しているとのニュースは頻々と絶え間なく届けられることになったのである。

日本と国交回復後、始めて送られた通信使において、その正使となったのは任統である。一六三八年のある日、任統は国王仁祖に侍っていた。任統がその前年に日本から帰ってきたことを知る仁祖は、「お前の考えでは、倭情つまり日本の状況をどう思うか」と尋ね、さらに「琉球国が日本に臣服し入貢しているということだが、本当か」と尋ねた。これに対し任統は「わたしが日本に使いした時に聞いた話では、本当だということです」と答えたという⁵⁰。

南龍翼は一六五五（孝宗六）年通信使の従事官として、日本を訪れた。その旅行記『扶桑録』には、江戸で聞いた話として、琉球国の使臣が薩摩藩主に連れられて来ているということを記している。琉球国使臣はすでに江戸に到着しているのだが、将軍は自分では会わず、執政らに接待させたあとで送り返しているとまで記している⁵¹。また一七一（肅宗三十七）年通信使従事官であった李邦彦は

⁴⁹ 『通文館志』巻五、交隣上、巻六、交隣下。

⁵⁰ 『朝鮮王朝実録』仁祖十六年（崇禎十一年）正月癸巳。

⁵¹ 南龍翼『扶桑録』（『海行摠載』第三冊、京城、朝鮮古書刊行会、一九一四）頁三五〇。
且聞琉球国使臣、薩摩守親領而來矣。已到此、閔白不為親接、令執政等接待以送。

新井白石との筆談の席で、「琉球の使節が貴国に来聘していると聞いているが…」と問うたのに対して、新井は肯定も否定もせず、どちらともとれる返答をしている⁵²。

このような情報は、毎回の通信使一行によって、数多くもたらされたであろう。一七一九（肅宗五十八）年通信使の製述官として日本を訪れた申維翰は、琉球は三年に一回日本に朝貢しており、薩摩で上陸したあと江戸まで行って行礼した後、帰っていると記している。雨森芳洲が語る言葉も、琉球が日本に併合されているとの想定を確信にまで導くものであった。また彼はかつて琉球に漂流して帰還した者に会ったところ、「琉球は日本に朝貢しているから、国王は（我々を）日本へ送ってくれ、やっと朝鮮東萊府まで伝送された」と語ったと伝える⁵³。このように琉球へ漂着した者が日本経由で送還されていた時代あるいは彼らがなお生きていた時代には、彼らの口を通して琉球の実情が朝鮮へ伝えられた。通信使の派遣が復活してからは、この種の情報はさらに多く入るようになったに違いない。

一七一九年通信使に続く一七四八年のそれでも、随員の洪景海は琉球が日本に服属しているとすでに朝鮮国内で聞いていたらしく、対馬から博多沖合いの藍島に向かう時すでに「琉球国は將軍に朝貢しており、薩摩州がその接待を司っていると聞いているが、本当かどうか」と日本人に尋ねている⁵⁴。江戸で書記の李命啓らと筆談した山宮維深は、琉球の土俗は日本とはなはだしく同じであり、これは「思うにわが薩摩州の附庸となっているからである」と述べ、さらには「慶長年間に薩摩の島津家久が兵を遣わして中山国を滅ぼし、尚寧王を捕虜にして帰り、

⁵² 任守幹『江関筆談』（天理図書館蔵今西文庫本）。なお『新井白石全集』第四巻、一九〇六、で趙泰億輯とするのは誤り。

南崗（李邦彦）曰、似聞琉球使臣亦有來聘貴國之事云。……白石曰、文字皆与本邦之俗同。…雖然三歲一聘唐山。…今中山十八世祖舜天王者、本邦源將軍為朝之遺胤。故中山王自稱源姓。

⁵³ 申維翰『海游録』（『海行摠載』第一冊、京城、朝鮮古書刊行会、一九一四）頁三五六。

琉球国有大小二種、皆在日本西南海中。其小者曰中山王。自古朝貢於日本。……三年一朝貢、自薩摩州登陸至江戸、行礼而去。……記余在國時、見京中一褐夫自云、曾於濟州海上、漂風至琉球、見百工所居各有部落、而渠在皮工之區、留得一歲、男女衣服飲食言語、一如日本。聞其國朝貢於日本、故國君送至日本、乃得傳到於東萊云。今与雨森東所言相符。

⁵⁴ 洪景海『隨槎日録』三月十七日。

聞琉球（球）國朝貢於閩白、薩摩州主其接待云、未知然否。

將軍にお目見えさせた。中山王は永く附庸国とならんことを請うた」と述べた。これに対して李命啓は「すでに聞いて知っている」と答えたという⁵⁵。同じく江戸で菅道伯は、通信使に医官として随行してきた趙崇寿らと筆談し、「耽羅国はすでに貴国朝鮮に服属しており、我が国が琉球・蝦夷を有しているようなものである」と言ったのに対して、趙崇寿はまったく疑問を呈していない。さらに趙崇寿が日本の酒について尋ねたとき、「また焼酎というものがあり、薩摩州の産物である。焼酎はもともと琉球から来ている。琉球は薩摩に隷属しているから、人々は薩摩の産物だとしている」とも述べている⁵⁶。通信使の一行は日本へ出発する前に、それまでに日本へ行ったことのある先輩の体験談を聴き、あるいは関連の文献を読んで来た。ここに見えるように琉球が日本に服属しているという事実は、歴代の通信使が続けて日本へ来ることによって、伝承され続け確認され続けたのである。

一六三六年以後であっても、かりに両国使節が北京で会っていれば、事実を知らないことにしてそのまま咨文を交換し続けた可能性はもちろんある。しかし偶然にもこの同じ一六三六年を境として、しばらくの間朝鮮から北京へ使節を送らなかつたし、琉球も明清の交代の前後には北京へ使節を送らなかつた。これが冷却期間となった。

一六三六年以降、再び朝鮮が日本に通信使を送りはじめると、朝鮮当局の要人を通じて琉球が実際には日本に服属し続けていることが継続して伝えられ、これが伝承され、琉球の国際構造におかれた虚構性が暴かれてしまう危険性が大きくなった。日本の幕府が朝鮮に対してこの虚構性を隠すのに汲々としていたようにはまったくくない。一六六九年まで琉球へ漂着した朝鮮漂流民を日本経由で送還し

⁵⁵ 山宮維深『和韓筆談薰風編』巻中、頁八。

其土俗与日本太同。蓋以為我薩摩州附庸也。……慶長中、薩摩侯家久遣兵滅中山、擒王尚寧而歸、見之于大君。中山請永為附庸。……（海阜復、）已聞之。

⁵⁶ 菅道伯『対麗筆語』頁七～九。

其国（耽羅国）既服属貴国、想如我有琉球・蝦夷也。……又有烧酒、出自薩摩州伝之。烧酒本自琉球来、琉球隸薩摩、故人為薩州所出。

ていたように、この頃まで幕府は琉球との関係について隠蔽する必要があるとは、考えていなかったようである。十八世紀になっても、新井白石のような幕府の中枢にいる者にして、「琉球の文字は日本の文字と同じであり、中山王の先祖は源為朝である」と事もなげに朝鮮側に言い放っていた。老練な外交官であった雨森芳洲でさえ、申維翰の問いに対して琉球は日本と関係ないなどと答えることはなく、逆にそれが日本の服属下にあることを確信させるような応答をしていたのである。

朝鮮と琉球が清代にはいると北京で咨文の交換をできなくなったのは、清朝の問題、つまりそれが満州族の統治する国家であったからではない。日本が当時の東アジア四国の国際構造において、それを成り立たせるのに不可欠の要因となるに至っていたからである。中国が日本に対して国交を杜絶し続けたのに対し、朝鮮はこれと通信関係という国交を回復した。ここにおいて両国の対琉球外交も根本的に異ならざるをえず、朝鮮と琉球との国交も杜絶するほかなかったのである。

おわりに

一六〇九年以降における東アジアという場での国際構造を理解しようとするとき、冊封体制という抽象概念が有効でないばかりか、そのような概念があることがかえって著しい事実誤認をも生み出すこと、以上によって明らかになったであろう。西嶋自身が清朝には空前の冊封体制が出現したと認識したことなど、その最たるものと言ってよいであろう。明朝が琉球に対して、時間かせぎとして十年間は入貢してくることは許さない、十年後なら入貢を許すと命じた外交政策についても、これを十年一貢制に改定したものと解釈され、これが繰り返し繰り返し主張されてきたのも、そこに冊封体制あるいは朝貢システムなどという概念があり、このようなシステムは永続するものであるという抜きがたい思い入れがあったからではないか。

中国、朝鮮、琉球、日本の四ヶ国関係は、清代において実質的には三つしかなかった冊封国のうち二つ含まれるという、当時の東アジアにおいては例外的なものであった。その珍しい二ヶ国である冊封国が、相互に咨文の交換すらできなかったという事実は、いわゆる冊封体制論とどのように両立しうるのであろうか。国交が杜絶していること、特に日本と中国とのそれが杜絶し続けたことが、東アジア四国の国際構造を形づくるのに決定的な契機となったのであって、これまで言われてきたように日本が東アジアの国際秩序を離脱していたわけでは決してなかった。そして日本が中国と国交を持たず、一方の朝鮮とは通信関係をもったことが、朝鮮と琉球との国交をも遮断することとなったのである。

外交とは機械によって形づくられるシステムのように、一度装置を設定すれば永続するものでは決してない。それは人間という、事実を知らぬことにできたり、また忘れてしまうことができる柔軟な「機械」が作り出すものである。したがって逆に、何かを契機にして事実が眼前に現れ、突然に思い出されたりすることがあるから、安定した国際構造はここに危機に立たされてしまう。このため皇帝、国王、将軍をはじめとして外交に関わる者たちは、事実が眼前に現れてしまわないように、時に注意をはらわねばならなかった。朝鮮国王肅宗は、琉球との咨文の交換を復活すべきではないと言った宋相琦の意見を採用したとき、彼はその理由として「意外な心配事（意外の慮）があるかも知れない」と言ったという。あるいは彼の漠然とした不安のなかには、将来において琉球が日本に「正式に」併合されてしまう可能性も含まれていたのかも知れない。隠されていたはずの事実が、何かを契機に自らの意図に反して突如として暴かれてしまうことを心配したのかも知れない。

また外交とは、その時その時の国力に応じて変更される。これまで述べてきた東アジア四国の国際構造とは、そのような変更をも含み込んだある枠組である。たとえば我々は、一六一二年から一六三三年までにおこなわれた琉球の朝貢、あるいは琉球に対する冊封について、これを虚構の朝貢、虚構の冊封と呼んだ。しかし、情勢が変化すれば当然に虚が実に置きかわる。中国—琉球関係に即して言

えば、この虚から実に転化したのは、おおよそ清朝が国力を完全に回復し、並ぶ
対抗相手がなくなった遷海令解除の頃、すなわち一六八〇年代のことと考えて
よかろう。康熙二十年代に中国自ら国力が回復しただけではない。かつて敵対国
であった日本もすでに鎖国に入ってから久しく、もはや鶏籠、淡水を占領できる
だけの軍事力を完全になくしていたのである。

〔本稿はもと『朝鮮史研究会論文集』第六集（二〇〇八年十月）に掲載された同
名論文のハングル訳である。〕

1609년 일본의 류큐 합병 이후 중국, 조선의 對류큐 외교

— 동아시아4국의 책봉, 통신 그리고 두절 —

夫馬 進(日本 京都大)

들어가며

동아시아 혹은 동아시아 세계라는 개념이 단순히 지리적인 개념 뿐 아니라 역사적인 개념까지 포함하는 것으로 생각했을 때, 이것은 과연 어디까지 유효한 것일까. 예를 들어 17세기 이후의 시대를 볼 때, 그 개념으로써 국제구조를 이해한다는 것은 어디까지 유효할 수 있을까.

동아시아 혹은 동아시아 세계라는 개념이 역사개념으로서 지금까지 잘 사용되어온 데에는, 페어백이 제창한 조공시스템(tribute system)론과 니시지마[西嶋定生]가 제창한 책봉체제론이 이루어낸 역할이 크다. 양자 모두, 과거 동아시아에서 중국이 압도적인 영향력을 가지고 있었다는 전제 하에 이러한 개념을 구상했기 때문이다. 일본에서는 종종 이 조공시스템론과 책봉체제론을 연결해서 언급해 왔다. 개별국끼리 연결되는 조공관계나 책봉관계를 넘어선 조공-책봉관계라는 추상적인 개념은 일찍이 존재해왔다.¹⁾ 현재에는 조공-책봉제도라는 개념도 자주 사용되고 있다.

그러나 이러한 조공-책봉관계 혹은 조공-책봉체제라는 추상적인 개념을 사용해 국제구조를 이해하려는 논자를 포함한 대부분의 사람들이 공통적으로 범하는 문제점이 있다. 예를 들면 가장 문제시되는 清代에는 과연 몇 개국 정도의 외국을 책봉국으로 보고 있었을까, 중국과 개별적으로 연결된 조공관계와 책봉관계는 구체적으로 어떻게 형성 되고 유지되는 것일까 등과 같이, 인식의 근본이 되어야하는 역사적 사실에는 극히 무관심하다는 것이다. 또 일본인에게 가장 가까운 국제관계, 즉 중국, 조선, 류큐 그리고 일본이라는 4개국의 관계에 지나지 않는 국제관계를 동아시아 전체의 국

1) 坂野正高, 『근대 중국 정치외교사』(동경, 동경대학 출판회, 1973) 76쪽 ; 浜下武志, 『조공시스템과 근대아시아』(동경, 岩波書店, 1997) 22쪽.

제관계로 확대시키는 논의도 자주 찾아볼 수 있다.

본고의 목적 중 하나는, 적어도 1609년에 일본이 류큐를 합병한 이후에는 동아시아에 책봉체제라고 할 만한 것은 존재하지 않았음을 이야기 하는 것이다. 또 당시 국제구조를 이해하기 위해 책봉체제 등의 개념을 사용하는 것이 유효하지 않을 뿐 아니라, 그릇된 인식이었다는 것을 이야기하고자 한다. 그런데 어떠한 개념이 실제 역사를 파악하는데 부적절하다고 이야기하는데 그쳐서는 안된다. 당시의 국제구조를 어떻게 보는 것이 가장 타당한가를 문제 삼아야 할 것이다. 단, 동아시아 혹은 동아시아 세계라는 역사적 개념이 유효한가를 의문시하는 우리들에게, 고찰의 대상이 되는 역사적 공간은 당연히 한정 된다. 여기에서 다루려는 것은 중국, 조선, 류큐, 일본이라는 동아시아 4개국의 국제 구조이다. 이 구조가 당시의 세계 전체의 국제구조에 어떻게 편입되는가는 이후의 과제로 남겨두어야 할 것이며, 책봉체제라는 개념이 1609년 이전에도 유효한 것이었는지에 대해서도 이후의 과제로 남겨두어야 할 것이다.

본고의 또 하나의 큰 목적은, 전근대에는 정식 외교가 두절된 상황에 있던 것이 당시의 국제구조를 성립시키는 데 얼마나 중요했는가를 이야기하려는데 있다. 明末 이후에 중국과 조공관계나 책봉관계를 가지지 않은 나라들이 있었던 것이야말로, 당시의 국제구조를 생성 유지 하는 중요한 요인이 되었다. 유럽각국이 이미 동아시아라고 하는 장에 들어와, 국제구조를 형성하는데 중요한 요인이 되었다는 것을 말하는 것은 아니다. 당시 일본의 지위와 의미를 이야기하려는 것이다. 지금까지의 조공시스템론이나 책봉체제론을 원용하거나, 이름은 없지만 이른 논의의 영향 하에 있다고 생각되는 역사서술에서, 일본은 동아시아의 국제질서에서 이탈해 있었기 때문 운운하는 표현을 자주 볼 수 있다. 그러나 일본이 중국과 정식 외교를 맺고 있지 않았다는, '동아시아의 국제질서에서 이탈했다'는 점이야말로, 오히려 중국이 개별 책봉국과의 관계를 유지하고 책봉국간의 관계를 생성 하는데 중요한 계기가 되었다는 것을 논하고 싶다.

본론에 들어가기 전에, 여기에서 사용하는 용어에 대해 간단히 설명하겠다. 우선 여기서 '일본의 류큐 합병'이라 함은 보통 일본에서는 사쓰마의 류큐 침공 등으로 부르고 있는 그것이다. 이를 일본의 류큐 합병이라고 부르는 것은 당시의 중국인이나 조선인이 이 표현을 가장 많이 사용하였고, 그러한 인식을 기반으로 류큐와 일본을 바라보고 외교정책을 입안했기 때문이다. 또 이 사건을 일본사로서가 아닌 세계사의

한 사건으로 볼 경우, 우리들도 그렇게 부르는 것이 적당하다고 여겨지기 때문이다.

다음으로 부제목을 '책봉, 통신, 그리고 두절'이라 한 것은 당시 동아시아 4국의 국제구조를 생각하는데 있어, 본고에서는 무역과 문화의 구조를 논하지 않고 외교구조만을 논하기 때문이다. 이 중 '통신'이란 조선통신사 등을 의미하는 것으로 國書를 통한 것이고, 이로 인해 양국의 국교가 정식으로 성립 되어 있다는 것을 의미한다. 그에 반해 '두절'은 책봉관계도 통신관계도 없는, 간단히 말해 양국의 국교가 없다는 것을 의미한다. 이와 비슷한 단어로는 '단절'이 있는데, 이 단어는 일반적으로 관계가 끊어진 순간을 표현 하는데 적당한 것으로, 일본과 중국이 16세기부터 19세기에 이르는 수백 년 간 일관적으로 정식 외교가 없었던 상태를 표현하는 데에는 적당하지 않다. 따라서 본고에서는 단절 상태가 지속된 것, 혹은 국교가 수립되지 않는 상태가 계속된 것을 '두절'이라고 표현하겠다.

제1장 청조의 '책봉국'은 몇 개국이었을까

동아시아 4개국의 국제구조를 보기 전에, 우선 밝혀두어야만 할 것이 있다. 그것은 청조의 '책봉국'이 몇 개국이며, 여기서 문제가 되는 동아시아 4국의 국제구조는 동아시아 전체에서 보았을 때 어떠한 특색을 가진 것으로 위치지어질 수 있을까 하는 것이다.

이 문제와 관련해 西嶋선생이 다음과 같이 말하였다. 그에 의하면 “청왕조가 들어서자 조선국을 시작으로 동아시아와 남아시아 諸國의 대부분이 책봉국이 되어 空前의 책봉체제가 출현하였다”, 그리고 이 책봉체제에 참여하지 않았던 것은 “일본과 무굴제국 뿐”이었다고 한다.²⁾ 동아시아와 남아시아 대부분의 나라가 책봉국이었던지 아닌지는 차치하고, 우리들조차도 책봉체제라는 말을 들으면 중국 왕조가 그 주변의 적어도 10여 개국 정도는 책봉국으로 거느리고 있었으리라 상상하고 있지는 않는가.

이 문제를 검토하기 위한 가장 간편한 방법은 각 시대에 편찬된 『大清會典』을 보는 것이다. 그 중 『嘉慶大清會典』(嘉慶 23=1818년 편찬) 권 31, 禮部, 掌四裔職貢에는 「무릇 외국을 책봉하는데, 운운」이라는 제목의 항목이 있고, 조선 越南(安南), 류큐 3개국이 기록되어 있다. 그리고 이 3개국에 대해 '封使' 즉 책봉사를 파견한다고

2) 西嶋定生, 「책봉체제와 동아시아 세계」(西嶋定生 동아시아論集 제 3권, 『동아시아 세계와 책봉체제』(동경, 岩波書店, 2002)) 101쪽. 이 논문은 원래 1989년에 公刊되었다.

기록하고 있다. ‘봉사’를 파견하여 책봉하는 것을 ‘頒封’이라고 부르기도 한다.

『가경대청회전』에는 이 반봉에 의한 3개의 책봉국을 기록한 후, 상대국의 사절이 중국에 파견 되었을 때 그들에게 勅과 印을 가지고 돌아가게 해 책봉한다는 방법을 서술하고 있다. 이것을 ‘頒封’이라고도 부른다. 칙과 인을 사절이 받게[頒] 하여 책봉하기 때문이다. 여기서는 타이가 1673년(康熙 12)과 1786년(乾隆 51)에, 緬甸(미얀마)이 1790년(乾隆 55)에, 라오스가 1795년(건륭 60)에 각각 ‘영봉’되었다고 기록하고 있다. 즉 『가경대청회전』이 편찬 된 19세기 초엽에 청조는 겨우 6개의 책봉국을 거느린 나라라고 생각되므로, 동아시아와 남아시아의 대부분의 나라가 청의 책봉국이었던 것은 완전히 틀린 말이 된다. 게다가 그 나라들을 동등한 책봉국으로 보는 것이 아니라, 적어도 2개 층으로 나누어 보고 있었다. 더욱이 문제인 것은 영봉에 의한 책봉을 받았다고 여겨지는 동남아시아 3국이 실제로 어떻게 책봉을 받았는가 하는 것이다.

우선 미얀마이다. 『淸實錄』에 따르면 1789년(건륭 54)에 처음 미얀마 국왕이 책봉을 원했다는 기록이 보인다. 그에 앞서 1760년대에 청과 미얀마는 두 나라의 국경 근처에서 전쟁을 하여 청이 승리하였다. 오랫동안 중단되었던 미얀마로부터의 조공이 재개된 것은 1788년(건륭 53)의 일이다. 1789년(건륭 54) 5월 乾隆帝는 돌연, 미얀마와의 국경 근처 雲南省의 永昌府知府가 어떤 정보를 자신에게 전해주었다고 말했다. 조공사절 중 한 명이 귀국하면서 미얀마는 책봉 받기를 원하기 때문에 내년에 사절을 보내고 싶다고 했다는 것이다. 건륭제는 이 미얀마인은 영창부지부와 면식이 있는 사이이므로 책봉을 받고 싶다는 미얀마 왕국의 말이 “당연히 근거가 있는 말”라고 여겨, 이제껏 그 보고를 하지 않았던 지방관을 나무라는 한편 “책봉 받기를 원하는 것은 당연히 좋은 것이다”라며 미얀마의 사신을 북경에 보내라고 명령했다.³⁾

건륭제는 이 해 윤 5월에도 미얀마가 책봉을 원하고 있다는 소식이 있다면 이를 위해 준비하라고 명했고, 다음해 2월에는 미얀마 국왕이 책봉을 요구한다는 내용의 상주를 각 지방관으로부터 받고 그를 책봉하기로 결정했다.⁴⁾ 실은 이 해 8월 13일은 건륭제의 80세 생일로, 國都 북경과 離宮 熱河에서 성대한 축하행사를 벌이기로 계획되어 있었다. 미얀마도 이 해에 북경과 열하에 축하 사절을 보냈다.

이 해 6월 13일에 건륭제는 미얀마 國長을 미얀마 국왕으로 봉한다는 칙서를 내렸지만, 이 때 미얀마 사신은 북경에 도착하지 못한 상황이었다. 그들이 ‘책봉국’의 대

3) 『淸實錄』 乾隆 54년 5월 丁丑.

4) 상동서, 건륭 54년 윤 5월 辛亥 ; 55년 2월 癸丑.

표로 入覲한 것은 7월 9일이 되어서였다.⁵⁾

이렇게 보았을 때, 1790년의 미얀마 국왕 책봉은 80세의 생일 축하행사를 한층 성대하게 하기 위한 건륭제 한사람을 위한 것이었다고 단정 지어도 틀린 말이 아닐 것이다. 생일 2달 전, 운 좋게 책봉국을 하나 더 늘린 것이다. 영창부지부에서 비롯된 “미얀마국은 책봉 받고 싶어한다”는 확인되지 않은 정보가돌연 나타나, 중국 관료 뿐 아니라 미얀마인까지 동원되어 새로운 '책봉국' 실현을 위해 움직인 것이다. 이러한 움직임은 건륭제가 안남(베트남)에서 찬탈이 있었다는 정보를 듣고 大軍, 즉 '問罪의 師'를 파견하였으나 그들이 하노이에서 크게 패했다는 소식에 거꾸로 찬탈자를 안남 국왕으로 책봉, 그를 북경, 열하의 축하행사에 참가시키려한 것과 완전히 일맥상통하는 것이다.⁶⁾ 청대에 미얀마국왕이 책봉을 받은 것은 그 때 한 번 뿐이다. 그렇다면 이 시기의 책봉은 건륭제 80세의 萬壽式典을 성대하게 치루기 위해 미얀마국을 '임시 책봉국'으로 만들기 위함이었다고 생각해야 한다. 우리들은 이 같은 '임시 책봉국'을 청조의 책봉국의 하나로 생각해야 하는 것일까. 청조가 이러한 '책봉국'을 조선, 안남, 류큐와 동등하게 보고 있었다고는 생각 할 수는 없다.

다음으로 南掌이다. 이미 언급한 것처럼 『가경대청회전』에는 1795년(건륭 60)에 남장 국왕을 책봉하였다고 기록하고, 이는 다음 『光緒大清會典』에서도 그대로 답습되고 있다. 『청실록』에 의하면, 이 해 7월 26일에 남장국의 사절이 입근하여 건륭제가 회견하였고, 8월 5일에 남장국왕 召濶猛에게 칙유를 내리고 있다. 그 칙유는, 건륭연호가 시작 된지 꼭 60년째이고 자신이 85세의 생일을 맞이했다고 서술한 후에 “龍章을 사용해 하사하며, 南服을 갖추고 王封을 부담케 한다”고 하고 또, “청하는 바를 허가한다”라고도 말하고 있다.⁷⁾ 여기서 말하는 “청하는 바”는 남장국왕에 의한 請封이 있었음을 나타내고 “왕봉을 부담케 한다”는 것이 국왕으로 책봉했다는 것을 나타내는 것 같다. 단, 이것이 이상하게도 건륭 60년이라는 기념할만한 해에 이루어졌다는 것, 그것도 8월 13일 그의 85세 만수절의 직전에 이루어졌다는 것을 주목해야한다. 즉 미얀마 국왕에 대한 것과 마찬가지로, 남장 국왕의 책봉도 만수식전을 띄워주

5) 상동서, 건륭 55년 6월 壬戌 ; 동 7월 丁亥.

6) 줄고, 「명청 중국에 의한 對조선 외교의 거울이 되는 對베트남 외교-책봉 문제와 ‘問罪의 師’를 중심으로-」, 紀平英作 編, 『글로벌화 시대의 인문학-대화와 관용의 지식을 찾아서-』[하](경도, 경도 대학 학술출판회, 2007) 246쪽~248쪽. (FUMA Susumu, "Ming-Qing China's Policy towards Vietnam as a Mirror of Its Policy towards Korea: With a Focus on the Question of Investiture and Punitive Expeditions", *Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko*, No. 65, 2007, pp. 24~26)

7) 『청실록』 건륭 60년 8월 癸未.

기 위한 작위적인 것으로, 극히 임시성이 강한 것일 가능성이 있는 것이다.

남장 국왕에 대한 이 시기의 책봉이 얼마나 임시적이고 자의적으로 이루어진 것인지, 그로부터 십 수년 지난 1809년(가경 14)에 일어난 기묘한 사건을 계기로 만천하에 드러나게 된다. 이 해에 월남 국왕 阮福映이 남장 국왕 소온맹을 청조 지방관에게 護送하면서, 그가 건륭 60년에 頒給되었다는 칙과 인을 함께 보내왔다. 1795년(건륭 60)부터 1805년(가경 10)에 이르는 십 수년간 남장국이 소온맹의 이름으로 청조에 올린 蒲葉의 표문에는 한 번도 이 인장이 사용되지 않았으며, 1794년에 청봉되었던 때에 그는 이미 도피 생활 중으로, 칙인을 받은 뒤에도 國都로 돌아가지 못하고 월남 국경에서 유랑하였다는 사실이 조사를 통해 판명된 것이다.⁸⁾ 베트남 사료 『大南正編例傳初集』에 의하면 소온맹은 1794년(건륭 57)경 운남성으로 도망 중이었다.⁹⁾ 청조는 1794년 혹은 1795년의 단계에서 '임시 책봉국'을 하나 더 만들어내기 위해, '남장 국왕'을 칭하는 인물이 도망 와있으며 그 사절이라는 자가 북경에 온 것을 기회로 책봉을 요청하게끔 하여 책봉한 것이다. 이렇게 책봉을 받은 남장을 청조 사람들이 제대로 된 '책봉국'의 하나로 꼽고 있었다고는 생각할 수 없다.

마지막으로 타이는 『청실록』에 1673년(강희 12) 국왕이 책봉을 받았고, 그 후 미안마에 의해 나라가 멸망한 후 1786년(건륭 51)에 다시 책봉을 받았다고 분명히 나와 있다.

이상에 의하면, 청조가 책봉국으로 보고 있었던 것은 『가경대청회전』이 편찬된 무렵 반봉에 의한 조선, 월남(안남), 류큐 세 나라에 아슬아슬하게 타이를 첨가한 총 4개국이라 말할 수 있다. 게다가 타이는 다른 3개 책봉국과는 위상이 다른 나라로 보고 있었다. 그렇다면 조선, 월남(안남), 류큐의 3개국만이 명실상부한 책봉국이라고 생각할 수 있겠다. 일본의 연구자, 혹은 조선사나 류큐사를 연구하는 사람들은 걸핏하면 중국, 조선, 류큐, 일본으로 이루어진 국제구조를 보고 동아시아 전체가 그러했을 것이라고 생각해버리는 경향이 있다. 그러나 이상에서 밝혀진 것처럼, 이 동아시아 4국의 국제관계는 책봉국 3개국(조선, 월남, 류큐) 혹은 기껏해야 4개국(조선, 월남, 류큐, 타이) 중 2개국(조선, 류큐)을 포함하는, 동아시아에서는 극히 이례적이었던 것이다.

8) 상동서, 嘉慶 14년 8월 乙卯 ; 15년 정월 庚誤.

9) 木村宗吉, 「라오스 왕자, 召溫猛에 대하여」(『史學』제 33권 제 2호, 1961) 111쪽.

제2장 1609년 일본의 류큐 합병 직후 명조의 對류큐 외교

다음으로 중국과 류큐와의 국교로 이야기를 넘겨보겠다.

사쓰마[薩摩]의 군사들이 류큐국 슈리[首里]城을 함락한 것은 1609년(慶長 14, 萬曆 37) 4월 1일의 일이다. 국왕 쇼네이[尙寧]는 포로가 되고 시마즈 이에히사[島津家久]와 함께 순푸[駿府], 에도[江戸]로 향했다. 1610년 8월 8일, 쇼네이는 이에히사와 함께 순푸城에서 도쿠가와 이에야스[德川家康]를, 8월 28일에는 에도성에서 쇼군[將軍] 도쿠가와 히데타다[德川秀忠]를 알현했다. 9월 20일 쇼네이는 이에히사와 함께 에도를 출발해 귀국길에 올랐다. 쇼네이가 나하[那覇]로 돌아간 것은 그 이듬해인 1611년 10월 19일의 일이다.

류큐가 사쓰마의 침략을 받았다는 소식은 그 이듬해 1610년(만력 38) 정월 20일부의 예부로 보내진 문서 및 정월 30일 부의 福建布政司에게 보내진 문서에 기록되어 류큐 사절 毛鳳儀 등을 통해 명에 통보되었다.¹⁰⁾ 양자 모두 류큐 국왕이 사쓰마의 포로가 되어 일본으로 연행되었다고 직접적으로 기록되어있지는 않으나, 후자에는 패전에 의해 “책봉된 국왕이 타국으로 出奔했다” 혹은 “국왕이 일본에서 아직 돌아오지 않았다” 등의 표현이 있었기 때문에, 류큐 국왕이 포로가 되어 일본에 있었다는 것은 누구든지 충분히 알 수 있었다. 또 후자에는 “아직 倭君(도쿠가와 이에야스, 히데요시)와 만나 강화를 요청하지 않았다” “내년(1610년) 2, 3월에 나는 關東으로 간다”고 말하고 있어, 이후 에도에 가서 강화를 할 것이라고 암암리에 전하고 있다.

이 문서들은 늦어도 1610년(만력 38) 2월 초에는 福建 福州의 布政司에게 전달된 것으로 보이나, 이에 대응하는 중국 측 사료는 『明實錄』 38년 7월 辛酉(18일)에야 겨우 등장한다. 게다가 그것은 福建巡撫 陳子貞으로부터 상주를 받아 관계 관청에서 의논한 결과 “계속해서 貢職을 이어갈 것을 허락한다” 즉 공물을 종래처럼 받겠다는 것 밖에는 되지 않는다. 다시 말하면, 책봉국의 국왕이 포로가 되어 일본에 연행된 것 같은데 이에 대해 어떻게 대처 할 것인가에 관한 提言은 전혀 보이지 않는다.

『명실록』에 대응책이 전혀 보이지 않는 것뿐만이 아니다. 당시 북경에서 內閣大學士는 李廷機와 葉向高였는데, 이정기는 몇 번이고 퇴직하기를 원해 정치에는 거의 관

¹⁰⁾ 『歷代寶案』(나하, 오키나와현 교육위원회, 1994·1997) 역주본, 1119-04(제 1책, 543쪽), 1118-05(동, 545쪽), 1132-17(제 2책, 216쪽). 또 『역대옥안』에는 이보다 앞선 萬曆 37년 5일부로 복건 포정사에게 보낸 자문이 남아 있지만(1118-03), 이것이 복건 포정사에게 건네지지 않은 것 같다.

여하지 않았고 엽향고가 실질적 首輔대학사, 즉 재상의 위치에 있었다. 그는 복건성 연안의 福清縣 출신이다. 그는 『蒼霞續草』라는 문집을 남겼으며, 그 중 지인 혹은 복건 주재의 관료에게 보내는 편지에는 鄉里 복건에서 횡행하고 있던 '通倭', 즉 일본과의 밀무역에 대한 내용이 많이 수록되어 있다. 그러나 이 편지 중에 류큐와 직접 연관되는 것은, 후술할 1612년(만력 41)이 되어 류큐에 대한 처우를 어떻게 하면 좋을 까를 진지하게 고민해야 하는 상황이 되어서야 처음 등장한다. 1610년(만력 38)과 그 다음 해에 쓰여진 것으로 보이는 편지에는 류큐에 대해 일절 언급하고 있지 않다. 류큐는 그때까지 역대 국왕이 명조에게서 책봉 받고 있었다. 그것도 영봉이 아니라, 북경에서 특별히 관리를 현지에 파견하는 방식을 취하고 있었다. 그런데 그 忠順한 류큐가 일본에 침략을 당해 국왕이 포로가 되어 끌려간 것 같다는 사실이 전해져도, 그 중주국의 실질적인 재상이자 복건성 연안지방 출신자로서 어떤 대책도 세우지 않고 있는 것이다.

『歷代寶案』에 의하면, 1610년 12월 16일부로 萬曆帝가 류큐국 中山王 쇼네이에게 보낸 칙유가 남아있다. 그러나 이것도 류큐 국왕이 왜란을 겪어 입공의 시기를 놓쳐 죄송하다는 말을 했다는 데 대해 “슬픈일이다”라고 쓰고 있을 뿐이다.¹¹⁾ 이처럼 명조 정부의 냉담하다고도 할 수 있는 대응을 볼 때, 혹시 복건순무 진자정이 류큐 국왕이 일본의 포로가 되어 연행되었다는 중대한 사실조차도 명확하게는 전달하지 않았던 것은 아닌가 하는 의문이 생긴다.

하지만 그렇지는 않았다. 이와 관련된 사료가 조선연행록에 몇 군데나 남겨져 있기 때문이다. 그 중 하나는 1610년(만력 38)에 千秋使 정사로 연행했던 黃是의 기록이다.¹²⁾ 이에 따르면 그가 7월 29일에 명조의 官報인 通報를 읽어보니, 류큐가 倭奴(일본인)의 공격을 받아 류큐 국왕이 포로가 되어 일본에 연행되었다는 복건순무 진자정의 상주문이 실려있었다고 한다. 여기서 우리의 의심은 완전히 풀린다. 즉, 류큐국왕이 포로가 되어 일본에 끌려간 것을 진자정이 중앙에 보고 한 것 뿐 아니라, 그 뉴스가 관보에 실려 공개되었기 때문에 누구든지 그 사실을 알 수 있었던 것이다. 더구나 9월 18일 일기에는 그 날에 류큐 사신 모봉의 등 11명이 조선 사신의 숙소

11) 상동서, 1101-31(제 1책, 33쪽).

12) 黃是, 『朝天錄』(林基中 편, 『연행록전집』, 서울, 동국대학교 출판부, 2001, 제 2책, 515쪽). 임기중이 이 연행록을 黃士祐 撰이라고 한 것은 잘못이다.
[萬曆三十八年]七月二十九日、見通報、福建巡撫陳子貞一本曰、上年四月、倭奴入寇琉球國、大肆攻殺、虜中山王尚寧及國戚三法司等官、一併隨往日本、王弟及(法)司馬良弼等、今守其國云。
[九月十八日]是日、琉球國使臣毛鳳儀等十一人來舍、於副使庁奔告其國倭寇之變也。

에 일부러 찾아와, 일본의 침략을 받았다고 말했다고 한다. 지푸라기라도 잡는 심정으로, 같은 책봉국에게 무언가 도움을 요청한 모양이다.

게다가 그 한 달여 뒤, 이번에는 冬至使 부사로 북경을 방문한 丁士信도 모봉의와 회견을 갖는다. 10월 30일 회견은 조선 측 倭譯官, 즉 일본어 통역을 중간에 세워, 서로의 의사가 잘 전달되었다고 한다. 회견은 다음과 같다.

더욱이 류큐 국왕이 倭(일본)의 포로가 되는 대사건에 대해 물어보니, “작년(1609) 4월, 왜인이 명목 없이 군사를 일으켰기 때문에 국왕이 화를 냈다. 올해 9월에 강화가 되어 나라에 돌아가게 되어 다행이다 운운” 이라고 대답했다.

세간에 떠도는 풍문에 대해 대략 물어보니, 류큐는 왜와 강화하여 매년 1회 사절을 파견하기로 하였다고 한다. 옛날 戊申년(1608)에 이에야스가 류큐에 봄과 가을 두 차례 공물을 바치게 하였으나, 류큐가 이를 따르지 않았다. 이에야스가 사쓰마에 명하여 군대를 일으켜 이를 정벌했다. 류큐왕은 “죄는 나에게 있다. 우리 죄 없는 인민을 곤혹하게 만들면 안된다”고 말하며 군대 앞으로 나아가니, 사쓰마는 이를 잡아 가버렸다. 이에야스는 “자기 스스로 그 어려움을 감당하고 인민을 생각했다. 천하의 義主이다”라고 말하고, 결국에는 귀환시키기로 했다고 한다.¹³⁾

여기서 정사신 쪽이 류큐 국왕이 왜(일본)의 포로가 된 사건을 화제로 삼았던 것은, 앞서 모봉의 일행과 회견한 황시가 귀국하는 도중에 북경에 가려고 하는 정사신 일행을 만나 그 때 이 이야기가 전달되어서였을지도 모른다. 혹은 그가 서울을 출발하기 전에 이 사건에 대해 들었기 때문이라고도 생각할 수 있다. 『조선왕조실록』 만력 38년(광해군 2) 4월 20일조에 의하면, 慶長의 役(丁酉倭亂) 때 포로가 된 조선인

13) 鄭士信, 『梅窓先生朝天錄』, 51쪽(임기중 편, 『연행록전집』제 9책, 336쪽 ; 정사신, 『庚戌朝天日錄』(동, 제 20책, 565쪽)).

[万曆三十八年十月]三十日辛丑, 晴. 与琉球国使臣相会, 伝授国咨及礼单. 琉球亦有正副使. 語用倭語, 訳官不解倭語, 故招管押使之倭訳官金孝舜伝語, 然後始得歡然相接. 仍問其国王為倭所擄之變, 答曰, 去年四月, 倭人興無名之師, 国王越在草莽. 以今年九月講和, 還国無事, 云々. 略聞流伝之言, 琉球与倭講好, 歲一遣使. 往在戊申(万曆三十六年), 家康使之春秋修貢, 琉球王不從. 家康命薩摩島興師伐之. 琉球王曰, 咎在予身, 不可以累我無辜之民. 遂詣軍前, 薩摩執之以去. 家康曰, 身当其難, 而志在愛民, 天下之義主也. 遂遣還云々. 相与啜茶而罷.

이 일본, 조선 간의 화의가 이루어져 귀국하였다. 그 한명이 사쓰마州에 끌려가니 “작년(1609) 5월, 사쓰마 島主가 류큐를 침략하여 그 왕을 포로로 삼고 데려왔다. 또 수천 명을 파견하여 류큐의 전 국토를 측량시켰다”라는 정보를 가져왔다. 정사신이 서울을 출발하여 북경을 향한 것은 8월 6일이므로, 이 단계에서 류큐 국왕이 사쓰마의 포로가 되어, 카고시마[鹿兒島]까지 연행되었다는 것을 알았을 가능성이 크다.

모봉의가 이 회견에서 “올해 9월에 강화가 있었다”고 특별히 9월을 지목해 말한 것은, 이 회담이 10월 30일에 이루어진 것을 생각할 때, 놀라운 정도로 빠르게 에도의 정보가 북경에 전달된 되었음을 나타낸다. 9월 3일 쇼군 히데타다가 중산왕 쇼네이과 함께 에도성에 온 시마즈 이에히사에 대해, 류큐는 이후로도 尙家가 국왕을 잇도록 명령했다는 사실을 말하는 것일지도 모르고, 혹은 9월 16일 히데타다가 이에히사와 쇼네이를 초대해 귀국을 허가 했던 사실을 가리키는 것일지도 모른다.¹⁴⁾

정사신이 기록한 류큐 사신과의 회담에 대한 기사에서 가장 흥미로운 것은, 그가 “流傳의 말” 즉 소문이라고 기록한 부분이다. 이에 의하면 류큐는 왜(일본)와 강화하고, 매년 1회 사신을 파견하기로 했다고 한다. 이것이 그 2년 전, 이에야스가 봄과 가을에 2번 入貢해야한다고 요구한 것에 대해 류큐 국왕이 이를 따르지 않았던 결과라는 것, 즉 바로 '조공'이라는 것을 정사신을 포함해 소문을 들은 사람들 누구든지 인정했음에 틀림없다.

이 “流傳의 말”이 중국의 어느 정도 범위에서 퍼져 있었는지는 확실하지 않지만, 북경의 관청가가 그 중심이었다고 보는 것이 가장 자연스럽다. 10월 말 단계에서 엽향고 등 북경 주재 당국자들이, 류큐가 일본의 침략 받은 뒤 이미 강화가 있었으며 '조공'하게 된 것 같다는 소문 이상의 정확도 높고 풍부한 정보를 손에 넣었을 것이라는 점은, 이러한 사실들을 종합해 볼 때 틀림없다. 그러나 그들은 '조공국' 류큐를 어떻게 처리해야할까, 혹은 일본에 대해 어떤 태도를 취해야할까에 대해서는 언급하고 있지 않다.

李日華의 『味水軒日記』 1611년(만력 39) 정월 4일에 실린 浙江省 海鹽縣 知縣의 喬拱璧이 남긴 말은 당시의 중국 관료로서 류큐 문제에 대해 언급하고 있는 얼마 없는 기록 중 하나이다.¹⁵⁾ 교공벽은 이 날, 이일화에게 “일본이 류큐를 합병했다”고 말

14) 『通航一覽』 권 3, 30~31쪽 ; 紙屋敦之, 『幕藩制 국가의 류큐 지배』(동경, 校倉書房, 1990) 25쪽.

15) 中砂明德, 『강남-중국 文雅의 원류』(동경, 講談社, 2002) 178쪽 ; 『味水軒日記』(상해, 上海遠東 출판사, 1996) 157쪽.

海鹽喬令君來顧。談日本併琉球事，言中朝既累世受其朝貢，不宜置之不理。即力不暇勤兵，亦宜于海島附近處稍安插之，令奉宗廟血食，以俟琉球臣民之忠義興復者，而為之策。是在督責閩廣二撫臣，不

하였다. 그에 따르면 명조는 역대에 걸쳐 류큐의 조공을 받아왔기 때문에 군대를 움직일 여유가 없다 하더라도 이를 두고 보기만 하는 것은 좋지 않다, 류큐 국왕을 海島 근처에 옮겨와 安置하고 그 선조의 제사를 계속하게 해야 한다고 말하고 있다. 또 그는 북진순무와 廣東巡撫가 입을 다물고 아무 말도 않는 것은 좋지 않다, 이라고 있으면 遠夷들이 중국을 업신여기게 된다고 말했다고도 하니, 북경의 관리들뿐 아니라 현장을 담당했던 북진순무 진자정 등도 역시 아무 말도 하지 않았던 것 같다. 게다가 이일화 자신이 관보(邸報)를 읽었다는 것이 일기에 자주 등장하기 때문에, 그도 류큐가 일본에 합병된 것을 일찍이 알았을 것이다. 그런데 그 날 교공벽과 대화하기 전까지 그는 류큐에 대해 아무 말도 하지 않았다. 이일화는 이렇게 직언하는 교공벽을 의연한 대장부라고 평가하지만, 그가 “일본이 류큐를 합병했다”는 것을 전제로 말하고 있는 이상, 류큐 국왕을 해도 부근에 옮겨와 안치해야 한다는 주장은 역시 탁상 공론에 지나지 않을 것이다.

謝肇淛의『五雜俎』에는 다음과 같은 글이 있다. “류큐는 나라가 작고 가난하고 약하여 자립이 불가능하다. 중국의 책봉을 받고 있다고는 하나, 왜(일본)에 臣服하고 왜(일본)의 사절로서 이르는 자가 끊이지 않고, 중국으로부터 오는 사절과 뒤섞여 있다. 생각건대 왜는 류큐와 영토가 연결되어 있어 공격하기 간단하다. 중국은 大海를 건너 류큐를 구해낼 수 있을까”¹⁶⁾

사조제에 의한 이 류큐 기사가 정확히 언제 쓰였는지는 알 수 없다. 이 글에는 1614년(만력 42)의 일도 쓰여져 있기 때문에, 그로부터 수 년 뒤의 기사일지도 모른다. 반대로 일본의 사신과 중국의 사신이 류큐에서 뒤섞여 있다고 한 것으로 보아, 1606년에 쇼네이를 책봉하러 갔던 夏子陽 일행이 가져온 정보에 의한 것일지도 모른다. 하자양은 귀국 후 “류큐는 장래에 일본에게 당할 것이다”라고 몰래 지인들에게 이야기 했다고도 한다.¹⁷⁾ 그렇다면 이 기사가 1609년 사쓰마의 공격 이전에 쓰였을 가능성도 부정할 수 없다. 그러나 일본이 류큐를 공격하기는 쉬우나 중국은 먼 바다

宜噤不發聲，使遠夷謂中國不足倚也。

단 간체자로 된 출판물로 「談日本并琉球事」로 기록된 것이 목판본에는 「談日本併琉球事」라고 기록되어 있다(북경도서관 고적진본총간 제 20책, 북경, 書目文獻출판사 수록).

喬拱璧에 대해서는 『天啓海鹽縣圖經』 권 9, 官師 편.

16) 『五雜俎』 권 4(변양, 요녕교육 출판사, 2001) 86쪽.

琉球國小以貧弱，不能自立，雖受中國冊封以亦臣服丁倭，倭使至者不絕，與中國使相錯也。蓋倭與接壤，攻之甚易，中國豈能越大海而援之哉。

17) 줄고, 「夏子陽 撰 『使琉球錄』 해제」(줄편, 『增訂使琉球 해제 및 연구』, 宜野灣, 용수서림, 1999) 57쪽.

를 건너 구조하러 갈 수 없었다고 쓰여 있던 점으로 보아, 역시 공격을 받은 이후에 쓰였다고 생각하는 것이 순리에 맞을 것이다. 사조재도 복건성 연안 長樂縣의 사람으로 1579년(만력 7)에 류큐 국왕 책봉부사가 된 謝杰과 비교적 가까운 친척이었다. 사절은 류큐에 대한 극히 상세한 사료를 남겼다.¹⁸⁾ 사필재는 류큐에 대해 비상한 관심을 가지고 있었다고 보인다. 그가 논하고 있는 것처럼, 류큐가 아무리 일본의 공격을 받는다 해도 중국이 대해를 건너 구조하러 가는 것이 불가능하다는 사실은, 당시 조금이라도 류큐의 실정을 알고 도리를 분별할 줄 아는 지식인들의 공통인식이었을 것이다. 그렇기 때문에 엽향고 이하 복건순무에서 鄉紳 이일화에 이르기까지, 아무런 발언도 하지 못한 것이다.

이상으로 이해할 수 있는 것은 첫째, 당시의 중국인과 조선인의 인식에는, 류큐가 사쓰마의 공격을 받았다는 것보다 일본에 합병되었다는 쪽이 더 중요한 것이었다. 이러한 인식은 그 후에도 계속되며, 그 후 사태의 진전에 따라 더욱 강화된다는 점은 후술하겠다.

두 번째로 명조의 류큐에 대한 외교정책은 같은 책봉 관계 하에 있던 조선과는 확연히 다르게 냉담함을 보였다. 류큐가 일본에게 침략당할 위험성이 있다는 것은 명조 사람들도 사전에 알고 있었다. 책봉국이 위기존망의 기로에 서있음에도 불구하고 명조는 아무런 대책이 없었다. 류큐 문제를 심각하게 다룰 수밖에 없게 된 것은 다음 장에 살펴볼 일본과의 문제가 시작된 시점이었다.

제3장 1612년 류큐 입공 이후 명조의 對류큐 외교

1609년부터 1611년 단계에서 조선이 류큐에 대해 어떠한 조치도 취할 수 없었던 것은 앞서 말한 바와 같은데, 1612년(만력 40)이 되면 상황이 크게 달라진다. 1612년에 류큐가 진공해 왔을 때, 이것이 일본의 조종에 의한 것이라는 점을 누구나 알 수 있었기 때문이다. 류큐의 조공 사절이 중국 측의 입국검사도 거치지 않고 사전에 入貢한다는 연락도 없이 돌연 福州에 나타났기 때문이며, 공물에는 일본의 생산물이 섞여있었기 때문이다. 또 그 조공 사절 중에는 다수의 일본인이 포함되어있었다고도 한다. 일본이 류큐를 배후에서 조종해 이번 조공이 이루어졌다는 사실은 누가

18) 岩井茂樹, 「蕭崇業·謝杰 撰『使琉球錄』해제」(상동서 수록) 43쪽.

보아도 명백했다.

1612년(만력 40) 정월, 류큐 국왕은 입공을 위해 사절을 파견하여, ‘夷酋’ ‘倭君’이 명조의 ‘天威’를 두려워해 자신이 무사히 귀국할 수 있었다, 그래서 자신은 이전과 마찬가지로 영토를 평정하고 있다고 보고했다. 이 보고에 대한 명조 측의 대응이 『명실록』에 나타난 것은 이 해 7월이 되어서야 었다.¹⁹⁾ 『명실록』에 의하면, 류큐가 다시금 입공해 왔다, 국왕은 무사 귀환했다고 통보해왔다는 정보가 복건순무 丁繼嗣에 의하여 북경에 전달되었다. 그는 여기에서 국왕은 귀국했다고 말하고 있지만, 류큐가 일본의 지배하에 있는 것은 의심할 여지가 없고 이를 “(독립) 국가로는 보기 힘들다는 것은 분명하다”라고 말하며, 이번 입공도 류큐가 “倭夷에 떠밀려서 왔다”고 서술하고 있다. 그가 얻었을 전후 정보로 보아 당연한 것인데, 그는 이번 류큐의 입공이 실질적으로는 일본에 의한 ‘입공’이라는 점, 위장을 하고 있을 뿐 아니라 류큐의 “평상시의 恭順한 뜻”을 의심하게끔 하는 일이라고 말하고 있다. 류큐 문제는 여기에서 명확히 일본 문제가 될 수밖에 없었으며, 따라서 명조 당국에게 비로소 큰 문제가 된 것이다.

같은 달 상주된 兵科給事 중 李瑾 등의 인식도 이와 거의 같았다. 류큐가 살육당한 직후에 국왕이 석방되었기 때문이라고 하며, 갑자기 일본의 위력을 잇고 머나먼 중국의 義를 우러러 입공해 왔을 가능성은 없다고 보고, 역시 “왜(일본)가 지시를 내려 시킨 것이 명백하다”고 말하였다. 이근 등은 “류큐가 약한 것은 걱정스러운 일이 아니다”라고 말한다. 걱정스러운 것은, 이러한 류큐의 입공을 허락하면 일본인이 국내의 간사한 무리와 결탁해 중국의 내정을 염탐하고, “왜(일본)에 가까운 境域이 류큐에 이어 그 영역이 되어버리는” 것이었다.²⁰⁾

병부의 인식도 이와 완전히 일치한다. 수십 년 동안, 왜(일본)가 탐내온 것은 중국에의 ‘조공’이다. 그래서 류큐를 획득하고, 나아가 중산왕을 석방 귀국시켜 通貢의 통로로 삼고자 하는 것이라고 병부는 인식하고 있었다.²¹⁾

앞서 서술했던 복건순무 정계사는 일본이 배후에서 류큐를 조정해 이루어진 이번 입공에 대해, 사절단 중 정사 등 몇 명을 억류해 처분을 검토하고 다른 사람은 모두 귀국시키자고 하였다. 아울러 통상적인 조공만 받아들이며 통상적이지 않은 공물 즉, 일본인이 공물로 들여왔던 일본의 산물은 모두 돌려보자는 대응책을 제언하였다. 이

19) 『明實錄』 萬曆 40년 7월 己亥.

20) 상동서, 만력 40년 7월 己酉.

21) 상동서, 만력 40년 8월 丁卯.

제언이 옳은가 그른가를 검토하라는 황제의 명을 받은 예부도 이렇게 하는 것이 좋겠다고 상주하였다. 이것이 7월 7일의 일이다. 그러나 예부에서 황제에게 올려진 이상주는 내부의 의견으로 끝나 버리고, 황제에 의한 최후결정은 내려지지 않았다. 이것을 留中이라고 한다. 엽향고는 당시 실질적인 재상의 지위에 있었고 게다가 복건성 출신자였기 때문에, 류큐 문제, 단적으로 말하면 일본문제에 지대한 관심을 가지고 있었다. 그는 현지 복건에서 이번 류큐 문제에 대응하고 있는 정계사에게 복건의 정황을 편지로 전하고 있다.

류큐가 입공해 온 것에 대해, 지금까지 예부가 회답한 상주문 중에 이렇게 하심이 어떻겠습니까라는 原案을 황제에게 올렸지만, 황제는 판단을 내리지 않았다. 그 후 다시 병부가 왜(일본)에 대해 조목별로 쓴 상주문 속에도 이렇게 하심이 어떻겠냐는 原案을 올렸지만, 역시 황제는 판단을 내리지 않았다.

황제께서 무슨 생각을 하시는지 알 수는 없지만, 두 가지 이유가 있을 것이다. 그 하나는 200여년에 걸쳐 恭順했던 류큐인데 하루아침에 공물을 거절하는 것(一旦絶之)은 服遠의 化를 밝히는 방법이 아니기 때문이다. 다른 하나는 왜(일본)가 가져온 공물(倭中貢物)이 먼 나라에서 온 이상 밀쳐내는 것이 반드시 좋지는 않다고 생각하시기 때문이다. 그렇지 않으면, 왜 몇 번이나 原案이 제출되었음에도 불구하고 몇 번이나 그대로 방기되어버렸겠는가.²²⁾

당시 만력제는 정무를 게을리 하여, 자신에게 전달되어 온 대량의 상주문을 留中해 둔 채 지시를 내리지 않았다. 류큐 입공 문제에 대한 상주문이 留中되었던 것 역시 그러한 맥락 위에 있지만, 위의 엽향고의 말에서 이 문제는 다른 문제들과 달리, 황제나 그 측근들이 좀처럼 결단을 내릴 수 없는 중요 안건이었을 것이라는 점을 엿볼 수 있다. 책봉국이자 조공국이면서 갑자기 공순한 태도를 버린 류큐의 공물에 대해, 책봉이나 조공의 이념에 따라 이 행위를 非禮로 보고 이를 거절하고 돌려보내는 것

22) 葉向高, 『蒼霞續草』 권 20, 答丁撫台(복건총서 제 1집의 2, 『蒼霞草全集』, 양주, 江蘇廣陵 고적각 인사, 1994, 제 7책, 1707쪽).

琉球貢事曾于禮部覆疏中, 擬上而不下. 後又于兵部條陳倭事疏中擬上而又不下. 聖意不可知, 度之殆有二端. 其一則以二百余年恭順之邦, 一旦絶之, 非所以昭服遠之化. 一則以倭中貢物既自遠來, 不必却還. 不然何以屢擬而屢寢也.

이 마땅하다는 사고가 그들의 대전제로 깔려 있었기 때문이다. 그러나 이러한 경우, 당연히 국교가 단절되어버릴 것이라는 점도 함께 고려해야 했다.

엽향고가 들고 있는 결단 지연의 다른 한 가지 요인은, 그 표현에서 흥미롭다. 그는 본래 ‘류큐 공물’이라 해야 할 부분을 ‘倭中貢物’이라 잘못, 아니 사실은 주저하지 않으면서도 정확하게 표현하고 있다. 더구나 본래대로라면 절대 받아들이면 안 될 ‘倭中貢物’을 “반드시 되돌려 보내야 하는 것은 아니다”라고 생각하고 있다. 그 이유는 무엇일까.

류큐 입공 문제가 留中으로 결론이 내려지지 않자, 이를 우려한 엽향고는 11월 12일 揭帖이라는 형식으로 상주해 사태를 타개해 보고자 했다. 揭帖이라 군사기밀과 관련된 중요 안건이나 조정의 큰 문제가 닦쳤는데 이념과 현실의 간극이나 관료들 간의 치열한 논의 때문에 황제가 좀처럼 결단을 내리기 힘들 때, 內閣大學士가 文淵閣의 인감을 사용해 봉인, 상주해 황제의 좌우 근신이라도 그 내용을 엿볼 수 없도록 한 형식이다.²³⁾ 엽향고의 이 揭帖은 그의 奏議集 뿐 아니라, 『명실록』 만력 40년 11월 壬寅에도 대략 전문이 실려 있다.

그가 여기에서 보이고 있는 인식은 정계사 등과 마찬가지로, “류큐는 이미 왜노(일본인)에게 병합되어버렸다. 이번에 입공 온 자들도 반수는 왜인(일본인)이었다”고 말하고, “왜는 류큐에 격문을 보내, 강제로 교역해달라는 청원을 하게 하였다”라고 보고 있다. 그리고 그는 빨리 결단을 내리지 않으면, 福州에 체재하고 있는 일본인들이 스파이 활동을 할지도 모르고, 나아가 과거 嘉靖 大倭寇처럼 대사건이 발생하게 된다고 경고하고 있다.

이 문제에 대한 결론이 내려진 것은 그 3일 후, 즉 11월 15일이었다. 『명실록』 만력 40년 11월 乙巳에는 예부로부터의 회답을 황제가 승인했다고 이 일을 기록한다. 예부는 “류큐가 어떻게 되었는지, 그 실정을 헤아리기 어렵다. 공물은 거절하는 것이 적당하다(宜絶之便). 그러나 진공을 명목으로 내세우고 있는데 이쪽이 갑자기 돌려보내면, 저쪽에 구실을 주게 되니 먼 곳의 백성을 화목하게 다스릴 수 없게 될 것이다”라 하고, 류큐가 일본의 침략을 받아 국력이 쇠퇴해져 있기 때문에 “10년 후를 기다려 국력이 어느 정도 충실해지면” 다시 입공시켜도 늦지 않다라고 말하고 있다. 명조 측은 10년간은 입공시키지 않고 10년 후에 입공하는 것은 인정한다는 결론을 겨우 내렸으며, 일본이 가져온 산물을 받아들이지 않고 가지고 돌아가게끔 하였다.

23) 徐復祚, 『花當閣叢談』 권 1, 密揭.

그런데 이 “10년 후를 기다려 국력이 어느 정도 충실해지면” 다시 입공을 허락한다는 결정에 대해, 학계에서는 대체로 그때까지의 2년 1공이 10년 1공으로 개정되었다고 생각하고 있다.²⁴⁾

그러나 이 예부의 결정 및 이것이 류큐에 통지되었음을 전하는 『역대보안』에 수록된 문서에 의하는 한, 어디에서도 2년 1공에서 10년 1공으로 개정되었다는 등의 내용은 기록되어있지 않다.²⁵⁾ 예부의 결정은, 간단히 말하면 십 년 간은 입공하러 오지 말라는 것이다. 이 명조 측의 의도를 더욱이 명확히 보여주는 것은 엽향고가 복건포정사였던 袁一驥에게 보낸 편지이다.

류큐의 공물에 대해서는, 이미 예부가 회답한 상주문 중에, 常貢은 받겠지만 倭의 산물은 거절하기로 한다, 류큐 사절들에게 앞으로 오지 않도록 訓諭하고 류큐가 평온해질 때까지 계속 기다렸다가 그 후 다시 처치하면 어떻까라고 황제에게 原案을 제출했다. 이는 福建巡撫·巡按의 의도이기도 하다.²⁶⁾

명조 측의 본심은 “앞으로 오지 말라”는 것으로, 입공 문제도 포함해 류큐와의 관계는 나중에 안정이 되면 다시 검토하고 싶다는 것이었다. 즉 10년간이란 그를 위해 시간을 버는 것에 다름 아닌 것이다.

이처럼 1612년(만력 40)이 되면 1610년의 경우와 달리, 명조 당국자들은 류큐 문제에 정면으로 마주 대하지 않을 수 없었다. 그러나 그것은 류큐가 200년에 걸친 공

24) 각주 14)의 紙屋 저서, 31쪽 ; 上原兼善, 『막부제 형성기의 류큐 지배』(동경, 吉川弘文館, 2001) 109쪽 ; 眞栄平房昭, 「류큐 무역의 구조와 유통 네트워크」(豊見山和行 편, 『류큐·오키나와사의 세계』 일본의 시대사 18, 동경, 길천홍문관, 2003) 121쪽 ; 豊見山和行, 『류큐 국왕의 외교와 왕권』(동경, 길천홍문관, 2004) 273쪽. 개설서로는 『新류큐사 근세편(상)』(나하, 류큐신보사, 1990) 70쪽, 124쪽.

25) 『역대보안』 1-07-6(제 1책, 270쪽), 1-07-18(제 1책, 272쪽), 1-18-08, (제 1책, 552쪽), 1-39-22(제 1책, 367쪽).

26) 『창하속초』 권 20, 答袁希我, 1709쪽.

琉球貢事, 已于部覆疏中, 의수기常貢而卻其倭物, 諭其來使, 以後勿來, 直俟彼國平定, 然後再處. 蓋亦即兩台疏中之意也.

원희아란, 당사 복건 포정사였던 袁一驥이다(『閩書』 권 45, 文菴傳, 복주, 복건인민출판사, 1994, 1129쪽).

원일기는 그 후, 복건순무로 승진한다. 그리고 『명실록』 만력 43년 3월 乙卯에 의하면, 10년 뒤를 기다려 입공하라고 명했음에도 불구하고 류큐는 41년에도 42년에도 입공하였다는 기술을 하며, “琉球違四十年題准十年一貢之限, 云々”이라고 서술하고 있다. 그러나 여기서 말하는 “十年一貢”은 “만력 40년에는 10년 후 입공하도록 허락했다”는 것에 지나지 않으며, 10년에 1회 입공하는 제도를 정한 것은 아니다.

순한 조공국이자 책봉국이었기 때문은 아니다. 이들 당국자들은 역설적으로 류큐가 “평상시의 공순한 뜻이 아닌” 면을 보았기 때문어야말로, 즉 일본에 조정당해 거짓 입공을 한 사실을 알았기 때문어야말로, 류큐와 정면으로 마주대하지 않을 수 없었던 것이다. 그들은 하루아침에 공물을 거절(一旦絶之)할 가능성도 생각하고, 공물을 거절하는 것이 적당하다(宜絶之便)고도 생각했다. 표면상으로는 조공이란 禮의 표현이기 때문에, 거짓 입공에 대한 이러한 사고는 당연한 것이었다. 실제로 또, 명초에 朱元璋이 非禮라는 명목으로 高麗의 입공을 몇 번이나 거절한 사례도 있다.²⁷⁾

명이 류큐의 공물을 거절하지 못했던 이유가 그 배후에 있는 일본이 두려웠기 때문이라는 것은 말할 필요도 없다. 예부 제안 가운데에, 공물을 거절하면 “저쪽에 구실을 주게 된다”라는 말은 이를 암시적으로 표현한 것이다.

이에 대한 엽향고의 생각을 다시 들어보자. 그는 문집에 「答董吏部」라는 제목의 편지를 남기고 있다. 동리부란 당시 吏部 文選司員外郎이었던 董應舉를 가리킨다. 동응거 역시 복건성 閩縣, 즉 복주 출신으로, 일본 문제에 지대한 관심을 가지고 있었다. 류큐 입공 문제가 북경에서 벌어져 때마침 예부의 상주문이 留中되고 있던 1612년 10월, 그는 「嚴海禁疏」를 상주했다.²⁸⁾ 그것은 가정연간에 왜구에게 큰 탄압을 가하고 자살한 朱紘을 현창하면서, 通倭 즉 일본과 밀무역을 하는 자를 엄벌에 처하고 海禁을 엄격히 해야한다는 주장을 펼친 글이다. 그 역시 이 상주문에서 “류큐는 이미 왜(일본)의 속국이 되었다”고 적고 있다. 이러한 그에게 엽향고는 해금 문제에 대해 다음과 같은 내용의 편지를 적어 보냈다.

복건 사람 가운데 사대부로서 먼 앞날의 일까지 생각하는 사람만이 海禁을 해야 한다고 말하며, 그 외의 자들은 모두 금지해서는 안된다고 말한다. … 또 하루아침에 관계를 끊어버리면(一與之絶) 왜는 반드시 신속히 쳐들어와서 오히려 피해를 주게 될 것이다. 그러므로 정부 당국자도 이 설에 현혹되어 海禁하고자 굳게 결심하지 못하게 되는 것이다.²⁹⁾

27) 줄고, 「명청 중국의 對조선 외교에 있어서의 “禮”와 “問罪”」(줄편, 『중국 동아시아 외교교류사의 연구』, 경도, 경도대학 학술출판회, 2007) 320쪽.

28) 董應舉, 『崇相集』(四庫禁燬書叢刊集部 102, 북경, 북경출판사, 17쪽) 疏 1, 嚴海禁疏. 그는 뒤에 「答項聽所年兄」(만력 45년), 「答黃撫台」(동년)에서 「嚴海禁疏」가 일본에 전해져, 왜인들이 저자인 자신을 비르고 있다며 자랑스럽게 기록하고 있다.

29) 『창하속초』 권 20, 答董吏部(1713쪽).

閩人惟士大夫之有遠慮者, 言其當禁, 其余則皆以禁為非. 是其說之所以易惑人者, 謂我以縉絮雜物, 而得倭之金錢, 利莫大焉. 且一與之絶, 倭必速來, 反以致害. 故當道亦狐疑于此, 難以堅決, 此乃吾閩

여기에서 볼 수 있듯이, 통왜 문제에 대한 대책과 류큐 입공 문제에 대한 대책에서 완전히 동일한 사고방식을 찾아볼 수 있다. 그들의 이념에 따라 류큐로부터의 공물, 실은 일본으로부터의 ‘공물’을 “하루아침에 거절”해 버린다면, 外夷에게 “구실을 준다”, 즉 이후 또 어떤 강경한 수단으로써 ‘通貢’을 강요해올지도 모른다는 사고방식과 마찬가지로, 해금을 엄중히 해 “하루아침에 그들과의 관계를 끊어 버리면” 오히려 피해를 입을지도 모른다고 생각하고 있는 것이다. 엽향고는 복건순무 정계사에게 보낸 다른 편지에서 “류큐는 이미 당해서 왜(일본)에 병합되어버렸다. 왜구 (침략)을 빌미로 통공하자고 하는 것도 필연적인 정세이다”라고 말했다.³⁰⁾ 류큐로부터의 통공을 완전히 차단하는 것은 해금을 엄중히 하는 것과 마찬가지로 극히 위험한 일이었다.

그들이 가장 두려워했던 것은, 류큐가 이미 일본의 세력 하에 들어간 위에, 다음으로 대만의 鷄籠·淡水를 점거당하는 일이었다. 류큐가 완전히 일본의 것이 되게 하면 안된다. 역시 정계사에게 보낸 다른 편지에서 다음과 같이 말한다.

많은 복건인은 왜(일본)의 목적은 通市 즉 자유무역에 있으며, 入寇 즉 침략에 있지 않다고 말한다. 그 정황과 도리로 본다면 그 말 대로일 것이다. 그러나 通市는 결코 이루어질 수 없는 설이다. 누가 이 임무를 맡을 수 있겠는가. 지금 걱정하는 것은 일본이 이미 류큐를 併呑하고 점차 우리나라에서 얼마 떨어지지 않은 鷄籠·淡水를 점거해, 이를 구축하려 해도 할 수 없고, 막으려 해도 방비하기 어려운 것이다.³¹⁾

류큐가 병합된 다음은 대만의 鷄籠·淡水라는 생각이 당시 명의 당국자 혹은 복건 사람 대부분의 공통된 인식이었던 것 같다. 이에 앞서 류큐 국왕 쇼네이가 자신은 사쓰마 軍勢의 포로가 되어 사쓰마까지 연행되었다고 완곡하게 통보한 문서 속에서, 자신은 왜(일본)와 함께 鷄籠을 점거하러 가자는 강압을 받았으나 이에 따르지 않았을 뿐 아니라 사쓰마에게 이를 중지하도록 설득해 받아들여졌다고 적고 있다.³²⁾ 그

人之自誤耳.

30) 상동서, 권 20, 答丁撫台(1689쪽).

琉球既折而入于倭. 倭之借寇以通貢, 亦必然之勢.

31) 상동서, 권 20, 答丁撫台(1725쪽).

閩人多言, 倭之志在于通市, 不在入寇, 拋其情理, 似亦近之. 然通市是決不可行之說, 誰敢任此. 今所慮者彼既吞琉球, 漸而拋鷄籠淡水, 去我愈近, 驅之則不能, 防之則難備.

로부터 수년 후인 1616년(만력 44) 쇼네이는 사절을 중국에 파견한다. 그는 일본의 정황을 보고하고, 지금 일본은 戰船 500여척을 만들어 鷄籠山을 차지하려고 한다고 보고하였다.³³⁾

앞서 언급한 동용거도 일본에 의한 鷄籠 점거를 두려워한 사람 중 하나였다. 무라야마[村山等安] 등이 대만에 출병한 1616년에, 그는 『籌倭管見』에서 “왜(일본)가 鷄籠에 눈독을 들인지 오래 되었다”고 말하고, “鷄籠은 복건에서 3일 거리에 있다”, 鷄籠을 빼앗기면 복건은 과거 왜가 조공 문제를 둘러싼 살육사건을 일으킨 寧波처럼 되거나 조선의 평양처럼 아수라장이 될 것이라곤 논하고 있다.³⁴⁾ 역대 使琉球錄(류큐 冊封使 기록)에 의하면 류큐에서 복건까지는 당시 약 10일에서 2주일정도 걸렸으므로, 겨우 3일 만에 도착한다는 것은 확실히 위협적이었음에 틀림없다. 동용거는 1616년에 되면 과거 해금론을 방기한 것처럼 보인다. 그리고 이러한 정세 판단을 근거로, 鷄籠을 일본과의 무역의 장으로 만들면 이곳을 점거당하지 않을지도 모른다, 그 보다는 류큐의 조공 무역을 확대해 ‘外寨’를 시장으로 삼아 여기에서 무역하도록 하는 편이 좋다고 주장한다. 그에게 있어서도 류큐 문제는 일본 문제였던 것이다.

명조 측은 일본이 통공을 위해 류큐를 이용하고 있다는 사실을 명확히 알고 있었다. 예컨대 류큐 입공 문제가 일어난 와중에, 兵部는 “수십년 동안 왜(일본)가 탐내는 것은 ‘貢’ 뿐이다. 따라서 이미 류큐를 그 지배하에 두고, 또 중산왕을 귀국하도록 놓아주고 통공의 통로로 삼으려고 하고 있다. 일본은 중국이 일본의 貢은 결코 받아들이지 않지만, 류큐의 貢은 절대 반대하지 않는다고 생각하고 있다”³⁵⁾고 말하였다. 지금 여기에서 류큐의 공물을 절대 받아들이지 않고 이후에도 이러한 방침을 견지한다면, 어떻게 될까. 일본은 류큐가 더 이상 이용 가치가 없다고 판단, 류큐 국왕도 폐위시키고 그 땅을 완전히 자국의 영토로 삼을 것이다. 그렇게 되면 다음은 鷄籠·淡水 차례가 될 것임은 누가 보더라도 명확했다.

이렇게 생각하면, 국력이 회복될 때까지 10년 동안 입공하지 말라는 예부의 최종 판단은 실로 훌륭한 외교적 판단이었다고 할 수 있다. 이 때 이러한 결정을 내린 예

32) 『역대보안』 1-18-03(제 1책, 540쪽), 1-18-04(544쪽), 1-18-05(546쪽).

33) 『명실록』 만력 44년 6월 乙卯 ; 11월 癸酉.

34) 『송상집』 議 2(集部 102, 190쪽) 籌倭管見, 권 2, 中丞黃公倭功始末(집부 102, 204쪽).

倭垂涎鷄籠久矣. ……鷄籠去閩僅三日, 倭得鷄籠則閩患不可測, 不為明州, 必為平壤. ……今開琉球之市于外寨交易, 則外貨流通, 奸人牟利者, 近亦得售, 不得生心于鯨鯢之窟, 而勾引可潛消. ……且与其以鷄籠市也, 孰若以琉球市, 与闌出而釀勾引也, 孰若開一路于琉球.

35) 『명실록』 만력 40년 8월 丁卯.

부의 중심인물은 翁正春이었다. 『明史』 권 216 翁正春傳에 의하면 그는 당시 禮部左侍郎으로서 禮部尙書의 대리를 맡고 있었으며, “공물을 거절하는 것이 적당하다(絶之便)”고 주장했다고 전한다. 옹정춘도 역시 복건성 侯官 사람, 즉 福州人이었다. 옹향고, 동응거, 그리고 옹정춘 등, 복건인으로서 일본, 류큐의 실정에 통달해 있는 인물들이 연계해 류큐와 조공 관계를 단절하지 않으면서 그리고 일본에의 밀무역을 완전히 끊어내지 않음으로써, 일본의 침략을 미연에 방지한다고 하는 실로 훌륭한 외교 정책을 입안했다고 할 수 있을 것이다.

류큐는 10년 후를 기다리지 못하고, 이듬해인 1613년, 그 다음해인 1614년에 명의 명령을 무시하고 입공을 반복했다. 그런데 이러한 非禮에도 불구하고, 공물을 받고 조공 관계를 유지하였다.³⁶⁾ 나아가 1614년(만력 42), 류큐 측은 10년 간의 입공 정지는 견디기 힘들다고 하며, 예부 앞으로 常貢 회복을 요청하는 문서를 제출하였다. 한편으로는 조선의 구원을 위해서는 大軍을 파견했으면서 우리 류큐는 “국왕이 포로가 되도록 놓아둔” 채 아무런 구원 조치도 없었다는, 명조에 대한 원망의 말을 나열하는 동시에, 이렇게 입공을 허락하지 않고 “만약 일본의 교활함을 끊어내기 위해 류큐의 忠順도 일괄적으로 끊으려는 것이라면” “順함을 驅逐하고 逆으로 돌아서게 된다”는 협박성 문구를 늘어놓은 것이었다.³⁷⁾ 이는 아마도 시마즈, 나아가 그 배후에 존재하는 막부의 압력을 받아 쓴 글일 것이다. 입공을 종래와 같이 회복하지 않으면, 자신은 명조를 더 이상 상대하지 않고 일본에 완전히 붙겠다라고 협박하는 것은 공순한 조공국·책봉국으로서 있을 수 없는 非禮이며, 명조 측에서 국교를 단절하는 것은 당연한 일이었다. 그러나 앞서 살펴본 바와 같이, 명조는 이때에도 이를 꾸짖거나 사신을 돌려보내는 일 없이, 공물조차도 돌려보내지 않고 받아들였다. 명조는 조공관계를 끊고 단교하고 싶어도 그렇게 할 수 없었던 것이다. 말할 것도 없이, 국교조차 성립되어 있지 않은 일본의 움직임에 규제를 받았기 때문이었다.

명조가 류큐의 압력을 일부 받아들여, “10년 간 기다리라”는 명령을 철회, 5년 1공으로 바꾼 것은 1623년(天啓 3)의 일이었다. 나아가 1634년(崇禎 7)에는 3년 2공이 되었다.³⁸⁾ 형태상으로는, 류큐의 중국에 대한 조공은 1609년 이전과 같은 형태로 회복한 것처럼 보인다. 그러나 여기에 중대한 변화가 있었다는 점은 말할 필요도 없다. 5년 1공 단계에서 일본이 류큐를 병합하고 있다는 정보에 어떤 변화가 없는 한, 류

36) 상동서, 만력 43년 3월 乙卯.

37) 『역대보안』 1-18-08(제 1책, 552쪽).

38) 상동서, 1-04-09(제 1권, 169쪽).

큐의 입공은 실질적으로는 일본의 입공에 다름 아니었다는 점을 명조 당사자들은 누구나 이해하고 있었을 것이다. 3년 2공 단계에서도 마찬가지이다. 실제로는 일본의 입공임에도 류큐의 입공이라고 바꾸어 적고, 명조가 이를 거절할 수 없는 조공, 우리는 이를 ‘허구의 조공’이라 불러도 될 것이다.

류큐가 새로이 책봉을 요청한 것은 1622년(천계 2), 그리고 실제로 尙豊이 책봉을 받는 것은 1633년(숭정 6)의 일이다. 이즈음 행해진 류큐의 조공을 허구의 조공이라 부르지 않을 수 없다면, 이렇게 행해진 책봉도 ‘허구의 책봉’이라고 부르지 않을 수 없을 것이다. 이미 우리는 명조에 의한 안남(베트남) 왕국에 대한 책봉이 허구의 산물이라고 보았다.³⁹⁾ 명 조정은 그 건국 당시부터 현지 베트남에서 大越皇帝라 칭해지는 별도의 황제가 존재했다는 것을 알고 있었기 때문이다. 그것을 알면서도 모르는 척, 대월황제를 ‘안남 국왕’이라고 바꾸어 적고 조공을 받고 책봉을 해 왔기 때문이다.

1609년을 경계로, 중국은 또 하나의 ‘허구의 조공국’, ‘허구의 책봉국’을 만들게 되었다. 물론 이것은 중국 측이 바란 것이 아니라 강요당한 것이었다. 언뜻 보기에는 이전과 같은 국제구조가 지속되고 있는 것처럼 보인다. 그러나 여기에서 새로이 생겨난 국제구조에는 중국과 국교가 두절되어 있는 한 국가, 즉 일본이 결정적 계기 제공자로서 쥘여 있었다. 류큐를 종래와 마찬가지로 조공국, 책봉국으로서 거느릴 수 있었던 것은 중국과 일본의 국교가 두절되어 있었던 점이 전제로 작용해 비로소 가능했던 것이다. 또 배후의 일본이 있기 때문어야말로, 류큐와 조공관계·책봉관계를 지속할 수밖에 없었다. 역설적으로 말하면, 지금까지의 표현을 빌자면 “일본이 동아시아의 국제질서에서 이탈해 있었기” 때문어야말로, 이들 논자들이 말하는 ‘동아시아 국제질서’가 존속된 것이다. 이러한 국제구조가 유지되기 위해서는 중국 측은 사실을 계속 모르는 척 하던지, 그 사실을 잊어버릴 필요가 있었다.

이러한 사실, 즉 일본이 중국과의 국교관계를 두절하고 있으면서 류큐를 매개로 사실은 전체로서 하나의 국제구조를 형성시키고 있었던 점은, 다음에 언급할 조선, 류큐의 관계를 살펴보면 한층 더 명확해질 것이다.

³⁹⁾ 각주 6)의 줄고, 239쪽, 249쪽(영역본, p. 15, 27).

제4장 조선·류큐의 외교 두절

일본과 중국이 외교적으로 두절관계에 있으면서 류큐를 매개로 구조상 밀접한 관계에 있었던 것은, 조선-류큐 관계에도 결정적인 변화를 가져왔다. 양국의 외교를 두절시켰기 때문이다.

류큐가 1609년에 일본에 병합되기 이전, 조선과 류큐는 명조로부터 함께 책봉을 받는 나라로서 서로 咨文을 구하는 관계였다. 서로 자문을 구하는 관계라는 것은, 예를 들면 북경으로 파견된 사절이 의식에 참가했을 때 조선 측이 상석에 앉는 등의 차이가 있지만, 기본적으로 대등한 관계였다는 것을 의미한다. 양국은 서로를 友邦이라고 부르며 형제라고 불렀다. 양국의 사절은 여러 차례 북경 玉河館에서 만나, 국왕의 대리로서 자문과 선물을 교환하였다. 일찍이 조선과 류큐는 바다 건너 通信使(信使)가 왕래했으며 국서를 교환하고 있었다. 그러한 관계는 16세기 초까지 계속된 것 같은데, 예컨대 1500년(弘治 13, 연산군 6)에 조선을 방문한 류큐 사신은 국왕을 대신하여 자문을 전달하고 있다.⁴⁰⁾ 이러한 의미에서, 북경에서의 자문의 교환은 통신관계의 연장이었다.

한편, 류큐가 일본에 병합되었다는, 게다가 그 국왕이 포로가 되었다가 강화가 성립해 나라로의 귀국이 허용되었다는 뉴스는 조선에 매우 빨리 전해졌다. 이에 조선 측은 류큐가 일본의 지배하에 놓인 것을 알았지만, 류큐와는 기존과 전혀 변함없는 관계를 유지했다. 명조가 류큐와 절교했던 것은 아니었으므로, 조선 측도 일본에 병합되었다는 사실을 모르는 척 하면 되었던 것이다. 양국의 자문 교환이 적어도 1634년(승정 7)까지 계속되고 있었다는 사실은 『역대보안』에 남아있는 문서를 보아도 명백하다⁴¹⁾.

조선이 홍타이지가 이끄는 만주족의 침략(丙子胡亂)을 받았던 것은 그로부터 2년 후인 1636년, 청의 책봉을 받은 것은 그 다음해인 1637년(승덕 2, 인조 15)의 일이다.

그 후 청이 북경으로 천도하고 이윽고 류큐도 책봉을 받자, 양국 사절은 다시금 북경에서 만날 수 있게 되었다. 그러나 양국 사절은 만나기는 하지만, 결코 서로 속사를 방문한다거나 국왕의 대리로서 국서를 교환하는 일은 없었다. 양국의 국교의 두

40) 『朝鮮王朝實錄』연산군 6년 11월 丁卯.

41) 『역대보안』 1-39-23(제 2책, 368쪽).

절은 일본이 ‘정식으로’ 류큐를 병합하기까지 즉, 이른바 류큐 처분에 의해 나라가 소멸하기까지 일관되게 계속되었다.

『조선왕조실록』, 『승정원일기』, 『비변사등록』 등의 국가 기록 혹은 연행록에는 류큐인을 보았다 혹은 그들과 만났다는 기록이 다수 남아있다. 그러나 그 모두가 기묘할 정도로 냉담하다. 특히 연행록에는 류큐인을 본 사실이 신기한 체험인 것 마냥, 그들이 입었던 의복 등에 대해서 상세히 기록되어 있다.

생각해보면 기묘한 광경이 아닐 수 없다. 왜냐하면 양국 사절이 함께 북경에 체재하고 있을 때에는 여러 차례 함께 예부의 명령으로 鴻臚寺로 불려가서, 함께 의식의 예행연습을 하고 있기 때문이다. 의식이나 연석에서도 예부는 같은 조공국자 책봉국으로 간주, 양국 사절을 같이 열석시켰다. 혹은 황제가 紫禁城에서 나올 때나 돌아갈 때, 예부는 양국 사절에게 명하여 그 문 밖에서 무릎을 꿇고 황제가 오는 것을 기다리도록 하였다. 이렇게 함께 무릎을 꿇고 열석해 있었음에도 불구하고, 양국 사절은 거의 대화를 나누는 일이 없었던 것 같다. 국교가 없었기 때문이다. 정사와 부사는 국왕의 대리로서 북경에 와있었기 때문에, 歡談이 불가능했다. 19세기가 되면, 조선 연행사의 수행원으로 북경에 왔던 자 중에는 류큐인과 조우하여 ‘友邦’ 사람이라고 기술한 자도 있었다. 1826년(道光 6)에 북경에 갔던 洪錫謨가 그 중 한 사람이다.⁴²⁾ 그들은 필담을 나누기도 하였다. 그런데 어떤 연행록에는 그러한 필담에서 류큐 측 사람이 다음과 같이 썼다고 전하고 있다.

貴國 조선은 일찍이 우리나라와 통교하고 있었다. 자문이 지금에 이르기까지 존재하고 있다는 것이다.⁴³⁾

여기에 보이는 것과 같이, 19세기에 들어서도 양국 간의 자문 교환은 이루어지고 있지 않았다. 조선 측에서 필담을 했던 것은 金命喜(山泉), 즉 金正喜의 동생이었다. 1823년(도광 3, 순조 23) 정월 元旦, 자금성에서 행해졌던 正朝 의식에 참가했던 때

42) 洪錫謨, 『游燕藁』(林基中·夫馬進 編, 『燕行錄全集日本所藏篇』, 서울, 동국대학교 한국문화연구소, 2001, 제 1책, 608쪽).

琉球來遣使, 萍水遇奇緣, 航梯重三訊, 衣冠共一天, 聲音雖未曉, 文字喜同傳, 各處東南海, 那知會日邊.

43) 撰者 미상, 『燕行雜錄』 癸未 정월 초 1일(林基中 編, 『연행록전집』 제 81책, 2001, 118쪽). 임기중은 徐有素 撰, 『燕行錄』이라고 본다.

山泉方与琉球使臣筆談, 其應對頓不窘. …貴國曾与我国通好, 咨文至今尚在云. 我朝, 琉球嘗入貢, 想其事也.

의 일이었다. 의식 사이에 이루어진 필담이었으므로 당연히 어수선했다. 이 연행록 작자는 이 필담을 기록한 후, “류큐는 일찍이 입공하고 있었다. 그 일을 말하는 것이다”라고 감상을 기술했다. 그러나 류큐가 ‘입공’해 왔던 것은 海路를 통한 통신이 이루어지고 있었던 16세기 초반까지의 일이다. 이 기록자는 17세기 중엽까지 양국이 북경에서 자문 교환을 했다는 사실을 모르고 있었던 것 같다.

이와 같은 상태가 발생한 원인으로, 명의 멸망 이후 양국의 ‘私交의 禮’가 없어졌기 때문이라든지, 조선은 이 시기에 청과의 책봉관계에 그다지 의미를 두지 않고 새로운 脫中華의 독립적인 교린체제를 수립했기 때문이라는 등의 해석이 이루어졌으나, 모두 설득력이 떨어지고 설명에 구체성이 결여되어 있다고 생각한다.⁴⁴⁾

이 문제에 대해서는, 1717년(강희 56, 숙종 43)에 단 한 번 조선정부에서 류큐와 국서를 교환해야 한다는 논의가 있었다는 사실이 시사하는 점이 매우 크다. 『비변사등록』 숙종 43년 정월 2일에 대략 다음과 같이 내용의 기록이 있다.⁴⁵⁾

이날, 提調 閔鎭厚가 국왕에게 다음과 같은 말을 하였다. 명대 만력 丙申년(1596)에 조선 측이 류큐 漂着民을 송환했을 때, 류큐는 감사의 뜻을 표하는 자문을 우리나라로 보내왔다. 작년(1716)은 마침 병신년이니, 이 해에 류큐가 조선 표착민을 송환해 준 것은 우연이 아닐 것이다. 이번에는 조선쪽에서 감사의 자문을 류큐에 보내야 하지 않을까.

都提調 金昌集도 이에 동조해 다음과 같이 말하였다. 류큐에 표착해 구조되었던 조선인의 말에 의하면, 그들은 “옛날 조선인이 표착했던 때, 이쪽에서 북경에 전송한 일이 있는데, 그들이 조선 본토까지 귀환했는가 어떤가”라고 류큐인이 물었는데 전혀 모르는 일이었기 때문에 마음이 불편했다고 한다, 류큐가 힘써 송환해 준 이상, 비록 명조와는 시대가 다르다고는 해도 자문을 보내 보고하는 것이 도리가 아닌가.

민진후는 더 나아가, 명대에 전례가 있는 이상, 북경의 예부도 트집을 잡아 반대하는 일은 없을 것이라고 의견을 개진했다.

그런데 예조판서인 宋相琦가 반대의견을 상주해, 결국 류큐로 자문을 보내는 것은 취소되었다.

44) 이훈, 「조선왕조 시에 후기 漂民 송환을 통해 본 조선-류큐 관계」(『歷代寶案研究』제 8호, 1997) 26쪽 ; 손승철, 「조선-류큐 교린체제의 구조와 특징」(손승철, 『근세 조선의 한일관계 연구』, 서울, 국학자료원, 1999, 191쪽 ; 하우봉 외, 『조선과 류큐』, 서울, 아르케, 1999, 74쪽).

45) 『備邊司謄錄』 제 70책, 숙종 43년 정월 2일. 『承政院日記』同日條도 거의 같은 내용이다. (提調閔鎭厚曰), 萬曆丙申, 琉球國以漂人還送事, 順付謝咨於我國云. ……謝咨古事, 既甚明白, 則今番亦宜有送咨申謝之道. ……既有前例, 禮部亦似無持難不從之事矣.

한편, 1596년(만력 24)에 류큐 표류민을 조선 측이 송환했다는 것은, 사실은 1589년(만력 17)에 표착했던 류큐인을 조선 측이 명조의 遼東都指揮使에게 데려다 준 일을 말하는 것일 것이다. 『명실록』에 의하면 그들은 요동도지휘사에게 건네진 후, 명조 측에 의해 북경까지 전송되고 그 뒤에 북건으로 보내졌다. 류큐 측은 이에 대해 감사의 뜻을 표하는 자문을 북경에서 조선 측에 건네고, 이 감사의 자문에 대한 회답을 조선 측이 써서 마찬가지로 북경에서 류큐 측에 전달하고 있다. 이는 1597년(만력 25) 8월 6일부 자문으로, 『역대보안』에 수록되어 있다.⁴⁶⁾

요동에서 북건 북주까지는 명조가 일관되게 호송하고 있기 때문에 류큐는 명에게도 당연히 상주문 혹은 자문을 통해 감사의 뜻을 표했을 것으로 생각된다. 이와 같이 명대에는 종주국인 명을 매개로 조선과 류큐가 표착민을 송환하고 있었다. 『同文彙考』에 의하면, 청조에 들어서자 1698년(강희 37)에 류큐가 조선 표류민을 북주까지 보내고 중국 측이 이들을 북경까지 보내어, 마침 이 때 북경에 와있었던 조선 관원에게 인도하였다고 한다. 이 때, 조선 측은 청조에게 「謝漂人出送表」라는 제목의 상주문 외에, 감사를 표하는 다수의 문서를 써 보내고 있다. 그러나 표착지점에서 북건까지 호송해 준 류큐국에게 감사의 자문을 쓰는 일은 전혀 없었다. 이를 명조 시대처럼 북경에서 전달하는 일 역시 전혀 없다. 자국 백성을 송환해 준 상대국에 대해 감사의 뜻을 표하는 것은 당연한 예의일 것이다. 더구나 양자는 동일한 종주국을 함께 받드는 조공국이며 책봉국이었다. 도대체 무엇을 꺼려 자문의 교환을 하지 않았던 것일까. 예조판서 송상기의 반대의견을 들어보자.

송상기에 의하면, 皇朝(명조) 시대에는 국가 간의 교제에 구속이 적었다. 지금 조선과 류큐가 같은 ‘藩服國’이라고 상호간에 문서가 왕래한다면, ‘외교의 戒’를 범하는, 즉 종주국을 통하지 않고 사적인 교제를 하게 되는 것이다. 반드시 청조를 통해 자문을 보낼 필요가 있는데, “명조 때에는 류큐와 자문을 교환하고 있었다”는 변명만으로 북경의 예부를 설득할 수 있을까. 원래 명조 때에는 예부를 가운데에 두고 류큐에 자문을 건네는 일 등은 없었다. 게다가 1698년(강희 37)에 류큐가 조선 표류민을 송환해 주었을 때에도, 이와 같은 감사의 자문은 이쪽(조선)에서 보내지 않았다.

또한 청조 중국은 조선이 일본과 통신사를 보내 교제하고 있는 것을 알면서 문제 삼지 않는다. 그러나 류큐와는 통신관계가 아니다. 만력 이래, 백년 가까이 양국 간

46) 『역대보안』1-39-18(제 2책, 360쪽). 이 자문과 일부 내용이 같은 자문이 『조선왕조실록』 선조 29년(만력 24) 8월 甲寅에 기술되어 있다. 민진후가 만력 24년의 일이라고 한 것은 이 때문일 것이다. 또 『명실록』 만력 17년 11월 庚戌.

의 서신 교환이 없었는데, 지금 갑자기 류큐와 통신하려고 한다면 청조의 의혹을 불러일으킬 것이다. 따라서 자문을 교환하지 않고, 북경에 齎咨官 등 사무 레벨의 조선 관료가 갔을 때 류큐 측에 감사의 뜻을 전하면 된다. 이상이 송상기 반대의견의 개략이다.⁴⁷⁾

그러나 이러한 논의를 자세하게 검토해 보면, 반대의견으로서 극히 설득력이 부족하다는 것을 알 수 있다. 그는 같은 ‘번복국’인 조선과 류큐 사이에서 문서가 왕래하면 사적인 교제를 하게 되는 것이다, 이를 예부가 납득하도록 설득할 수 있을까 등 몇 가지 난점을 들고 있지만, 자문을 보내자는 제안을 했던 민진후가 “예부도 트집을 잡아 반대하는 일은 없을 것이다”라는 예측을 했던 것처럼, 반대하지 않았을 가능성이 충분하기 때문이다. 실제로 예부의 허가를 얻어 혹은 예부를 통해 자문을 교환한다면, 청조로서는 자신의 ‘번복국’이 사이 좋게 교제하고 있다는 사실이 드러나 왕조의 威德을 한층 빛낼 수 있는 절호의 기회라고 판단했을 가능성이 크다. 그러나 숙종은 이러한 반대 의견을 지지하는 판단을 내리고, 그 결과 상호간에 국서 교환은 끝내 이루어지지 않았다. 송상기의 상주문을 읽은 숙종은 “이 문제에는 뜻밖의 걱정거리가 있을지도 모른다”고 말해, 그의 의견을 채용했다고 한다.

그런데 도대체 어떠한 원인 때문에 양국을 다시 통신을 교환하는 나라가 되지 못했던 것일까. 송상기가 언급했던 다른 반대이유를 보자. 그것은, 강희 50년대에 이르기까지의 약 80년간 이미 양국은 통신이 끊어져 있었다는 사실이다. 그리고 이전 류큐가 조선 표류민을 송환했던 1698년(강희 37)에는 감사의 자문을 쓰지 않았다는 선행이 있다. 송상기가 만력 이후 백년 가까이라고 말한 것은 명백한 과장으로 사실은 승정 이래 약 80년이지만, 이 때 이미 80년간 국교 두절 상태였던 것은 사실이다.

결론부터 말하면, 이 시기 조선이 류큐에 자문을 보낼 수 없었던 이유는 배후에 일본이 있었기 때문이다. 더욱 명확히 말하면, 첫 번째, 1698년(강희 37)에 류큐가 조선 표류민을 복주-북경을 경유해 송환해 주기 전까지, 류큐-사쯔마-나가사키[長崎]-쓰시마[對馬]라는 일본 루트를 통해 송환하고 있었기 때문이다. 그리고 두 번째로, 조선은 류큐가 일본에 병합된 상태였다는 것을 알고 있었기 때문이다.

47) 宋相琦, 『玉吾齋集』 권 10, 請勿送琉球國咨文疏(『韓國文集叢刊』 제 171책, 418쪽).

但念皇朝時則視我國猶一家, 凡於朝聘交際之間, 不甚拘禁. ……若以藩服之國, 自相通書, 以犯外交之戒, 而又要我以伝云爾而或有嘖嘖之言, 則其將以皇朝時亦有此事為解, 而可以杜彼之說耶. ……頃於戊寅年, 琉球亦有解送漂人之事, 而其時未聞有謝咨, 豈亦拘於事勢難便而然耶. ……蓋我國之於日本, 則壤地相接, 信使往來, 即彼人之所知, 無可諱者. 而琉球則不然, 隔以重溟万余里, 萬曆以後近數百年, 曾無通問之事. 今忽修書齎幣, 以示相好之意, 則彼之不致怪持難, 臣不敢必也.

答曰, ……茲事不無意外之慮, 予意則不如不為之為愈也.

먼저 첫 번째 문제이다.

외교사료집 『동문회고』 付編, 권 29 이하에는 조선인이 일본으로 표착, 송환되었던 때에 교환된 많은 문서가 실려 있다. 다수는 초슈[長州]와 쓰시마 등 ‘일본’ 諸藩에 표착했던 경우의 기록이고, 류큐에 표착했던 경우의 기록은 3건이다. 1662년(寬文 2), 1663년(관문 3), 1669년(관문 9년)의 연호가 들어간 문서이다. 쓰시마島主가 조선에 보낸 송환에 관한 문서에는 모두 ‘류큐’→삿슈[薩州]→나가사키 그리고 쓰시마까지 전송되어왔던 사실이 기재되었다. 이는 예컨대, 초슈로 표착했을 때, 초슈→나가사키 그리고 쓰시마로 송환되었다고 기록된 것과 같은 형식이다. 이에 대한 감사의 글은 조선 예조에서 발행되었는데, 모두 「禮曹參議答書」라는 제목이 붙여졌다. 여기에도 ‘류큐’→삿슈→나가사키로 전송되었다고 기록되었다. 주의해야 할 것은, 이 모두가 쓰시마도주가 보낸 문서에 대응해, 류큐는 삿슈와 나가사키라는 하나의 번과 동격으로 기재되어 있으며, ‘류큐국’이라는 하나의 국가로 기록되고 있지 않다는 점이다.

한편, 『동문회고』 原編, 권 66 이하에는 조선인이 중국에서 송환되었던 때에 교환했던 문서가 수록되어 있다. 역시 다수는 중국으로 표착해 송환되었던 때의 것이지만, 류큐에서 중국의 복주-북경을 경유해 송환되어 왔던 때의 것이 몇 가지 포함되어 있다. 이미 밝혀진 대로, 청조가 海禁令(遷海令)을 해제한 1684년(강희 23) 이후가 되면, 류큐는 중국인 표류민을 일본 사쓰마가 아니라 복주로 직접 보내주게 되었다.⁴⁸⁾ 이와 함께, 조선 표류민에 대해서도 일본을 경유하지 않고 중국을 경유해 송환하게 된다. 『동문회고』에 의거하면, 처음으로 복주를 경유해 조선 표류민의 송환이 이루어졌던 것은 1698년(강희 37)의 일이다. 이 경우, 예부가 조선 표류민의 송환에 대해 통지했던 문서에 ‘류큐국’→복주→북경이라고 기재되어 있는 것에 대응해, 조선에서 황제에 제출했던 감사의 뜻을 표하는 상주문, 혹은 예부로의 자문에서도 ‘류큐국’이라고 쓰여 있다.

류큐에서 복주까지 송환을 담당했던 것은 류큐국이었는데, 조선에서 ‘류큐국’으로 감사의 뜻을 표하는 자문이 보내진 적은 한 번도 없었다. ‘禮義의 邦’을 자인하는 조선으로서는 심히 예의에 어긋나는 일이라고, 국정 담당자도 생각했을 것이다. 그렇기 때문에, 민진후와 김창업과 같은 주장이 나왔던 것이다.

1698년에 감사의 자문을 쓰지 않았던 이유는, 아마 바로 30년 전까지 조선 표류민이 일본을 경유해 귀환하고 있었기 때문일 것이다. 그때까지 예조는 쓰시마에 보냈던

48) 荒野泰典, 『근세 일본과 동아시아』(동경, 동경대학 출판회, 1988) 126쪽 ; 각주 24)의 豊見山 저서, 81쪽.

禮狀에 류큐를 마치 일본의 藩인 초슈 등과 같이 일개 지방명으로 기록 할 뿐, ‘류큐국’이라고는 기록하지 않았다. ‘류큐’에 감사의 문서를 보낸다고 한다면, 초슈와 삿슈에도 보내지 않으면 안 되었을 것이다. 게다가 일본을 경유해 보내지 않으면 안되었다. 1698년, 북경의 예부에서 발송된 자문에는 ‘류큐국’에서 북주까지 표류민이 송환되어 왔다고 기록되어 있었다. 서울의 예조는 약간의 당황스러움 혹은 어긋남을 느꼈겠지만, 약 30년 전에 ‘류큐’에 사례의 편지를 보내지 않았기 때문에, 사실상 같은 ‘류큐국’으로 자문을 보내기 어려웠을 것이다. 송상기의 반대의견 중 하나는, 지난 1698년(강희 37)에 류큐→북주→북경의 경로로 송환되었던 때에 류큐에는 감사의 자문을 보내지 않은 선례가 있다는 것인데, 그 선례가 이러한 역사적 경위에서 발생한 것이었다.

송상기는 또 하나, 류큐에 백년 가까이 자문을 보내는 일이 없었다는 것을 반대이유로 들었다. 이것이 두 번째 문제이다. 왜 양국은 자문 교환을 하지 않게 되었던 것일까. 그 역시 일본과 관련된 원인이 있었다고 생각된다. 1636년(숭정 9, 인조 14) 이후, 일본에 통신사를 보내기 시작한 것이 아마 그 이유일 것이다.

도요토미 히데요시에 의한 조선침략 이후, 조선과 일본은 오랜 시간 국교가 단절된 상태였다. 국교 회복에 적극적이었던 것은 일본이었다. 도쿠가와 막부는 국교 회복을 바라며 여러 차례 조선에 통신사(信使) 파견을 요청했다. 그러나 이러한 요청에 응해 1607년, 1617년, 그리고 1624년 3차례에 걸쳐 조선이 보낸 사절은 모두 통신사라는 명칭을 굳이 피하고, 回答兼刷還使라고 칭하는 것이었다. 이는 조선 측이 일본과 통신관계에 들어가는 것, 즉 정식 국교를 회복하는 것에 극히 신중한 태도를 보이고 있었음을 의미한다. 1636년에 통신사가 파견되었다고 하는 것은, 조선 측의 시각에서, 비로소 전쟁 이전과 비슷한 정식 국교를 맺었다는 것을 의미하고 있었다.

현재 확인할 수 있는 한도 내에서, 조선과 류큐가 1634년까지 자문을 교환하고 있었다는 언급은 이미 하였다. 『역대보안』에 수록된 조선 국왕으로부터 류큐 국왕에게로의 자문 및 류큐 국왕으로부터 조선 국왕에게로의 자문에는 공통되게 ‘교린’이라는 글자가 보이고 있어, 양국이 교린관계에 있다는 인식을 공유했음은 명확해 보인다. 게다가 ‘교린’이란 다시 말할 필요도 없이, 조선이 대외관계로 설정했던 ‘사대’와 ‘교린’의 그것으로, 그 대표가 일본이었다.⁴⁹⁾ 일본과 류큐가 같은 명조의 책봉국이었을 때에는 양국을 함께 교린국이라 위치 짓고 통신관계를 맺는 데에 아무런 문제도 없

49) 『通文館志』 권 5, 交隣 上 ; 권 6, 交隣 下.

었다. 그러나 1609년 이후, 류큐는 일본에 병합되어버렸다. 더구나 1636년까지는 일본과 정식 국교가 없었기 때문에, 명과 마찬가지로 조선도 류큐의 실정을 모르는 척하고 있으면 되었다. 그러나 1636년에 일본과 통신관계가 수립되어 버렸다. 이와 같이 국제구조가 변해버렸을 때, 류큐가 일본에 병합되었다는 상황을 모르는 척 하면서 류큐와도 통신관계를 유지하는 것이 가능했을까. 게다가 조선은 중국과는 달리, 류큐가 일본에 복속되어 있다는 소식이 빈번하게, 그리고 끊임없이 전해져 왔다.

일본과 국교 회복 후, 처음으로 파견된 통신사의 정사는 任統이다. 1638년 어느 날, 임광은 국왕 인조의 곁을 지키고 있었다. 임광이 그 전해에 일본에서 돌아왔던 것을 아는 인조는 “그대 생각에는, 倭情, 즉 일본의 정황을 어떻게 생각하는가”라고 묻고, 이어 “류큐국이 일본에 신복해 입공하고 있다고 하는데, 정말인가”라고 물었다. 이에 대해 임광은 “제가 일본에 머무르던 때에 들은 이야기로는, 맞다고 합니다”라고 답했다고 한다.⁵⁰⁾

南龍翼은 1655년(효종 6) 통신사 종사관으로 일본을 방문했다. 그의 여행기 『扶桑錄』에는 에도에서 들은 이야기로, 류큐국의 사신이 사쓰마 번주를 따라 왔다고 하는 내용을 기록하고 있다. 류큐국 사신은 이미 에도에 도착해 있었는데, 쇼군은 직접 만나지 않고 執政들에게 접대시킨 후에 돌려보냈다고까지 기록하고 있다.⁵¹⁾ 또한 1711년(숙종 37) 통신사 종사관이었던 李邦彦은 아라이 하쿠세키[新井白石]와의 필담 자리에서 “류큐의 사절이 귀국에 來聘해 있다고 듣고 있습니다만...”이라고 묻자, 아라이는 긍정도 부정도 하지 않고, 어느 쪽으로든 해석할 수 있는 대답을 하고 있다.⁵²⁾

이와 같은 정보는 매 회 통신사 일행에 의해 다수 전해졌을 것이다. 1719년(숙종 58) 통신사 製述官으로 일본을 방문했던 申維翰은, 류큐는 3년에 한번 일본에 조공하고 있고 사쓰마에 상륙한 후 에도까지 가서 行禮를 한 후 돌아간다고 기술하고 있다. 아메노모리 호슈[雨森芳洲]의 표현도 류큐가 일본에 병합되어 있다는 생각을 확실히 하게끔 하는 것이었다. 또한 그가 과거 류큐에 표류했다가 귀환한 자를 만났을 때, “류큐는 일본에 조공하고 있기 때문에, 국왕은 (우리들) 일본으로 보내 주었고, 겨우

50) 『조선왕조실록』 인조 16년(승정 11년) 정월 癸巳.

51) 南龍翼, 『扶桑錄』(『海行摠載』 제 3책, 경성, 조선고서 간행회, 1914) 350쪽.

且聞琉球國使臣, 薩摩守親領而來矣. 已到此, 關白不為親接, 令執政等接待以送.

52) 任守幹, 『江關筆談』(天理도서관 소장 이마니시[今西]文庫本). 『新井白石全集』 제 4권, 1906에서 趙泰億 輯이라고 한 것은 잘못이다.

南崗(李邦彦)曰, 似聞琉球使臣亦有來聘貴國之事云. ……白石曰, 文字皆與本邦之俗同. …雖然三歲一聘唐山. …今中山十八世祖舜天王者, 本邦源將軍為朝之遺胤. 故中山王自稱源姓.

조선 東萊府까지 전송되었다”라고 말했다고 전한다.⁵³⁾ 이와 같이 류큐에 표착했던 자들이 일본을 경유해 송환되고 있던 시대, 혹은 그들이 아직 살아 있던 시대에는 그들의 입을 통해 류큐의 실정이 조선으로 전해졌다. 통신사 파견이 부활한 후에는 이러한 종류의 정보가 더욱 많이 들어왔음에 틀림없다.

1719년 통신사 다음으로 파견된 1748년의 통신사에서도, 수행원이었던 洪景海는 류큐가 일본에 복속해 있다는 사실을 이미 조선 국내에서 들어 알고 있었던 것 같다. 쓰시마에서 하카다 앞바다에 위치해 있는 아이노시마[藍島]로 향할 때 “류큐국은 쇼군에 조공하고 있고, 사쯔마주가 그 접대를 맡고 있다고 들었는데, 정말인가 아닌가”라고 일본인에게 묻고 있는 것이다.⁵⁴⁾ 에도에서 서기인 李命啓 등과 필담을 나누었던 야마노미야[山宮維深]는 류큐의 토속이 일본과 매우 같으며 이것은 “생각컨대 우리 사쯔마주의 附庸이기 때문이다”라고 말하고, 또한 “慶長연간에 사쯔마의 시마즈 이에히사[島津家久]가 군대를 보내 中山國을 멸하고 쇼네이王을 포로로 잡아와, 쇼군 께서 만나보셨다. 중산왕은 오래도록 附庸國이 되기를 요청하였다”고 기술하였다. 이에 대해 이명계는 “이미 들어 알고 있다”고 대답했다고 한다.⁵⁵⁾ 마찬가지로 에도에서 菅道伯은 통신사 醫官으로 수행해 왔던 趙崇壽 등과 필담을 나누며 “탐라국은 이미 귀국 조선에 복속해 있으니, 우리나라에 류큐·에조[蝦夷]가 있는 것과 마찬가지로 이다”라고 말한 데 대해 조송수는 전혀 의문을 나타내지 않았다. 나아가 조송수가 일본의 술에 대해 물었을 때, “또한 소주라는 것이 있는데, 사쯔마주의 산물이다. 소주는 원래 류큐에서 왔다. 류큐는 사쯔마에 예속되어 있기 때문에 사람들은 사쯔마의 산물이라고 한다”라고까지 기술되어 있다.⁵⁶⁾ 통신사 일행은 일본으로 출발하기 전에, 기존에 일본에 다녀온 적이 있는 선배의 경험담을 듣거나 또는 관련 문헌을 읽고 갔다. 여기에서 보이는 바와 같이 류큐가 일본에 복속되어 있다는 사실은 역대 통신사

53) 申維翰, 『海游錄』(『해행총재』 제 1책, 경성, 조선고서 간행회, 1914) 356쪽.

琉球國有大小二種, 皆在日本西南海中. 其小者曰中山王. 自古朝貢於日本. ……三年一朝貢, 自薩摩州登陸至江戶, 行禮而去. ……記余在國時, 見京中一褐夫自云, 曾於濟州海上, 漂風至琉球, 見百工所居各有部落, 而渠在皮工之區, 留得一歲, 男女衣服飲食言語, 一如日本. 聞其國朝貢於日本, 故國君送至日本, 乃得傳到於東萊云. 今與雨森東所言相符.

54) 洪景海, 『隨槎日錄』 3월 17일.

聞琉球(球)國朝貢於關白, 薩摩州主其接待云, 未知然否.

55) 山宮維深, 『和韓筆談薰風編』 권 중, 8쪽.

其土俗與日本大同. 蓋以為我薩摩州附庸也. ……慶長中, 薩摩侯家久遣兵滅中山, 擒王尚寧而歸, 見之于大君. 中山請永為附庸. ……(海阜復)已聞之.

56) 菅道伯, 『對麗筆語』, 7~9쪽.

其國(耽羅國)既服屬貴國, 想如我有琉球·蝦夷也. ……又有燒酒, 出自薩摩州傳之. 燒酒本自琉球來, 琉球隸薩摩, 故人為薩州所出.

의 지속적인 일본 방문에 의해 계속 전승되고 끊임없이 확인되었던 것이다.

1636년 이후에도, 만약 양국 사절이 북경에서 만나게 되면, 사실을 모르는 척 하며 그대로 자문을 교환했을 가능성도 물론 있다. 그러나 우연하게도 같은 1636년을 경계로 조선이 당분간 북경에 사절을 보내지 않았으며, 류큐도 明清 교체 전후에는 북경에 사절을 보내지 않았다. 이것이 냉각기간이 되었다.

1636년 이후, 다시 조선이 일본에 통신사를 보내기 시작하자 조선 당국의 要人을 통해 류큐가 실제로는 일본에 복속되어 있다는 사실이 계속해서 전해지고 전승되어, 류큐의 국제구조에 속에서의 허구성이 폭로되어버릴 위험성이 커지게 되었다. 일본의 막부가 조선에 대해 이러한 허구성을 숨기는 데 급급했던 것은 전혀 아니다. 1669년까지 류큐에 표착했던 조선 표류민을 일본을 경유해 송환하고 있던 데에서 알 수 있듯이, 이즈음까지 막부는 류큐와의 관계를 은폐할 필요가 있다고 생각하지 않았던 것 같다. 18세기가 되어서도, 아라이 하쿠세키처럼 막부의 중추에 있는 자조차, “류큐의 문자는 일본의 문자와 같고, 중산왕의 선조는 미나모토노 타메토모[源為朝]이다”라고 태연하게 조선 측에 말하고 있었다. 노련한 외교관이었던 아메노모리 호슈조차도, 신유한의 물음에 류큐는 일본과 관계없다 등의 대답을 하지 않고, 오히려 류큐가 일본의 복속 하에 있다는 사실을 확신케 하는 응답을 하고 있었던 것이다.

조선과 류큐가 청대에 들어 북경에서 자문 교환을 할 수 없게 되었던 것은, 청조의 문제, 즉 만주족이 통치하는 국가였기 때문은 아니다. 일본이 당시 동아시아 4국의 국제구조에서, 그것을 성립시키데 불가결한 요인이 되기에 이르렀기 때문이다. 중국이 일본과 국교를 계속 두절했던 데 반해, 조선은 일본과 통신관계라고 하는 국교를 회복했다. 이에 양국의 對류큐 외교도 근본적으로 다를 수밖에 없었고, 조선과 류큐와의 국교도 두절될 수밖에 없었던 것이다.

나가며

1607년 이후 동아시아의 국제구조를 이해하려 할 때, 책봉체제라는 추상적 개념이 유효하지 않을 뿐 아니라, 그러한 개념이 있기 때문에 오히려 현저한 사실 오인을 불러일으킨다는 것이 이상의 논의로 명백해졌을 것이다. 니시지마 자신이 청조에는 공전의 책봉체제가 출현했다고 인식했던 사실 등이 가장 좋은 예라 할 수 있을 것이

다. 명조가 시간을 벌기 위해 류큐에게 10년 간 입공을 금지했던 외교 정책이 10년 1공 제도로의 개정으로 해석되어 반복적으로 주장되어 왔던 이유도, 그 근거에 책봉 체제 혹은 조공 시스템 등의 개념이 위치해 있고 이러한 시스템은 영속적인 것이라는 뿌리 깊은 사고가 존재했기 때문은 아닐까.

중국, 조선, 류큐, 일본의 4개국 관계는 청대에 실질적으로는 3개 밖에 없었던 책봉국 중 2 개가 포함된다고 하는, 당시의 동아시아에서는 예외적인 것이었다. 이렇게 드문 2개국의 책봉국이 서로 자문 교환조차 할 수 없었다는 사실은, 이른바 책봉체제론과 어떻게 양립될 수 있는 것일까. 국교가 두절되어 있는 것, 특히 일본과 중국과의 국교가 계속 두절상태에 있었다는 것이 동아시아 4국의 국제구조를 형성하는데 결정적인 계기가 된 것으로, 지금까지의 주장처럼 일본이 동아시아의 국제질서에서 이탈해 있었던 것은 결코 아니었다. 그리고 일본이 중국과 국교를 맺지 않고 조선과는 통신관계를 가졌던 사실이, 조선과 류큐와의 국교도 차단하게끔 만들었던 것이었다.

외교라는 것은 기계 시스템처럼 한번 설정하면 영속되는 것이 결코 아니다. 그것은 인간이라는, 사실을 모른 척 할 수도 있고 잊어버릴 수도 있는 유연한 ‘기계’가 만들어 내는 것이다. 따라서 반대로, 어떤 계기로 사실이 눈앞에 나타나 갑자기 생각이 나버리거나 하는 일도 있기 때문에, 안정된 국제구조는 여기에서 위기에 처해버리게 된다. 이 때문에 황제, 국왕, 쇼군을 비롯해 외교에 관련된 사람들은 사실이 눈앞에 나타나지 않도록 때때로 주의를 기울이지 않으면 안되었다. 조선 국왕 숙종이 류큐와의 자문 교환을 부활시키지 말아야 한다는 송상기의 의견을 채택했을 때, 그는 그 이유로 “뜻밖의 걱정거리가 있을지도 모른다”고 말했다고 한다. 그의 막연한 불안감 속에는 장래에 류큐가 일본에 ‘정식으로’ 병합되어 버릴 가능성도 포함되어 있었을지 모른다. 은폐되어있는 사실이 무엇인가를 계기로 스스로의 의도에 반해 갑자기 폭로되어버리는 것을 걱정했을 지도 모른다.

또한 외교라는 것은 그때그때의 국력에 따라 변한다. 지금까지 이야기한 동아시아 4국의 국제구조라는 것은 이러한 변경도 포함한 구조이다. 예를 들어 우리들은 1612년부터 1633년까지 행해졌던 류큐의 조공 혹은 류큐에 대한 책봉을 허구의 조공, 허구의 책봉이라고 불렀다. 그러나 정세가 변하면 당연히 허구가 사실로 변한다. 중국-류큐 관계에 입각해서 말하자면, 이러한 허구에서 사실로의 전환은 대체로 청조가 국력을 완전히 회복해 필적할 대항 상대가 없어지게 된 遷海令 해제 무렵, 즉 1670년

대의 일이라고 생각해도 좋을 것이다. 강희 20년대에 중국이 스스로 국력을 회복했기 때문만은 아니다. 과거 적대국이었던 일본도 쇠국에 들어선지 오래이고, 이미 鷄籠, 淡水를 점령할 수 있는 군사력을 완전히 잃었기 때문인 것이다.

[본고는 원래 『조선사연구회논문집』제 6집(2008년 10월)에 게재되었던 같은 제목의 논문을 한글로 번역한 것이다.]

近十五年中国学术界关于清朝与朝鲜关系史研究述评

陈尚胜 中国 山东大学 历史文化学院

自1992年中华人民共和国与大韩民国建立外交关系以后，伴随着中韩两国之间学术交流的开展和加强，中国大陆学术界对于中韩关系史的研究也越来越重视。从近十五年（1993—2008）公开发表和出版的论著情况看，这一时期的论著超过了从1950至1992年共四十三年数量。¹在中韩关系史领域，由于清朝与朝鲜之间的关系处于从传统走向近代的重要阶段，加上研究资料本身的丰富，更为历史学者所重视。本文拟从前四十年中国学术界对于清鲜关系研究的回顾、近十五年对于清朝前期与朝鲜关系史研究情况、近十五年对于晚清与朝鲜（韩国）关系史研究情况等三个方面做一总结，以期发现在若干问题上的研究进展，并提出一点个人看法。

一、前四十年中国学术界对于清鲜关系研究的回顾

自上个世纪50年代至90年代初中国学术界对于清朝与朝鲜关系史的研究，基本上是以中国台湾地区的学者为主要研究群体。最初，李光涛先生在中央研究院历史语言研究所整理明清档案的过程中，依据所掌握的档案写成《朝鲜国表文之研究》，²对朝鲜与明清两朝往来的表文的程式以及清朝对朝鲜表文用字的诘责等问题进行了细致的研究。另外，他还根据朝鲜方面文献中的《朝鲜王朝实录·孝宗实录》、《备边司臚录》、《承政院日记》，编著成《多尔衮征女朝鲜史事》³。受李光涛的影响，张存武自台湾大学毕业进入中央研究院近代史研究所后即把清鲜关系作为自己的主要研究领域，先后发表有

¹ 参据黄宽重编辑：《中韩关系中文论著目录》（台北，中央研究院东北亚区域研究2000年）和中国人民大学书报资料中心历年编辑的各段历史研究论著“索引”。

² 载于《中央研究院院刊》第二辑，台北，1955年。

³ 李光涛：《多尔衮征女朝鲜史事》，台北，中央研究院历史语言研究所专刊，1970年。

《清代中韩边务问题探源》⁴、《清代中韩宗藩关系之制度性分析》⁵、《清韩陆防政策及其实施——清季中韩界务纠纷的再解释》⁶、《清韩关系：1637--1644》⁷、《清代中国对朝鲜文化之影响》⁸、《朝鲜对清外交机密费之研究》⁹、《丁卯议和后金兵的撤退》¹⁰、《清入关前与朝鲜的贸易 1627-1736》¹¹、《清韩关系：1631-1636》¹²、《穆克登所定的中韩国界》¹³、《中国对日本亡韩的反应》¹⁴、《清季中韩关系之变通》¹⁵、《宗藩关系制度的运作——以朝鲜与奴尔哈赤的第一次纠纷为例》¹⁶等论文。这些论文，主要侧重于对清鲜政治关系的探索，尤其是对清鲜之间宗藩关系进行了非常深入的研究，后来多数论文收入作者的《清代中韩关系论文集》中。¹⁷ 根据张氏的研究，自皇太极至清朝平定“三藩之乱”，清朝对朝鲜的干涉较多。自“三藩之乱”被平定以后至十九世纪七十年代，清朝甚少干涉朝鲜事务。其后受西方之影响，朝鲜俞求独立，清朝亦回至初年之干涉时代。然而无论松弛或紧张，其大端仍不出中国传统宗藩制度之精神。而在此论文集出版前，张存武出版有《清韩宗藩贸易 1637-1894》的研究专著¹⁸。这本专门探讨宗藩关系体制下的清鲜贸易史著作，着重考察了官方的朝鲜使节入清贸易和民间的边市贸易，并就清鲜宗藩贸易对清朝和朝鲜双方的影响进行了深入的分析。

刘家驹则对清太宗皇太极时期与朝鲜的关系情有独钟，曾先后发表有《崇德改元与太宗伐朝鲜之役》¹⁹、《天聪元年阿敏等伐朝鲜之役与金国兄弟之盟》²⁰、《金国、朝鲜

⁴ 载于《中央研究院近代史研究所集刊》第2期，台北，1971年。

⁵ 载于《食货复刊》第1卷第4期，台北，1971年。

⁶ 载于《中央研究院近代史研究所集刊》第3期（下），台北，1972年。

⁷ 载于《故宫文献》第4卷第1期，台北，1973年。

⁸ 载于《中央研究院近代史研究所集刊》第4期（下），台北，1974年。

⁹ 载于《中央研究院近代史研究所集刊》第5期，台北，1976年。

¹⁰ 载于《东方学志》第18辑，台北，1978年。

¹¹ 载于《东方学志》第21辑，台北，1979年。

¹² 载于《韩国学报》第1期，台北，1981年。

¹³ 载于《中央研究院国际汉学会议论文集》（下册），台北，1981年。

¹⁴ 载于《中韩关系史国际研讨会论文集》，台北，1983年。

¹⁵ 载于《中央研究院近代史研究所集刊》第14期，台北，1985年。

¹⁶ 载于《劳贞一先生八秩荣庆论文集》，台北，商务印书馆，1986年。

¹⁷ 张存武：《清代中韩关系论文集》，台北，商务印书馆，1987年。

¹⁸ 张存武：《清韩宗藩贸易 1637-1894》，台北，中央研究院近代史研究所，专刊第39种，1985年。

¹⁹ 载于《沈刚伯先生八秩荣庆论文集》，台北，1976年。

²⁰ 载于《食货复刊》第7卷第10期，台北，1978年。

之建交与开市》²¹、《清初朝鲜助兵攻陷皮岛始末》²²、《清初朝鲜世子入质沈阳始末》²³、《清初朝鲜缔结婚媾及朝鲜进献侍女考》²⁴、《清初征兵朝鲜始末》²⁵、《清初征粮朝鲜始末》²⁶、《清初朝鲜奉明正朔考》²⁷、《清初贸易于明朝与朝鲜间的潜商考》²⁸、《从朝鲜对金国的礼单与贡单分析两国贸易的物资（西元 1627 年至 1641 年）》²⁹等论文。刘氏正是以这些论文为基础，写出《清朝初期的中韩关系》专著³⁰，从而为人们揭示出皇太极时期清鲜关系的复杂状况。另外，陈捷先《论天聪年间后金与朝鲜的关系》³¹和《1636 年满洲与朝鲜战争原因略考》³²、庄吉发《满鲜通市考》³³，也对皇太极时期与朝鲜的政治关系和经济关系做了深入的探讨。

在对入关后以及晚清时期中朝关系史的研究方面，主要论著有：陈捷先《康熙丁酉阿克敦出使朝鲜事迹考》³⁴、陈明崇《韩儒金阮堂对〈海国图志〉的认识》³⁵，梁嘉彬《李鸿章外交与中日间朝鲜交涉》³⁶、张雪智《甲午战争前后李鸿章外交政策之探讨》³⁷、林明德《燕岩之亲明反清思想及其中国观》³⁸和《袁世凯与朝鲜》³⁹，王德昭《论甲午援韩》⁴⁰，则是相关问题的代表性成果。此外，研究晚清与朝鲜关系的论文还有刘路生《袁世凯在朝鲜》⁴¹，孙启瑞《清末（1883-1886）中韩俄的关系---兼论穆麟德主倡的

²¹ 载于《食货复刊》第 9 卷第 1、2 期，台北，1979 年。

²² 载于《食货复刊》第 11 卷第 5 期，台北，1981 年。

²³ 载于《食货复刊》第 12 卷第 1 期，台北，1982 年。

²⁴ 载于《食货复刊》第 12 卷第 3 期，台北，1982 年。

²⁵ 载于《食货复刊》第 12 卷第 10、11、12 期，台北，1983 年。

²⁶ 载于《食货复刊》第 14 卷第 1 期，台北，1984 年。

²⁷ 载于《中国历史学会史学集刊》第 16 期，台北，1984 年。

²⁸ 载于《韩国学报》第 5 期，台北，1985 年。

²⁹ 载于《国史馆馆刊》第 9 期，台北，1990 年。

³⁰ 刘家驹：《清朝初期的中韩关系》，文史哲出版社，台北，1986 年。

³¹ 载于《东方学志》第 23、24 辑，台北，1980 年。

³² 载于《政大国际中国边疆学术会议论文集》，台北，国立政治大学，1985 年。

³³ 载于《食货复刊》第 5 卷第 6 期，台北，1975 年。

³⁴ 载于《韩国学报》第 5 期，台北，1985 年。

³⁵ 载于《食货复刊》第 7 卷第 6 期，台北，1977 年。

³⁶ 载于《中国历史学会史学集刊》，第 7 辑，台北，1975 年。

³⁷ 载于《韩国学报》第 8 辑，台北，1989 年。

³⁸ 载于中华学术院韩国研究所：《中韩文化论集》第 4 集，台北，1978 年。

³⁹ 中央研究院近代史研究所专刊，台北，1970 年。

⁴⁰ 载于《新亚学报》，香港，第 10 卷第 1 期，1971 年。

⁴¹ 载于《韩国学报》第 11 期，台北，1992 年。

韩俄密商》⁴²、林子侯《论 1885 年中日朝鲜外交措施的调整》⁴³及其专著《甲午战争前之中日韩关系》⁴⁴、杨翠华《甲午战争之中韩关系：1896--1905》⁴⁵。然而，台湾学人在整理晚清与朝鲜关系的档案资料方面，却做出了重要贡献。郭廷以、李毓澍负责编辑的《清季中日韩关系史料》共十一册，⁴⁶以清朝总理各国事务衙门的“朝鲜档”和清末外务部有关中日韩商务、边务、路矿、侨民、渔业、航运、邮电等交涉案件汇编而成。所收档案起自同治三年（1864 年），终于宣统三年（1911 年），共收入 5048 件。这部史料汇编由于直接采自原始档案，为人们研究晚清时期的中韩关系提供了极为珍贵的史料。由赵中孚、张存武、胡春惠负责编辑的《近代中韩关系史料汇编（1860-1945）》⁴⁷共十二册，从晚清民国年间报刊等公私文献上辑录相关资料，也为人们的研究提供了莫大的方便。

相对来说，同一时期中国大陆学术界的相关研究成果较少。吴忠亚《吴禄贞与所谓“间岛”问题》⁴⁸，认为“间岛”实为朝鲜农民越境开垦所致，后来日本的朝鲜统监伊藤博文阴谋实施占领，为清朝廷吉边务督办吴禄贞进行抵制，迫使日人与清朝签订《图们江中韩界务条款》。王崇时《中朝以图们江为东段边界的历史回顾----驳日帝蓄意制造“间岛”谬说》⁴⁹，认为日本帝国主义者制造“间岛问题”的核心是否认图们江是中朝两国东段边界的天然界江；而清朝在作出重大让步的基础上与日本所签订的《图们江中韩界务条款》，则意味着“间岛案”的终结。他还发表有《会宁、庆源开市》⁵⁰，论述了两国边境贸易。冯尔康《朝鲜大报坛述论----中朝关系和中国文化传播的一个侧面研究》⁵¹，讨论了中国文化传播在明清鼎革时期的特殊影响。曹中屏《李鸿章与朝鲜----评甲申政变前后的中朝关系》⁵²、陈尚胜《李鸿章与朝鲜对西方的缔约开放》⁵³、高伟浓《19 世

⁴² 载于《食货复刊》第 2 卷第 5 期，台北，1972 年。

⁴³ 载于《思与言》第 24 卷第 3 期，台北，1986 年。

⁴⁴ 林子侯：《甲午战争前之中日韩关系》，台北，玉山书局，1990 年。

⁴⁵ 载于《食货复刊》第 8 卷第 6 期，台北，1978 年。

⁴⁶ 中央研究院近代史研究所，台北，1972 年。

⁴⁷ 国史馆，台北，1987 年。

⁴⁸ 载于《社会科学战线》1984 年第 4 期，长春。

⁴⁹ 载于《社会科学战线》1991 年第 3 期，长春。

⁵⁰ 载于《吉林师范学院学院》1991 年第 2 期。

⁵¹ 载于《韩国学报》第 10 期，台北，1991 年。

⁵² 载于《浙江学刊》，杭州，1988 年第 4 期。

⁵³ 载于《山东大学学报》，济南，1990 年第 2 期。

纪 80 年代中朝外交和贸易体制的演变》⁵⁴等三篇论文，皆是讨论晚清时期的中朝关系。曹、陈两人论文围绕着李鸿章对清鲜关系的设计和作为来展开讨论，高文是以李鸿章对清鲜关系“变通旧制”并签订《中朝商民水陆通商章程》而加以分析的。此外，还有陈伟芳的著作《朝鲜问题与甲午战争》⁵⁵；杨昭全和韩俊光所著的《中朝关系简史》⁵⁶，其第九章和第十章也分别叙述了清前期和清后期与朝鲜的关系。在资料的编辑方面，王其渠《清实录：邻国朝鲜篇资料》是一部重要的资料⁵⁷，可惜当时未公开出版；王崇时等《朝鲜文献中的中国东北史料》⁵⁸，其中也有不少涉及清鲜关系史料。

二、近十五年对于清朝前期与朝鲜关系史研究情况

1993 年以后，中国学术界在清朝与朝鲜关系史的研究方面，就有黄枝连《朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论》⁵⁹、刁书仁《明清中朝日关系史研究》（该书收录有作者关于清鲜关系史专题研究论文七篇）⁶⁰、刘为《清代中朝使者往来研究》⁶¹、白新良《中朝关系史：明清时期》（该书第七章至第十一章为分别清朝不同时期与朝鲜的政治关系以及经济和文化交流状况）⁶²、李花子《清朝与朝鲜关系史研究——以越境交涉为中心》⁶³、廉松心《十八世纪中朝文化交流史研究》⁶⁴、魏志江《中韩关系史研究》（该书下编为清朝与朝鲜关系 1619—1795）⁶⁵、赵兴元《清代中朝关系研究》⁶⁶、

⁵⁴ 载于北京大学韩国学研究中心：《朝鲜学论文集》第 1 辑，北京大学出版社，1992 年。

⁵⁵ 陈伟芳：《朝鲜问题与甲午战争》，北京，三联书店，1959 年。

⁵⁶ 杨昭全、韩俊光《中朝关系简史》，沈阳，辽宁民族出版社，1992 年。

⁵⁷ 此资料并未公开出版，只是由中国社会科学院中国边疆史地研究中心于 1987 年刊印。

⁵⁸ 王崇时等编：《朝鲜文献中的中国东北史料》，长春，吉林文史出版社，1991 年。

⁵⁹ 黄枝连：《朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论》，北京，中国人民大学出版社，1995 年。

⁶⁰ 刁书仁：《明清中朝日关系史研究》，长春，吉林文史出版社，2001 年。

⁶¹ 刘为：《清代中朝使者往来研究》，哈尔滨，黑龙江教育出版社，2002 年。

⁶² 白新良：《中朝关系史：明清时期》，北京，世界知识出版社，2002 年。

⁶³ 李花子：《清朝与朝鲜关系史研究——以越境交涉为中心》，延边大学出版社，2006 年。

⁶⁴ 廉松心：《十八世纪中朝文化交流史研究》，吉林文史出版社，长春，2006 年。

⁶⁵ 魏志江：《中韩关系史研究》，广州，中山大学出版社 2006 年。

⁶⁶ 赵兴元：《清代中朝关系史研究》，长春，吉林文史出版社，2006 年。

姜龙范等《清代中朝日关系史》⁶⁷、宋慧娟《清代中朝宗藩关系嬗变研究》⁶⁸、孙卫国《大明旗号与小中华意识——朝鲜尊周思明问题研究（1637—1800）》⁶⁹等专著出版。而在资料的整理出版方面也有新的进展：张存武、叶泉宏编《清入关前与朝鲜往来国书汇编 1619--1643》⁷⁰、郑毅、赵兴元等人选编《〈同文汇考〉中朝史料》（四册），都是研究清鲜政治关系的重要资料。此外，还有更多的相关论文公开发表。就清前期与朝鲜关系的研究来说，人们研究所关心的主题主要表现在下列方面：

一是比较关心对清入关前与朝鲜关系的研究，尤其是皇太极时期清鲜交涉与战争的研究。徐凯《论“丁卯虏乱”与“丙子胡乱”——兼评皇太极两次用兵朝鲜的战略》⁷¹，认为既有征服朝鲜解除后金南下之忧的战略目的，也有摧毁明朝在鸭绿江口军事防线和改善自身经济困难局面的意图。而刁书仁《论皇太极两次对朝鲜的战争》，则是依据清鲜双方实录对战争过程和盟誓过程进行事实考订。叶泉宏《沈馆幽囚记（1637-1645）：清鲜宗藩关系建立时的人质问题》⁷²，则根据朝鲜文献史料细致地考察了皇太极征鲜战争后的朝鲜王子入质问题。全信子《“丙子胡乱”与朝鲜“还乡女”》⁷³，则以皇太极第二次征服朝鲜战争所俘掠的朝鲜妇女为中心，考察了朝鲜在战后所做的赎还交涉以及被掠朝鲜女赎还后在朝鲜社会的艰难处境。徐凯《满洲八旗中高丽士大夫家族》⁷⁴，根据满文老档等资料，考察了后金在努尔哈赤和皇太极时期有不少朝鲜大姓望族前来投奔的情况，并逐渐融入到满洲八旗之中。黄枝连在《朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论》⁷⁵一著中，曾提出光海君的“脱明亲虏”（后金）政策。不过，李善洪《从十七世纪朝鲜内外局势看光海君的“两端外交”》⁷⁶一文中，却把光海君的

⁶⁷ 姜龙范等著：《清代中朝日关系史》，长春，吉林文史出版社，2006年。

⁶⁸ 宋慧娟：《清代中朝宗藩关系嬗变研究》，长春，吉林大学出版社，2007年。

⁶⁹ 孙卫国：《大明旗号与小中华意识——朝鲜尊周思明问题研究（1637—1800）》，北京，商务印书馆，2007年。

⁷⁰ 张存武、叶泉宏编：《清入关前与朝鲜往来国书汇编（1619-1643）》，台北，国史馆，2000年。

⁷¹ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第3辑，北京，1994年。

⁷² 载于《韩国学报》第6期，台北，1993年。

⁷³ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第12辑，北京，2004年。

⁷⁴ 载于陈尚胜主编：《第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集》，济南，山东大学出版社，1999年。

⁷⁵ 黄枝连：《朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论》，北京，中国人民大学出版社，1995年。

⁷⁶ 载于《松辽学刊》1996年第1期，吉林。

政策视为“两端外交政策”。而从朝鲜角度来详细讨论当时后金与朝鲜之间交往的论文，还有王燕杰《朝鲜光海君时期对明朝和后金“两端外交”政策探析》⁷⁷、石少颖《仁祖时代朝鲜对后金（清）交涉史研究》⁷⁸等研究生的学位论文，上述两篇论文使这种研究更详实和更深入。对于因皇太极对朝战争所造成的朝鲜对清朝敌视态度，李贤淑的《从朝鲜对皇太极的丧礼的态度看清廷与朝鲜的关系》⁷⁹，则提出了人们不甚关注的朝鲜态度微妙变化问题。此外，相关论文还有：李善洪《后金朝鲜“丁卯之役”原因浅析》⁸⁰、李治亭《后金（清）与李氏朝鲜关系述略》⁸¹、陈捷先《清太祖时期满洲与朝鲜关系考》和《略论天聪年间后金与朝鲜关系》⁸²，晁中辰《满清入关前与李氏朝鲜的关系》⁸³、刁书仁《论后金建立前与朝鲜的关系》⁸⁴、孙卫国《试论入关前清与朝鲜关系的演变历程》⁸⁵、魏志江《论萨尔浒之役后朝鲜与后金的关系》⁸⁶和《清鲜“丁卯胡乱”与“丙子之役”考略》⁸⁷、王臻《“丁卯之役”的交涉及战后金鲜的矛盾冲突探析》等文。

二是对入关后清朝对朝鲜政策行为的研究。最初，黄枝连在其著作《朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论》⁸⁸中，认为清朝在入关后，对朝鲜采取了“字小以仁”的政策。而刘为《试论摄政王多尔衮的朝鲜政策》⁸⁹，则具体考察了多尔衮在皇太极去世后对朝鲜所采取的归还质子、释放罪臣、减免岁贡、停止刷还女真人等重要措施，认为此举有利于在朝鲜王朝内部培植主和派甚至亲清派势力。王艳莉《论康熙时期清朝对朝鲜政策的调整》⁹⁰，认为康熙时期对朝鲜所采取的减免使行次数、蠲免贡物、宽免罪责、赈灾和救济、边地瓯脱等项措施，都在一定程度改善了对朝鲜的政策。刘雪

⁷⁷ 山东大学硕士学位论文，济南，2008年6月。

⁷⁸ 山东大学博士学位论文，济南，2008年6月。

⁷⁹ 载于《满族研究》第49辑，沈阳，1997年。

⁸⁰ 载于《吉林师范学院学报》，1995年第2期，吉林。

⁸¹ 载于《中朝关系史研究论文集》，长春，吉林文史出版社，1995年。

⁸² 两文皆载于《中朝关系史研究论文集》，长春，吉林文史出版社，1995年。

⁸³ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第4辑，北京，1995年。

⁸⁴ 载于《社会科学战线》，2004年第1期，长春。

⁸⁵ 载于《中国边疆史地研究》，2006年2期，北京。

⁸⁶ 载于浙江大学韩国研究所：《韩国研究》第6辑，北京，学苑出版社，2002年。

⁸⁷ 载于金健人主编：《韩国研究》第七辑，北京，2004年。

⁸⁸ 黄枝连：《朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论》，北京，中国人民大学出版社，1995年。

⁸⁹ 载于《中国边疆史地研究》，2005年第3期，北京。

⁹⁰ 山东大学2001年硕士学位论文，载于陈尚胜主编：《山东半岛与中韩交流》，香港出版社，2007年。

《朝鲜关系中的岁币研究》⁹¹，则针对朝鲜关系中的岁币问题，考察了清朝在入关后不断削减岁币以主动改善与朝鲜之间关系的事实。魏志江《论清兵入关后大清与朝鲜的关系》⁹²，也是从经济利益方面对韩国全海宗在《清代韩中朝贡关系考》⁹³一文中所持的朝鲜在经济利益方面受损失的观点提出商讨。孙卫国《试论清朝对朝鲜王朝宗藩政策的演变及其效果》⁹⁴也认为，清朝在入关后对朝鲜开始实行德化政策，以收朝鲜君臣之心，并在乾隆时期基本取得了朝鲜在心态上认同与清朝宗藩关系的效果。

三是对朝鲜处理与清朝关系的思想观念之研究。最初，于澎与前人侧重于中国文化传播的研究理路不同，在《大报坛与明清之际的中朝关系》⁹⁵一文中，从朝鲜的思明反清思想角度讨论了大报坛的建立兴衰。樊延明《论“三藩之乱”时期朝鲜与清朝的关系》⁹⁶，则考察了清朝“三藩之乱”时朝鲜对清朝政局的研判及其设镇筑防的措施，并对朝鲜抵触清朝的思想进行了分析。而陈尚胜则在《礼义观与现实冲突——李朝政府对清初漂流海商政策波动的研究》⁹⁷一文中，对于《朝鲜王朝实录》所记载的从1644年至1681年间（属于清初“海禁”期间）所发生的十二件中国海商漂流到朝鲜沿海事件进行了考察分析，认为朝鲜王朝虽然被迫臣服于清朝，但她对于附属于南明势力的漂流海商却常常秉持春秋义理精神来予以暗中相助。此后，陈尚胜在《论17-19世纪朝鲜王朝的清朝观演变》⁹⁸一文中，认为朝鲜王朝在处理与清朝的政治关系上，最初一直秉持儒家华夷观学说中的攘夷论，在心理上甚至行动上排斥清朝。后来由于乾隆盛世的到来，朝鲜入清使团的一些有识之士开始在朝鲜倡导“北学论”，开始从心理和情感上接纳清朝。刁书仁《从“北伐论”到“北学论”——试论李氏王朝对清朝态度的转变》⁹⁹，也探讨了朝鲜王朝一个多世纪对于清朝的痛苦心路历程。而把这一主题进行详细研究的，当为孙卫

⁹¹ 山东大学2006年硕士学位论文，载于陈尚胜主编：《山东半岛与中韩交流》，香港出版社，2007年。

⁹² 载于《江海学刊》2002年第6期，南京。

⁹³ 按：全海宗《清代韩中朝贡关系考》，韩文原文发表在《震檀学报》卷29和卷30的合集上（1960）；英文文本则收录于费正清《中国的世界秩序》（哈佛大学出版社1968年）一书中；中文文本收录于全海宗著、全善姬译《中韩关系史论集》中（中国社会科学出版社1997年）。

⁹⁴ 载于香港大学中文系：《东方文化》第41卷第1期，2006年。

⁹⁵ 收载于陈尚胜等著：《朝鲜王朝（1392-1910）对华观的演变》，济南，山东大学出版社，1999年。

⁹⁶ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第8辑，北京，1999年。

⁹⁷ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第4辑，北京，1995年。

⁹⁸ 载于《韩国学报》第16期，台北，1999年。该论文观点，被纳入到陈尚胜等著《朝鲜王朝（1392-1910）对华观的演变》中（济南，山东大学出版社，1999年）。

⁹⁹ 载于《中国边疆史地研究》2006年第4期，北京。

国的系列论文和专著。他曾发表过《略论朝鲜儒林之尊周思想----以华阳洞万东庙为中心》¹⁰⁰、《朝鲜大报坛创设之本末及其象征意义》¹⁰¹、《朝鲜王朝尊周攘夷及其对清关系》¹⁰²、《从正朔看朝鲜王朝尊明反清的正统意识》¹⁰³、《试论朝鲜王朝尊明贬清的理论基础》¹⁰⁴以及专著《大明旗号与小中华意识----朝鲜尊周思明问题研究(1637—1800)》¹⁰⁵。他比较广泛地征引中文、韩文以及日文资料及文献,完全从朝鲜人的文化心理角度来考察和分析当时的清鲜之间政治关系,从而来揭示清鲜宗藩关系的内在特性。毫无疑问,这是迄今为止研究清鲜关系史的最成功力作。此外,研究这一主题的论文还有:王元周《华夷观与朝鲜后期的小中华意识》¹⁰⁶、晁中辰《明清鼎革之际朝鲜的义理之争》¹⁰⁷等。

四是对《燕行录》及其清前期与朝鲜之间文化交流的研究。中国学者开始注意朝鲜使节所著的《燕行录》,最早为张存武,他曾提出《推展朝国的华行录研究》¹⁰⁸。而大陆学者王锦民则根据“辽海丛书”第一集中所收录柳得恭的《溇阳录》和《燕台再游录》,写出《柳得恭与清朝士人的交游》¹⁰⁹。不久,詹杭伦发表《李调元与韩国诗人交往叙论》¹¹⁰,内容仍是侧重于清鲜两国士人交谊与文艺交流。王政尧所著的《〈燕行录〉初探》¹¹¹和《略论〈燕行录〉与清代戏剧文化》¹¹²,开始从该书中发掘清史尤其是研究清朝文化史的新资料。其后,黄时鉴《朝鲜“燕行录”所记的北京天主教堂》¹¹³和《纪昀与西学》¹¹⁴,又利用“燕行录”来研究东西方之间的文化交流。而王政尧再次利用《燕行录》写

¹⁰⁰ 载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第9辑,北京,2001年。

¹⁰¹ 载于《中国文化研究学报》新第11期,香港,2002年。

¹⁰² 载于《韩国学报》第17期,台北,2002年。

¹⁰³ 载于《汉学研究》22卷1期,台北,2004年。

¹⁰⁴ 载于《史学月刊》,2004年第6期,开封。

¹⁰⁵ 孙卫国:《大明旗号与小中华意识----朝鲜尊周思明问题研究(1637—1800)》,北京,商务印书馆,2007年。

¹⁰⁶ 载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第12辑,北京,2004年。

¹⁰⁷ 载于浙江大学韩国研究所:《韩国传统·历史卷》,北京,学苑出版社,2000年。

¹⁰⁸ 载于《韩国史学论丛(水屯朴永锡教授花甲纪念)》,首尔,探求堂,1992年。

¹⁰⁹ 载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第二辑,北京,1993年。

¹¹⁰ 载于《四川师范大学学报》1994年增刊,成都。

¹¹¹ 载于《清史研究》1997年第3期,北京。

¹¹² 载于《中国社会科学院研究生院学报》,1997年第3期,北京。

¹¹³ 载于黄氏所著《东西交流史论稿》,上海古籍出版社,1998年。

¹¹⁴ 载于《文史》第46辑,北京,1998年。

出《18世纪朝鲜“利用厚生”学说与清代中国》¹¹⁵，开始探讨朝鲜北学派所受清朝的影响。而从《燕行录》来研究清鲜关系，则从陈尚胜《朝鲜王朝（1392-1910）对华观的演变》¹¹⁶开始。该书根据台北珪庭出版社于1978年出版的《朝天录》和韩国成均馆大学大东文化研究院于1960—1962年出版的《燕行录选集》，对朝鲜王朝所派遣的使节在华活动及其对明清社会所进行的观察予以梳理，并对朝鲜王朝关于明清两朝思想观念的演变进行了分析。而依据《燕行录》对清朝与朝鲜之间文化交流进行比较系统的研究，当推廉松心的博士学位论文《十八世纪中朝文化交流研究》¹¹⁷和杨雨蕾的博士学位论文《十六至十九世纪初中韩文化交流研究---以朝鲜赴京使臣为中心》¹¹⁸。廉松心的论文主要集中在十八世纪，分别从当时中朝文化交流的背景、中朝物质文化交流、中朝书籍交流、中朝西学交流、文人学者之间的交流、文化交流与朝鲜北学派的形成进行讨论。廉松心还分专章分别研究了朝鲜使者朴趾源的《热河日记》和清朝使者阿克敦的《奉使图》，填补了人们对清朝入鲜使节访问记录的研究空白。不过，如果该文能对两国使节访问对方国家的文字记录进行比较探讨，则能揭明两国使节在异国观察事物的不同倾向。杨雨蕾在学位论文中对朝鲜燕行使团的构成及其任务、朝鲜使臣与中国文人的笔谈交流、朝鲜使臣在清朝书肆访书购书情况以及传入朝鲜的书籍情况、朝鲜使臣在北京所接受并传入朝鲜的西学收籍及知识、朝鲜对清朝观念的演变和北学派的兴起等问题，一一有专章予以探讨，从而使中国学界对《燕行录》的研究更加深入。左江《〈燕行录全集〉考订》¹¹⁹，对《燕行录》的作者以及作者生卒年和使行时间做了细致的订误或补充工作，是一篇极有功力的论文。此外，研究《燕行录》的论著还有黄时鉴《纪昀与朝鲜学人》¹²⁰、祁庆富与权纯姬《〈日下题襟合集〉概说》¹²¹、祁庆富《中韩文化交流的历史见证---关于新发现的〈铁桥全集〉》¹²²、谢正光《乾隆末年学风与朝政：读徐浩修〈燕行记〉》

¹¹⁵ 载于《清史研究》1999年第3期，北京。

¹¹⁶ 陈尚胜等著：《朝鲜王朝（1392-1910）对华观的演变》，济南，山东大学出版社，1999年。

¹¹⁷ 廉松心：《十八世纪中朝文化交流研究》，中央民族大学博士学位论文，北京。该学位论文已由吉林文史出版社出版，长春，2006年。

¹¹⁸ 杨雨蕾：《十六至十九世纪初中韩文化交流研究---以朝鲜赴京使臣为中心》，复旦大学2005年博士学位论文，上海。

¹¹⁹ 载于张伯伟编：《域外汉籍研究集刊》第四辑，北京，中华书局，2008年。

¹²⁰ 载于浙江大学：《韩国传统·历史卷》，北京，学苑出版社，2000年。

¹²¹ 载于陈尚胜主编《第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集》，济南，山东大学出版社，1999年。

¹²² 载于《浙江大学学报》2001年第1期，杭州。

¹²³、施晓燕《从〈热河日记〉管窥中朝士大夫交往中的思想状况》¹²⁴、金柄珉《朝鲜诗人朴齐家与清代文坛》¹²⁵、陈东辉《阮元与朝鲜学人交往考略》¹²⁶等。

五是对清代前期中朝两国边境事务问题的研究。其中，康熙五十一年（1712年）穆克登巡边立碑事件是人们关注的一个热点。早年，张存武在《清代中韩边务问题探源》¹²⁷一文中，认为穆克登立碑在长白山天池以南十余地处，此碑即为清鲜界碑，但穆克登定界使清朝土地损失甚大。后来，杨昭全和孙玉梅在撰写《中朝边界史》¹²⁸时，也认同张存武的观点，并认为康熙帝没有让朝鲜方面共同会勘边界也有重大责任。而徐德源《长白山东南地区石堆土堆筑设的真相》¹²⁹和《穆克登碑的性质及其凿立地点与位移述考》¹³⁰、刁书仁《康熙年间穆克登查边定界考辨》¹³¹等三篇论文，则认为穆克登是奉旨巡边而不是会勘边界的外交事件，穆克登碑是奉旨查边的纪念碑而不是清鲜双方的界碑，而穆克登巡视碑最初应立于小白山顶后却被人移置于长白山东南麓。李花子在《清朝与朝鲜关系史研究---以越境交涉为中心》¹³²一书中则认为，当代学者所主张的界碑移动说，史料证据仍然不足。不过，这部著作的重点是研究两国人越境问题及其交涉。根据她的考察，朝鲜人越境，从最初的采参发展到潜商再发展到垦荒。而清朝对朝鲜人越境的交涉，也从入关前的高压朝鲜到康熙中期演变为两国官员的共同会审。李花子新近发表的论文《穆克登错定图们江源及朝鲜移柵位置考》¹³³，依据朝鲜差使员的口供和地方官的报告，认为穆克登错定了图们江源，指定了一条流向松花江的溪水；而朝鲜在图们江断流处设标时，既将堆柵连接到穆克登错认的水源上，又用木柵连接到图们江上流的红土山水上。此外，相关论文还有：陶勉《清代封祭长白山与踏查长白山》¹³⁴、姜龙范《清代中朝两

¹²³ 载于《九州学林》创刊号，香港，2003年。

¹²⁴ 载于复旦大学韩国研究中心：《韩国研究论丛》，第12辑，北京，2006年。

¹²⁵ 载于金柄珉主编：《朝鲜-韩国的历史传统与人文精神》，延边大学出版社，2004年。

¹²⁶ 载于金健人主编：《中国江南与韩国文化交流》，北京，学苑出版社，2005年。

¹²⁷ 载于《中央研究院近代史研究所集刊》第2期，台北，1971年。

¹²⁸ 杨昭全、孙玉梅：《中朝边界史》，长春，吉林文史出版社，1993年。

¹²⁹ 载于《中国边疆史地研究》1996年第2期，北京。

¹³⁰ 载于《中国边疆史地研究》1997年第1期，北京。

¹³¹ 载于《中国边疆史地研究》2003年第3期，北京。

¹³² 李花子：《清朝与朝鲜关系史研究---以越境交涉为中心》，延边大学出版社，2006年。

¹³³ 载于复旦大学韩国研究中心：《韩国研究论丛》，第18辑，北京，2008年。

¹³⁴ 载于《中国边疆史地研究》，1996年第3期，北京。

国边界问题的理论思考》¹³⁵和《历史的留影：清代中朝两国的边疆政策》¹³⁶。而谢肇华《清朝与朝鲜的中江贸易》¹³⁷和郭庆涛《试论 17 世纪中叶至 18 世纪清朝与朝鲜的会源边市贸易》¹³⁸，则是研究清鲜边境互市贸易兴衰变化过程的两篇论文。

三、近十五年对于晚清与朝鲜关系史研究情况

近十五年中国学术界对于晚清与朝鲜关系史的研究，也有不少专著问世，主要有徐万民《中韩关系史（近代卷）》¹³⁹、王明星《韩国近代外交与中国（1861-1910）》¹⁴⁰、王如绘的《近代中日关系和朝鲜问题》¹⁴¹、权赫秀《19 世纪末韩中关系史研究---以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心》¹⁴²和《近代韩中关系史的再照明》¹⁴³、杨昭全、孙玉梅《朝鲜华侨史》¹⁴⁴和《中朝边界史》¹⁴⁵（两书的主要部分皆在近代以及现代）、姜龙范《近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究》¹⁴⁶。在资料的出版方面也有：中国第一历史档案馆编《清代中朝关系档案史料汇编》¹⁴⁷和《清代中朝关系档案史料续编》¹⁴⁸，前书收有清朝光绪年间（1875-1908）军机处的录副奏折共 417 件，后书录有从乾隆元年至同治（1736-1874）以及宣统时期（1909-1911）军机处的录副奏折共 396 件；刘为、魏显洲主编《吉林省档案馆藏清代中朝关系史料选编》¹⁴⁹，收有从同治十年（1871）到宣统

¹³⁵ 载于《延边大学学报》1997 年第 3 期，延边。

¹³⁶ 载于《延边大学学报》1997 年第 4 期，延边。

¹³⁷ 载于《商鸿逵教授逝世十周年纪念文集》，北京大学出版社，1995 年。

¹³⁸ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第 6 辑，北京，1997 年。

¹³⁹ 徐万民：《中韩关系史（近代卷）》，北京，社会科学文献出版社，1996 年。

¹⁴⁰ 王明星：《韩国近代外交与中国 1861-1910》，北京，中国社会科学出版社，1998 年。

¹⁴¹ 王如绘：《近代中日关系与朝鲜问题》，人民出版社，北京，1999 年。

¹⁴² 权赫秀：《19 世纪末韩中关系史研究---以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心》，韩国首尔，白山资料院，2000 年。

¹⁴³ 权赫秀：《近代韩中关系史的再照明》，韩国首尔，慧眼图书出版公司，2007 年。

¹⁴⁴ 杨昭全、孙玉梅：《朝鲜华侨史》，北京，中国华侨出版公司，1991 年。

¹⁴⁵ 杨昭全、孙玉梅：《中朝边界史》，长春，吉林文史出版社，1993 年。

¹⁴⁶ 姜龙范《近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究》，牡丹江，黑龙江民族出版社，2000 年。

¹⁴⁷ 中国第一历史档案馆编：《清代中朝关系档案史料汇编》，北京，国际文化关系出版社公司，1996 年。

¹⁴⁸ 中国第一历史档案馆编：《清代中朝关系档案史料续编》，北京，中国档案出版社，1998 年。

¹⁴⁹ 刘为、魏显洲主编：《吉林省档案馆藏清代中朝关系史料选编》，长春，吉林人民出版社，2000 年。

三年（1911）的朝鲜关系档案 149 件；权赫秀编《近代中韩关系史料选编》¹⁵⁰，收录有近代中朝关系的约章 17 件和文牍 140 件；杨昭全、孙玉梅主编《中朝边界沿革及界务交涉史料汇编》，内分历史文献和历史档案两编，其中大部分史料皆为清代史料尤其是晚清史料。而从此期间所发表的大量论文来看，人们对于晚清与朝鲜关系史研究的主要兴趣在于对近代中朝政治关系的变化问题上。

近代中朝政治关系的变化是从何时开始的？中国史学界虽然没有专文讨论过这一问题，但一些专著大都定在 19 世纪 70 年代。如王明星《韩国近代外交与中国（1861-1910）》就以 1874 年作为清朝朝鲜政策转变的起点¹⁵¹。权赫秀在《关于近代中朝关系史（1876—1910）的几点认识》¹⁵²一文中，则把 1876 年视为近代中朝关系史的开端。而宋慧娟的《清代中朝宗藩关系嬗变研究》，也把 19 世纪 70 年代定为中朝宗藩关系的“变通”时期¹⁵³。但张礼恒《论清朝对鲜政策的转变及其评价》¹⁵⁴，认为变化是在 19 世纪 80 年代发生的。在他看来，从 1644 年至 1882 年间清朝的对朝政策仍是固守朝贡体制的传统，对朝鲜的内政和外交基本采取不予干预的政策。而从 1882 至 1894 年间，在面对西方列强和日本的强大攻势下，清朝为了边疆的安全和上国的尊严，开始对朝鲜的内政外交采取干涉政策。

在晚期与朝鲜政治关系的发展进程中，清朝外交重臣李鸿章是一个关键性的人物。在研究李鸿章与朝鲜关系方面，最重要论著当推权赫秀的《19 世纪末韩中关系史研究——以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心》¹⁵⁵。该书一一考察了李鸿章在朝鲜发生江华岛事件发生后所面临到的中日两国皆有把朝鲜视为“藩属”的意识，在西洋各国纷至沓来朝鲜后使李鸿章产生的朝鲜危机意识以及劝导朝鲜进行门户开放，在朝鲜相继发生壬午军乱和甲申政变后李鸿章对朝鲜政治两面性的认识，李鸿章对朝鲜干涉政策的确立以及甲午战争前后对朝鲜问题的认识等。内容极为详细，但由于该书是用韩文在韩国出版，极不

¹⁵⁰ 权赫秀编：《近代中韩关系史料选编》，北京，世界知识出版社，2008 年。

¹⁵¹ 见王明星《韩国近代外交与中国 1861-1910》第 75 至 80 页，北京，中国社会科学出版社，1998 年。

¹⁵² 权赫秀：《关于近代中朝关系史（1876-1910）的几点认识》，载于《中国朝鲜史研究》第一辑，香港社会科学出版社，2004 年。

¹⁵³ 见宋慧娟《清代中朝宗藩关系嬗变研究》第五章“中朝宗藩关系的‘变通’”，第 151 至 221 页，长春，吉林大学出版社，2007 年。

¹⁵⁴ 载于复旦大学韩国研究中心：《韩国研究论丛》，第 18 辑，北京，世界知识出版社，2008 年。

¹⁵⁵ 权赫秀：《19 世纪末韩中关系史研究——以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心》，韩国首尔，白山资料院，2000 年。

便于中国学人的了解。关威《甲申事变与李鸿章、伊藤关于朝鲜的交涉》¹⁵⁶一文,则考察了朝鲜发生甲申政变时李鸿章与伊藤博文就朝鲜问题的交涉经过,并通过,签署《中日天津条约》解决了两国争端。而在国内报刊上的相关论文还有:于建胜《甲午前中国的对朝政策——兼论李鸿章与“以夷制夷”政策》¹⁵⁷、尹小红《李鸿章与朝鲜问题》¹⁵⁸、张君法、李健:《李鸿章对朝鲜的国际均衡政策(1879-1882)》¹⁵⁹、谢世诚《李鸿章与朝鲜》¹⁶⁰等。于文和张李两人合作文皆认为,为了防止日本与西方国家的勾结,李鸿章在主导朝鲜对其它国家的政策方面,根据中国传统的“以夷制夷”思想,制订了使西方国家和日本在朝鲜的均势政策。而谢世诚则认为,李鸿章是在坚持传统清鲜宗藩关系前提下,积极帮助朝鲜抵御列强的侵略,敦促朝鲜政府顺应历史潮流进行对外开放。而中国被迫卷入中日甲午战争,其原因即是清廷顾及维护自己在朝鲜的权益。不过,上述观点仍是传统意见的复述而少有新意。

在晚清对朝鲜政策的转变过程中,清朝首届驻日使馆参赞黄遵宪所写的《朝鲜策略》也曾有过重要影响。因此,人们对黄遵宪《朝鲜策略》的研究也极为重视,相关的论文有:杨天石《黄遵宪的〈朝鲜策略〉及其风波》¹⁶¹、李德征《论〈朝鲜策略〉与近代朝鲜的对外开放》¹⁶²、李里峰和王庆德合著《何如璋与新朝鲜政策的实施》¹⁶³、宋慧娟《何如璋驻日期间朝鲜策略简析》¹⁶⁴等。上述论文都基本认定了何如璋在清政府新朝鲜政策形成和实施的过程中所发挥的重要作用。杨天石文重在揭示《朝鲜策略》形成后由朝鲜赴日修信使金弘集带回朝鲜,在朝鲜君臣内部所造成的强烈影响。而李德征文则具体分析了《朝鲜策略》的基本主张和原则。李里峰和王庆德的论文认为,何如璋的对朝外交思想和实践,直接导致了《朝美通商条约》的签定,从而对朝鲜乃至东亚的局势都产生了深远的影响。但何如璋的外交思想和清政府的新朝鲜政策,又具有介于传统与现代之间具有过渡性特征。宋慧娟文也认为,作为转型时期的外交官,何如璋对近代国际关系的认

¹⁵⁶ 载于《韩山师范学院学报》2001年第1期。潮州。

¹⁵⁷ 载于《青岛大学师范学院学报》2000年第4期,青岛。

¹⁵⁸ 载于《宿州师专学报》2001年第4期,安徽宿州。

¹⁵⁹ 载于《延安大学学报》2006年第1期,陕西延安。

¹⁶⁰ 载于《江苏社会科学》2006年第6期,南京。

¹⁶¹ 载于《近代史研究》1994年第3期,北京。

¹⁶² 载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第4辑,北京,1995年。

¹⁶³ 载于《徐州师范大学学报》2001年第4期。

¹⁶⁴ 载于《长春师范学院学报》2005年第5期。

识和研究还不够深入,他的朝鲜政策的矛盾和错误之处也在所难免。而梁英华《试论黄遵宪、曾经泽、袁世凯在 19 世纪 80 年代对朝鲜的外交策略》¹⁶⁵一文,视野却从黄遵宪一人扩大到当时清朝涉外事务的多位要员,极富新意。根据她的考察和比较,认为黄、曾、袁三人在对朝鲜的战略定位和维系清鲜宗藩关系的认识上存在一致,三人都以拒俄为对朝鲜外交政策的要点并共同轻视了日本的因素;不同之处,黄从联亚拒欧的立场出发主张朝鲜联合日本,曾认为俄国侵略朝鲜的意图明显而朝鲜必须联合日本以对抗俄国,而袁的《朝鲜大局论》根本就没有把日本放在眼中。

对于 19 世纪末清鲜政治关系的发展走向,当时朝鲜方面是如何考虑的?权赫秀《19 世纪末韩国开华势力之韩中关系构想研究》¹⁶⁶,则填补了中国学人在这个问题上研究的空白。该文分别考察了当时朝鲜的急进开化派代表人物金玉均、朴泳孝、俞吉浚和稳健开化派代表人物金允植、鱼允中、金弘集等人关于朝鲜和清朝关系的各种构想,他们虽然都认识到必须从传统宗藩关系体制向近代条约体制转变,但在对清朝的立场上却表现为排斥与亲近的差异。在朝鲜王朝处理与西方国家关系的实际过程中,是接受清朝上国的约束还是自主外交?王元崇的《清末朝鲜领选使研究》¹⁶⁷,通过 1882 年朝鲜派遣吏曹参议金允植率团来华,对朝鲜开放之初接受清朝外交指导和技术人才培养进行了非常具体的考察,是一篇填补空白的力作。蔡晓燕在《“朴定阳事件”与中朝宗藩关系的变化》¹⁶⁸一文中,考察了朝鲜使节朴定阳在出使美国过程中所做的摆脱清朝控制的种种努力。最近,陈红民也以《晚清外交的另一种困境:以 1887 年朝鲜遣使事件为中心的研究》¹⁶⁹为题,阐述了朝鲜决定在向欧美国家派遣使节过程中宣示外交“自主”的决心,而清朝在阻止不成的情况下制订了朝鲜使节必须遵循向中国使馆报到、参加宴酬必须随从中国使节、对外交涉必须先与中国使节相商的“三端”要求,但朴定阳却在出使美国过程中自行其是,而朝鲜政府对于清朝的强硬要求也极力拖延敷衍,使清朝对朝鲜的外交政策陷于失败。清朝之所以在朝鲜向西方开放过程中强化宗藩关系,高强的《清政府强化中

¹⁶⁵ 载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第 10 辑,北京,2002 年。

¹⁶⁶ 载于金健人主编:《韩国研究》第八辑,沈阳,辽宁民族出版社,2007 年。

¹⁶⁷ 北京大学硕士研究生学位论文,2006 年。

¹⁶⁸ 载于《钦州高等师范专科学校学报》2003 年第 1 期,广西钦州。

¹⁶⁹ 载于《历史研究》2008 年第 2 期,北京。

朝宗藩关系原因探析》¹⁷⁰文章认为,清政府力图强化与朝鲜之间的宗藩关系,其原因在于朝鲜的重要战略地位与中国安全利益息息相关。他在《甲午战前清韩宗藩关系的强化及其后果》¹⁷¹一文中又指出,清朝在与日本围绕着中朝宗藩关系的存废问题的外交斗争中,为了使中朝宗藩关系取得国际合法性,清朝主动让朝鲜与西方国家建立外交关系,期望中朝宗藩关系被纳入条约体系当中。但是,用这种模仿近代不平等条约的范式来实行“立约保藩”,最终导致原来表面的不平等转化为内在的实质不平等,从而酿成朝鲜的自主反抗和日本的军事反击。而清朝在甲午战争中失败,被迫彻底放弃中朝之间的宗藩关系。

在研究晚清与朝鲜政治关系演变问题时,袁世凯也是回避不了的关键性人物。李劲军《袁世凯与中朝交涉》¹⁷²,是一篇比较全面地探讨袁世凯在清鲜政治关系上作用的论文。该文把袁世凯在朝鲜的活动,划分为三个阶段。第一阶段为1882年8月至1885年1月,为袁世凯初入朝鲜推行干涉朝鲜政策初露锋芒;第二阶段为1885年10月至1889年底,他成为清朝驻朝鲜总理交涉通商事宜大臣,开始全面强化清朝对朝鲜的宗主权时期;第三阶段为1890年初至1894年7月19日,为袁世凯在朝鲜全力抵制日本而最终受挫时期。此后,李德征和李劲军在《1882-1884年袁世凯对朝交涉中的得失与影响》¹⁷³一文中,又专门对袁世凯在朝鲜的最初阶段活动进行了深入探讨。沈渭滨的《朝鲜“壬午兵变”与中韩关系述论》(上、下)¹⁷⁴,则为人们提供了一份比较详尽的袁世凯入朝前后清鲜政治关系的背景,论文也分析了壬午(1882年)兵变发生时清朝平叛措的不当性,并认为它是清鲜政治关系史上的一个转折点。施高强在《袁世凯甲午战争前夕行为及其后果探析》¹⁷⁵文中认为,作为清政府驻朝鲜总理交涉通商大臣的袁世凯,在怂恿清政府出兵朝鲜时不遗余力,轻率鲁莽,使日本有了侵略朝鲜和中国的极佳借口;危急关头请求内调回国而不择手段,张皇失措,导致中国驻朝鲜公职人员人心浮动、旅朝华侨和华商处境异常艰难。杨涛的《袁世凯在朝鲜的外交活动述评》¹⁷⁶一文则认为,袁世凯在朝连续

¹⁷⁰ 载于《锦州师范学院学报》2001年第4期,辽宁锦州。

¹⁷¹ 载于《烟台大学学报》2005年第3期,山东烟台。

¹⁷² 此文为山东大学2003年硕士学位论文,已收录于陈尚胜主编《山东半岛与中韩交流》中,香港出版社,2007年。

¹⁷³ 载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第12辑,北京,2004年。

¹⁷⁴ 分别载于复旦大学韩国研究中心:《韩国研究论丛》第2期(1996年)、第4期(1998年),上海。

¹⁷⁵ 载于《商丘师范学院学报》2003年第4期,商丘。

¹⁷⁶ 载于《新乡高等师范学校学报》2007年第4期,新乡。

平定了“壬午兵变”与“甲申政变”，对英、美、俄、日等国对朝鲜的侵略起了一定的遏制作用。这也使袁世凯的功名欲望急剧膨胀，在外交活动中过于自信和骄狂，对宗藩关系僵硬维持而且忽略对朝鲜内政全面变革的支持，对国际形势没有以全面、求变的态度来应对，终于使袁世凯在朝鲜的外交活动归于失败。此外，相关论文还有纪能文《关于袁世凯在朝鲜活动的历史考察》¹⁷⁷等。

陈树棠、马相伯等人也是近代清鲜政治关系转型过程中的重要人物。对此，权赫秀的《陈树棠在朝鲜的商务领事活动与近代中朝关系(1883年10月-1885年10月)》¹⁷⁸一文进行了深入研究。他认为，陈树棠自1883年10月被派驻朝鲜担任总办朝鲜各口交涉商务委员，至1885年10月清政府试图加强对朝鲜干涉政策遂召回他并代之以袁世凯为止，先后与朝鲜签订了三项有关通航与租界章程，从而促成近代中朝经贸关系之急剧发展，并代表清政府负责办理中朝外交事务，还曾协助朝鲜高宗政府办理近代外交事务，实际上是近代中国最早派驻朝鲜的最高级商务领事官员。权赫秀在《马相伯在朝鲜的顾问活动(1882年11月—1884年4月)》¹⁷⁹一文中，考察了1882年11月马相伯(时名马建常)奉命赴朝鲜的活动。他曾被朝鲜高宗政府破格委任为正二品议政府赞议兼总理交涉通商事务衙门协办，成为近代朝鲜授予官职最高的外国顾问。他提出早期近代化改革的一系列建议，并参与创建近代外交和通商制度与机构，协助办理对外交涉事务。由于清政府对朝政策的多重性、矛盾性及朝鲜政府的保守立场等内外因素的干扰，他不得不于1884年4月请假回国，其顾问使命遂半途而废。此外，权赫秀还发表有《韩国藏张树声、丁汝昌、吴兆有致朝鲜王朝官员书信三件笺证》¹⁸⁰；叶渡和魏三纲也发表有《新发现〈吴长庆、闵泳翊等笔谈卷〉》¹⁸¹，这些新史料的发现都是研究晚清与朝鲜关系的珍贵史料。

1897年11月8日朝鲜改国号为“大韩帝国”，1898年7月清政府决定在大韩帝国设立使馆，从而揭开了近代中韩政治关系的新篇章。李德征《论清政府设立驻韩使馆的原

¹⁷⁷ 载于《安阳师范学院学报》2001年第1期，安阳。

¹⁷⁸ 载于《社会科学研究》2006年第1期，成都。又载于陈尚胜主编：《登州港与中韩交流国际学术讨论会论文集》，济南，山东大学出版社，2005年。

¹⁷⁹ 载于《近代史研究》2003年第3期，北京。

¹⁸⁰ 载于《安徽史学》2003年第5期，合肥。

¹⁸¹ 载于北京大学韩国学研究中心：《韩国学论文集》第3辑，北京，1994年。

因及特点》¹⁸²一文，具体探讨了清朝设立驻韩使馆的背景及其选择徐寿朋作为首任驻韩大使的原因，并对徐寿朋赴任之初在韩国的活动做了考察。对大韩帝国建立后与清朝的平等外交关系的详尽研究，则是蔡建的博士学位论文《大韩帝国与中国的外交关系 1897-1910》¹⁸³。该文不仅具体考察了两国使馆制度的建立，还包括中国驻韩商务总董制度与领事馆制度的建立，以及这一时期双方围绕着边界争端所签订的条约过程。

关于晚清与朝鲜的界务交涉问题研究，学术界主要集中在中朝勘界与界约问题的研究。杨昭全和孙玉梅的《中朝边界史》¹⁸⁴，从第八章至第十一章中分别考察了“乙酉（1885年）勘界”、“丁亥（1887年）勘界”、鲜民非法越境与清韩边界交涉、中日《图们江中韩界务条款》（韩国方面常称为《间岛条约》）与“间岛案”的交涉，第十二章还就外国学者的相关论著进行了讨论，是一部系统而又具体的专著。姜龙范《关于清季中朝边界交涉的研究》¹⁸⁵一文，认为清鲜两次勘界谈判活动，最终未能达成划定边界协议并竖立界碑，使越垦朝鲜人的法律地位成为两国外交纷争的焦点，为两国间的政治关系埋下了隐患。而他的《近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究》¹⁸⁶著作，考察了“间岛”一词出自越界的朝鲜垦荒者，本是指光霁峪前图们江中的“假江”，人们将它称为“垦土”或“垦岛”乃转音成“间岛”。而日俄战争后日本人守田利远则把“间岛”的地理范围扩大为海兰河以南至图们江以北的地区。蔡建《中朝边界争执与〈图们江中韩界务条款〉》¹⁸⁷一文，主要针对上个世纪 80 年代以后韩国学术界认为 1909 年中日双方签订的《图们江中韩界务条款》是无效条约的观点，提出条约签订后韩国内阁总理李完用曾应允公布，意味着韩国政府承认并接受此约；而从“间岛”所指的延吉地区历史源流来看，也一直属于清朝管辖的领土。此外，陈慧也曾以《清代中朝图们江界务研究》¹⁸⁸为题，提出了自己的博士学位论文。

¹⁸² 载于陈尚胜主编：《第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集》，济南，山东大学出版社，1999年。

¹⁸³ 复旦大学博士学位论文，2004年。

¹⁸⁴ 杨昭全、孙玉梅：《中朝边界史》，长春，吉林文史出版社，1993年。

¹⁸⁵ 载于《延边大学学报》，1998年第1期，吉林延边。

¹⁸⁶ 姜龙范《近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究》，牡丹江，黑龙江民族出版社，2000年。

¹⁸⁷ 载于复旦大学韩国研究中心：《韩国研究论丛》，第11辑，北京，中国社会科学出版社，2004年。

¹⁸⁸ 延边大学博士学位论文，2007年。

四、感想与展望

从上述回顾可见,近十五年中国学术界对于清鲜关系史的研究,无论在论著的数量上还是在论述所涉及到的学术问题方面,都远远超过了以前四十年的成果。它从一个侧面说明,中国学术界出于对中韩关系的重视,而特别关注于中韩关系史的研究。

回顾过去是为了更好地前进。为了把清鲜关系史的研究继续推向前进,我认为以下问题的研究还比较薄弱,尤其需要加强。一是对清鲜政治关系的研究比较关注于清初和清末,而对清中期与朝鲜之间政治关系的研究相对薄弱;二是对晚清与朝鲜政治关系变化进程的研究,也多是以关键人物为中心来推动的,却缺乏从体制变通和改革角度做出具体的考察;三是对清鲜之间文化交流的研究也是侧重于清前期并且偏重于人物交往的研究,而对清后期与朝鲜之间文化交流的研究却也不足,仅有有吴士英《中朝友谊的记录——朝使李承五〈燕槎日记〉之我见》¹⁸⁹、蔡少卿、王庆德《金泽荣在华的韩国文化拯救活动述评》¹⁹⁰、陈东辉《俞樾与中日韩文化交流》¹⁹¹等文;四是对清鲜之间贸易和经济交流的研究,大家比较关注于朝贡贸易和鸭绿江与图们江之间的边境贸易,而对1882年《中朝商民水陆贸易章程》签订后海上贸易以至两国商民入境贸易的研究则十分薄弱,更缺乏把中朝经济交流活动与区域社会发展问题结合起来进行研究的尝试。与此项研究基础薄弱相关,清代入鲜华侨史的研究尤其是山东商民通过航海贸易进入朝鲜侨居的历史研究也十分薄弱。¹⁹²五是对边界问题的研究虽然较为关注,但关注面过窄,而对宗藩体制之下两国围绕着边境事务的交涉与合作问题研究却不足。

而要加强和拓宽对清鲜关系史的研究,更需继续加强对清鲜关系资料的搜集和整理以及出版,尤其是对除两国“实录”以外的档案资料的整理和出版。同时,加强与韩国学术界以及第三国学术界尤其是日本学术界的交流和对话,也是一个特别需要加强的问题。只有充分地了解国内外同行的研究成果,才能避免重复性的无效研究,从而更有效地提出问题和解决问题。

¹⁸⁹ 载于陈尚胜主编:《第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集》,济南,山东大学出版社,1999年。

¹⁹⁰ 载于陈尚胜主编:《第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集》,济南,山东大学出版社,1999年。

¹⁹¹ 载于浙江大学韩国研究所:《韩国研究》第8辑,沈阳,2007年。

¹⁹² 仅见晁中辰《旅韩华侨华人历史分期初探》(载于北京大学韩国学研究中心:《韩国学论文集》第8辑,北京,1999年),而该文只是提供一个笼统的旅韩华侨史框架。

최근 15년간 중국 학계의 清朝와 朝鮮關係史에 대한 연구 논평

陳 尙 勝(中國 山東大學 歷史文化學院)

중화인민공화국과 대한민국이 수교를 맺은 1992년 이후, 중한 양국의 학술교류와 발전이 함께 이루어졌으며, 중국 대륙의 학술계에서도 중한관계사 연구가 점차 중요시되었다. 지난 15년 동안(1993-2008) 공개 발표되고 출판된 논저를 살펴보면, 이 기간 동안 발표된 논저의 수량이 1950-1992년의 43년간의 수량¹⁾을 초과하고 있음을 알 수 있다. 청조와 조선의 관계는 전통에서 근대를 향하는 중요한 단계에 있는 시기였으므로, 중한관계사 연구 영역에서 이와 관련된 연구 자료가 풍부한 상태이며, 역사학자들이 중시하는 학문 분야가 되었다. 이 글에서는 중국 학계의 지난 40년 동안 清·朝 관계사 연구를 회고하고, 최근 15년 동안의 清朝 前期와 朝鮮關係史 연구 현황과 清末과 朝鮮(韓國) 관계사 연구 현황 등 세 방면에서 검토할 것이다. 또한 이를 통해 연구 전개상에서 드러나는 문제들을 살펴보면서, 더불어 개인적인 의견도 제시하고자 한다.

1. 지난 40년간 중국 학계의 清·朝鮮관계 연구에 대한 회고

지난 1950년대부터 90년대 초에 이르기까지 청조와 조선의 관계사에 대한 중국 학계의 연구는 기본적으로 대만 지역의 학자들이 연구를 주도하였다. 중앙연구원 역사언어연구소의 李光濤 선생이 처음으로 明清檔案을 정리하는 과정에서 확보한 당안을 기반으로 『朝鮮國表文之研究』²⁾를 완성하였고, 朝鮮과 明清 사이에 왕래된 表文의 程式 및 清朝가 朝鮮의 表文에 기재된 문자의 사용에 대해 비난한 것과 같은 문제가 세심하게 연구되었다. 이 외에, 그는 조선 측의 문헌 가운데 『朝鮮王朝實錄·孝宗實

1) 黃寬重 編, 『中韓關係中文論著目錄』(台北, 中央研究院東北亞區域研究, 2000年)과 中國人民大學書報資料中心에서 편찬한 『各段歷史研究論著“索引”』 참조.

2) 『中央研究院院刊』第二輯, 台北, 1955年.

录』, 『备边司臚录』, 『承政院日记』을 근거로 하여 「多尔衮征女朝鲜史事」³⁾을 완성하였다. 李光涛의 영향을 받아, 대만대학을 졸업한 张存武가 중앙연구원 근대사연구소에서 청조관계를 주요 연구 분야로 삼고, 「清代中韩边务问题探源」⁴⁾, 「清代中韩宗藩关系之制度性分析」⁵⁾, 「清韩陆防政策及其实施-清季中韩界务纠纷的再解释」⁶⁾, 「清韩关系: 1637--1644」⁷⁾, 「清代中国对朝鲜文化之影响」⁸⁾, 「朝鲜对清外交机密费之研究」⁹⁾, 「丁卯议和后金兵的撤退」¹⁰⁾, 「清入关前与朝鲜的贸易1627-1736」¹¹⁾, 「清韩关系: 1631-1636」¹²⁾, 「穆克登所定的中韩国界」¹³⁾, 「中国对日本亡韩的反应」¹⁴⁾, 「清季中韩关系之变通」¹⁵⁾, 「宗藩关系制度的运作-以朝鲜与奴尔哈赤的第一次纠纷为例」¹⁶⁾ 등의 논문을 발표하였다. 이 논문들은 주로 清과 조선의 정치 관계사를 탐색하는데 중점을 두고 있으며, 무엇보다 청조와 조선 사이의 종번 관계에 대해서 깊이 있는 연구를 진행한 것이며, 이후 다수의 논문이 『清代中韩关系论文集』¹⁷⁾ 가운데 수록되어 있다. 张存武의 연구에 따르면, 皇太极에서 “三藩之乱”에 이르기까지, 청조의 조선에 대한 간섭은 비교적 많았다. 그러나 “三藩之乱”이 평정된 이후부터 1870년대에 이르는 시기에는, 청조의 朝鮮에 대한 간섭은 크게 감소하였다. 그 후 서양의 영향을 받으면서, 조선이 독립을 요구하자, 청조 역시 처음과 같은 간섭의 시대로 돌아갔다. 그러나 청조의 조선에 대한 고삐의 강약에 상관없이 그 요점은 여전히 중국 전통적인 종번 제도의 정신에서 벗어나지 않았다. 또한, 이 논문집을 출판하기 이전, 张存武는 『清韩宗藩贸易1637-1894』¹⁸⁾의 연구를 출판하였다. 이 글에서는 주로 종번관계 체제하의 청과 조선의 무역 관계사를 다루고 있는데, 官方의 조선 사절이 청에 들어와서 진행한 무역과 민간의

-
- 3) 李光涛, 『多尔衮征女朝鲜史事』, 台北, 中央研究院历史语言研究所专刊, 1970年.
 - 4) 『中央研究院近代史研究所集刊』 第2期, 台北, 1971年.
 - 5) 『食货复刊』 第1卷第4期, 台北, 1971年.
 - 6) 『中央研究院近代史研究所集刊』 第3期(下), 台北, 1972年.
 - 7) 『故宫文献』 第4卷 第1期, 台北, 1973年.
 - 8) 『中央研究院近代史研究所集刊』 第4期(下), 台北, 1974年.
 - 9) 『中央研究院近代史研究所集刊』 第5期, 台北, 1976年.
 - 10) 『东方学志』 第18辑, 台北, 1978年.
 - 11) 『东方学志』 第21辑, 台北, 1979年.
 - 12) 『韩国学报』 第1期, 台北, 1981年.
 - 13) 『中央研究院国际汉学会议论文集』(下册), 台北, 1981年.
 - 14) 『中韩关系史国际研讨会论文集』, 台北, 1983年.
 - 15) 『中央研究院近代史研究所集刊』 第14期, 台北, 1985年.
 - 16) 『劳贞一先生八秩荣庆论文集』, 台北, 商务印书馆, 1986年.
 - 17) 张存武, 『清代中韩关系论文集』, 台北, 商务印书馆, 1987年.
 - 18) 张存武, 『清韩宗藩贸易1637-1894』, 台北, 中央研究院近代史研究所, 专刊第39种, 1985年.

변시 무역을 주로 고찰하고 있으며, 이와 함께 종번 무역에 대한 청조와 조선의 쌍방의 영향에 대해서 심도 있게 분석하고 있다.

刘家驹은 특히 清 皇太極 시기의 조선과의 관계를 연구하는데에 관심을 집중하였는데, 일찍이 「崇德改元与太宗伐朝鲜之役」¹⁹⁾, 「天聰元年阿敏等伐朝鲜之役与金国兄弟之盟」²⁰⁾, 「金国、朝鲜之建交与开市」²¹⁾, 「清初朝鲜助兵攻陷皮岛始末」²²⁾, 「清初朝鲜世子入质沈阳始末」²³⁾, 「清初朝鲜締结婚媾及朝鲜进献侍女考」²⁴⁾, 「清初征兵朝鲜始末」²⁵⁾, 「清初征粮朝鲜始末」²⁶⁾, 「清初朝鲜奉明正朔考」²⁷⁾, 「清初贸易于明朝与朝鲜间的潜商考」²⁸⁾, 「从朝鲜对金国的礼单与贡单分析两国贸易的物资(西元1627年至1641年)」²⁹⁾ 등의 논문을 발표하였다. 刘家驹은 바로 이 논문들을 기초로, 『清朝初期的中韩关系』³⁰⁾을 저술하였는데, 이러한 논문을 통해 皇太極 시기의 청과 조선의 복잡한 관계를 보여주었다. 이외에, 陈捷先의 「论天聰年间后金与朝鲜的关系」³¹⁾과 「1636年满洲与朝鲜战争原因略考」³²⁾, 庄吉发的 「满鲜通市考」³³⁾ 역시 皇太極 시기 청과 조선의 정치·경제 관계를 심도 있게 연구한 글이다.

入關 이후와 청말 시기의 中朝관계사 연구 방면의 주요 논저는 다음과 같다. 陈捷先의 「康熙丁酉阿克敦出使朝鲜事迹考」³⁴⁾, 陈明崇의 「韩儒金阮堂对『海国图志』的认识」³⁵⁾, 梁嘉彬의 「李鸿章外交与中日间朝鲜交涉」³⁶⁾, 张雪智의 「甲午战争前后李鸿章外交政策之探讨」³⁷⁾, 林明德的 「燕岩之亲明反清思想及其中国观」³⁸⁾과 「袁世凯与朝鲜」³⁹⁾, 王德昭의

19) 『沈刚伯先生八秩荣庆论文集』, 台北, 1976年.

20) 『食货复刊』 第7卷 第10期, 台北, 1978.

21) 『食货复刊』 第9卷 第1、2期, 台北, 1979年.

22) 『食货复刊』 第11卷 第5期, 台北, 1981年.

23) 『食货复刊』 第12卷 第1期, 台北, 1982年.

24) 『食货复刊』 第12卷 第3期, 台北, 1982年.

25) 『食货复刊』 第12卷 第10、11、12期, 台北, 1983年.

26) 『食货复刊』 第14卷 第1期, 台北, 1984年.

27) 『中国历史学会史学集刊』 第16期, 台北, 1984年.

28) 『韩国学报』 第5期, 台北, 1985年.

29) 『国史馆馆刊』 第9期, 台北, 1990年.

30) 刘家驹, 『清朝初期的中韩关系』, 文史哲出版社, 台北, 1986年.

31) 『东方学志』 第23、24辑, 台北, 1980年.

32) 『政大国际中国边疆学术会议论文集』, 台北, 国立政治大学, 1985年.

33) 『食货复刊』 第5卷 第6期, 台北, 1975年.

34) 『韩国学报』 第5期, 台北, 1985年.

35) 『食货复刊』 第7卷 第6期, 台北, 1977年.

36) 『中国历史学会史学集刊』, 第7辑, 台北, 1975年.

37) 『韩国学报』 第8辑, 台北, 1989年.

「论甲午援韩」⁴⁰⁾이 있으며, 이는 중한 관계사와 관련된 문제들을 다룬 대표적인 성과물들이다. 그 밖에도, 清末 조선과의 관계를 다룬 논문들로 沈路生의 「袁世凯在朝鲜」⁴¹⁾, 孙启瑞의 「清末(1883-1886)中韩俄的关系-兼论穆麟德主倡的韩俄密商」⁴²⁾, 林子侯의 「论1885年中日朝鲜外交措施的调整」⁴³⁾와 「甲午战争前之中日韩关系」⁴⁴⁾, 杨翠华的 「甲午战争之中韩关系：1896-1905」⁴⁵⁾이 있다. 그런데 대만 학자들은 清末 조선과의 관계에 대한 당안 자료들을 정리하였는데, 이것이 오히려 연구에 중요한 공헌을 하였다. 郭廷以와 李毓澍이 책임 편집한 『清季中日韩关系史料』(총11책)⁴⁶⁾이 있으며, 清朝 總理各國事務衙門의 “朝鮮档”과 清末의 외무부와 관련한 中日韩商务, 边务, 路矿, 侨民, 渔业, 航运, 邮电 등의 교섭 안건들이 집대성되었다. 이렇게 수집된 档案에는 同治三年(1864年)부터 宣统 三年(1911年)에 이르는 총 5048件이 수록되어 있다. 이 이러한 사료 회편은 직접 1차 당안을 수집한 것이므로, 청말의 중한관계를 연구하는데 귀중한 사료를 제공하고 있다. 赵中孚, 张存武, 胡春惠이 책임 편집한 『近代中韩关系史料汇编(1860-1945)』(총 12책)⁴⁷⁾은 청말부터 民國년간의 간행물 등 관계있는 자료들이 公私 문헌과 함께 수집되었고, 이 역시 연구에 많은 편리함을 제공하였다.

이와는 대조적으로 같은 시기 중국 대륙 학계의 관련 연구 성과는 상당히 적은 편이다. 吴忠亚의 「吴禄贞与所谓“间岛”问题」⁴⁸⁾는 “간도”는 사실 조선농민들이 越境하여 개간한 것에서 비롯된 것으로, 후에 일본의 조선통감 伊藤博文이 이 지역을 점령하려는 음모를 진행하자, 청조의 延吉边务督办 吴禄贞이 이를 저지하기 위해서, 일본인들로 하여금 청조와 <图们江中韩界务条款>을 체결하도록 하였다고 보았다. 王崇时는 「中朝以图们江为东段边界的历史回顾-驳日帝蓄意制造“间岛”谬说」⁴⁹⁾에서 일본 제국주의자들이 “간도문제”를 만들어낸 핵심은 图们江이 중국과 조선 양국 변계에 있는 자연

38) 中华学术院韩国研究所, 『中韩文化论集』第4集, 台北, 1978年.

39) 中央研究院近代史研究所专刊, 台北, 1970年.

40) 『新亚学报』, 香港, 第10卷第1期, 1971年.

41) 『韩国学报』 第11期, 台北, 1992年.

42) 『食货复刊』 第2卷 第5期, 台北, 1972年.

43) 『思与言』 第24卷 第3期, 台北, 1986年.

44) 林子侯, 『甲午战争前之中日韩关系』, 台北, 玉山书局, 1990年.

45) 『食货复刊』 第8卷 第6期, 台北, 1978年.

46) 中央研究院近代史研究所, 台北, 1972年.

47) 国史馆, 台北, 1987年.

48) 『社会科学战线』, 1984年 第4期.

49) 『社会科学战争』, 1991年 第3期, 长春.

히 경계가 되는 강이라는 것을 부인하기 위한 것이라고 하였다. 청조가 상당히 양보한 기초 위에서 일본과 <图们江中韩界务条款>을 체결한 것은 바로 “간도사건”의 마무리를 의미한다고 하였다. 그는 또 「会宁、庆源开市」⁵⁰⁾를 발표하여 양국간의 변경 무역에 대해서 서술하였다. 冯尔康은 「朝鲜大报坛述论-中朝关系和中国文化传播的一个侧面研究」⁵¹⁾에서 중국문화가 明清이 교체되는 특수한 시기에 전파되어 특별한 영향을 미쳤다는 점을 지적하였다. 曹中屏의 「李鸿章与朝鲜-评甲申政变前后的中朝关系」⁵²⁾, 陈尚胜의 「李鸿章与朝鲜对西方的缔约开放」⁵³⁾, 高伟浓의 「19世纪80年代中朝外交和贸易体制的演变」⁵⁴⁾ 등 세편의 논문은 모두 청말의 中朝관계를 다루고 있는 논문들이다. 曹中屏, 陈尚胜의 논문은 모두 李鴻章의 清·조선 관계를 둘러싼 계획과 그 성과의 전개를 다룬 논문들이며, 高伟浓의 논문 역시 李鴻章의 清과 조선 관계에서의 “变通旧制”와 <中朝商民水陆通商章程>체결을 분석하였다. 그 밖에, 陈伟芳의 『朝鲜问题与甲午战争』⁵⁵⁾, 杨昭全과 韩俊光의 『中朝关系简史』⁵⁶⁾이 있으며, 이 가운데 9장과 10장에서 별도로 清 前期와 清 后期的 朝鮮과의 관계를 서술하고 있다. 자료 편집 방법에서는 王其渠의 『清实录：邻国朝鲜篇资料』⁵⁷⁾이 중요한 자료이나, 아쉽게도 당시 비공개적으로 출판되었다. 그리고 王崇时 등의 『朝鲜文献中的中国东北史料』⁵⁸⁾ 가운데에는 적지 않은 清 조선 관계 사료가 수록되어 있다.

2. 최근 15년간 清朝 前期의 朝鮮 관계사 연구동향

1993년 이후, 중국 학계에서 이루어진 청조와 조선관계사 연구 방법으로는 바로 黄枝连의 「朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论」⁵⁹⁾, 刁书仁의 「明清

50) 『吉林师范学院学院』 1991年 第2期.

51) 『韩国学报』第10期, 台北, 1991年.

52) 『浙江学刊』, 杭州, 1988年 第4期.

53) 『山东大学学报』, 济南, 1990年 第2期.

54) 北京大学韩国学研究中心, 『朝鲜学论文集』第1辑, 北京大学出版社, 1992年.

55) 陈伟芳, 『朝鲜问题与甲午战争』, 北京, 三联书店, 1959年.

56) 杨昭全、韩俊光『中朝关系简史』, 沈阳, 辽宁民族出版社, 1992年.

57) 이 자료는 비공개적으로 출판되었으며, 단지 中国社会科学院 中国边疆史地研究中心에서 1987년에 刊印되었음.

58) 王崇时 等 编, 『朝鲜文献中的中国东北史料』, 长春, 吉林文史出版社, 1991年.

59) 黄枝连, 『朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论』, 北京, 中国人民大学出版社, 1995年.

中朝日关系史研究』(이 책에는 청과 조선관계사를 주제로 연구한 논문 7편이 수록되어 있음)⁶⁰, 刘为의 『清代中朝使者往来研究』⁶¹, 白新良의 『中朝关系史：明清时期』⁶² (이 책의 제7장에서 11장에는 각기 다른 시기 清朝와 朝鮮의 政治·经济·文化 교류 상황이 서술되어 있다.), 李花子의 『清朝与朝鲜关系史研究-以越境交涉为中心』⁶³, 廉松心の 『十八世纪中朝文化交流史研究』⁶⁴, 魏志江의 『中韩关系史研究』(해당 서적 하편에 清朝와 朝鮮关系(1619-1795)를 다루고 있음)⁶⁵, 赵兴元의 『清代中朝关系研究』⁶⁶, 姜龙范 등이 서술한 『清代中朝日关系史』⁶⁷, 宋慧娟의 『清代中朝宗藩关系嬗变研究』⁶⁸, 孙卫国的 『大明旗号与小中华意识-朝鲜尊周思明问题研究(1637-1800)』⁶⁹ 등의 저서들이 출판되었다. 또한 자료 정리 방법에서의 출판도 최근 전개되고 있다. 张存武와 叶泉宏이 펴낸 『清入关前与朝鲜往来国书汇编1619-1643』⁷⁰, 郑毅과 赵兴元 등이 선별하여 편찬한 『「同文汇考」中朝史料』(4책) 모두 淸과 朝鮮의 정치 관계와 관련한 중요한 자료를 연구한 것이다. 이 밖에, 수많은 관련 논문들이 발표되었는데, 청 전기에 조선과의 관계를 연구하는 연구자들의 주요 관심 주제는 다음과 같다.

첫째, 연구자들은 淸의 입관 전 조선 관계를 연구하는데에 많은 관심을 두고 있는데, 특히 皇太極 시기 청과 조선의 교섭과 전쟁에 관한 것이다. 徐凯는 「论“丁卯虏乱”与“丙子胡乱”-兼评皇太极两次用兵朝鲜的战略」⁷¹에서 이미 조선을 정복하여 후금의 남하에 대한 우려를 없애고자 한 전략적 목적이었으며, 압록강 입구에서 군사 방어선을 지키고 있고 있는 明朝를 공략하고 어려운 경제적 국면을 개선하기 위한 의도라고 보았다. 또, 刁书仁은 「论皇太极两次对朝鲜的战争」에서 청과 조선의 양측 실록에 의거하며 전쟁과 盟約의 과정을 사실적으로 고증하였다. 叶泉宏은 『沈馆幽囚记(1637-1645)：清鲜宗藩关系建立时的人质问题』⁷²에서 조선 측의 문헌 사료를 세밀하

60) 刁书仁, 『明清中朝日关系史研究』, 长春, 吉林文史出版社, 2001年.

61) 刘为, 『清代中朝使者往来研究』, 哈尔滨, 黑龙江教育出版社, 2002年.

62) 白新良, 『中朝关系史：明清时期』, 北京, 世界知识出版社, 2002年.

63) 李花子, 『清朝与朝鲜关系史研究-以越境交涉为中心』, 香港亚洲出版社, 2006年.

64) 廉松心, 『十八世纪中朝文化交流史研究』, 吉林文史出版社, 长春, 2006年.

65) 魏志江, 『中韩关系史研究』, 广州, 中山大学出版社, 2006年.

66) 赵兴元, 『清代中朝关系史研究』, 长春, 吉林文史出版社, 2006年.

67) 姜龙范 等, 『清代中朝日关系史』, 长春, 吉林文史出版社, 2006年.

68) 宋慧娟, 『清代中朝宗藩关系嬗变研究』, 长春, 吉林大学出版社, 2007年.

69) 孙卫国, 『大明旗号与小中华意识-朝鲜尊周思明问题研究(1637-1800)』, 北京, 商务印书馆, 2007年.

70) 张存武、叶泉宏, 『清入关前与朝鲜往来国书汇编(1619-1643)』, 台北, 国史馆, 2000年.

71) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第3辑, 北京, 1994年.

72) 『韩国学报』第6期, 台北, 1993年.

게 다루면서 皇太極이 조선 정복 전쟁 후에 조선 왕자를 인질로 삼은 문제를 고찰하고 있다. 全信子是 「“丙子胡乱”与朝鲜“还乡女”」⁷³⁾에서 皇太極의 제2차 조선 정복 전쟁이 조선 부녀를 포로로 잡아 약탈하기 위한 것이었다는 것에 중점을 두고 살피고 있으며, 전쟁 후에 속환 교섭과 납치당한 조선 부녀들이 조선 사회에 돌아온 후에 겪는 어려움을 고찰하고 있다. 徐凯는 「满洲八旗中高丽士大夫家族」⁷⁴⁾에서 滿文老档 등의 자료를 근거로 努尔哈赤와 皇太極 시기에 적지 않은 조선의 명망있는 가문들이 망명한 상황과 이들이 점차 满洲八旗에 융합되고 있는 모습을 고찰하였다. 黄枝连은 「朝鲜的儒化情境构造：朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论」⁷⁵⁾에서 일찍이 光海君의 “脱明亲虏”(后金)정책을 다루고 있다. 그런데 李善洪은 「从十七世纪朝鲜内外局势看光海君的“两端外交”」⁷⁶⁾에서, 光海君의 정책을 오히려 “两端外交政策”으로 다루고 있다. 또한 조선의 입장에서 당시 후금과 조선의 교섭에 관해 상세하게 다룬 논문으로는 王燕杰의 「朝鲜光海君时期对明朝和后金“两端外交”政策探析」⁷⁷⁾, 石少颖의 「仁祖时代朝鲜对后金(清)交涉史研究」⁷⁸⁾ 등의 학위 논문이 있으며, 상술한 두 편의 논문은 이러한 연구를 더욱 상세하고 심도 있게 하는데 기여하고 있다. 皇太極이 진행한 조선 전쟁과 이로 인한 조선의 反清적인 태도에 대한 논문으로는 李贤淑의 『从朝鲜对皇太極的丧礼的态度看清廷与朝鲜的关系』⁷⁹⁾이 있으며, 저자는 다른 연구자들이 깊이 관심을 기울이지 않았던 조선의 미묘한 태도 변화에 대해 지적하였다. 이 밖에, 관련 논문으로는 李善洪의 「后金朝鲜“丁卯之役”原因浅析」⁸⁰⁾, 李治亭의 「后金(清)与李氏朝鲜关系述略」⁸¹⁾, 陈捷先의 「清太祖时期满洲与朝鲜关系考」와 「略论天聪年间后金与朝鲜关系」⁸²⁾, 晁中辰의 「满清入关前与李氏朝鲜的关系」⁸³⁾, 刁书仁의 「论后金建立前与朝鲜的关系」⁸⁴⁾, 孙卫国的 「试论入关前清与朝鲜关系的演变历程」⁸⁵⁾, 魏志江의 「论萨尔浒之役后朝鲜与后

73) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第12辑, 北京, 2004年.

74) 陈尚胜 主编, 『第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集』, 济南, 山东大学出版社, 1999年.

75) 黄枝连, 『朝鲜的儒化情境构造:朝鲜王朝与满清王朝的关系形态论』, 北京, 中国人民大学出版社, 1995年.

76) 『松辽学刊』1996年第1期, 吉林.

77) 山东大学硕士学位论文, 济南, 2008年 6月.

78) 山东大学博士学位论文, 济南, 2008年 6月.

79) 『满族研究』第49辑, 沈阳, 1997年.

80) 『吉林师范学院学报』, 1995年第2期, 吉林.

81) 『中朝关系史研究论文集』, 长春, 吉林文史出版社, 1995年.

82) 『中朝关系史研究论文集』, 长春, 吉林文史出版社, 1995年.

83) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第4辑, 北京, 1995年.

84) 『社会科学战线』, 2004年第1期, 长春.

金的关系」⁸⁶)과 「清鮮“丁卯胡乱”与“丙子之役”考略」⁸⁷) 등의 논문이 있다.

둘째, 入關以後 청조의 조선 정책에 관한 연구이다. 우선, 黄枝连은 「朝鮮의 儒化 情境 构造: 朝鮮王朝与 滿清王朝의 关系 形态 论」⁸⁸)에서 清朝의 入關 후 조선에 대해 “字小以仁” 정책을 취했다고 보고 있다. 또한, 刘为는 「试论 摄政王 多尔袞의 朝鮮 政策」⁸⁹)에서 皇太極 사후 조선에 대해 취해진 왕자 인질 송환, 罪臣 석방, 歲功 감면, 女眞人의 刷還 정지 등 多尔袞의 중요한 정책에 대해 고찰하고 있으며, 이러한 정책이 조선 왕조 내부에 親淸派 세력을 키우는데 유리했다고 보고 있다. 王艳莉은 「论 康熙时期 清朝对 朝鮮 政策의 调整」⁹⁰)에서 康熙年間에 시행된 사신 왕래의 횡수 감면, 공물 면제, 罪責 寬免, 賑灾와 救济, 무인지대 설정 등의 시행을 통해, 일정 정도 對조선 정책이 개선되었다고 보고 있다. 刘雪은 『清鮮关系中的 岁币 研究』⁹¹)에서 청과 조선의 관계 가운데 歲幣 문제에 대해 살펴보고 있으며, 入關 후 계속해서 삭감된 歲幣가 조선과의 관계 개선을 위한 것이었음을 고찰하고 있다. 魏志江의 「论 清兵 入关 后 大清与 朝鮮의 关系」⁹²)과 한국의 全海宗의 『清代 韩中朝 贡关系 考』⁹³)에서는 경제 방면에서의 이익과 손실에 대해 다루고 있다. 孙卫国도 「试论 清朝对 朝鮮 王朝 宗藩 政策의 演变 及其 效果」⁹⁴)에서 入關 후, 청조의 對조선 정책의 변화가 조선 君臣의 마음을 얻기 위한 목적에서 추진된 것이었으며, 나아가 건륭 시기에 청조의 종번 관계를 살펴서 이것이 조선의 인정을 얻게 된 효과를 얻었다고 보고 있다.

세 번째, 朝鮮에 대한 처리와 청 조선 관계에 있어서 사상과 관념에 대한 연구이다. 우선, 于澎은 기존의 연구자들이 주로 중국문화의 전파에 중점을 두고 연구를 했던 것과는 달리, 「大报坛与 明清之际의 中朝 关系」⁹⁵)에서, 조선의 思明反淸 思想의 각

85) 『中国边疆史地研究』, 2006년 2기, 北京.

86) 浙江大学韩国研究所, 『韩国研究』 第6辑, 北京, 学苑出版社, 2002年.

87) 金健人 主编, 『韩国研究』 第七辑, 北京, 2004年.

88) 黄枝连, 『朝鮮의 儒化 情境 构造: 朝鮮王朝与 滿清王朝의 关系 形态 论』, 北京, 中国人民大学出版社, 1995年.

89) 『中国边疆史地研究』, 2005년 第3기, 北京.

90) 山东大学 2001年 硕士学位 论文(陈尚胜 主编, 『山东半岛与中韩交流』, 香港出版社, 2007年)

91) 山东大学 2006年 硕士学位 论文(陈尚胜 主编, 『山东半岛与中韩交流』, 香港出版社, 2007年)

92) 『江海学刊』 2002년 第6기, 南京.

93) 全海宗 『清代 韩中朝 贡关系 考』, 韩文 原文은 『震檀学报』 卷29·卷30 合集(1960)에 발표; 英文은 费正清 『中国的世界秩序』(哈佛大学出版社1968年)에 수록; 中文은 全海宗著, 全善姬译 『中韩关系史论集』中(中国社会科学出版社1997年)에 수록.

94) 香港大学中文系: 『东方文化』 第41卷 第1期, 2006年.

95) 陈尚胜 等, 『朝鮮王朝(1392-1910)对华观的演变』, 济南, 山东大学出版社, 1999년에 수록.

도에서 大报坛의 건립과 興衰를 논하고 있다. 樊延明은 『论“三藩之乱”时期朝鲜与清朝的关系』⁹⁶⁾에서 清朝의 “三藩之乱”시기, 조선이 청조의 정국을 주시하고 군대를 주둔시켜 방어책을 시행한 점을 고찰하고, 이와 함께 청조에 대해 갖는 조선의 상호 모순된 사상을 분석하였다. 또한, 陈尚胜은 『礼义观与现实冲突-李朝政府对清初漂流海商政策波动的研究』⁹⁷⁾에서 『朝鲜王朝实录』에 기재된 1644년부터 1681년 사이에(清初 “海禁”기간에 속함) 발생한 12건의 중국 海商 표류자가 조선 연안에 도착한 사건을 고찰·분석하였고, 이를 통해 조선 왕조가 비록 清朝에 대한 臣服이 강요되고 있었으나, 오히려 南明勢力的 표류하여 海商과 결탁하였으며, 종종 春秋義理의 정신으로 암암리에 南明과 서로 돕고 있었다고 보고 있다. 이후, 陈尚胜은 「论17-19世纪朝鲜王朝的清朝观演变」⁹⁸⁾에서 處理와 청조의 정치 관계 측면에서 조선 왕조가 처음에는 儒家的 華夷觀 학설 중의 攘夷論을 계속 유지하면서, 심리적으로나 행위 면에서도 清朝를 배척하고 있었다고 보고 있다. 그러나 이후 乾隆 盛世 시기에 이르러, 조선의 사신단 가운데 일부가 조선에서 “北学论”을 일으키기 시작했고, 심리적으로나 감정적으로나 청조를 받아들이기 시작했다고 보고 있다. 刁书仁은 「从“北伐论”到“北学论”-试论李氏王朝对清朝态度的转变」⁹⁹⁾에서 조선 왕조의 한 세기에 걸친 청조에 대한 심리적인 고통스러운 과정을 고찰했다. 또한, 이 주제와 관련한 상세한 연구가 孙卫国的 여러 논문과 저작에서도 진행되었다. 그는 일찍이 「略论朝鲜儒林之尊周思想-以华洞万东庙为中心」¹⁰⁰⁾, 「朝鲜大报坛创设之本末及其象征意义」¹⁰¹⁾, 「朝鲜王朝尊周攘夷及其对清关系」¹⁰²⁾, 「从正朔看朝鲜王朝尊明反清的正统意识」¹⁰³⁾, 「试论朝鲜王朝尊明贬清的理论基础」¹⁰⁴⁾ 등의 논문과 『大明旗号与小中华意识--朝鲜尊周思明问题研究(1637-1800)』¹⁰⁵⁾의 저서를 발표하였다. 그는 中文, 韓文 및 日文 자료와 문헌 등을 비교적 광범위하게 이용하여, 朝鮮人の 문화심리 각도에서 당시 청과 조선 사이의 정치 관계를

96) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第8辑, 北京, 1999年.

97) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第4辑, 北京, 1995年.

98) 『韩国学报』第16期, 台北, 1999年. 이 논문의 관점은 陈尚胜 等 『朝鲜王朝(1392-1910)对华观的演变』에 (济南, 山东大学出版社, 1999年)에 내제됨.

99) 『中国边疆史地研究』2006年第4期, 北京.

100) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第9辑, 北京, 2001年.

101) 『中国文化研究学报』新第11期, 香港, 2002年.

102) 『韩国学报』第17期, 台北, 2002年.

103) 『汉学研究』22卷1期, 台北, 2004年.

104) 『史学月刊』, 2004年第6期, 开封.

105) 孙卫国, 『大明旗号与小中华意识-鲜尊周思明问题研究(1637-1800)』, 北京, 商务印书馆, 2007年.

고찰·분석하였으며, 청과 조선의 종번 관계의 내재된 특징을 제시하였다. 말할 것도 없이, 이는 현재까지 이루어진 청과 조선 관계사 부분에서 가장 성공적인 연구이다. 이 밖에도 이 주제를 다룬 논문으로는 王元周的「华夷观与朝鲜后期的小中华意识」¹⁰⁶⁾, 晁中辰의「明清鼎革之际朝鲜的义理之争」¹⁰⁷⁾ 등이 있다.

넷째, 『燕行录』 및 淸 前期와 朝鮮 사이의 문화교류에 관한 연구이다. 중국 학자들은 조선 사절들이 기록한 『燕行录』에 관심을 기울이기 시작하였는데, 그 시작은 张存武였고, 『推展朝国的华行录研究』¹⁰⁸⁾를 발표하였다. 또한 대륙 학자인 王锦民은 『辽海丛书』의 제 1집 수록된 柳得恭의 『溟阳录』과 『燕台再游录』을 근거로 삼아 「柳得恭与清朝士人的交游」¹⁰⁹⁾를 발표하였다. 또한, 詹杭伦이 「李调元与韩国诗人交往叙论」¹¹⁰⁾을 발표하였고, 여기에서도 여전히 청과 조선 양국의 사대부 사이의 交誼와 文藝 交流를 중시하고 있다. 王政尧은 「『燕行录』初探」¹¹¹⁾와 「略论『燕行录』与清代戏剧文化」¹¹²⁾에서 청조 문화사의 새로운 자료를 연구하여 淸史의 또 다른 부분을 발굴하기 시작하였다. 그 후, 黄时鉴은 「朝鲜“燕行录”所记的北京天主教堂」¹¹³⁾과 「纪昀与西学」¹¹⁴⁾에서 다시 “燕行录”을 이용하여 東西文化交流를 연구하였다. 또한, 王政尧도 재차 『燕行录』을 이용하여 「18世纪朝鲜“利用厚生”学说与清代中国」¹¹⁵⁾을 발표하였고, 조선의 북학파가 청조의 영향을 받아들이는 부분에 대해 연구하기 시작하였다. 그리고 “燕行录”을 통해 청과 조선 관계를 연구하는 것은 陈尚胜의 『朝鲜王朝(1392-1910)对华观的演变』¹¹⁶⁾에서 시작되었다. 이 연구는 台北의 珪庭出版社에서 1978년에 출판된 『朝天录』과 한국의 성균관대학 대동문화연구원에서 1960-1962년에 출판된 『燕行录选集』을 근거로 삼고 있으며, 이는 조선 왕조에서 파견한 사절의 활동 및 明清社會를 관찰하는 밑거름이 되었고, 또한 조선 왕조의 明清 兩朝에 대한 사상 관념의 변화를 분석한 것이다. 『燕行录』에 근거한 淸朝와 朝鮮의 文化交

106) 北京大学韩国学研究中心：『韩国学论文集』第12辑，北京，2004年.

107) 浙江大学韩国研究所：『韩国传统·历史卷』，北京，学苑出版社，2000年.

108) 『韩国史学论丛(水屯朴永锡教授花甲纪念)』，首尔，探求堂，1992年.

109) 北京大学韩国学研究中心，『韩国学论文集』第二辑，北京，1993年.

110) 『四川师范大学学报』1994年增刊，成都.

111) 『清史研究』1997年 第3期，北京.

112) 『中国社会科学院研究生院学报』，1997年第3期，北京.

113) 黄时鉴，「东西交流史论稿」，上海古籍出版社，1998年.

114) 『文史』第46辑，北京，1998年.

115) 『清史研究』1999年 第3期，北京.

116) 陈尚胜 等，『朝鲜王朝(1392-1910)对华观的演变』，济南，山东大学出版社，1999年.

流는 비교적 체계적으로 연구되고 있으며, 廉松心の 박사학위논문인 『十八世纪中朝文化交流研究』¹¹⁷⁾과 杨雨蕾의 박사학위논문인 『十六至十九世纪初中韩文化交流研究-朝鲜赴京使臣为中心』¹¹⁸⁾이 연구 성과에 속한다. 廉松心の 논문은 주로 18세기를 집중적으로 다루고 있으며, 당시 中·朝의 문화 교류의 배경, 물질 문화 교류, 서적 교류, 서학교류, 문인 학자의 교류, 문화 교류와 조선 북학파의 형성 등을 연구하고 있다. 그는 또한 조선 사신 가운데 朴趾源의 『热河日记』와 清朝 사신인 阿克敦의 『奉使图』를 별도의 章에서 다루고 있으며, 이로써 청조에서 파견한 조선 사신 방문기록에 대한 연구 공백을 보충하고 있다. 그런데 만일 이처럼 양국의 사절방문단이 남긴 글로써 상대방 국가의 문자 기록물에 대한 연구가 가능하다면, 바로 양국 사절단이 타국에서 관찰한 사물에 대해 나타나는 다른 경향도 밝혀질 수 있을 것이다. 杨雨蕾은 학위 논문 가운데 조선의 燕行使團의 구성과 임무, 조선 사신과 중국 사신의 중국 문인의 필담 교류, 청조에서 조선 사신의 书肆, 访书, 购书의 상황, 조선 사신이 북경에서 접하고 주로 입수한 조선의 서학 서적과 지식, 조선의 清朝에 대한 관념의 변화와 북학파의 흥기 등에 관한 문제를 하나씩 깊이 다루고 있으며, 이로써 중국 학계의 『燕行录』연구가 더욱 심도 있게 행해지게 되었다. 左江의 「『燕行录全集』考订」¹¹⁹⁾은 『燕行录』의 작자, 작자의 生沒연도, 사행시기 등에 대해서 세밀하게 고찰하여 오류를 바로잡고 보완하는 작업을 한 것으로 상당히 애쓴 논문이다.

이 밖에 『燕行录』을 연구한 논저로는 黄时鑑의 「纪昀与朝鲜学人」¹²⁰⁾, 祁庆富과 权纯姬의 「『日下题襟合集』概说」¹²¹⁾, 祁庆富의 「中韩文化交流的历史见证-关于新发现的『铁桥全集』」¹²²⁾, 谢正光的 「乾隆末年学风与朝政：读徐浩修『燕行记』」¹²³⁾, 施晓燕의 「从『热河日记』管窥中朝士大夫交往中的思想状况」¹²⁴⁾, 金柄珉의 「朝鲜诗人朴齐家与清代文坛」¹²⁵⁾, 陈东辉의 「阮元与朝鲜学人交往考略」¹²⁶⁾등이 있다.

117) 廉松心, 『十八世纪中朝文化交流研究』, 中央民族大学博士学位论文, 北京. 이 학위논문은 이미 출판되었음(吉林文史出版社出版, 长春, 2006年)

118) 杨雨蕾, 『十六至十九世纪初中韩文化交流研究-以朝鲜赴京使臣为中心』, 复旦大学 2005年博士学位论文, 上海.

119) 张伯伟 编, 『域外汉籍研究集刊』, 第四辑, 北京, 中华书局, 2008年.

120) 浙江大学, 『韩国传统·历史卷』, 北京, 学苑出版社, 2000年.

121) 陈尚胜 主编, 『第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集』, 济南, 山东大学出版社, 1999年.

122) 『浙江大学学报』 2001年第1期, 杭州.

123) 『九州学林』 创刊号, 香港, 2003年.

124) 复旦大学韩国研究中心, 『韩国研究论丛』, 第12辑, 北京, 2006年.

125) 金柄珉 主编, 『朝鲜-韩国的历史传统与人文精神』, 延边大学出版社, 2004年.

126) 金健人 主编, 『中国江南与韩国文化交流』, 北京, 学苑出版社, 2005年.

다섯 번째, 清代 前期의 中朝 兩國의 邊境事務에 관한 연구이다. 특히 康熙 11년 (1712년) 穆克登의 巡邊과 백두산 정계비 事件이 주요한 관심 가운데 하나이다. 일찍이, 張存武는 「清代中韓邊務問題探源」¹²⁷⁾에서 穆克登이 長白山 天池 남쪽의 십여 지역에 정계비를 세웠다고 보고 있으며, 이러한 비석은 바로 청과 조선의 정계비였으나, 穆克登이 정한 경계는 청조의 막대한 영역 상실을 가져왔다고 보고 있다. 이후, 楊昭全과 孫玉梅의 『中朝邊界史』¹²⁸⁾에서도 張存武와 동일한 관점으로 접근하였으며, 아울러 康熙帝가 조선과의 변계 조사에서 중대한 책임이 없다고 하였다. 그런데 徐德源의 「長白山東南地區石堆土堆築設的真相」¹²⁹⁾, 「穆克登碑的性質及其齒立地點與位址述考」¹³⁰⁾, 刁書仁의 「康熙年間穆克登查邊定界考辨」¹³¹⁾ 등의 3편의 논문에서는 穆克登은 지시를 받아 변방을 조사한 것이지, 그것이 청과 朝鮮 양측이 변계를 조사한 외교적 사건을 아니며, 穆克登의 碑는 旨를 받들어 변계를 조사한 기념비이지 청과 조선 양측의 정계비는 아니라고 보았다. 따라서 穆克登의 巡視碑는 처음에는 小白山 정상에 있었으나, 후에 사람들에 의해 長白山 東南쪽으로 옮겨졌다고 보고 있다. 李花子는 『清朝與朝鮮關係史研究-以越境交涉爲中心』¹³²⁾에서 당대 학자들이 주장한 정계비 移動說이 사료상 그 증거가 여전히 부족하다고 보고 있다. 하지만 이 연구의 중점은 兩國人의 越境問題와 그 交涉에 있다. 저자의 고찰에 따르면, 조선인의 越境은 처음 探參에서 시작되어 潛商으로, 그리고 墾荒에 이르게 되었다고 보고 있다. 또한, 清朝의 朝鮮人 越境의 交涉에 대한 태도도 入關 前에는 朝鮮에 대해서 강압적이었으나 康熙 中期에 이르러 兩國 官員이 공동으로 會審을 할 정도로 변화했다고 보고 있다. 李花子가 최근에 발표한 논문인 「穆克登錯定圖們江源及朝鮮移柵位置考」¹³³⁾은 朝鮮 差使員의 진술과 지방관의 보고를 근거로 穆克登이 圖們江의 水源을 잘못 정해서 松花江의 지류를 향하는 물줄기를 정했다고 보았다. 그런데 조선 측이 圖們江의 물줄기가 끊어지는 곳에 표시를 세웠을 때, 穆克登이 잘못 알았던 水源까지 堆柵을 연결하였고 아울러 圖們江 상류의 紅土山의 물줄기에까지 木柵을 연결하였다고 하였다. 이 밖에, 관련 논문으로는 陶勉의 「清代封祭長白山與踏查長白山」¹³⁴⁾, 姜龍范의 「清代中朝兩國

127) 『中央研究院近代史研究所集刊』第2期, 台北, 1971年.

128) 楊昭全、孫玉梅, 『中朝邊界史』, 長春, 吉林文史出版社, 1993年.

129) 『中國邊疆史地研究』1996年2期, 北京.

130) 『中國邊疆史地研究』1997年第1期, 北京.

131) 『中國邊疆史地研究』2003年第3期, 北京.

132) 李花子, 『清朝與朝鮮關係史研究-以越境交涉爲中心』, 香港亞洲出版社, 2006年.

133) 復旦大學韓國研究中心, 『韓國研究論叢』, 第18輯, 北京, 2008年.

边界问题的理论思考」¹³⁵⁾, 「历史的留影：清代中朝两国的边疆政策」¹³⁶⁾, 郭庆涛의 「试论 17世纪中叶至18世纪清朝与朝鲜的会源边市贸易」¹³⁷⁾ 등이 있다.

3. 清末과 朝鮮 關係史에 대한 최근 15년간의 연구동향

최근 15년간 중국학계에서는 청말과 朝鮮 關係史에 대한 많은 연구들이 전문서적으로 출판되었는데, 주요한 것으로는 徐万民의 『中韩关系史(近代卷)』¹³⁸⁾, 王明星의 『韩国近代外交与中国(1861-1910)』¹³⁹⁾, 王如绘의 『近代中日关系和朝鲜问题』¹⁴⁰⁾, 权赫秀의 『19世纪末韩中关系史研究-以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心-』¹⁴¹⁾과 『近代韩中关系史的再照明』¹⁴²⁾, 杨昭全·孙玉梅의 『朝鲜华侨史』¹⁴³⁾과 『中朝边界史』¹⁴⁴⁾, 姜龙范의 『近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究』¹⁴⁵⁾이 있다. 자료를 출판한 것들도 있는데, 中国第一历史档案馆에서 편찬한 『清代中朝关系档案史料汇编』¹⁴⁶⁾과 『清代中朝关系档案史料续编』¹⁴⁷⁾이 있다. 전자에는 淸朝의 光緒연간(1875-1908) 軍機處의 錄副奏折 417건이 수록되어 있고, 후자에는 乾隆 元年부터 同治(1736-1874) 및 宣統시기(1909-1911)까지의 軍機處의 錄副奏折 396건이 수록되어 있다. 刘为·魏显洲 등이 정리한 『吉林省档案馆藏清代中朝关系史料选编』¹⁴⁸⁾에는 同治 10년(1871)부터 宣統 3년(1911)까지의 淸과 朝鮮관계에 관련된 檔案 149건이 수록되어 있다. 权赫秀가 정리하여 출판한 『近代中韩关系史料选编』¹⁴⁹⁾에는 근대 中·朝관계의 조약문서 17건과

134) 『中国边疆史地研究』, 1996年第3期, 北京.

135) 『延边大学学报』 1997年 第3期, 延边.

136) 『延边大学学报』 1997年 第4期, 延边.

137) 北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』 第6辑, 北京, 1997年.

138) 徐万民, 『中韩关系史(近代卷)』, 北京: 社会科学文献出版社, 1996.

139) 王明星, 『韩国近代外交与中国 1861-1910』, 北京: 中国社会科学出版社, 1998.

140) 王如绘, 『近代中日关系与朝鲜问题』, 北京: 人民出版社, 1999.

141) 权赫秀, 『19世纪末韩中关系史研究 -以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心-』, 서울: 白山资料院, 2000.

142) 权赫秀, 『近代韩中关系史的再照明』, 서울: 慧眼图书出版公司, 2007.

143) 杨昭全·孙玉梅, 『朝鲜华侨史』, 北京: 中国华侨出版公司, 1991.

144) 杨昭全·孙玉梅, 『中朝边界史』, 长春: 吉林文史出版社, 1993. 두 책 모두 대부분 근대와 현대를 다루고 있다.

145) 姜龙范, 『近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究』, 牡丹江: 黑龙江民族出版社, 2000.

146) 中国第一历史档案馆编, 『清代中朝关系档案史料汇编』, 北京: 国际文化关系出版社, 1996.

147) 中国第一历史档案馆编, 『清代中朝关系档案史料续编』, 北京: 中国档案出版社, 1998.

148) 刘为·魏显洲 主编, 『吉林省档案馆藏清代中朝关系史料选编』, 长春: 吉林人民出版社, 2000.

공문서 140건이 수록되어 있다. 杨昭全·孙玉梅 主编의 『中朝边界沿革及界务交涉史料汇编』은 역사 문헌과 역사档案 두 부분으로 나뉘져 있는데, 그 대부분의 사료는 모두 清代 사료, 특히 清末의 사료이다. 그리고 이 기간에 발표된 수많은 논문들을 보면, 연구자들이 清末과 朝鮮의 關係史 研究에 대한 관심이 주로 近代 중국과 조선의 정치관계의 변화에 집중되어 있음을 알 수 있다.

近代 中·朝 정치관계의 변화는 언제부터 시작되었는가? 중국 사학계에 이 문제를 가지고 토론한 특별한 논문은 없으나, 전문서적의 대부분이 1870년대를 다루고 있다. 王明星의 『韩国近代外交与中国(1861-1910)』에서는 1874년을 清朝가 朝鮮政策을 전환한 기점으로 보고 있다.¹⁵⁰⁾ 权赫秀는 『关于近代中朝关系史(1876-1910)的几点认识』¹⁵¹⁾에서 1876년을 近代 中·朝關係史의 시작으로 보고 있다. 그리고 宋慧娟의 『清代中朝宗藩关系嬗变研究』는 1870년대를 中朝 宗藩관계의 ‘變通’시기로 규정하고 있다.¹⁵²⁾ 그런데, 张礼恒의 「评甲午战争前清政府的对朝政策」¹⁵³⁾에서는 그 변화가 1880년대에 시작된 것으로 보고 있다. 그의 견해는, 1644년부터 1882년까지 청조의 조선 정책은 바로 조공체제의 전통을 고수한 것이었고, 조선의 內政과 외교에 대해서는 기본적으로 간섭하지 않는 정책을 취하였다. 그런데 1882년부터 1894년 사이에는 서양 열강과 일본의 강력한 공세 하에서 청조는 변강의 안정과 上國의 존엄을 지키기 위해서 조선의 내정과 외교에 대해서 간섭하는 정책을 취하였다는 것이다.

清末 조선과의 정치관계의 발전과정에 있어서, 청조의 외교를 이끌었던 李鴻章이 바로 핵심적인 인물이다. 이홍장과 조선의 관계에 대한 연구를 보면, 가장 중요한 論著로 权赫秀의 『19世纪末韩中关系史研究-以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心-』¹⁵⁴⁾을 들 수 있다. 이 책은 이홍장이 조선에서 江華島事件이 발생한 후에 中日 양국 모두 조선을 “藩屬”으로 인식하게 된 현실을 직면하였다는 점을 고찰하고 있다. 당시 서양 각국 또한 끊임없이 조선에 접근하자, 이홍장은 이를 통해서 조선에 대한 위기의식을 갖게 되었고 조선에게 문화개방을 권유하게 되었다. 壬午軍亂과 甲申政變 후에, 이홍

149) 权赫秀 编, 『近代中韩关系史料选编』, 北京: 世界知识出版社, 2008.

150) 王明星, 『韩国近代外交与中国 1861-1910』, 北京: 中国社会科学出版社, 1998, pp.75~80.

151) 权赫秀, 「关于近代中朝关系史(1876-1910)的几点认识」, 『中国朝鲜史研究』 제1집, 香港社会科学出版社, 2004.

152) 宋慧娟, 「第5章 中朝宗藩关系的“变通”」, 『清代中朝宗藩关系嬗变研究』, 长春: 吉林大学出版社, 2007, pp.151~221.

153) 张礼恒, 「评甲午战争前清政府的对朝政策」, 『安徽史学』, 1993年 2期.

154) 权赫秀, 『19世纪末韩中关系史研究 -以李鸿章的朝鲜认识与政策为中心-』, 서울: 白山资料院, 2000.

장은 조선정치에 대해 이중적인 생각을 갖게 되었다는 점과 조선에 대한 간섭정책의 확립과 갑오전쟁을 전후로 한 조선 문제에 대한 인식 등을 다루고 있다. 내용은 매우 상세하지만, 이 책은 한국에서 한국어로 출판되었기 때문에, 중국학자들이 접근하기에는 어려운 점이 있다. 矣威의 「甲申事变与李鸿章、伊藤关于朝鲜的交涉」¹⁵⁵⁾은 조선에서 甲申政變이 일어났을 때, 李鸿章과 伊藤博文이 교섭을 통해 조선으로 인한 양국의 분쟁의 실마리를 결국 “中日天津條約”으로 해결한 것에 대해 고찰하고 있다. 국내 간행물에서도 이와 관련 있는 논문이 있다. 建胜의 「甲午前中国的对朝政策-兼论李鸿章与“以夷制夷”政策-」¹⁵⁶⁾, 尹小红的 「李鸿章与朝鲜问题」¹⁵⁷⁾, 张君法·李健의 「李鸿章对朝鲜的国际均衡政策(1879-1882)」¹⁵⁸⁾, 谢世诚의 「李鸿章与朝鲜」¹⁵⁹⁾ 등이 있다. 张君法과 李健의 글을 보면, 이홍장은 일본과 서양 국가의 결탁을 방지하기 위해서 이 나라들에 대한 조선의 정책을 주도했다고 한다. 이 때 이홍장은 중국의 전통적인 “以夷制夷” 사상에 근거해서 서양국가와 일본이 조선에서 세력균형을 이루도록 정책을 제정했다. 그리고 谢世诚은 이홍장이 淸과 朝鮮이 전통적인 宗藩관계를 지속한다는 전제 하에, 조선에게 열강의 침략을 막을 도움을 주고 역사의 조류에 따라 대외개방을 진행하도록 조선정부를 독촉했다고 생각하고 있다. 그리고 중국이 청일전쟁에 휘말려든 원인이 청 조정이 조선에서의 권익을 지키려 했던 점에 있다고 보고 있다. 그러나 위의 관점은 여전히 전통적인 의견을 되풀이한 것으로 새로운 견해는 아니다.

淸末 청 조정의 조선에 대한 정책이 변하는 과정에 있어, 첫 번째로 駐日使館(주일영사관) 參贊 黄遵宪이 쓴 『朝鮮策略』이 청 조정에 중요한 영향력을 미쳤다. 이 때문에 연구자들은 黄遵宪의 『朝鮮策略』에 대한 연구 또한 매우 중시한다. 다음은 이것과 관련 있는 논문이다. 杨天石的 「黄遵宪的「朝鮮策略」及其风波」¹⁶⁰⁾, 李德征의 「论「朝鮮策略」与近代朝鲜的对外开放」¹⁶¹⁾, 李里峰·王庆德的 「何如璋与新朝鲜政策的实施」¹⁶²⁾, 宋慧娟의 「何如璋驻日期间的朝鲜策略简析」¹⁶³⁾ 등이 있다. 이 논문들은 모두 기본적인

155) 矣威, 「甲申事变与李鸿章、伊藤关于朝鲜的交涉」, 『韩山师范学院学报』, 2001年 1期.

156) 建胜, 「甲午前中国的对朝政策 -兼论李鸿章与“以夷制夷”政策-」, 『青岛大学师范学院学报』, 2000年 4期.

157) 尹小红, 「李鸿章与朝鲜问题」, 『宿州师专学报』, 2001年 4期.

158) 张君法·李健, 「李鸿章对朝鲜的国际均衡政策(1879-1882)」, 『延安大学学报』, 2006年 1期.

159) 谢世诚, 「李鸿章与朝鲜」, 『江苏社会科学』, 2006年 6期.

160) 杨天石, 「黄遵宪的「朝鮮策略」及其风波」, 『近代史研究』, 1994年 3期.

161) 李德征, 「论「朝鮮策略」与近代朝鲜的对外开放」, 『韩国学论文集』 제4집, 北京 : 北京大学韩国学研究中心, 1995年.

162) 李里峰·王庆德, 「何如璋与新朝鲜政策的实施」, 『徐州师范大学学报』, 2001年 4期.

로 何如璋이 청 정부가 新조선정책을 형성하고 실시하는 과정에서 중요한 역할을 했다는 것을 인정하고 있다. 杨天石의 글은 『朝鮮策略』이 만들어진 후, 일본으로 갔던 修信使 金弘集이 조선으로 가지고 돌아와서 朝鮮 君臣에게 강력한 영향을 미쳤다는 것을 거듭 명시하고 있다. 李德征의 글은 『朝鮮策略』의 기본적인 주장과 원칙을 구체적으로 분석하고 있다. 李里峰·王庆德의 논문은 하여장의 조선에 대한 외교사상과 실행이 “朝美通商條約”의 조인을 이끌어냈고, 그리하여 조선이나 동아시아의 에 이르기까지 상당한 영향력을 미쳤다고 파악하였다. 그러나 하여장의 외교사상과 청 정부의 新조선정책이 전통과 현대의 간극을 잇는 過渡性이란 특징을 가지고 있었다. 宋慧娟의 글에서는 전형적인 시기의 외교관으로서, 하여장이 近代 국제관계에 대한 인식과 연구가 깊이 있지 못해서 그의 조선정책에 모순과 착오가 있을 수 밖에 없다고 하였다. 梁英華의 「试论黄遵宪、曾经泽、袁世凯在19世纪80年代对朝鲜的外交策略」¹⁶⁴⁾은 당시 清朝의 외교사무가 黄遵宪 한 사람에서부터 당시 청과 조선과의 외교사무를 담당했던 많은 人士들로까지 확대되는데, 상당히 새로운 시도라고 할 수 있다. 그녀의 고찰과 비교에 따르면, 黄遵宪·曾经泽·袁世凯, 세 사람은 조선에 대한 戰略과 청과 조선의 중변관계를 유지해야 한다는 점에서는 인식을 같이 하고 있는데, 세 사람 모두 러시아를 막는 것을 조선에 대한 외교정책의 요점으로 여겨서 일본이란 요소를 가볍게 취급했다고 하였다. 이들 세 사람의 다른 점은 黄遵宪이 유럽을 막기 위해 아시아가 연합해야 한다는 입장에서 조선을 일본에 연합시킬 것을 주장했다는 것이다. 나아가 황준현은 러시아의 조선을 침략하려는 의도는 명백하고, 조선은 러시아를 막기 위해서 반드시 일본과 연합할 것이라고 여겼는데, 袁世凯의 『朝鮮大局論』은 근본적으로 일본을 시야에 넣고 있지 않았다.

19세기말 淸과 朝鮮의 정치관계의 발전방향에 대해서, 당시 조선 측은 어떻게 생각했을까? 权赫秀의 「19世纪末韩国开华势力之韩中关系构想研究」¹⁶⁵⁾은 중국학자의 이 문제에 대한 연구의 공백을 보충하고 있다. 이 글은 당시 조선의 급진개화파의 대표 인물인 金玉均, 朴泳孝, 俞吉浚과 온건개화파의 대표인물인 金允植, 鱼允中, 金弘集 등을 조선과 청조 관계에 대한 여러 가지 구상을 나누어서 고찰하였다. 그들 모두는 전통적인 중변관계 체제로부터 근대 조약체제로 변해야 한다고 생각하고 있었으나,

163) 宋慧娟, 「何如璋驻日期间的朝鮮策略簡析」, 『長春師範學院學報』, 2005年 5期.

164) 梁英華, 「试论黄遵宪、曾经泽、袁世凯在19世纪80年代对朝鲜的外交策略」, 『韓國學論文集』 제10집, 北京: 北京大學韓國學研究中心, 2002年.

165) 权赫秀, 「19世纪末韩国开华势力之韩中关系构想研究」, 『韓國研究』제8집, 沈陽: 遼寧民族出版社, 2007年.

清朝를 대하는 입장에 있어 배척과 친근감이라는 태도의 차이를 보였다는 것이다. 조선왕조가 처리하는 과정과 서양국가의 실제적인 관계에 있어서, 조선 측은 청조를 上國으로 여겼는가 아니면 自主外交를 펼쳤는가? 王元崇의 「清末朝鮮領選使研究」¹⁶⁶⁾는 1882년 사절단을 이끌고 중국에 온 조선의 吏曹參議 金允植을 통해서, 조선이 개방 초기에 청조의 외교적인 지도와 인재를 배양하는 기술을 받아들였다는 것을 구체적으로 고찰하였는데, 이전 연구의 공백을 보충하는 역작이다. 蔡晓燕은 「“朴定陽事件”与中朝宗藩关系的变化」¹⁶⁷⁾에서 조선의 朴定陽이 미국에 외교사절로 가는 과정에 있어 清朝의 조선에 대한 통제를 벗어나기 위해 노력한 것을 고찰했다. 최근 陈红民도 「晚清外交的另一种困境：以1887年朝鮮遣使事件为中心的研究」¹⁶⁸⁾에서 조선이 歐美 국가에 사절을 파견하는 과정에서 自主外交를 펼치기로 결심했다고 서술하고 있다. 즉, 청조는 자신들의 통제 밖의 상황에 대해서, 조선사절에게 반드시 도착하면 중국 영사관에 보고를 할 것과 연회에 참가할 때는 중국사절을 뒤따를 것, 그리고 외교교섭시에 먼저 중국사절과 협의할 것 등 세 가지를 요구했는데, 박정양은 미국에 외교사절로 가는 과정에서 이것을 행하지 않았으며, 조선정부는 청조의 강경한 요구에 대해 설명을 미뤄서, 청조의 조선에 대한 외교정책은 실패했다고 하였다. 청조가 조선이 서방에 개방하는 과정에 있어 중번관계를 강화하려고 했다는 것에 대해, 高强도 「清政府强化中朝宗藩关系原因探析」¹⁶⁹⁾에서 청 정부가 조선과의 중번관계를 강화하려고 힘썼다고 하고 있다. 그 원인은 조선이 전략적으로 중요한 지위를 가지고 있어서 중국의 안전이나 이익과 연관되어 있기 때문이었다. 그는 「甲午战前清韩宗藩关系的强化及其后果」¹⁷⁰⁾에서 청조가 일본과 中·朝의 중번관계의 존폐문제를 둘러싸고 외교적으로 갈등을 빚는 가운데, 中朝 宗藩관계가 국제적으로 합법성을 가질 수 있도록 적극적으로 조선과 서방국가의 외교관계 수립을 이끌면서, 中·朝사이의 宗藩관계가 조약체제 안에 포함되기를 기대했다고 한다. 그러나 이와 같은 근대 불평등조약의 방식을 모방한 “立约保藩”을 실행하였는데, 마침내는 표면상의 불평등이 내재된 실질적인 불평등으로 변하여, 조선의 자주적인 반발과 일본의 군사적 행동을 야기하였다. 그리고 清朝는 甲午戰爭에서의 패배에 따라, 中·朝 사이의 중번관계를 완전히 버릴 수

166) 王元崇, 「清末朝鮮領選使研究」, 北京大学硕士研究生学位论文, 2006年.

167) 蔡晓燕, 「“朴定陽事件”与中朝宗藩关系的变化」, 『钦州高等师范专科学校学报』, 2003年 1期.

168) 陈红民, 「晚清外交的另一种困境：以1887年朝鮮遣使事件为中心的研究」, 『历史研究』, 2008年 2期.

169) 高强, 「清政府强化中朝宗藩关系原因探析」, 『锦州师范学院学报』, 2001年 4期.

170) 高强, 「甲午战前清韩宗藩关系的强化及其后果」, 『烟台大学学报』, 2005年 3期.

밖에 없게 되었다.

清末 청조와 朝鮮의 정치관계의 변화를 연구할 때, 袁世凱 또한 빠뜨릴 수 없는 핵심적인 인물이다. 李劲军의 「袁世凱与中朝交涉」¹⁷¹⁾은 청과 조선의 정치관계에 있어 원세개가 한 역할을 매우 깊이 있게 연구한 논문이다. 이 글은 원세개의 조선에서의 활동을 3단계로 구분하고 있다. 제1단계는 1882년 8월부터 1885년 1월까지로, 원세개는 이 시기에 조선에 들어와서 조선정책에 간섭함에 있어 처음으로 재능과 능력을 발휘했다. 제2단계는 1885년 10월부터 1889년 초까지로, 그는 清朝의 駐朝鮮總理交涉通商事宜大臣이 되어 청조의 조선에 대한 종주권을 전면적으로 강화하기 시작했다. 제3단계는 1890년 초부터 1894년 7월 19일까지로, 이 시기 동안 원세개는 조선에서 일본을 전력을 다해 저지했으나, 결국 좌절해야만 했다. 이후, 李德征와 李劲军는 「1882-1884年袁世凱对朝交涉中的得失与影响」¹⁷²⁾에서 원세개의 조선에서의 제1단계 활동에 대해 깊은 연구를 진행했다. 沈渭滨의 「朝鮮“壬午兵变”与中韩关系述论」(上、下)는 연구자들에게 원세개가 조선에 들어온 전후로 청과 조선의 정치관계의 배경이 어떠한지 비교적 상세하게 서술하고 있다. 또한 이 논문은 壬午(1882년)군란 발생 때, 청조가 군란을 평정한 것은, 청과 조선의 정치관계에 있어 하나의 전환점이 되었다고 피력하고 있다. 高强은 「袁世凱甲午战争前夕行为及其后果探析」¹⁷³⁾에서 청 정부가 駐朝鮮總理交涉通商事宜大臣인 원세개에게 조선으로 출병하라고 종용했을 때, 원세개는 여력이 남아 있지 않다면서 경솔하게 행동했는데, 이것은 일본에게 조선과 중국을 침략할 매우 좋은 구실이 되었다고 서술하고 있다. 원세개는 위급한 시기에 귀국하기 위해 수단을 가리지 않았는데, 그의 과장된 행동은 중국의 駐朝鮮公職에 있는 이들의 마음을 불안하게 하고, 조선의 華僑와 華商을 어려움에 처하도록 하였다. 杨涛의 「袁世凱在朝鮮的外交活动述评」¹⁷⁴⁾은 원세개가 조선에서 “壬午兵變”과 “甲申政變”을 차례로 평정함으로써, 영국·미국·러시아·일본 등과 같은 국가의 조선 침략을 어느 정도 억제하는 역할을 했다고 한다. 이것은 또한 원세개의 공명에 대한 욕망을 급격하게 팽창시켰으며, 외교활동에서 자신감과 교만함을 가지게 했다. 이에 따라 그는 중韓관계를 강경하게 유지시키고, 더 나아가 朝鮮 내부에서 일어난 전면적인

171) 이 논문은 山东大学 2003년 석사학위논문으로 陈尚胜 主編의 『山东半岛与中韩交流』(香港出版社, 2007年)에도 수록되어 있다.

172) 李德征·李劲军, 「1882-1884年袁世凱对朝交涉中的得失与影响」, 『韩国学论文集』 제12집, 北京 : 北京大学韩国学研究中心, 2004年.

173) 高强, 「袁世凱甲午战争前夕行为及其后果探析」, 『商丘师范学院学报』, 2003年 4期.

174) 杨涛, 「袁世凱在朝鮮的外交活动述评」, 『新乡高等师范学校学报』, 2007年 4期.

개혁에 대한 지지를 무시했으며, 국제정세에 전면적이고 변화를 요구하는 태도로 응대하지 못해서 마침내 원세개가 조선에서의 외교활동에서 실패할 수 밖에 없었다는 것이다. 이외에 원세개와 관련 있는 논문으로 纪能文의 「关于袁世凯在朝鲜活动的历史考察」¹⁷⁵⁾ 등이 있다.

陈树棠, 马相伯 등도 近代 淸과 조선사이의 전형적인 정치관계에 있어 중요한 인물들이다. 이에 관해서는 权赫秀의 「陈树棠在朝鲜的商务领事活动与近代中朝关系(1883年10月-1885年10月)」¹⁷⁶⁾에서 심도 깊은 연구가 진행되었다. 陈树棠은 1883년 10월, 驻朝鲜担任总办朝鲜各口交涉商务委员으로 파견되었다가, 1885년 10월에 이르러 조선에 대한 간섭정책을 강화하려는 청 정부에 의해 마침내 소환당해서, 원세개가 그를 대신하게 되었다. 그 동안 陈树棠은 조선과 通航과 租界章程과 관련 있는 세 가지 조항을 조인하고 이에 따라 근대 中朝 經濟貿易관계의 발전을 촉진시켰다. 또한 그는 청 정부를 대표해서 중국과 조선간의 외교 사무를 책임지고 처리했으며, 朝鮮의 高宗이 근대적인 外交 事務를 처리하는 것을 도왔고, 실제로 陈树棠이 近代 中國으로부터 최초로 조선에 파견된 고급 商务领事官이었다. 权赫秀는 「马相伯在朝鲜的顾问活动(1882年11月-1884年4月)」¹⁷⁷⁾에서 1882년 11월, 명을 받들어 조선에 온 马相伯(또는 马建常)의 활동을 고찰했다. 그는 朝鮮의 高宗으로부터 파격적으로 正二品 議政府贊議兼统理交涉通商事务衙门协办으로 위임받아서, 근대 조선으로부터 관직을 수여받은 최고의 외국 고문이 되었다. 그는 초기 근대화 개혁에 대해 일련의 건의를 제출했으며, 근대 외교와 통상 제도 및 기구를 만드는데 참여함으로써 대외교섭 사무를 처리하는 것을 도왔다. 그는 청 정부의 조선에 대한 정책의 多重性, 矛盾性과 조선 정부의 보수적인 입장 등 내적·외적 요소의 방해에 의해서 1884년 4월, 고문을 그만두고 淸으로 귀국할 수밖에 없게 되었다. 이외에 权赫秀는 「韩国藏张树声、丁汝昌、吴兆有致朝鲜王朝官员书信三件笺证」¹⁷⁸⁾을 발표했다. 叶渡과 魏三纲 또한 「新发现「吴长庆、闵泳翊等笔谈卷」」¹⁷⁹⁾을 발표했는데, 여기서 이용된 새로운 사료는 모두 淸末 청과 朝鮮 관계에 있어서 진귀한 사료이다.

175) 纪能文, 「关于袁世凯在朝鲜活动的历史考察」, 『安阳师范学院学报』, 2001年 1期.

176) 이 글은 『社会科学研究』 2006年 1期에 실린 논문으로, 陈尚胜主编의 『登州港与中韩交流国际学术讨论会论文集』(济南: 山东大学出版社, 2005年)에도 실렸다.

177) 权赫秀, 「马相伯在朝鲜的顾问活动(1882年11月-1884年4月)」, 『近代史研究』 2003年 3期.

178) 权赫秀, 「韩国藏张树声、丁汝昌、吴兆有致朝鲜王朝官员书信三件笺证」, 『安徽史学』 2003年 5期.

179) 叶渡·魏三纲, 「新发现「吴长庆、闵泳翊等笔谈卷」」, 『韩国学论文集』 제3집, 北京: 北京大学韩国学研究中心, 1994年.

1897년 11월 8일, 朝鮮은 “大韓帝國”으로 이름을 바꿨으며, 1898년 7월, 청 정부는 大韓帝國에 영사관을 건립하기로 결정하였고, 이것으로 近代 中韓 정치관계의 새로운 장을 열었다. 李德征은 「论清政府设立驻韩使馆的原因及特点」¹⁸⁰⁾에서 清朝가 駐韓 영사관을 건립한 배경과 초임 駐韓 大使로 徐寿朋이 선택된 원인을 구체적으로 탐구하고 徐寿朋의 한국에서의 활동을 고찰했다. 大韓帝國 건립 후의 清朝와의 平等 外交關係에 대해 상세히 연구한 것으로는 蔡建의 박사학위논문인 「大韩帝国与中国的外交关系 1897-1910」¹⁸¹⁾이 있다. 이 논문은 兩國 영사관 제도의 건립을 구체적으로 고찰했을 뿐만 아니라, 中國의 駐韓 商务总董制度和 領事館 制度的 건립 및 이 시기 兩國간에 분쟁을 일으키는 단서가 되었던 국경을 둘러싸고 조약을 체결하는 과정을 포괄하고 있다.

근대 중국과 조선사이의 경계 설정 문제에 대한 연구는 주로 中·朝戡界와 조약체결 문제에 집중되어 있다. 杨昭全과 孙玉梅의 『中朝边界史』¹⁸²⁾는 8장부터 11장까지 “乙酉(1885年)勘界”와 조선인이 불법으로 월경한 것과 청과 조선의 邊界교섭, 中日간의 <图们江中韩界务条款>(한국에서는 일반적으로 <间岛条约>이라고 함)과 “间岛案”의 교섭을 章을 달리하여 고찰하였고, 12장에서는 외국학자들의 관련된 논문을 실어 토론을 진행하였는데 체계적이고 구체적인 전문서적이라 할 수 있다. 姜龙范의 「关于清季中朝边界交涉的研究」¹⁸³⁾은 청과 조선이 두 차례에 걸쳐 勘界회담을 하였지만 최종적으로는 변계를 설정하는 협이나 경계비를 세우는 데에는 도달할 수 없었고, 월경하여 개간하고 있던 조선인의 법률적 지위가 양국간 외교 분쟁의 초점이 되었지만, 양국 간의 정치관계 때문에 그 폐해를 덮어버렸다고 하였다. 그의 『近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究』¹⁸⁴⁾는 “간도”라는 단어가 월경한 조선 개간자에서 나온 것으로 본래 光霽峪 앞의 图们江 중의 “假江”을 가리켰는데, 사람들이 그것을 “垦土”나 “垦岛”로 칭하면서 음이 “间岛”가 되었다고 하였다. 러일전쟁 후 일본인 守田利远이 “间岛”의 지리적 범위를 海兰河 남쪽에서 图们江北쪽지역까지 확대하였다고 하였다. 蔡建은 「中朝边界争执与<图们江中韩界务条款>」¹⁸⁵⁾에서 주로 1990년대 이후 한국학

180) 李德征, 「论清政府设立驻韩使馆的原因及特点」, 『第三届韩国传统文化国际学术讨论会论文集』, 济南: 山东大学出版社, 1999年.

181) 蔡建, 「大韩帝国与中国的外交关系 1897-1910」, 复旦大学博士学位论文, 2004年.

182) 杨昭全、孙玉梅, 『中朝边界史』, 长春, 吉林文史出版社, 1993年

183) 『延边大学学报』, 1998年 第1期, 吉林 延边.

184) 姜龙范, 『近代中朝日三国对间岛朝鲜人的政策研究』, 牡丹江, 黑龙江民族出版社, 2000年

185) 复旦大学韩国研究中心, 『韩国研究论丛』, 第11辑, 北京, 中国社会科学出版社, 2004年

계가 1909년 중국과 일본이 체결한 <圖們江中韓界務條款>을 무효조약이라고 주장하는 것에 대해서, 조약체결 후 대한제국의 내각총리 李完用이 윤택하여 공포하였고, 이것은 대한제국정부가 그 조약을 승인하였다는 것을 의미한다고 하였다. “間島”를 지칭하는 延吉지역의 역사적 기원에 대해서도 계속해서 청조가 관할한 영토였다는 점을 지적하였다. 이외에 陈慧도 「清代中朝圖們江界務研究」¹⁸⁶⁾이란 제목으로 박사학위논문을 제출했다.

4. 감상과 전망

이상에서 살펴본 것처럼 朝淸관계사의 대한 최근 15년간의 중국학계의 연구는 논문의 수량뿐 아니라 학술문제에 관한 논술에도 이전 40년간의 연구 성과의 수준을 월등히 뛰어넘고 있다. 이것은 중국학계가 한중관계를 중시하며 특히 한중관계사 연구에 관심을 가지고 있음을 말해 준다.

과거를 돌아보는 일은 앞으로 계속적인 발전에 큰 도움이 될 것이다. 앞으로도 朝淸관계사 연구를 계속 발전시키기 위해서는 비교적 연구가 진행되지 않았던 다음과 같은 문제들에 대한 관심을 가지고 연구를 진척시켜야 할 것이다. 첫째, 朝淸 정치관계에 대한 연구는 시기가 淸初와 淸末에 집중되어 있고 이로 인해 청 중기 조선과의 정치관계에 대한 연구가 상대적으로 빈약하였다. 둘째, 청말과 朝鮮의 정치관계가 변화하는 시기에 대한 연구가 몇몇 핵심인물을 중심으로 추진되는 것이 많았던 반면 체제 변용과 개혁측면에서의 구체적인 고찰은 부족하였다. 셋째, 淸과 朝鮮의 문화교류에 대한 연구 또한 시기적으로는 淸 전기가 많았고 그 내용에서도 청전기 인물의 왕래에 관한 연구에 편중되었다는 점이다. 또한 淸 후기 조선과의 문화교류에 대한 연구도 부족한 실정이다. 최근 이와 관련된 논문으로는 吳士英의 「中朝友誼的記錄-朝使李承五〈燕槎日記〉之我見-」¹⁸⁷⁾, 蔡少卿·王慶德의 「金澤榮在華的韓國文化拯救活動述評」¹⁸⁸⁾, 陳東輝의 「俞樾與中日韓文化交流」¹⁸⁹⁾ 등이 있을 뿐이다. 넷째, 淸과

186) 陈慧, 「清代中朝圖們江界務研究」, 延邊大學博士學位論文, 2007年.

187) 吳士英, 「中朝友誼的記錄 -朝使李承五〈燕槎日記〉之我見-」, 『第三屆韓國傳統文化國際學術討論會論文集』, 濟南: 山東大學出版社, 1999年.

188) 蔡少卿·王慶德, 「金澤榮在華的韓國文化拯救活動述評」, 『第三屆韓國傳統文化國際學術討論會論文集』, 濟南: 山東大學出版社, 1999年.

189) 陳東輝, 「俞樾與中日韓文化交流」, 『韓國研究』 제8집, 沈陽: 浙江大學韓國研究所, 2007年.

朝鮮 사이의 무역과 경제교류에 대한 연구를 보면, 대부분 朝貢貿易과 압록강과 두만강 사이의 변경무역에 관심을 가지고 연구를 진행하였으나 1882년, “中朝商民水陸貿易章程” 체결 후 해상무역 및 양국 상인이 入境무역에 대한 연구는 빈약하다. 또한 중국과 조선의 경제교류 활동과 지역 사회발전 문제를 결부시켜 하는 연구의 시도도 거의 없었다. 이와 같은 연구 기반이 부족하였던 점과 관련하여 清代 朝鮮에 건너간 華僑에 대한 연구, 특히 산동상인이 해상무역을 통해 조선에 들어가 거주하게 되는 역사과정에 대한 연구 또한 매우 빈약하다.¹⁹⁰⁾ 다섯 째, 邊界문제에 대한 연구가 관심 받고 있으나, 관심에 비해 성과가 적다. 특히 宗藩체제에서 양국을 둘러싼 변경사무 교섭과 협의문제에 대한 연구가 부족하다.

清鮮關係史에 대한 연구를 보강 및 확장하기 위해서는 계속해서 清鮮관계 자료를 수집하고 정리해서 출판해야 할 것이다. 특히 양국의 “실록”이외의 檔案 자료의 정리 및 출판이 필요하다. 동시에 한국학계 및 제3국 학계, 특히 일본학계와의 교류와 대화를 강화시켜 가는 것 또한 매우 강화가 필요한 부분이다. 국내외에서 진행되는 연구 성과를 충분히 이해할 때에 비로소 연구의 중복을 피할 수 있고, 더욱 효과적으로 문제를 제출하며 해결해 나갈 수 있을 것이다.

190) 晁中辰, 「旅韩华侨华人历史分期初探」(载于北京大学韩国学研究中心, 『韩国学论文集』第8辑, 北京, 1999年), 이 글은 단지 대강의 旅韩华侨史의 틀을 보여주고 있다.

동아시아 삼국의 조공제도 연구 비교

정혜중(이화여대 사학전공)

1. 문제제기 : 淸史工程과 朝貢體制

최근 한국과 중국에서 韓中關係史에 대한 연구가 한창이다. 그 배경으로는 1992년 韓中修交 이래 증가된 교류를 遠因으로 하면서 첫째, 1990년대 후반 이후 중국에서는 역사성을 긍정하고 재창조하려는 문명사적 전환을 추구하는 경향이 두드러고 이른바 문화보수주의가 주류 담론으로 등장한 상황¹⁾이 촉진제(近因) 역할을 하였다고 볼 수 있다. 둘째, 역사연구 방법론에서도 타자 인식의 중요성이 제기되면서 “연행록”이라는 방대한 여행 기록 2)에 주목하기 시작하였는데 이러한 사행록 자료들은 양국관계 내지 한중일 사회의 상호인식의 제고할 수 있는 중요 사료로 이해되고 양국 관계사 연구의 발전에 한 몫을 하였다.

특히 위에서 지적한 첫 번째의 배경에는 중국이 개혁개방 이후 中華에 대한 자신감 회복을 바탕으로 진행하고 있는 역사성의 긍정, 그리고 그 현상 형태의 하나로 새롭게 시도되는 각종 역사공정 및 그와 연관된 연구가 단순히 학문으로서의 역사의 차원을 넘어, 회복하고 있는 ‘중화’에 걸 맞는 역사의 재구성 추구하고 밀접한 관련이 있다는 지적³⁾을 상기하지 않을 수 없다. 역사 관련 프로젝트의 규모나 중국에서 생각하는 역사 평가의 중요성을 고려해 볼 때 國家淸史纂修工程은 東北工程보다 중요한 의미를 갖는다. 때문에 한국의 중국사학계에서는 한국 언론이나 그간의 연구에서 東北工程만이 초미의 관심으로 주목되고 있었던 상황에서 벗어나 최근에는 청대사 연구자들을 중심으로 중국의 각종 공정을 보다 면밀히 검토하고자 하는 시도⁴⁾도

1) 전인갑, 「현대 중국의 지식구조의 변동과 ‘역사공정」, 『역사비평』 82호, 2008. 238쪽.

2) 林基中 編, 『燕行錄全集 1-100』, 東國大學校出版部, 2001. 그 외 연행록관련 논문은 한중양국에 일일이 열거할 수 없을 정도로 많다.

3) 전인갑 위의 글.

4) 정혜중, 「중국정부의 『청사』편찬과 한국 청대사연구의 과제, 『이화사학연구』 33집, 2006 : 전인갑, 「현대중국의 ‘지식구조’ 변동과 ‘역사공정」, 『동북공정 이후, 우리학계의 과제 - 2007년 동양학 연구소 학술 토론회 논문집』, 단국대 동양학연구소, 2007 ; 허혜윤, 「청사공정의 배경과 현황-

계속되고 있다.

중국에서는 21세기에 들어오면서 중국은 방대한 청사를 다시 쓰고자 하는 움직임이 대규모로 본격 계획, 진행되면서 전 세계 청사연구자들의 관심을 집중시킨 바 있다. 지난 2000년 말 人民大學 청사연구소 戴逸가 처음으로 “청사재편찬”에 관한 의견을 피력한 바 있다. 2001년 3월에 개최된 전국인민대표대회와 정치협상회의의 제 4회의 석상에서 人民大學 名譽教授 李文海 및 北京大學의 教授 王曉秋의 청사편찬에 대한 제안이 보도를 타면서 이에 대한 광범한 주의를 끌게 되었고 나아가 戴逸과 李文海가 계속하여 청사공정에 대한 의견과 구상을 보다 선명하게 밝히었다.⁵⁾ 이러한 주장이 받아들여져 2002년 3월 29일 淸史纂修籌備工作領導小組가 문화부에 설치되어 편찬작업이 실질적인 단계에 들어갔고, 그해 8월 江澤民, 朱鎔基, 胡錦濤, 李嵐清 4인의 정치국상무위원회의의 비준을 거쳐 결정되었다. 이에 국무원 주도하에 國家淸史編纂領導小組가 구성되고, 2002년 12월, 25명의 청대사, 근대사연구자로 구성된 國家淸史編纂委員會가 정식으로 성립되었다. 人民大學의 戴逸가 주임직으로, 중국사회과학원 馬大正, 北京大學 교수 朱誠如, 人民大學 교수 成崇德가 부주임으로 청사공정을 이끌고 있다. 이른바 “國家淸史纂修工程”으로 불리는 이 사업은 중국 정부가 10년을 계획으로 방대한 자금을 투자하여 민국시대에 편찬된 『淸史稿』를 대신하는 새로운 청사 편찬을 목적으로 하는 사업이다.⁶⁾

한국의 학자들에게는 과거 『청사고』에서 이전의 정사와는 다른 “속국전”의 규정이 어떻게 처리될 것인지 관심을 끌고 있다. 주지하듯이 1916년부터 10여 년에 걸쳐 편찬된 『淸史稿』에는 朝鮮과 관련한 역사가 1619년부터(光海君 11년)부터 1895년(高宗 32年)까지가 卷531의 「屬國列傳」에서 처리되고 있다. 司馬遷의 『史記』 이래 중국 正史에는 ‘列傳’에 주변 민족이나 국가를 서술하였는데, 유독 『청사고』에서만 屬國列傳이라고 속국이라는 표현을 쓰고 있다. 『史記』에서부터 대부분의 정사에서 주변에 대한 서술은 중국과 직접적인 관련이란 측면에서 다루어져 있어 중국 황제가 직접 지배하지 않는 지역의 주민이 황제와 어떤 관계에 있는가를 서술하는 것이 기본적인

국가청사편찬위원회 관계자들을 만나다, 『역사비평』 82호, 2008; 정혜중·김형중·유장근편, 『중국의 청사공정연구』, 동북아역사재단, 2008.

5) 이들은 21세기에 들어 개혁개방이 이미 20년이 지나 국가의 모습은 일신하여, 정치의 안정, 경제의 발전, 사회의 진보, 종합적인 국력증대가 더해져 연구의 신용도 커지고, 학술성과도 풍부하게 되었다는 점을 들어 청사의 편찬이 가장 좋은 시기임을 주장하였다. 또 현재 청조가 붕괴한지 이미 90년이 지났기 때문에 청사를 편수해야 하는 적기이며 정부, 학계, 사회가 모두 이 사업에 관심을 가지고 거대 문화사업을 조속히 시작하여 순조롭게 진행시키기를 희망한다고 밝히었다.

6) 정혜중, 『중국의 청사공정연구』, 2008, 9-11쪽.

목표였다.

『宋史』·『遼史』·『金史』·『元史』·『明史』에는 모두 「外國列傳」에 「高麗傳」·「朝鮮傳」으로 내용을 기록하는 방식을 선택해왔던 사실을 상기한다면 「屬國列傳」이라는 형식으로 서술하는 방안을 선택한 것은 『淸史稿』만의 독특한 산물이고 의도적인 변경으로 볼 수 있다. 이것은 전통시대와는 달리 근대에 들어 帝國主義列強의 침략이라는 외부 도전에 대해 조선을 통해 훨씬 높은 강도로 자신의 통제를 받는 ‘屬國’으로 만들고자 하는 중국의 근대의 갈등이 노정된 것이라고 할 수 있다. 『淸史稿』에서의 이러한 「屬國」개념과 규정은 民國時代에서 오늘날까지도 이어지면서 중국인의 ‘韓國觀’에서 가장 기본적인 바탕을 이루고 있다. ‘한국’을 언급하면 바로 옛날 중국의 ‘속국’이었던 나라라는 이미지를 떠올리게 되는 상황은 피할 수 없다. 그러나 전통적인 朝貢體制는 근대의 식민지 종주국과 식민지의 관계와는 분명히 다른 차원에서 이해되어야 한다. 하지만 그러한 차이가 무시되고 곧바로 속국=식민지라는 인식이 淸朝와 朝鮮의 관계를 보는 시각에 쉽게 반영되어 버리는 것이 현실이기도 하다. 또한 조공관계 내에서의 중국과 한반도의 제 왕조와의 관계가 시대에 따라, 상황에 따라 얼마든지 다양한 양상을 보이는 실제 모습도 무시되는 경우가 많다.⁷⁾

『淸史稿』에서 외국관련 서술 부분은 列傳 중의 屬國傳과 志 중의 邦交志이다. 屬國傳에는 조선, 월남, 유구, 미얀마 등이 포함되고 邦交志에는 일본을 비롯하여 구미 각국과의 관계를 서술하였는데 새로 편찬되는 청사에서는 屬國傳의 국가들을 모두 邦交志에 포함시키면서 邦交志를 상하로 나누어 상권에는 청사고 속국전에 포함되었던 조선, 유구, 월남 등을, 하권에는 청사고 방교지에 포함되었던 일본과 구미 각국을 포함시킬 예정이라고 한다. 그렇지만 방교지 상권 앞부분에 조공체제편을 삽입하여 상권의 국가들이 조공체제 내에 속했던 국가들의 상정을 기획중이라고 한다.⁸⁾

그 내용을 간단하게 살펴보면 첫째, 조공제도의 흥쇠에서는 입관전과 아편전쟁 이전과 이후를 구분하여 전체 개괄을 하고 있으며, 둘째, 외국조공조건으로 조공통로와 기한, 규모와 조공물품 및 조공表文, 셋째, 주관기구에서는 예부, 會同四譯館, 이번원, 기타 중앙기구와 지방기구가 다루어 지고 넷째, 조공예의에서는 외국사절의 조공예의와 파견사절의 책봉예의가 다섯째, 조공대우에서는 賞賜, 會同館무역, 국경무역에 대

7) 김형중, 「중화인민공화국에서의 청사편수·신청사·편찬토론에 나타난 중국학계의 반응분석」, 『중국의 청사공정연구』 2008, 97-107쪽 “『청사고』 「속국전」의 처리 문제를 둘러싼 시각”을 참고.

8) 정혜중·유장근 등외, 『중화인민공화국의 “청사편수”에 관한 연구』, 2007년도 동북아역사재단 연구지원과제연구결과보고서. 2007년.

한 내용이 연구될 것이라고 한다.

결국 중국에서는 지금까지의 조공관계의 틀에서 한중관계를 파악하고자 하면서 조공관련 문서형식의 규정, 예에 의한 통제라는 조공제도의 기본적인 틀을 만들어 가고 있다고 보인다. 이렇게 형태를 달리하지만 여전히 명청대의 조공개념 속에 세계, 동아시아를 파악하고 있는 기본 시각을 읽을 수 있다. 때문에 청사고에서의 조선과의 관계와 나아가 한중관계사, 중국의 대외관계(혹은 국제관계)를 이해하기 위해서는 조공제도에 대한 이해가 필수임은 두 말할 필요가 없다. 청사공정과 관련하여 시기를 한정시켜 본다면, 청대 조공제도의 기본 개념을 살펴보기 위해서 이전시기와 비교하여 청대 조공관계의 기본틀은 무엇이고, 그 전개는 어떻게 진행되는지에 대한 이해가 선행되어야 한다. 이에 대한 기본적인 이해를 위해 각 국의 연구를 각각 살펴보는 것은 무의미하고 각국 연구의 비교 분석을 통해 공통점과 차이점을 도출하여 함께 연구해야 할 필요성을 느낀다.

이에 본 발표에서는 2000년 전후하여 거듭 논의되고 있는 조공제도에 대한 일반 연구를 비교·고찰하고, 이를 통해 청대 한중관계의 기본 이념과 관계에 대한 분석을 시도해 보고자 한다. 최근 조공제도에 대한 연구 소개 및 신경향 비판은 한국 뿐 아니라 일본과 중국에서도 새롭게 제기되어 논의되고 있다. 과연 각국은 최근 어떻게 조공제도를 논의하고 있는가에 초점을 두어 비교해 보고자 한다. 먼저 한국에서의 논의를 중심으로 살펴보면서 중국과 일본의 논의 경향과 비교해 보자.

2. 한국의 조공제도 대한 최근 연구경향

한국에서는 2004년 중국에서의 ‘동북공정’으로 대표되는 학계활동에 대해 한국에서도 민족사의 정체성을 확보하고자 하는 시도가 이어졌고, 역사연구전문기관으로 고구려연구재단이 출범하였다. 이후 전근대의 동북아 관계사나 근대 민족문제에 이르기 까지 북방사 연구 범주가 설립되면서 고구려사 연구와 더불어 한중관계사에 대한 폭넓은 연구가 시작되었다.⁹⁾ 초기 고구려연구재단에서 제시하였던 연구의 범주에서 몇 가지 중요한 연구과제가 설정되었는데 그중의 하나가 한중관계와 관련하여 조공제도

⁹⁾ 이로 인한 연구 성과는 일일이 열거 할 수 없을 정도로 많지만, 조공, 책봉관계와 관련해서만 언급하고자 한다. 신체식 편, 『한중외교관계와 조공책봉』, 고구려연구재단 연구총서 8, 2005가 대표적인 연구 성과이다.

에 대한 연구였다. 이를 계기로 한국학계에서도 각 시대별로 조공체제에 대한 연구가 “공동연구”의 형태로 시작되었다.

당시 비교적 활발하게 진행되었던 조공체제에 대한 공동연구자들은 조공책봉관계가 비단 고구려와의 관계뿐만 아니라 전근대 전시기를 통한 한국과 중국의 외교시스템이었던 만큼 이를 정확히 분석, 검토하여 그 실질적 정체성을 부각시킬 필요성에서 연구가 시작되었음을 강조하였다. 이를 위해 전근대 한국과 중국의 외교사를 몇 시기로 나누어 살펴보고 있는데, 즉 중국의 선진시대부터 19세기말 전통적인 조공책봉관계가 붕괴되는 시기까지에 대해 고대 동아시아 책봉조공체제의 원형과 변용, 고려와 송의 외교관계, 고려와 요금의 외교관계, 명청교체와 한중관계, 조공질서의 붕괴와 淸·朝(大韓帝國)관계의 변화, 1895-1910 등이 그것이다.

그런데 이 연구에서는 연구자들 스스로도 지적하고 있는 것처럼, 조공제도라고 할 때 양국의 왕조의 변화에 따라 다양한 관계가 보이는데 연구자 수의 제한과 정해진 연구시간 제약 등으로 각 시기별로 충분한 검토가 이루어 지지 못한 부분도 있으나, 해당 시기별로 그 동안의 연구들을 종합·정리하였다는 측면에서 나름대로 의미를 지닐 것이다.

비슷한 맥락의 연구가 다음해인 2006년에 『한국 고대국가와 중국왕조의 조공·책봉관계』라는 주제로 연구되어 책으로 출판되었다.¹⁰⁾ 이 책은 제목대로 고구려와 중국의 각 왕조 즉, 前燕과 後燕, 北魏, 隋唐의 조공책봉관계¹¹⁾, 그리고 발해, 신라와 당의 관계 등을 한국고대 시기의 각 왕조와 중국왕조와의 관계를 살피고 있다. 전근대 동아시아 여러 나라들은 조공, 책봉 관계라는 형태로 다양한 외교관계를 맺어 왔는데 책봉국인 중국왕조 중심의 국제질서를 강조하거나 조공하는 주변국의 주체적 입장을 중시하는 등 특정 측면에 치우쳐 이해하는 경향이 강했다고 전제하고 있다. 그러면서 조공, 책봉관계가 책봉국의 중심적 위상과 더불어 조공국의 독자성을 인정하는 가운데 성립하였으므로 어느 한쪽의 입장만을 강조해서는 안 되며, 동아시아 국제질서와 각국의 내부 상황을 유기적으로 연관시켜 고찰할 필요가 있다고 주장하고 있다.

특히 조공, 책봉관계의 성격은 각 시기별로 변화했다고 하면서 국제정세의 변동에

10) 여호규 편, 『한국고대국가와 중국왕조의 조공·책봉체제』, 고구려연구재단 연구총서 15, 2006.

11) 여호규의 「高句麗와 慕容燕의 朝貢·冊封關係 研究」, 노대돈의 「高句麗와 北魏간의 朝貢·冊封關係에 대한 研究」, 박한제의 「朝貢秩序 및 羈縻體制와 관련하여-」, 송기호의 「對外關係에서 본 渤海政權의 속성」, 羅唐交涉史에서의 朝貢과 冊封」의 연구가 그것이다.

따라 조공, 책봉관계라는 외교 형식에 담기는 국제질서의 성격, 그리고 이를 통해 실현하려던 각국의 외교정책이 끊임없이 바뀌었음에 주목하였다. 또한 근대 동아시아 조공, 책봉관계는 근대 국제관계와는 그 성격이 근본적으로 다르다는 사실에 유의해야 하는데 조공, 책봉관계에서는 책봉국의 중심적인 위상을 인정하는 상하위계질서가 설정되어 있지만, 피책봉국의 자주권을 인정했다는 점에서 근대 국제법의 주종관계와는 명확히 구별되어야 함도 주장하고 있다. 예를 들면 동일한 용어라 하더라도 전혀 다른 의미로 사용될 수 있다고 한다. 가령 조공, 책봉관계에서 ‘屬國’은 자주권을 지닌 피책봉국을 지칭하지만, 근대 국제관계에서는 ‘屬國’은 주권을 상실한 보호국이나 부용국을 의미한다고 지적하고 있다. 특히 전근대 조공·책봉 관계의 본질을 규명하기 위해서는 조공책봉관계와 관련하여 일반적으로 조공, 책봉의 내용이 각 시기마다 다르므로 시기별로 보다 천착된 연구가 필요하다는 결론을 제시하고 있다.

이처럼 한국의 각각의 공동연구에서의 연구핵심은 중국과의 조공, 책봉관계가 시대에 따라 매우 상이한 양상들을 제시하면서 조공, 책봉이라는 일반적인 개념을 하나로 그대로 적용시키는 것에 대한 비판이 주요 특징이라고 할 수 있다. 그러한 문제의식은 비단 위에서 지적한 공동연구의 경우에만 한정된 것은 아니다. 예를 들면 박성주는 「고려말 러명간 조공책봉체제의 전개와 그 성격」에서 고려의 창왕, 공양왕 때에 명측은 끝내 고려왕조가 망할 때까지 여전히 책봉권을 행사하지 않아 이 시기는 고려의 일방적인 조공만 이루어졌음을 강조하고 있다. 즉, 공민왕 17년부터 공양왕 4년까지 24년간의 고려와 명의 관계를, 양국의 교섭 과정과 조공책봉관계의 성립, 그리고 그 이후의 전개과정과 양상을 중심으로 검토하여 고려말 24년간 여명관계의 양상에서 전형적인 조공책봉기가 3년 3개월에 불과한데 이 시기는 다른 시기에 비해 명측이 고압적이고, 강압적인 측면이 많았음을 강조하고 있다. 따라서 고려 말의 여명관계는 전형적인 조공책봉관계라기 보다는 고려의 일방적인 조공형태였다¹²⁾고 결론짓고 있다.

또 송대의 대외관계에 대한 고찰에서 김성규는 「송대 조공질서의 재편과 그 양상」¹³⁾에서 송대 조공질서에 대한 문제제기를 하고 있다. 기존에는 북송과 남송을 구별하여 송대에 조공무역이 쇠퇴하고 사무역이 발달하였다는 논리를 반박하면서 남송에서는 조공이라는 국가 간의 행위는 거의 의미를 갖지 못하고 사무역만 발전한 반면, 북송에서는 1100건 이상의 조공건수가 대변하는 것처럼 조공 또는 조공무역이 왕성

¹²⁾ 박성주, 「고려말 러명간 조공책봉체제의 전개와 그 성격」, 『경주사학』 23집, 2004.

¹³⁾ 김성규는 「송대 조공질서의 재편과 그 양상」, 『역사학보』 185, 2005.

하게 전개되고 있어서 사무역에 의한 쇠퇴가 북송을 상대로 설명하기는 적절하지 않다고 주장한다. 북송대에서 사무역이 성장한 것이 사실이므로 엄밀하게 말하면 이 시대에는 조공과 사무역이 양존하는 것으로 볼 수 있지만, 적어도 사무역에 의해 조공이 위축되었고 까지 말하기는 어렵다는 것이다.

이렇게 다양한 사례연구로 중국의 조선(고려)의 조공책봉관계를 밝히려는 시도가 최근 한국학계의 주요한 특징임을 알 수 있다. 그러면 청사공정과 관련한 명청대의 조선과 중국과의 관계사 연구는 어떠한 경향을 가지고 있는지 살펴보자. 이 시기 관계사 내지는 상호인식에 대한 공동연구로 기획된 것이 박원호 등의 『15-19세기 중국인의 조선인식』¹⁴⁾이다. “명청과 조선”이라고 “인식”이라는 키워드로 시대를 살피고 있는 이 공동연구에서는 동아시아의 역사전쟁이 바로 역사에 대한 인식의 문제에 기인한다고 전제하면서 인식은 바로 국제관계의 성격을 규정하는 포괄적인 주제라고 설명한다. 보다 세밀한 연구가 필요한 17세기를 제외한 500년간의 전개, 변화하는 중국인의 조선인식이 양국관계의 특징과 무관하지 않다고 보며 각 시대의 중국인들의 기록으로 조선관을 살펴보고 있다. 그런데 이러한 인식의 내용과도 관련하여 박원호는 최근 조공제도에 대한 견해를 피력한 바 있다.¹⁵⁾ 이 글에서의 비판의 초점은 한국에서 일찍이 조공책봉관계를 정리한 전해중의 견해이다.

“한중관계라고 할 때에 대체로 국가 대 국가 또는 그 집단들을 호칭하지만, 특히 문화적 관계를 염두에 둘 때에는 국가 대 국가의 관계보다 주로 민족 대 민족의 관계를 뜻하게 된다. 더욱이 중국의 경우에 북방 여러 민족보다 漢民族을 가리키는 것이 보통이다.” 라고 서술한 바 있는 전해중의 연구에서는 한중관계를 국가관계 또는 민족관계라고 보고, 이를 “전형적인 조공관계”, “준조공관계”, “비조공계”로 나누고 다음과 같은 시기구분을 주목하고 있다. 첫째, 초기조공관계의 성립을 삼국시대 후반기의 관계(A.D. 317-668) 둘째, 조공관계의 발전기로 통일 신라 및 고려와 당송과의 관계(A.D.669-1279) 셋째, 조공관계의 변질기로 고려와 요, 금, 원과의 관계(A.D. 918-1368) 넷째 전형적인 조공관계의 성립기로 고려와 조선 그리고 명청과의 관계(1368-1849) [전해중, 『한중관계사연구』(일조각, 1970)] 가 그것이다. 박원호는 여기

14) 박원호 편, 『15-19세기 중국인의 조선인식』, 고구려연구재단(연구총서 9), 2005에는 박원호의 「15세기 중국인의 조선인식-崔溥의 『漂海錄』을 길잡이로 삼아」, 권인용의 「16세기 中國使臣의 朝鮮認識-龔用卿의 『使朝鮮錄』을 중심으로」, 홍성구의 「18世紀 中國의 朝鮮認識-阿克敦의 朝鮮出使와 『東遊集』·『奉使圖』를 통해 본 朝淸關係, 그리고 시대적 特徵」과 박정현의 「19세기 중국인의 조선인식」에 관한 글이 실려있다.

15) 박원호, 「근대 이전 한중관계사에 대한 시각과 논점」, 『한국사 시민강좌』 40, 2007.

에서 한중관계사의 시기별 특징으로 조공관계의 성립- 발전- 변질 그리고 마지막 고려, 조선과 중국의 명청에 이르러 ‘전형적인 조공관계’에 도달한다고 하는 전해종의 견해가 이후 한국학계에서 ‘전형적인 조공관계’라는 표현이 중요한 개념으로 자리잡고 있는 상황을 비판하고 있다. 실상, 위의 최근 한국연구자들이 지적하고 있는 것처럼 중국과 한국과의 조공책봉 관계가 시대의 변화에 따라 각각 다른 양상으로 나타나는데, 고려 조선과 명청과의 관계를 굳이 전형적이라고 간주할 수 있는 요소가 무엇일까 하는 문제제기라고 할 수 있다.

조공이란 주나라의 종법적 봉건제도 하에서 제후가 정기적으로 천자에게 조공하고 공물을 바침으로써 군신 간의 의리를 밝히는 천자와 제후국 사이의 결속을 공고히 하기 위하여 고안된 정치 의례이다. 그러나 주왕실 붕괴 후 혼란기를 거쳐 강력한 통일 왕조인 秦, 漢이 등장하자 종래 국내에서 행해지던 조공의례는 중국과 주변 국가들 사이의 국제질서로 그 외연이 확대되었다. 특히 한대 이후 조공제도는 중국 중심의 동아시아 전통사회에서 주변국가와의 외교관계를 규정짓는 기본적인 제도로 정착, 활용되어 갔다. 이와 같이 조공제도가 시스템과 외교관계로 연구되기 시작한 것은 니시지마 혹은 페어뱅크에 의해서인 것은 주지의 사실이다.

특히 조선시대의 조공제도 자체가 가장 완비되고 정착된 단계에 속하기는 하지만, 유독 조선시대의 조공을 조공 본래의 표준적인 모습으로 간주해야 할 이유를 찾기 어렵다는 지적을 충분히 공감하는 바이다. 나아가 고려가 송, 요, 금을 상대로 맺은 탄력적이고 전략적인 조공관계는 왜 ‘조공’의 표준적인 모습으로 볼 수 없는가를 반문하였다.¹⁶⁾ 명청의 입장에서 조선은 가장 모범적인 조공국가였을 뿐, 조선의 명청에 대한 조공을 반드시 전형적인 조공관계로 간주해야 할 당위성은 없는 것 같다는 것이다.

3. 최근 중국의 조공제도 연구 : 전형적 조공관계로서의 朝淸關係

중국에서 조공제도는 대외관계사 연구의 한 분야로 특히 정치상황과 가장 밀접한 관련을 가지고 있다. 중국의 경우는 중화인민공화국 성립이후부터 청말, 즉 근대시기의 대외관계사 연구의 대상으로 제국주의 중국침략사를 분석하는 것은 가장 핵심 내

¹⁶⁾ 박원호, 앞의 논문.

용이다.¹⁷⁾ 따라서 각국의 제국주의 활동 가운데는 건국 후 최고의 적대적 국가였던 미국의 경제적인 측면에서 중국에 대한 침탈활동을 분석하는 한편,¹⁸⁾ 50년대 중소관계의 우호를 선전하는 연구가 진행되었다. 그러나 1960년대 중반이후 중소관계가 급변하면서 러시아의 중국침략을 강화하는 연구로 바뀌었다.¹⁹⁾ 공산주의 중국건설 및 외교관계에 초점이 맞추어지면서 영국과 일본 등을 중심으로 아편전쟁과 청일전쟁을 중심으로 한 외국 각국과의 관계를 논하는 연구²⁰⁾는 중국의 초기 대외관계사 연구의 주요 흐름이었다.

이러한 연구의 흐름은 1976년 개혁개방을 기점으로 전환을 맞이한다. 개혁개방이후 외부 세계를 어떻게 이해할 것인가와 더불어 확대되는 대외교류로 야기된 서방사회에 대한 이해는 무엇보다 중요한 연구의 과제였다. 앞 시기의 제국주의 침략의 관점에서의 연구와 더불어 中外關係史 혹은 外交史라는 제목의 통사류가 나오기 시작하였고,²¹⁾ 중국의 불평등조약 관계의 형성과 발전, 일본의 중국침략의 기원과 과정, 문호개방정책, 반기독교 투쟁과 의화단 등 주로 근대시기에 초점을 맞춘 다양한 연구가 진행되었다.²²⁾ 이렇게 대외관계사에서 조선 혹은 주변부 조공국가라고 일컬어지는 국가와의 관계는 매우 적었다.

그러나 2000년을 전후로 하여 중국역사학계의 대외관계사 연구는 또 한 차례의 변화를 겪었다. 개혁개방으로 인한 서양제국에 대한 시각의 변화에 이어 이번에는 주변국가 연구로 이어지면서 많은 연구들이 쏟아져 나오게 되었다. 한국과의 관계에 대한 연구도 이러한 대외관계사의 흐름과 맥을 같이 한다. 한국에 관한 연구는 중국에서는

17) 有胡繩의 『帝國主義與中國政治』(三聯書店, 1950과 丁名楠·余繩式 等の 『帝國主義侵華史』(科學出版社, 1958) 등에서는 1840-1895년까지 제국열강의 침입이 중국의 반식민지 반봉건 사회 형성에 중대한 영향을 미쳤다는 인식이다.

18) 劉大年, 『美國侵華史』, 人民出版社, 1955 ; 卿汝揖, 『美國侵華史』 2卷, 三聯書店, 1956 그리고 欽本立, 『美國經濟侵華史』, 世界知識出版社, 1976.

19) 曹錫玲, 『中蘇外交史』, 上海世界知識出版社, 1951 ; 彭明, 『中蘇友誼簡史』, 中國青年出版社, 1955 ; 中國社會科學院近代史研究所集體撰, 『沙俄侵華史』 4卷, 人民大學出版社, 1976-78 ; 復但大學歷史系, 『沙俄侵華史』上海人民出版社, 1975 ; 吉林師範大學歷史系, 『沙俄侵華史簡編』吉林人民出版社, 1976.

20) 鮑正鵠, 『阿片戰爭』, 上海新知識出版社, 1954 ; 魏建猷, 『第二次阿片戰爭』, 上海人民出版社, 1955 ; 陳聯芳, 『朝鮮問題與甲午戰爭』, 三聯書店, 1959 ; 戚其章, 『中日甲午威海海戰』, 山東人民出版社, 1962.

21) 劉培華, 『近代中外關係史』, 北京大學出版社, 1986 ; 王紹坊, 『中國外交史』, 河南人民出版社, 1988 ; 楊公素, 『滿清外交史』, 北京大學出版社, 1991 ; 沈予 等, 『日本侵華七十年史』, 中國社會科學出版社, 1992) 등등.

22) 王建朗·鄒永庆, 『50年来的近代中外關係史研究』, 『近代史研究』, 1999-5.

徐亮之, 『韓中關係史話』, (香港: 自由出版社, 1952)와 朴眞奭, 『中朝經濟文化交流史研究』(遼寧人民出版社, 1984)에서 출발하여 연구조차 매우 적은 형편이었다. 특히 초기 연구라고 할 수 있는 徐亮之의 『韓中關係史話』는 최초의 한중관계사 개설서로 일컬어지지만 내용이 소략하고 외국의 연구 성과를 충분히 반영하지 못하고 있다는 점이 이미 지적되기도 하였다.²³⁾ 따라서 연구의 깊이에서는 林明德, 『袁世凱與朝鮮』(中央研究院近代研究所, 1970); 劉家駒, 『清代初期的中韓關係』(文史哲出版社, 1986)나 張存武, 『清韓宗藩貿易 1637-1894』(中央研究院近代史研究所, 1983) 및 張存武, 『清代中韓關係論文集』(臺北 商務印書館, 1987) 등에서 볼 수 있는 것처럼 대만학계의 연구 성과가 훨씬 두드러진 편이리라고 할 수 있다.²⁴⁾

그러나 1990년대 들어서면서 중국학계에서는 한중관계사 방면에 상당히 많은 연구 성과를 쏟아내기 시작하였고, 이미 앞서서도 지적하였듯이 1992년의 한중 수교로 연구자들의 연구가 활발하다.²⁵⁾ 이러한 본격적인 연구 전개가 21세기에 들어서면서도 끊이지 않아 연구서 출간이 줄을 잇고 있다.²⁶⁾

2000년을 전후로 하여 최근 2005년 이후의 연구에서는 무엇보다 조선과 중국의 경제관계에 대한 연구가 큰 비중을 차지하고 있다는 점이 특색이다. 경제관련 분야의 최근 연구는 근대보다는 청대 초·중기에 초점이 맞추어져 연구가 진행되고 있는데 특히 金悅의 「清朝與朝鮮在盛京將軍轄區的使行貿易」(『遼寧經濟』 2008-8)과 張杰의 「清代朝鮮使團與滿族雇車業述論」(『滿族研究』, 2008-1) 그리고 「后金时期滿族與朝鮮的貿易」(『遼寧大學學報(哲學社會科學版)』(2008-3))에서 보이는 것처럼 전통적인 연구

23) 김한규, 『한중관계사』, 아르케, 1999.

24) 김형중, 「최근 중국에서의 청대사 연구 동향의 분석- 특히 한중 관계사와 국경 문제에 관련된 연구를 중심으로-」 『중국 역사학계의 청사연구동향 - 한국관련 연구를 중심으로』 중간보고서, 2008.

25) 楊昭全의 『中朝關係簡史』, 遼寧民族出版社, 1992; 楊昭全, 『中朝關係史論文集』, 遼寧民族出版社, 1992; 楊昭全·孫玉梅, 『中朝邊界史』, 吉林文史出版社, 1993; 黃枝連, 『天朝禮治體系研究 上中下』, 中國人民大學出版社, 1994-1995; 刁書仁 編, 『中韓關係史研究論文集』, 吉林文史出版社, 1995; 金龜春 主編, 『中朝韓日關係史研究論叢』, 延邊大學出版社, 1995; 徐萬民, 『中韓關係史 古代卷』, 社會科學文獻出版社, 1996; 陳尙勝, 『中韓關係史論』, 齊魯書社, 1997; 蔣非非 等, 『中韓關係史 古代卷』, 社會科學文獻出版社, 1998; 王明星, 『韓國近代外交與中國(1860-1910)』, 中國社會科學出版社, 1998; 王如繪, 『近代中日關係與朝鮮問題』, 人民出版社, 1999 등이 그것이다.

26) 姜龍范, 『近代中朝日三國對間島朝鮮人的政策研究』, 黑龍江朝鮮民族出版社, 2000; 白新良 主編, 『中朝關係史 - 明清時期』, 世界知識出版社, 2002; 劉爲, 『清代中朝使者往來研究』, 黑龍江教育出版社, 2002; 魏志江, 『中韓關係史研究』, 中山大學出版社, 2006; 楊軍 等, 『中國與朝鮮半島關係史論』, 社會科學文獻出版社, 2006; 朴鍵一 主編, 『中國對朝鮮半島的研究』, 民族出版社, 2006; 楊昭全, 『中國朝鮮·韓國文化交流史 1-4』, 昆侖出版社, 2007; 李花子, 『清朝與朝鮮關係史研究 - 以越境交涉爲中心-』, 延邊大學出版社, 2006.

주제였던 양국 사행무역에 대한 연구와 청홍기시의 만주족의 무역의 위상에 대한 재고 등의 분야에 새로운 견해들은 주목된다. 후금과 조선의 무역에 관한 연구로 林紅의 「“兄弟之盟”下后金与朝鲜贸易初探」(『山东大学学报(社会科学版)』 2000-3)과 王臻의 「建州女真凡察部与朝鲜关系述论」(『东北史地』, 2008-1)에서 보이는 것처럼 여진과 조선과의 관계를 다루면서 조선과의 무역을 통해 성장, 발전해 가는 모습도 연구되고 있다.

청사연구에서 청조흥기 부분 특히 만주족에 대한 평가가 부각되면서 이들의 경제적 역할 또한 새롭게 연구 평가되는 것은 청조의 흥기와 관련이 있으나 그것을 조선과의 관계, 즉 국제적 관계에서 부각시키고자 하는 의도로 생각된다. 예를 들면 張杰은 청조중기는 양국의 무역이 가장 활발하였던 시기이었음에도 불구하고 사료적인 제약으로 연구가 적었음을 지적하면서 임기중 선생의 『연행록선집』의 자료를 분석을 통해 양국의 경제교류가 증가한 측면을 분석하였다. 한편, 이러한 만주족은 흥기의 청조 역사에서 대외무역은 무엇보다 중요한 역할을 하였는데 특히 1627년(天聰元年) 皇太極가 阿敏을 파견하여 조선을 정벌하여 조선과 맺은 "平壤之盟"의 중요한 목적이 조선과의 무역관계를 건립하고자 하였던 것이라는 점과 만족상인과 조선상인이 상호 무역에서 많은 이익을 얻을 수 있었기 때문에 후금(청)과 조선의 무역이 이후 양국의 변경호시를 만드는 조건으로 작용하게 되었다고 그 의의를 부여하고 있다.

근대 시기의 경제관련 논문으로는, 먼저 청일전쟁이전의 대외무역의 새로운 경향으로 해상의 대일무역이 육상의 변경무역과 중국무역을 대신한 대외무역에서의 주류를 형성하여 간다는 점을 밝히고 있는 毛立坤·張金萃의 「甲午前夕朝鮮海上對外貿易初探(1884-1893)」(『安徽史學』 2008-4)이 있다. 논문에서는 인천·원산·부산 등 3항구에서 양국 상인의 구체적인 무역액과 움직임의 차이가 있다고 밝히며 이미 조선에서 무역을 행하는 중일 상인의 지위 또한 차이가 있다고 밝히고 있다. 논문에서는 양국의 무역 확대가 조선인에게 불리한 요소도 있었지만 조선의 경제발전에 어느 정도 기여한 점이 있다고 설명하고 있는데, 이와 같은 분석은 식민지 근대화론에 입각한 연구 경향이 보인다는 점에서 주목된다. 근대시기의 경제관계에 대한 연구는 소략한 편이라고 할 수 있다. 다만 이미 1995년 曹力强이 「清政府对朝鲜海關的控制」(『东北师大学报(哲学社会科学版)』 1995-2)라는 논문에서 근대 한중관계에서 청정부가 조선정부에 대한 종주권을 정치, 외교적인 수단을 이용해 어떻게 강화시켜 가는가에 대한 점을 해관을 통해 분석하였다. 그는 여기서 청정부는 열강이 조선에 대한 침략의도를

강화시켜 가는 근대 시기 조선해관의 洋員들을 효과적으로 통제함으로써 해관을 관리하는 방법으로 조선의 종주권에 대한 경제, 재력을 강화시켜 가는 수단이었다고 주장한다.

이러한 근대경제분야에 대한 연구는 비교적 적는데 다만 변경의 이주문제가 비교적 활발하다. 姜龙范의「清政府对朝鲜移民的政策—以怀柔与同化政策为中心」(『延边大学学报(社会科学版)』(2003-2) 에서는 중국 역대 왕조에서 “恩威兼施”를 통치의 기본방침으로 삼고 있는데, 특히 소수민족지구에는 이러한 방침과 더불어 “因俗而治”를 함께 통치의 기본 내용으로 하여 朝鮮移民을 분석하고 있고 동시에 19세기 중기이후 확대되어 가는 조선이민사회의 분석하면서 조선이민이 동북에 미친 영향도 고찰되었다.²⁷⁾

이상과 같은 경제 분야에서의 연구와 더불어 조공과 관련한 연구가 상당히 다양하게 진행되고 있음에 주목하지 않을 수 없다. 이는 비단 한국과 중국과의 관계에 한정되는 것이 아니고 중국주변의 다양한 국가들을 대상으로 전에 없던 관계사 연구가 증가하고 있다. 관계사 연구의 핵심에 조공제도를 키워드로 하는 많은 연구들이 주목된다. 이는 물론 청사공정과 관련한 대외관계사 정리의 핵심인 조공체제에 대한 논의의 필요성에서 제기된 연구 성과라는 것도 쉽게 짐작할 수 있다. 이러한 필요성은 외교시스템으로서의 조공관계 연구에 대한 두 가지 방향으로 정리되고 있다.

하나는 외교관계로서의 형식의 정비에 대한 연구이다. 이러한 경향에는 조공 사절에 대한 각 내용을 연구를 핵심으로 하면서, 특히 문서의 형식으로 규정되는 조공체제를 살펴보는 작업들이 그것이다. 다른 하나는 조공이념에 대한 정리가 활발하다는 점이다. 예를 기본으로 한 유교이념의 확산과 그를 통한 문화전파라는 맥락에서 대외관계를 보고자 하는 작업들이 이러한 부류이다. 예를 들면 李善洪의「明清时期朝鲜對華外交使节初探」(『歷史檔案』, 2008-2)에서는 朝鮮과 明清의 관계가 전형적인 조공관계라고 전제한 뒤 이러한 조공관계의 특징과 내용은 조선사절이 명나라에 파견한 사절과 사절이 보내는 외교문서의 종료와 형식 및 문서 전송체제 등에 매우 잘 반영되어 있다고 보고 있다. 조선의 대명외교문서가 “事大文书”에 속하며, 조선과 명청간의 외교사무의 처리는 각자 외교사신의 왕래에 의해 완성이 되었는데, 외교문서의 傳送은 외교사절 출사의 가장 중요한 임무였고, 형식상 조선과 명청외교 사무는 왕래사신이 와서 완성이 되는 것이었지만 사실상으로는 중국사신이건, 조선사신이건외교사무

27) 宋佳의, 「鸭绿江北岸朝鲜移民社會研究(1860-1910)」(『广西师范大学 석사논문(2008)』)

를 처리할 권한은 없었고, 외교교섭의 주체세력도 아니었다는 것이다.

비슷한 시각에서 조선과 명청의 공문을 비교하는 연구도 주목되는데 沈載權의 「朝鮮與明清公文比較研究」(『南京師範大學 박사논문, (2007)』)이 그것이다. 명청시기가 한중교류가 가장 활발하였다고 보면서 이 시기 정치, 문화적 영향은 공문영역에서 받은 영향이 가장 중요하게 대표되고 있다는 점을 강조하고 있다. 양국의 왕명공문, 관부에서 국왕에게 올리는 공문, 관부사이에 오가는 공문으로 나누어 각각의 공문을 형식과 명칭과 종류, 역할형식과 작용, 행문관계 등에서 중국과 조선의 차이점을 분석하고 있다.

한편, 黃枝連의 『天朝禮治體系研究 上中下』(中國人民大學出版社, 1994-1995)는 중국과 동아시아 제국가와의 관계에 대한 연구를 실시하여 이러한 관계를 “天朝禮治體制”라고 명명하고 있다. 예치란 예치시스템을 말한다. 그는 주로 명청시대 중국과 조선과의 국제관계를 ‘禮’가 양국 간에 구체적으로 어떠한 문맥 속에서 취급되고 있는가를 소개하고 있다. 뿐만 아니라 비슷한 맥락에서 李雲泉도 『朝貢制度史論』(新華出版社, 2004)에서 조공제도로 한중관계 고대부터 파악하고 있다. 조공체제를 전형적이고 본질적 조공체제와 禮儀性 조공체제 일반적 조공체제 등으로 구분하고 있는 그의 저서에서는 명청시대는 본질적 조공체제로 파악된다. 전형적, 본질적 조공체제라는 것은 稱臣을 하며 정기적으로 조공사절을 파견하면서 年號와 年歷 등을 받으면 책봉과 조공물에 대한 回賜를 진행시키는 일련의 과정이 포함된 체제라고 설명한다. 결국 이러한 관계는 명청대의 朝鮮과 琉球, 安南으로 대표되는 것이다. 중국 중심주의 중국의 문화적 우월만을 인정한 주변민족들이 중국문화에 동화하기 위해 불평등한 관계를 수용하면서 자발적으로 중국에 조공을 바쳤다는 것이다.

이는 중국 스스로 천하의 중심으로 자부하고 주변민족을 이적시하는 중화사상과 주변의 조공국들이 중국에 대해 가졌던 事大를 기반으로 한다. 따라서 유교이념에서 비롯된 중국 중심적 문화론을 국제관계로 확장한 것으로 예를 기저로 한 상하불평등의 국제질서를 전제로 하므로 문화 이념적 개념인 中華와 정치적 군사적 산물인 事大, 그리고 때로는 경제적 필요의 산물인 朝貢을 구분하지 않고 일원적으로 파악하고 있어 역사 형성에서 다양성을 간과한 논의라고 비판할 수 있다.²⁸⁾

28) 정용화, 「조선의 조공체제 인식과 활용」, 『한국정치외교사논총』 제27집 2호, 2006.

4. 결론을 대신하며

1872년(同治11년) 일본 외무경이 북경에 와서 조약문제를 논의할 때에 總理各局事務衙門에 “조선은 중국의 屬國이므로 중국이 일을 대신 처리해 줄 것을 요구하자 묻자 “조선은 비록 藩屬이기는 하지만 內政과 外交는 그 스스로 하도록 내버려두고 중국에서 간여하였던 일이 없다”²⁹⁾라는 기사는 근대 한중관계사 및 조선과 청의 관계를 규정하고자 하는 한국의 연구자들에 의해 많이 인용되고 있다. 한국에서의 朝鮮과 청의 관계를 보는 시각은 중국의 藩屬으로 內政과 外交는 그 스스로 하도록 내버려두고 간여하였던 일이 없었다는 점에 초점이 두어지고 있다. 그러나 淸朝는 근대 이후에는 적극적인 屬國化 정책을 추진하는 방향으로 바뀌었고, 결국은 19세기의 격동의 국제질서 속에 조공국의 상실로 이어지면서 속국화는 실패로 끝났지만 조선이 일본의 식민지로 전락하면서 속국화의 개념자체가 『청사고』 그대로 반영되었다고 보고 비판하고 있다. 또한 위에서도 언급한 것처럼 조공관계의 다양한 측면을 밝히어 진정한 한중관계가 무엇이었는가를 각 시대 별로 소개 하고자 하는 노력을 기울이고 있다.

한편 중국에서는 근대동아시아의 국제관계 속에서의 조선과 청과의 관계를 파악하고자 한다. 아편전쟁이후 동북아 전략 요충의 한반도는 열강의 세력 확장이 초점에 놓이게 되는 상황 속에서 조선의 통제권 쟁탈을 위해 신흥의 일본과 미국, 러시아 등의 국가가 종주국인 청과의 사이에 격렬한 각축이 진행되었다. 이른바 “조선문제”라고 불리는 이시기의 국제문제는 강국이 약국을 압박하고 강국들간의 세력쟁탈이었다고 본다. 당시 서양은 무력을 배경으로 중국에 들어온 이후 중국의 전통적 중화세계관을 제압하고자 하였고, 결과적으로 청조의 직접영지 및 속방의 주권을 침식하는 여러 조약의 체결하였고 이에 청정부는 전통관계와 서방의 국제법에 의거하여 그들의 영토와 속방에 대한 권익을 보호하고자 하였다고 설명하고 있다. 이러한 전통적인 배경 하에 진행된 청말 외교가 중국전통의 대외체제의 요소를 포함하면서 근대 국제법 체제를 포괄하고자 하는 새로운 외교정책 실현이라는 관점에서 분석하고 있다.

위에서도 살펴본 것처럼 한국이 조공의 다양한 현상을 파악하고자 한다면 중국에서는 조공개념에 근거한 형식의 분석과 해석을 통해 조공체제를 전근대 시대 중국과 관련 있는 모든 외국과의 관계를 규정하는 하나의 틀로 이론화하는 작업을 진행중이

29) 『淸史稿』의 「朝鮮列傳」

다. 따라서 조공이라는 이념과 현실의 괴리만큼이나 양국관계를 보는 중국과 한국의 시각도 상당한 차이가 있음이 자못 우려되는 바이다.

최근 일본에서도 동아시아 관계사라는 측면에서 최근연구가 주목된다. 일찍이 중국 왕조를 중심에 놓은 국제질서의 전개과정을 통해 6-8세기 동아시아 국제정세의 추이를 고찰한 니시지마는 “중국황제가 주변국의 군주에게 작위나 관호를 주어 책봉하고 군신의 관계를 맺음으로써 국내의 예적 질서가 국외로 확대되어 책봉체제라는 국제 질서가 성립하였다”고 보고 중국을 중심으로 한 한자, 유교, 율령제, 대승불교를 받아들인 한국, 일본, 베트남은 책봉체제라는 국제정치적 구조를 통해 문화를 확산시켜 갈 수 있었다고 주장한 바 있는데 최근 그의 논의가 새롭게 소개되고 있는 점³⁰⁾도 중국의 시각을 뒷받침하는 이론적 근거로 사용된다고 본다.

일찍이 조공책봉체제를 논해온 일본, 그리고 한국과 중국에서의 양국의 관계사에 대한 연구가 활발하게 진행된 시점에서 연구의 시각을 함께 공유할 수 있는 기회의 확대로 연구의 시각을 극복해 가기를 기대해 본다.

30) 西島定生著, 李成市, 『古代東アジアと日本』, 岩波書店, 2000은 송완범에 의해 『일본의 고대사인식-동아시아세계론과 일본』(역사비평사, 2008) 로 번역되었다.

조선의 대청관계 인식과 외교체계

— 조선후기 외교문서의 정리를 중심으로 —

김 경 록(공군사관학교)

1. 머리말

조선시대의 국제체제나 국제질서는 사대·교린을 바탕으로 한 조공체제이며, 조선 후기 조·청관계는 전형적인 조공체제가 정립된 시기라 할 것이다. 어느 시대이든 개별 국가는 주변 국가와 교류없이 존재할 수 없으며, 여러 국가간의 상호교류와 일정수준의 의존성을 가진다. 이러한 국가간의 교류와 의존성은 특정의 위상과 행위양식을 가지는데, 위상을 중심으로 한 국가간 상호 관련성을 국제질서, 구체적인 행위양식을 외교형식이라 할 수 있다. 조선시대는 조공체제 내지 조공질서라는 국제질서 하에 사대·교린이란 외교형식을 통하여 주변 국가와 관계를 맺었다. 이러한 조공체제라는 국제질서를 어떻게 인식하고 구체적인 외교형식으로 사대·교린을 구성하였는가는 조선이 인식하고 구축한 외교체계였다.

조선시대 뿐만 아니라 동양의 조공체제와 조공제도에 대한 관심은 학계에서 일찍부터 연구되어 다양한 성과를 거두었다.¹⁾ 특히 명·청교체기 조·중관계는 역사적 변동기라는 점에서 다른 시기에 비하여 학계의 관심을 받았다. 국제질서의 측면에서 조·중관계를 조공관계로 설명한 연구,²⁾ 명·청교체의 중심에 있었던 요동의 역사성

1) Fairbank, J. K. "A Preliminary Framework." Fairbank(ed.) *The Chinese World Order*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1968; 陳顯遠, 『中國國際法溯源』 商務印書館, 1967; 전해중, 『한중관계사연구』 일조각, 1970; 信夫清三郎, 『日本外交史』 1974; 이용희, 『일반국제정치학(상)』 박영사, 1962; 張存武, 『清韓宗藩貿易』 臺灣中央研究院近代史研究所, 1978; 『清代中韓關係論文集』 臺灣商務出版社, 1987; 김한규, 『고대중국적세계질서 연구』 일조각, 1982; 김홍철, 『외교제도사』 민음사, 1985; 黃枝蓮, 『天朝禮治體系研究』 上卷, 中國人民大學出版社, 1992; 이성규, 「중화사상과 민족주의」, 『동아시아 문제와 시각』 문학과 지성사, 1995; 濱下武志, 『近代中國的國際契機』 1997; 權善弘, 「조선과 중국의 책봉·조공관계」, 『전통시대 중국의 대외관계』 釜山外大 國際關係研究叢書, 1999; 孫承喆, 「朝鮮朝 事大交隣政策의 成立과 그 性格」, 『朝鮮朝 對外政策史 研究試論』 『溪村 閔丙河教授停年紀念 史學論叢』, 1988; 崔韶子, 「清과 朝鮮, 明·清交替期 동아시아의 國際 秩序에서」, 『梨花史學研究』 22, 1995; 何芳川, 「華夷秩序論」, 『北京大學學報』 1998-6期; 喻常森, 「試論朝貢制度的演變」, 『南洋問題研究』 2000-1期; 李雲泉, 『朝貢制度史論』 新華出版社, 2004.

에 집중하여 조·중관계를 다룬 연구,³⁾ 조·청의 상호인식을 분석하여 강희·옹정·건륭시기를 조·청관계의 확립·안정·완성시기로 정리한 연구,⁴⁾ 명·청교체의 직접적인 동기로 작용한 임진왜란 이후 조·중관계를 ‘再造之恩’을 강조하는 중국 중심적 시각과 ‘중립외교’를 강조하는 일본시각을 넘어 조선중심의 시각으로 고찰한 연구⁵⁾ 등이 있어 조·청관계의 역사성을 조망할 수 있다.

이러한 연구성과에도 불구하고, 조선후기 전시기를 전형적인 조공체제로 분석하는 것에 대한 세부적인 의문이 남는다. 청의 입관을 전후한 시기부터 영·정조대의 조·청관계는 분명 시대적인 변화상을 반영하는 외교체계가 형성되었을 것이다. 사행과 사신접대라는 외교형식에 입각하여 조·청관계가 전개되더라도 사행의 성격과 내용이 인조대와 정조대가 다를 것이며, 이러한 차이는 무엇에서 기인하는가?

조공체제에서 사행은 국가의 유일한 외교형식으로 국왕명의로 외교문서를 상대국에 전달하고, 상대국의 외교문서를 접수하였다. 본 글에서는 조선후기 조선의 외교문서 정리과정을 통하여 조선이 청을 어떻게 인식하고, 어떠한 내용으로 조·청관계를 전개하였는가를 정리하고자 한다. 이에 조선후기 대청관계에 직접적인 관련성을 가지며, 정조대 편찬된 외교문서의 집대성이라 할 『동문휘고』에 주목한다. 본서 原編의 항목분류를 기준으로 하여 조선의 대청인식과 외교사안의 분류방식을 정리한다. 외교문서의 정리방식 및 외교인식을 통해 조선후기 대청관계 외교체계의 변화과정을 병자호란에서 숙종초반, 숙종중반에서 정조대, 정조이후 개항기까지로 구분하고자 한다.⁶⁾

두 차례 호란을 계기로 명 중심 조공체제에서 청 중심 조공체제로 전환된 첫째 시기는 청의 강압적인 대조선 정책에 대한 반청의식이 고조되었던 시기로 현실 외교체계와 대청인식이 철저히 이중성을 보였던 시기이다. 둘째 시기는 두 중국 대륙을 완전히 장악한 청은 천자국으로 명실상부한 조공체제를 구축하고자 하였으며, 조선은 강국으로 청을 인식하고 현실 외교체계에서 각종 외교사안을 정리하여 조선의 실리를 추구하는 모습을 보였다. 셋째 시기는 조일관계에 관련한 외교사안이 부각되면서

2) 전해중, 『한중관계사 연구』 일조각, 1970.

3) 김한규, 『한중관계사Ⅱ』 아르케, 1999.

4) 최소자, 『청과 조선-근세 동아시아의 상호인식』 혜안, 2005.

5) 한명기, 『임진왜란과 한중관계』 역사비평사, 1999.

6) 외교문서 전반을 다루는 점은 필자의 능력으로 불가능하기에 개별 문서의 내용을 모두 점검하지 못하는 점을 밝혀두고, 우선적으로 항목분류와 특정 항목의 구성에 집착하여 시론적인 시기구분을 한다. 또한, 정조대 이후 개항기의 시기는 필자의 정리가 미흡하여 차후의 과제로 한다.

조·청관계의 조공체제에 조·일관계의 교린체제가 혼재되어 개항기로 이행된 시기였다.⁷⁾

2. 조선후기 외교문서의 정리와 사안별 인식

조공체제의 동아시아 국제질서에서 조·중관계는 사행과 사신접대의 외교형식을 통해 외교관계를 맺었다. 외교관계에서 사행과 사신접대는 근본적으로 황제와 조선국왕의 명의로 발행된 문서를 전달하고 접수하는 의미를 가지며, 명대이후 조공체제가 보다 확립되면서 외교문서는 형식과 전달체계가 복잡해졌다.⁸⁾

조·청관계에서 사행이 겸행하여 동지사로 일원화되더라도 사행명에 입각한 문서 지참은 필수사항이었다. 이는 조선후기에 사행이 전달한 외교문서를 통해 확인된다. 조선은 조공체제에서 외교문서의 중요성을 인식하고, 외교문서의 생산단계에서 보존단계에 이르기까지 효율적인 관리체계를 갖추어 외교정책에 활용하였다.⁹⁾ 초기부터 承文院을 중심으로 외교문서를 관리하였으며, 특히 외교문서의 보존은 단순한 외교문서의 정리를 뛰어넘어 대중국관계에 대한 인식을 반영하였다. 조선초기에는 승문원과 架閣庫, 조선후기에는 藏書閣과 奉安閣을 중심으로 외교문서를 보관하였으며, 외교문서 뿐만 아니라 刻本도 보존하였다.

7) 안외순, 『고종의 초기(1864-1873) 대외인식 변화와 親政-遣清回還使 소견을 중심으로-』 한국정치학회보, 1996; 남궁곤, 「동아시아 평화체제에 관한 연구 : 조선사행록을 통해 본 18세기 조공체제」 『한국정치학회보』 33-3, 1999; 정용화, 「전환기 자주외교의 개념과 조건: 19세기말 조선의 대청외교의 이론적 고찰」 『국제정치논총』 43-2, 2003; 박현모, 「세도정치기(1800-1863) 조선의 대외정책 연구」 『국제정치논총』 44-4, 2004.

8) H. D. Walker, 'The Yi-Ming rapprochement: sino-korean foreign relations, 1392-1592' University of California, Los Angeles, Ph.D., 1971. 151~152쪽; 金暲綠, 「明代 公文制度와 行移體系」 『明清史研究』 26, 126~129쪽.

9) 김경록, 「조선시대 사대문서의 생산과 전달체계」 『한국사연구』 134, 2006; 「조선시대 대중국 외교문서의 접수·보존체계」 『한국사연구』 136, 2007. 참조.

<표 1> 使行時 賫去文書總數

使行名	賫去總數
冬至・正朝使	御前表：正・副本 各 1, 方物表：正・副本 各 1, 禮部咨：1 皇太后前狀：1, 禮部咨：1 皇太子前箋：正・副本 各 1, 方物箋：正・副本 各 1, 禮部咨 1
聖節使	御前表：正・副本 各 1, 方物表：正・副本 各 1, 禮部咨 1 皇太后前狀：1, 禮部咨 1 年貢奏本：1, 禮部咨 1, 禮物摠單 1
謝恩・進賀使	御前表：正・副本 各 1, 方物表：正・副本 各 1, 禮部咨：1 皇太后前狀：1, 禮部咨：1 皇太子前箋：正・副本 各 1, 方物箋：正・副本 各 1, 禮部咨：1, 禮物摠單：1
奏請・陳奏使	御前奏本：1, 禮部咨：1, 方物奏本：1, 禮部咨：1 皇太后前單本：1, 禮部咨：1 皇太子前啓本：1, 禮部咨：1, 禮物摠單：1
陳慰使	御前表：正・副本 各 1, 禮部咨 1, 進香祭文：1 皇太子前箋：正・副本 各 1, 禮部咨：1
告訃使	御前表：正・副本 各 1, 禮部咨：1 皇太子前箋：正・副本 各 1, 禮部咨：1
問安使	御前起居表：正・副本 各 1, 方物表：正・副本 各 1, 禮部咨：1, 禮物摠單 1

전거: 『通文館志』

외교문서 보존체계의 시대변화를 통하여 대중국관계에 대한 인식의 일단을 볼 수 있는데, 조선초기에는 체계적인 보존이 어려웠다. 이는 전문인력의 부족, 외교문서의 체계가 정립되지 않았기 때문이다. 외교문서 관리체계의 정립은 1차적으로 『경국대전』이 반포되면서 명확하게 규정화되었다.¹⁰⁾

조선초기에 외교문서집인 『吏文』이 정리됨으로써 조선의 외교문서 정리는 본격화되었다.¹¹⁾ 고려 공민왕대부터 성종대에 이르기까지 조·명 사이에 왕래한 문서를 정리한 『이문』은 구성에 있어 사안별 분류가 아닌 전체적으로 시간적 구성을 취하되 개별 외교사건을 중심으로 구성되어 있다.

10) 『經國大典』 卷3, 禮典, 藏文書.

11) 김경록, 「조선초기 吏文의 편찬과 對明 外交文書の 성격」 『이화사학연구』 34, 2007. 참조.

<표 2> 『吏文』권2·3 수록 외교문서

권	순번	시기	종류	문서내용
2	1	1370(공민19)	咨文	歸附各國山川降香致祭事
	2	1371(공민20)	咨文	前原平章劉益投順開設遼東衛指揮使司事
	3	1370(공민19)	咨文	蘭秀山海賊干連人高麗高伯一審決發回事
	4	1371(공민20)	呈文	前元司徒平章八丹洪保保等殺害劉益等事
	5	1371(공민20)	呈文	前元平章洪保保等動兵事
	6	1372(공민21)	咨呈	在逃糧船梢工陳均祥起取發來事
	7	1372(공민21)	咨文	進賀平蜀又請子弟入學事
	8	1374(공민23)	咨文	詔諭三年一貢物不在多及貢使鄭庇金甲兩事
	9	1374(공민23)	申文	征進馬匹官金義殺害明使走往北元納哈出處事
	10	1374(공민23)	咨文	朝貢往來陸海道路事
	11	1374(공민23)	咨文	獻馬使臣金甲雨等斷罪申報事
	12	1375(우왕 1)	申文	都統使崔瑩討平耽羅及起取馬匹事
	13	1376(우왕 2)	咨呈	高家奴遼東到任招諭事及高麗所在遼東人戶起取事
	14	1379(우왕 5)	照會	義州藏在殺人賊徒取發事
	15	1388(우왕14)	咨文	鐵嶺迤北迤東迤西三散哈刺雙城等舊屬開原所管軍民漢人女直達達高麗仍屬遼陽榜文張掛事
	16	1388(우왕14)	帖文	總旗薛興前去義州被人打死事
	17	1385(우왕11)	照會	北元使臣見在雙城及三散把口官金萬戶等殺虜遼東差出官軍馬匹事
	18	1385(우왕11)	照會	遼東復業人民在催起送事
	19	1387(우왕13)	照會	指揮馬扒運糧海船高麗龍岡地面漂泊事
	20	1391(공양 3)	咨文	高麗所領符驗解來倒換事
	21	1393(태조 2)	照會	第七運第八運馬匹依數解來事
	22	1393(태조 2)	咨文	馬價段匹絛布給送事
	23	1406(태종 6)	咨文	在逃人口取發事公用好細白紙進來事及大統曆一百本頒給事
	24	1406(태종 6)	咨文	在逃人口催取事猛哥帖木兒親屬家小完聚事
	25	1406(태종 6)	咨文	廟社樂器工部成造賜給事
	26	1406(태종 6)	咨文	差千戶金聲在逃人口催取事
	27	1406(태종 6)	咨文	差千戶陳敬催取在逃人口事及萬戶佟鎖魯阿家小完聚事
	28	1407(태종 7)	咨文	高皇后傳五十本大統曆一百本頒賜事土門阿罕地面住坐人口起取事及再差陳敬將金聲賣放的在逃人口起取事
	29	1410(태종10)	移呈	運糧海船漂到仁州山島事
	30	1423(세종 5)	箭付	永樂十九年并今次去取馬共二萬匹價布絹給賜事
	31	1438(세종20)	奏文	野人李滿住攔截使客來往道路改設事
	32	1441(세종23)	奏文	凡察逃往李滿住處事及公嶮鎮迤南至鐵嶺仍屬朝鮮洪武五年以降十四回勅諭朝鮮寵遇洪武二十五年以降十三回勅諭申覆
3	1	1456(세조 2)	咨文	免朝鮮國世子來朝事
	2	1459(세조 5)	奏文	遭風軍人鎖慶等敗船錢糧搬運事
	3	1462(세조 8)	咨文	發回漂風人高處誠等事
	4	1463(세조 9)	咨文	發還走回婦女趙羅得事
	5	1467(세조13)	咨文	征勦建州三衛事
	6	1467(세조13)	咨文	發回被虜牟斤重事

7	1467(세조13)	咨文	發回被虜女金哈冬伊遼東都司咨
8	1471(성종 2)	咨文	發還在逃朝鮮僧人志淸事
9	1475(성종 6)	咨文	邊警事
10	1475(성종 6)	咨文	發還被虜員鎖貴事
11	1475(성종 6)	題咨	冊立東宮欽差正副使祈張賚捧詔書事
12	1476(성종 7)	咨文	各職欽差朝鮮國公幹事
13	1475(성종 6)	咨文	建州衛女直釋怨止戈事
14	1476(성종 7)	咨文	倭寇聲息馳報事
15	1476(성종 7)	咨文	海西女直聲息馳報事
16	1478(성종 9)	手本	強盜張政等射傷朝鮮使臣事
17	?	題呈	撫安建州女直事
18	1478(성종 9)	呈文	成化十三年以後遼東開原虜寇節次侵掠防禦各官提問擬律事
19	1478(성종 9)	題本	交趾接境雲南邊備事
20	1478(성종 9)	題本	安南朝貢事

* 전거 : 『吏文』(상백 貴 411.1J773i)

권1은 漢文인 宣諭·聖旨로서, 최세진이 간행하지 않고, 권2는 공민왕 19년(1370)부터 세종 23년(1441)까지 오고간 咨, 奏, 申, 呈, 照會 등 32건, 권3은 1456년(세조 2)부터 1478년(성종 9)까지의 咨-奏-呈-題奏 등 20건, 권4는 1402년(태종 2)부터 1476년(성종 7)까지의 榜文 등 41건의 문서가 수록되어 전체 93건의 문서 가운데 咨文 30건, 呈文 6건, 照會 5건, 奏文 3건, 題本 3건 등 12개 이상의 종류별 외교문서를 전체적으로 시간 순서에 따라 정리하였다. ‘歸附各國山川降香致祭事’(1370년, 공민왕19), ‘前原平章劉益投順開設遼東衛指揮使司事’(1371년, 공민왕20), ‘蘭秀山海賊干連人高麗高伯一審決發回事’(1370년, 공민왕19), ‘前元司徒平章八丹洪保保等殺害劉益等事’(1371년, 공민왕20), ‘前元平章洪保保等動兵事’(1371년, 공민왕20) 등과 같이 사건의 연관성에 따른 구성을 일부 취하고 있지만, 외교사건이나 사안에 따른 세부적인 분류체계를 완전하게 갖추지 못하였다.

중국문서를 중심으로 정리된 『이문』 이후 17세기 전반기까지 대명 외교문서를 문체별로 분류하여 기재한 『槐院臚錄』은 외교문서 가운데 조선문서를 중심으로 정리하였다.¹²⁾ 문서 정리에 있어 『이문』처럼 중국문서를 중심으로 정리한 것은 대중국 관계에 있어 각종 외교사건에 대한 증빙자료 및 외교정책 수립의 목적이었다. 『괴원등록』과 같이 조선문서를 중심으로 정리한 것은 조선의 외교활동을 명시하기 위해서였다.

¹²⁾ 『槐院臚錄』(K2-3465). 한국학중앙연구원에 소장하는 것으로 동일한 서명으로 서울대 규장각에 소장되어 있는 奎-27013본은 1743년(영조 19)부터 1887년(고종 24) 사이에 승문원의 중요 활동사항을 초록한 책이다.

전체 12책 가운데, 1~2책은 表文·箋文을, 3~5책은 奏文을, 6~7책은 咨文을, 8~9책은 揭帖·檄文을, 10~12책은 呈文·劄子·上書·帖文 등을 수록하였다. 전체 외교문서 가운데 많은 분량의 문서가 임진왜란과 관련하여 조·명사이에 왕래한 문서를 수록한 점으로 보아 편찬목적이 명의 임진왜란 파병에 대한 대명의리론에 중심이 있었다. 『괴원등록』 단계에는 외교문서를 문서종류별로 분류하고, 세부적으로 시간별, 외교문서 작성자별로 분류하여 정리하여 조선의 외교문서 정리가 보다 체계화됨을 보여준다.

<표 3> 『槐院謄錄』 수록 외교문서

冊	文書	세부분류	額數
		文書種類	
1	表文	賀聖節表, 賀正朝表, 賀節日表, 賀冬至表, 崇禎皇后冊立進賀表, 皇太后上尊號賀表, 賀加上慈殿徽號表, 皇太子誕生賀表, 崇禎皇帝登極陳賀表, 賀白雉表, 賀平定北方表, 賀討平北虜表, 賀甘露醴泉表, 賀騶虞表, 賀麟見表, 賀定都北京建奉天華蓋謹身三殿表, 賀車駕還京表, 賀建都北京龍馬出現松柏凝脂表, 賀駕幸北京表, 賀瑞免靈芝慶雲瑞永表, 賀瑞象白鳥甘露醴泉天花圓光浙江潮緩滌河水退表	228
		元宗恭良大王追封降勅謝恩表, 世子冕服降勅謝恩表, 宥過降勅謝恩表, 漂流人解送謝恩表, 謝宗係惡名準許改正表, 雪冤禮部咨謝恩表, 誥冕補賜謝恩表, 謝皇帝降勅勉諭表, 倭情陳奏降勅謝恩表, 再發天兵謝恩表, 雪冤降勅謝恩表, 謝署理國事兼賜綵段刷還漂流人物表, 捕解下海人犯謝賜白金綵幣兼及陪臣表, 謝賜中宮金氏誥命冠服表, 本朝謝欽賜銀兩許貢弓角等材表, 反正後冊封謝恩表	
		皇極殿災慰表, 天啓皇太子薨逝陳慰表, 大明新成太廟災進慰表, 天啓元年遼東失守陳慰表, 天啓皇帝崩陳慰表, 明朝乾清坤寧二宮有火災進慰表	
		本國告訃表	
		請免金銀表, 請世子冕服表, 仁廟請諡表, 請諡表	
		方物表	
		賀皇太子箋, 賀千秋箋, 賀冬至箋, 賀冬至皇太子箋, 賀皇太子正位箋	
		皇太子殿謝恩箋	
		方物箋	
		方物箋	
2	表文	聖節表, 冬至表, 賀平寧夏賊劉東暘表, 擒播賊楊應龍頒詔進賀表, 皇太子誕生進賀表	379
		倭情辨誣降勅謝恩表, 解送鍋銃船隻降勅謝恩表, 傾覆使船收還謝恩表	
		仁聖皇太后崩逝陳慰進香表, 隆德殿延喜宮失火進慰表, 皇帝崩逝陳慰表	
		方物表	
		千秋箋, 建都北京龍馬出現松柏凝脂賀皇太子箋, 太上皇還京後賀皇太子箋, 皇太子冊立進賀箋	
箋文	辨誣降勅謝恩箋, 冊封世子降勅謝恩箋, 協討孔耿降勅獎諭謝恩箋, 獎諭降勅謝恩箋	379	
	方物箋		
3	奏文	請遣子弟入學奏, 收買弓角奏, 辨誣奏, 乞頒示會典奏文(辛巳), 陳倭情奏文(辛卯), 陳賊情奏文, 陳本國開府經理便否奏文, 復平壤獻捷奏文, 復開城後奏捷文, 李提督辨誣奏本	14
4	奏文	陳奏奏文, 請於京城平壤等處立畫像以報東征諸臣功勞奏, 賊情奏文, 冊封奏文, 請兵糧奏文, 賊情告急奏文, 歷陳開府設鎮屯田練兵築城等項難使事奏文, 經理楊鎬被參撤還請留奏, 築城事辨誣別奏	14

5	奏文	贊畫丁應泰奏本, 丁主事應泰參論本國辨誣奏, 請全給折色奏, 請誥命冕服奏, 貢獻人參乞用把參奏, 請復登州舊路奏文, 論毛鎮事情奏本	23
6	咨文	咨回宋經略應昌, 咨李提督如松, 咨劉總兵綖, 經略贊畫武庫清吏司員外郎劉黃裳職方清吏司主事袁黃前回咨, 遼東都指揮使司回咨	36
7	咨文	都督回咨, 孫閣部回咨, 陳都督移咨, 毛都督移咨, 王李兩都司回咨, 禮兵部軍門閣部衙門移咨, 張遊擊沈參將前回咨, 陳都督前咨文	46
8	揭帖	邢軍門前揭帖, 陳提督前賀帖, 帖劉員外黃裳, 擬同副承旨申點呈沈遊擊揭帖, 馮相公仲纓金相公相處揭帖, 平壤接待後呈李提督揭帖, 揭楊經理稿, 揭陳御史效, 賀揭麻提督貴, 揭陳總兵璘, 回揭祖摠兵承訓	91
9	揭帖	回揭龐參將渤, 揭陳同知登, 正使姜白廣回帖(丙寅), 副使王夢尹回帖, 爲副元帥鄭忠信揭劉興治帖, 楊都御史鎬前揭帖(庚戌)	141
	書	答呂參軍應鍾書, 與韓布政取善書, 與李提督如松書, 與宋經略應昌書, 答宋遊擊大斌書	
	啓文	啓正朝賀邢軍門啓(李延龜製), 啓賀邢軍門生辰啓	
	檄文	檄諭皮島檄(張維製), 檄諭島中檄文(李植製)	
10	呈文	百官呈司天使憲陳情文, 呈司天使陳賊情文, 呈兵部宋侍郎應昌文, 晉州陷後陳賊勢呈李提督如松文	35
	上書	上禮部郎中書, 上禮部尚書書, 上尙書第三書, 上禮部書, 上兵部書, 再上禮部書, 再上兵部書	
	帖文	揭帖, 申帖, 稟帖, 別帖	
11	呈文	通遠堡迎候李提督呈文, 薛行人慰諭回程後追到遼陽呈文, 申點上兵部石尙書星呈文, 遼東撫院山海關分司等衙門查還人口呈文, 山海關三次呈文	34
	上書	上禮部尙書書	
	帖文	禮部稟帖, 小稟, 稟提督主事陳公帖, 御史前稟帖, 中軍前稟帖	
12	呈文	呈徐給事文, 禮部因呈文題本, 反正初查官前通國臣民呈文, 兩天使前呈文, 貢路確黃事呈禮部, 請船糧兵器事呈高太監方軍門, 到寧遠因護送序班之回呈禮部	38
	上書	上李提督書, 上廣寧都御史李化龍書, 謝提督主事曾棟書, 上楊經理文	
	批文	軍門批	

* 동일한 명칭의 문서는 생략함.

비록 외교문서 자체의 정리는 아니지만, 대외관계에 관련한 국가적인 정리작업은 조선후기에 들어서 본격화되었다. 조선후기 대외관계서의 시작은 『攷事撮要』라 할 것이다. 吏文學官을 역임한 也足堂 魚叔權이 중종 9년(1514)에 事大交隣에 관련한 문제와 조선과 明의 官制를 정리한 『고사촬요』는 이후 선조 18년(1585)과 光海君 5년(1613)에 增補되었다. 구성에 있어 卷上에 大明紀年, 中朝忌辰, 本朝忌辰, 誕日, 進貢方物數目, 馬色, 中原進貢路程, 大明官制, 各省道里, 月支俸米, 文官服色, 武官服色, 文廟從享, 宗廟配享功臣, 本朝功臣名號 등 조명관계 및 조공의 자료로 참고하기 위한 목적으로 편찬되었다.¹³⁾

『고사촬요』이후 보다 체계적인 대외관계 서적의 편찬시도는 『통문관지』로 귀결되었다. 肅宗 때 司譯院 譯官인 金指南, 金慶門 부자가 司譯院의 연혁과 중국 및 일본과의 외교관계사항을 기록한 『통문관지』는 고사, 의식, 절차, 사실 등을 정리하는 것

13) 김경록, 「조선후기 ‘同文彙考’의 편찬과정과 성격」 『조선시대사학보』 32, 2005. 203쪽.

이 편찬 동기였다.¹⁴⁾ 조공체제에 있어 종합적인 지침서의 목적으로, 卷頭에 序文·目錄·引用書目이, 卷1에 沿革篇(官制·軍職·外任)·勸獎篇(譯科科擧·取才·考講·補關·褒貶·坐起節次·文壯書式), 卷2에 事大篇(中國에 使節을 보내는 節次·行사와 貿易開市·賓奏官 行次), 卷3에 事大篇(勅使의 迎接·宴享·儀式), 卷4에 交隣篇(日本使臣과 對馬島人이 올 때의 接待·開市·俸約), 卷5에 交隣篇(使節이 日本에 갈때의 定員·路資·圖書·書類·禮單·宴享·路程·儀式·回答書禮에 대한 規例), 卷6에 人物篇, 卷7에 故事篇·率屬篇·什物篇·書籍篇, 卷8에 紀年篇(1636년부터 1720년까지)의 체제를 갖추고, 지속적으로 增補·續刊되었다.¹⁵⁾ 이러한 속간은 시기별로 외교문제를 정리하여 외교정책의 수립 및 외교관계 설정을 합리적으로 하기 위해서였다.

외교문서의 정리 필요성은 조선후기에 지속적으로 제기되었다. 이는 표전식을 통해 확인된다. 조공체제에서 외교문서는 擡頭, 避諱, 종이, 포장 등에서 엄격한 형식이 요구되어 외교문서 자체가 외교사건화되는 경향까지 발생하였다. 특히 조명관계에서 발생하지 않던 외교문서의 외교사건화가 조·청관계에서 발생한 것으로 청의 중국통치에 있어 자주 발생하였던 文字獄과 대조선 강압적인 태도에 기인하였다.¹⁶⁾

조선후기 외교문서에서 발생하는 문제에 대해 청은 罰銀을 부과하여 질타하였으며, 1705년(숙종 31)에는 이례적으로 청 예부에서 조선의 외교문서가 매년 정해진 형식에 맞지 않도록 문사를 변경하여 문제를 발생시키니 이후로 내각에서 편찬한 표전성식에 의거하여 작성하라는 자문을 조선에 전달하였다.¹⁷⁾ 1658년(효종 9)부터 1776년

14) 김경록, 2005, 위 논문. 204~205쪽; 기타 『통문관지』에 관련한 편찬 및 간행에 관련한 사항은 다음 연구를 참조할 것. 김종원, 「통문관지의 편찬과 중간에 대하여」 『역사학보』 26, 1965; 김운제, 「규장각 소장 ‘통문관지’의 간행과 판본」 『규장각』 29, 2006; 이영춘, 「통문관지의 편찬과 조선후기 한중관계의 성격」 『실학사상연구』, 2007.

15) 현존하는 續刊은 紀年篇(인조14-숙종46)을 권9로 하고, 경종 1년(1721)-정조 2년(1778)까지 紀年 기사를 권10으로 續紀年으로 新增續纂한 것(奎812), 정조 20년(1796)에 속간하여 정조 3년(1779)부터 정조 19년(1795)까지의 기사가 추가되었고(奎796), 순조 3년(1803)에 11卷 4冊으로 순조 2년(1802)까지의 기년을 증보하였으며(奎1006), 철종 3년(1852)까지(奎884), 철종 12년(1861)까지(奎 795), 고종 11년(1874)까지(奎 551), 고종 18년(1881)까지(奎 883), 고종 25년(1888)까지(奎 882)의 紀年記事를 수록하였다.

16) 청대 문자옥에 관련해서는 다음 연구를 참조할 것. 趙志毅, 「清代文字獄辨」 『東南文化』 1997-3期; 李凌, 「乾隆時期的文字獄」 『炎黃春秋』 2001-8期; 李岩, 「清初文字獄初探」 『揚州職業大學學報』 2002-3期; 黃少卿, 「明清文字獄及其對文化發展的影響」 『滄州師範專科學校學報』 2003-1期; 蕭茜, 「清代文字獄案研究」 武漢大學碩士學位論文, 2004; 李博, 「從文字獄案件看清朝皇權與法律的關係」 西南政法大學碩士學位論文, 2006; 姜寧, 「乾隆朝生員文字獄研究」 遼寧大學碩士學位論文, 2006; 李潤強·牛黎芳, 「清初士人的明史意識與康熙朝文字獄」 『甘肅廣播電視大學學報』 2007-1期; 黃文斌, 「再論清代文字獄」 『邊疆經濟與文化』 2007-2期; 呂立忠, 「清代乾隆時期廣西的文字獄」 『廣西社會科學』 2008-5期.

17) 『燃藜室記述』 卷5, 事大典故, 奏箋.

(영조 52)까지 조선에 전달된 표전식은 18건이고, 다른 항목을 참조하도록 한 경우까지 합하면 94건이다. 118년 동안 94건의 表箋式이 조선에 전달되어 거의 매년 문서 형식이 바뀌는 상황에서 외교문서의 작성에 어려움이 많았다. 점차 외교문서의 보다 체계적인 정리가 필요하였다.¹⁸⁾

또한, 인조대에서 숙종대까지 지속적으로 반청의식의 기반위에서 조선은 스스로 小中華를 자처하고, 對明義理論을 내세웠다.¹⁹⁾ 효종대에서 숙종대까지 이어졌던 반청의식을 바탕으로 한 북벌론은 숙종대 이후 급속하게 소멸되고, 현실적인 강대국으로 청을 인정하고 청의 선진적인 문물을 받아들여야 한다는 인식이 확산되었다. 이 과정에서 조·청관계의 외교문서를 일괄적으로 정리하여 현실적인 외교사건에 체계적으로 대응할 필요성이 대두하였다. 정조대 세자책봉을 위한 칙사를 맞이하는 의주를 논의하는 과정에서 정조는 칙사를 접대하는 의례를 정리하여 후일에 상고하도록 명하였다.²⁰⁾ 이에 호조판서 鄭昌順과 前公事提調 李崇祐는 해당 낭청과 역관들을 모아 사대문서를 成冊하는 작업을 시작하였다. 이것이 『同文彙考』의 당면한 편찬배경이 되었다. 당시 정조는 대청관계에서 문제시되었던 외교문서의 작성 및 형식문제에 대한 명확한 전거를 세워 대비하고, 즉위이후 영조대의 문화정책을 계승하면서 시행되었던 서적편찬 작업의 일환으로 『동문회고』를 편찬하고자 하였다.²¹⁾

『同文彙考』는 承文院臚錄 중에서 仁祖이후의 事大-交隣에 관한 외교문서를 정리 출판한 것으로서, 中華를 중심으로 教化를 넓혀 中華體制를 이룬다는 『中庸』의 관념이 기본적인 전제로 편찬된 외교문서집이다. 정조 12년(1788)에 출간된 初編 60冊과 그 후에 속간된 續編 36冊으로 구분되는데, 初編은 정조 8년(1784) 10월 왕명에 따라 4년에 걸쳐 중국-일본과의 事大-交隣關係에 관한 詔, 表, 咨文, 使臣別單, 國書, 書契 등을 項目別로, 년차로 분류 편찬하여 정조 12년에 완성된 책이다.²²⁾

『동문회고』의 25개 항목은 조선이 대중국관계의 전례를 분류한 것으로 조·중관계에서 발생하는 개별 사건을 범주화한 것이다. 이러한 범주화된 외교사건들은 외교사안이라 정의할 수 있다. 즉, 조선은 대중국관계에서 발생하는 각종 사건을 25개 사안

18) 조선 후기 외교문서의 외교사건화 경향과 이에 대한 조선의 대응에 관련하여 김경록, 「조선후기 사대문서의 종류와 성격」 『한국문화』 35, 2005. 참조.

19) 정옥자, 『조선후기 조선중화사상연구』, 일지사, 1998. 100~103쪽.

20) 『정조실록』 권18, 정조 8년 10월 경인.

21) 『정조실록』 권18, 정조 8년 10월 신묘.

22) 김경록, 「조선후기 ‘동문회고’의 편찬과정과 성격」 『조선시대사학보』 32, 2005. 188~191쪽.

<표 2> 『同文彙考』 항목구성

初編			續編		
原編	別編	補編	附編		
封典: 권1-4	封典-進賀-陳慰: 권1	使臣別單(書狀官聞見事 件-譯官手本): 권1-6	陳賀: 권1	原編권61 原續권62-78 原編續권86-94	
哀禮: 권5-6			陳慰: 권2		
進賀: 권7-15			告慶(關白事): 권3		
陳慰(進香): 권16			告慶(島主事): 권4		
問安: 권17			告訃(關白事): 권5		
節使(歲幣-方物): 권18-32	節使-請求-錫賚-鑄弊: 권2	使行錄: 권7	告訃(島主事): 권6	補編續권79	
陳奏(辨誣-討逆): 권33-34			告還: 권7		
表箋式: 권35			通信: 권8-9		
請求: 권36			進獻: 권10-21		
錫賚: 권37			請求(我國事): 권22		
鑄弊: 권38-40		事大文書式: 권8	事大文書式: 권8	請求(日本國事): 권23	附編續권80-85
飭諭: 권41				約條: 권24	
曆書: 권42				邊禁: 권25	
日月食: 권43-44				爭難: 권26	
交易: 권45-47				替代(裁判事): 권27	
疆界: 권48	勅諭-交易-犯越-刷還: 권3	詔勅錄: 권9	替代(館守事): 권28	附編續권95-96	
犯越: 권49-62			漂民: 권29-35		
犯禁: 권63-64			雜令(文書式附): 권36		
刷還: 권65					
漂民: 권66-73					
推徵: 권74-75	軍務-倭情-雜令: 권4	迎勅儀節: 권10			
軍務: 권76					
賻恤: 권77					
倭情: 권78					
雜令: 권79					

으로 분류하고 이에 대한 대응을 효과적으로 하기 위해 방대한 『동문회고』를 편찬하였다. 『동문회고』의 분류항목의 수록된 문서분량을 기준으로 정리하면 다음 표와 같이 ‘節使’, ‘犯越’, ‘進賀’, ‘漂民’, ‘封典’이 상대적으로 높은 빈도로 분류됨을 알 수 있다. 이들 항목은 외교사안으로 ‘필연적 외교사안’과 ‘실질적 외교사안’의 2가지 형태로 구분할 수 있다.²³⁾

23) 최소자, 『청과 조선』 해안, 2005. 22~23쪽. 『동문회고』의 항목분류를 의례적인 관계와 실질적인 관계로 구분하는 연구도 있다. 본 글에서 의례적인 외교사안이란 용어를 배제하는 것은 단순히 항목명칭이 의례에 관련되었을 뿐이지, 해당 항목에 수록된 문서를 분석해보면 조·청간에 치열하게 전개되었던 외교활동이 고스란히 포함되어 있기 때문이다. 또한, 외교사건은 단편적인 것이 아니라 상호 밀접한 연관성을 가진다. 세자의 죽음을 통보하는 것은 단순한 사실통보가 아닌 차후에 이루어지는 새로운 세자책봉을 주청하는 과정을 충분히 고려하여 외교문서가 작성·전달되

<표 5> 『同文彙考』 原編의 項目 卷數

구분	권수	항목
原編	15권	節使(歲幣-方物)
	14권	犯越(我國人 11권, 中國人 3권)
	9권	進賀
	8권	漂民(我國人 4권, 中國人 4권)
	4권	封典
	3권	鑷弊, 交易
	2권	陳奏(辨誣-討逆), 犯禁, 推徵, 哀禮, 日月食
	1권	陳慰(進香), 問安, 表箋式, 請求, 錫賚, 飭諭, 曆書, 疆界, 刷還, 軍務, 賻恤, 倭情, 雜令
합	79권	25항목

필연적 외교사안은 ‘封典’, ‘哀禮’, ‘進賀’, ‘陳慰’, ‘問安’, ‘節使’, ‘表箋式’, ‘曆書’, ‘日月食’ 등과 같이 정례적인 성격이 강한 사안이다. 正朝, 冬至, 聖節과 같은 節日에 정기적으로 이루어지는 것으로 조공체제의 국제질서에서 조선이 필연적으로 대응해야 하는 외교사안이다. 대체적으로 일정한 주기성을 가지며, 조공체제의 핵심내용인 책봉과 조공을 행하는 것으로 국내적으로 조선 국왕과 왕실의 정통성문제와 관련되어 중시되었다. 이러한 필연적 외교사안은 대외적으로 책봉·조공과 연관되고, 대내적으로 왕실의 정통성과 관련되기 때문에 형식상으로 의례적인 모습이지만, 가장 정치적인 성격을 내포한 사안이다. 조선후기에 빈번하게 발생한 왕위계승의 문제와 관련하여 필연적 외교사안은 국내외적으로 큰 정치적 파장을 가져왔다. 특히, 전통시대에 의례행위 자체가 정치행위라는 점을 감안한다면 국내 정치의 외적 표현으로 외교사안으로 필연적 외교사안은 대내외적인 정치·외교사안이다.

이에 비하여 실질적 외교사안은 ‘陳奏’, ‘請求’, ‘錫賚’, ‘鑷弊’, ‘飭諭’, ‘交易’, ‘疆界’, ‘犯越’, ‘犯禁’, ‘刷還’, ‘漂民’, ‘推徵’, ‘軍務’, ‘賻恤’, ‘倭情’, ‘雜令’ 등과 같이 긴박한 국제관계에서 부정기적으로 발생하는 외교사안이다. 조·중간에 발생할 수 있는 다양한 외교사건에 대한 조선과 중국의 외교입장 및 대응의 구체적인 표현으로 국제정세의 변화와 국내 정치·사회·경제적 상황에 따라 발생한다. 실질적 외교사안

는 것이며, 국왕의 죽음이나 왕비의 책봉 등 모든 외교문제가 정치적 성격을 강하게 지닌다. 봉전이나 절사처럼 정례적으로 이루어지는 사행이라도 중대한 정치·외교적 의미를 내포한 사행이 많다. 정조사를 파견하는 것은 정례적이지만, 명·청교체기나 국내 정치상황이 복잡한 경우에는 정조사의 등급을 상향시켜 중요인물을 파견함으로써 대중국관계를 보다 원만히 해결하고자 하였다. 즉, 일반적으로 의례적이라 인식하는 외교활동이나 사건은 기본적인 속성에 있어 정치적이고 정례적이기 때문에 본 글에서는 의례적이라는 용어보다 필연적이란 용어로 규정하고자 한다.

은 필연적 외교사안보다 형식과 내용에 있어 국익을 우선시하는 경향성이 강하며, 조선과 중국이 어떠한 외교목적을 설정하느냐에 따라 단순 사안이 더 국익을 우선시하는 정치·외교적 성격이 강하며, 조·중간의 외교목적을 어떻게 설정하느냐에 따라 단순 외교사안이 다른 외교사안과 복잡하게 연관되기도 한다. 실질적 외교사안은 형식적인 측면이 약하고 실질적인 국익문제이며, 조선과 중국의 다양한 정치·경제세력이 얽혀 다양한 방향으로 사안이 전개되어 체계적인 정리가 되어 있지 않으면 명분과 실리에서 큰 손실을 초래할 수 있다. 이러한 측면에서 조선은 각종 실리적인 외교사안을 범주화하여 인식함으로써 효율적인 외교정책 및 외교활동을 취하고자 하였다.

청에 대한 인식은 儀軌제작에서도 확인할 수 있다. 의궤는 조선시대에 국가적 행사를 준비하고 관리하는 전담 기구를 설치하여 국왕과 관련기관에 행사의 전말을 기록과 그림으로 남긴 보고서 형식의 책이다.²⁴⁾ 중국 사신이 出來하면 조선은 국가적인 행사로 접대업무를 전담할 迎接都監을 설치하여 총괄하도록 하였다. 영접도감은 영접업무를 모든 사항을 의궤로 기록하여 국왕에게 보고한 다음에 활동을 종료하였다. 明使의 출래에 대해서는 의궤를 제작하여 보고하였지만, 淸使의 출래에 대해서는 등록 형식으로 정리하였다.

현존하는 영접도감의궤 16종 27책이 모두 明使에 관련한 것이며, 청사에 관련한 『勅使茶禮儀』, 『勅使膳錄』, 『勅使時各項儀註膳錄』, 『勅使宴禮膳錄』, 『勅使儀註膳錄』, 『勅使日記』, 『勅使贈給』 등은 모두 등록이다.²⁵⁾ 의궤청을 설치하여 제작된 의궤는 공식적인 기록이라는 점에서 등록과 유사하지만, 엄연히 기록의 격에 있어 차이가 있었다. 청사접대관련 기록물은 의궤가 아닌 등록으로 정리하되 의궤의 형식과 체제를 적용하였다.²⁶⁾ 이들 기록물의 정리는 광해군대까지 明使접대 기록의 『儀軌』편찬기, 광해군대에서 인조대까지 의궤와 등록의 혼합기, 인조 후반이후 『勅使膳錄』의 작성기, 전반적인 대청관계 기록의 정리로써 『同文彙考』의 편찬기 등으로 구분할 수 있다.

조선은 대중국 관계의 체계적인 외교를 위해 조선초기부터 외교문서를 정리하였으며, 명청교체이후 부정적인 대청인식을 반영한 청사접대 기록물 정리가 이루어졌다.

24) 김문식·신병주, 『조선 왕실기록문화의 꽃 의궤』 돌베개, 2005. 20~28쪽.

25) 『勅使茶禮儀』(想白古 394.4-C435); 『勅使膳錄』(奎 12904); 『勅使時各項儀註膳錄』(奎 12906-1); 『勅使宴禮膳錄』(奎 12918); 『勅使儀註膳錄』(奎 12906); 『勅使日記』(奎 12799); 『勅使贈給』(奎1312).

26) 김경록, 「조선시대 사신접대와 영접도감」 『한국학보』 117, 2004. 94~96쪽. 청사접대를 책별로 1책씩 기록하고, 날짜와 座目(行都承旨, 左·右承旨, 左·右副承旨, 事變假注書)을 기입한 뒤 날짜별로 내용(영접도감과 해당 관아사이에 왕래한 문서 등)을 기록하였다.

그러나 현실 조·청관계에서 발생하는 각종 외교사건에 효율적인 대응을 위해 사신 접대와 사행에 관련한 내용은 『通文館志』로 일괄 정리하고, 외교문서는 25개의 체계적인 외교사안별로 『同文彙考』를 정리하였다.

3. 병자호란 전후 조·청관계와 청 중심 조공체제의 성립

인조반정으로 집권한 서인정권은 대외적으로 명·청에 대한 중립외교와 대내적으로 廢母殺弟 등 광해군의 폭정을 대대적으로 비판하고 성리학적 명분론을 내세워 성립되었다. 명은 대외적으로 후금의 대대적인 공세로 瀋陽과 遼陽이 점령당하는 등 국가적인 위기상황이었으며, 대내적으로 위충현이 동창의 장관으로 정권을 농락하는 등 혼란상황에 있었다. 명은 후금과 전쟁에 임하는 입장에서 인조의 서인정권을 승인하고 誥命을 조선에 전달하였다. 여말선초의 조선 건국과 같은 상황은 아니었지만, 反正이라는 비상한 수단으로 성립된 서인정권은 국제정세에 어느 정도 도움을 받아 정권 승인을 받아 광해군대 일시적으로 이탈조짐을 보였던 명 중심 조공체제에 속하였다.

1627년(인조 5)의 정묘호란으로 국제체제는 명 중심의 조공체제를 유지하였지만, 조·후금관계는 변화하였다. 후금은 요동을 장악한 뒤, 가장 큰 위협세력이었던 몽고에 대해 투항을 유도하며, 반명 연합전선을 형성함으로써 대몽고 영향력을 강화하였다.²⁷⁾ 전면적인 대명 전쟁을 시작하기 전, 후금은 조선과의 관계를 새롭게 정립할 필요성에서 전격적으로 정묘호란을 감행하였다.²⁸⁾ 이 시기 조·후금관계는 정묘호란으로 체결된 약조를 통해 파악할 수 있다. 平山에 진주한 阿敏의 후금군은 胡差 劉海를 통해 강화도의 인조정권을 압박하여 인조의 告天儀式을 강요한 江都約誓는 다음과 같다.

“朝鮮國王 以今丁卯年某月日 與金國立誓 我兩國已講定和好 今後各遵約誓 各守封疆 毋爭競細故 非理徵求 若我國 與金國計仇 違背和好 興兵侵伐 則亦皇天降災 若金國仍起不良之心 違背和好 興兵侵伐 則亦皇天降禍 兩國君臣 各

27) 노기식, 「후금시기 만주와 몽골의 연맹 관계」 『명청사연구』 11, 1999. 14~26쪽.

28) 김종원, 『근세 동아시아관계사 연구』 해안, 1999. 84~85쪽. 후금은 심양, 광녕 등 요동의 전략적 요지를 차지하고, 조선과 우호관계를 맺어 경제적이고 전략적인 이득을 얻고자 하였다.

守信心 共享太平 皇天后土嶽瀆神祇 監聽此誓²⁹⁾

인조와 후금 사이의 誓文, 유해와 조선대신 사이의 誓文 등을 읽는 것으로 약조의 식은 진행되었다. 誓文에서 주목되는 부분은 조선과 후금이 상호 和好를 講定하고 封疆을 수호하여 爭鬪하지 않는다는 것으로 군사적 침범을 불가한다는 내용이다. 특히, 各守封疆의 封疆은 封典받은 疆域이라는 의미로 조선에서 사용하였다. 봉전은 원래 책봉국으로부터 제후국이 국왕으로 책봉받는 것을 의미하는 것이며, 책봉과 동시에 일정한 강역이 규정된다. 조선의 입장에서 강도약서를 후금과 체결하면서 책봉국으로 명의 존재를 인정하면서 같은 조공국으로 후금을 인정하고자 하였던 의도였다. 이는 후금의 입장에서 정묘호란을 통하여 의도하였던 외교적 목적이 講定和好하여 各守封疆함으로써 기존 명 중심의 조공체제에서 후금의 국제적 위상을 상승시키고 조선에 대한 견제였음을 의미한다.

강도약서이후 철군과정에서 체결된 平壤約誓는 외교적 성과를 추가하고자하는 후금의 의도를 보여준다.³⁰⁾ 철군하던 후금군은 후금의 태종에게 강도약서의 내용을 보고하자 태종은 모문룡에 대한 견제를 위해 일부군대의 義州, 鎭江 등지 주둔을 지시하였다.³¹⁾ 또한, 후금의 조정은 조선과의 강화에 대한 논쟁이 벌어져 명확한 태도를 보이지 못하였다.³²⁾ 이에 아민은 王弟로 假稱하여 심양에 데려가던 종실 李覺을 위협하여 평양에서 추가조항을 담은 약서를 체결하였다.³³⁾

“... 自盟之後 朝鮮國王李倧 應進滿洲國皇帝禮物 若違背不進 或不以待明國使臣之禮 待滿洲國使臣 仍與滿洲結怨 修築城池 操練兵馬 或滿洲俘獲編入戶口之人 逃回朝鮮 容留不行遣還 或違王所言 與其遠交明國 毋寧近交滿洲之語

29) 『인조실록』 권15, 인조 5년 3월 경오.

30) 평양약서의 경우, 정확하게 언제 작성되었는지 확인할 수 없다. 그러나 강도약서가 작성된 3월 3일 이후 청의 서문등본이 조선에 전달된 21일 사이에 작성된 것으로 보인다. 또한, 아민의 군대가 청천강을 건너간 17일 이전에 작성된 것으로 보인다.

31) 『청태종실록』 권2, 천총 원년 3월 을유. 만주군 1,000명과 몽고군의 2,000명 등을 義州에, 만주병 300명과 몽고병 1,000명을 鎭江에 주둔시켰다.

32) 『청태종실록』 권2, 천총 원년 3월 신사. 조선원정군의 阿敏이 전황 및 강화여부를 청 태종에게 보고하자 청 태종은 악탁 등 팔기대신을 소집하여 회의하였지만 결론을 쉽게 내리지 못하다가 강화를 허가하였다.

33) 『청태종실록』 권10, 천총 원년 5월 경오. “至每年 往來之禮 王自知之 自丁卯年 平壤盟誓之後 若有爾國人民 逃歸我國 我即緝以還汝 我國之滿洲漢人及陣獲朝鮮之人 逃至爾國 爾即緝以歸我 若隱匿不還 恐釁端漸開 兩國和好之事 又無益矣”

當告諸天地 征伐之 …”³⁴⁾

위 추가조항의 요지는 평양약서 이후 明使와 동등하게 후금사신을 대우할 것, 국방을 함부로 강화하지 말 것, 만주에서 도망한 사람을 刷還할 것, 명과 교유하지 말 것 등이었다. 이 가운데 실질적인 후금의 관심사는 쇄환문제였다. 후금의 입장에서 요동을 안정시키고, 향후 진행될 명과의 전쟁에서 필수적인 인구의 확보가 최우선 관심사였다. 그래서 요동에 거주하던 漢人이나 조선에서 被擄되어 온 조선인이 도망하여 조선에 오는 경우를 방지하고자 하였다. 또한, 절차상에 있어 평양약서는 인질과 같은 처지의 이각을 강압하여 체결한 것으로 국왕의 전권적인 승인을 획득하지 않아 이조·청 양국간에 외교적인 마찰을 일으키는 요소였다.³⁵⁾

조선의 입장에서 정묘호란으로 체결된 2개의 약조에 대해 시세의 불리함으로 인해 체결한 것이며, 약서의 내용을 전적으로 인정하지 않았다. 이는 평양약서를 접하고 인조가 대신과 인견한 자리에서 강도약서와 평양약서의 내용이 차이가 많다고 지적하자 최명길은 후금도 조선이 약서내용을 따르지 않을 것을 알 것이라고 언급한 것을 통해 알 수 있다.³⁶⁾ 결국 조선은 명 중심의 조공체제를 유지하고 군사적으로 강력한 후금의 공세를 무마시키고자 하였다. 후금은 조선을 압박하여 조·명 共助를 외세시키고 형식적이지만 조·후금의 和好체제를 형성함으로써 피로인 쇄환 등 현실적인 이득을 얻고자 하였다.

조선이 청 중심의 조공체제라는 새로운 국제질서에 편입되어 조·청관계의 새로운 외교체제가 형성된 것은 병자호란 이후였다. 병자호란의 결과는 결코 단순히 새로운 조공체제로의 편입을 의미하는 문제가 아니라 국내외적으로 다양한 문제를 발생시켰다. 국내적으로 삼전도의 치욕적인 항복의식은 국왕 인조의 정치적 권위를 근본적으로 훼손시켜 인조는 척화파 배척과 친청파 반정공신의 중용 등 친청 행보를 보이게 되었으며, 소현세자를 비롯한 인질은 국왕 뿐만 아니라 지배층의 정치·사회·경제적 손상을 초래하여 혼란상황을 초래하였다.³⁷⁾ 대외적으로 청에 굴복한 사실은 조선과

34) 『청태종실록』 권2, 천총 원년 3월 을유. 아민이 평양에서 서문을 다시 개정하고자 하였던 것은 명분상으로는 조선군대의 위협 등 조선국왕이 강도약서를 제대로 이행하지 않았기 때문이라고 하지만, 내용이 귀순인구의 쇄환과 명과 동등한 대우 등인 점으로 보아 강도약서의 내용에 대한 불만이 근본원인이라 볼 수 있다.

35) 陳捷先, 「略論天聰年間後金與朝鮮的關係」 『東方學志』 23-24, 1980. 331쪽.

36) 『인조실록』 권15, 인조 5년 3월 무자.

37) 한명기, 「병자호란 패전의 정치적 파장 -청의 조선 압박과 인조의 대응을 중심으로-」 『동방학지』 119, 2003. 73~82쪽.

교린체제를 유지하던 일본과의 관계 설정에 영향을 주어 임진왜란 이후 강력한 대일 정책을 취하지 못하게 되었다.³⁸⁾

병자호란의 결과로 체결된 丁丑約條는 청 태종의 詔諭를 그대로 옮겨놓은 것으로 ① 君臣의 信義, ② 明과 단절, ④ 후금의 正朔을 받들 것, ⑤ 세자와 대신의 자제를 인질로 삼음, ⑥ 征明의 助兵, ⑦ 椴島의 공격에 助兵, ⑧ 청군의 철병에 犒軍, ⑨ 후금에 사신 파견, ⑩ 명과 동일한 의례준수, ⑪ 속환·쇄환, ⑫ 후금의 諸臣과 和婚, ⑬ 築城금지, ⑭ 兀良哈의 刷還, ⑮ 日本을 조회하도록 할 것 등이었다.³⁹⁾

약조에서 주목되는 것은 세자의 인질이다.⁴⁰⁾ 초기 심양관을 활용한 대조선정책은 단순한 내정간섭의 수준을 넘어 조선의 정국을 분열시켜 청의 征明전쟁에 적극적으로 활용하고자 하였다.⁴¹⁾ 실제 심양관은 分朝로서의 역할을 충실히 수행하여 조·청 관계에서 현안으로 등장한 속환인 문제, 군사동원 등을 원만히 해결하는 성과를 거두었다. 그러나 심양관의 존재는 외교적으로 이중성을 내포하는데, 청의 입장에서 심양관을 통한 대조선 정책의 시행을 통하여 인조를 비롯한 조선 정부를 압박할 수 있었다.⁴²⁾

청 중심의 조공체제가 성립되는 시기의 조·청관계에서 이전의 조명관계와 다른 특징으로 청의 강압적인 대조선정책을 들 수 있다. 강압적인 대조선정책은 철저한 군비강화의 금지, 과도한 세폐요구, 조병요구, 贖還·刷還문제, 瀋陽館문제, 罰銀사례 등을 통해 확인할 수 있다. 과도한 세폐요구는 청의 대조선정책을 잘 보여주는 것으로 정명전쟁의 과정에서 경제적 어려움을 극복하는 방안으로 설정되었지만, 중국 대륙을 장악한 뒤 삼번의 난에 동조하지 않는 조선의 외교적 태도를 확인하고 점차 완화시켜 조선으로 하여금 청 중심의 조공체제에 안주하도록 의도하였다.

조선은 인조말엽에서 효종초반에 군비강화의 금지와 심양관문제 등에 대해 倭情을 새로운 외교사안으로 제기하여 극복하고자 하였다. 동아시아의 조공체제를 확립하고 천자국으로 위상을 강조하려는 청은 일본의 입조를 강력하게 원하였다. 이에 조선을 통해 일본에 관련된 다양한 정보를 수집하고자 하였다. 조선은 일본의 정세가 불안하고, 조선에 위협이 됨을 강조함으로써 조선의 군비강화가 필요하다는 논리를 폈다.⁴³⁾

38) 한명기, 「영조대 왜관문제와 이이장」 『역사문화논총』 3, 2007. 118~122쪽.

39) 『인조실록』 권34, 인조 15년 1월 戊辰.

40) 전해중, 「清代韓中關係의 一考察」 『東洋學』 1, 檀國大 東洋學研究所, 1971. 230-231쪽.

41) 송미령, 「입관 전 청조의 심양관 통제양상」 『명청사연구』 30, 2008. 132~141쪽.

42) 김용덕, 「소현세자 연구」 『사학연구』 18, 1964. 449쪽.

43) 『同文彙考』 原編, 卷78, 倭情. 飭虛張倭情勅; 辨明倭情飭諭及一表兼謝恩奏.

왜정사안을 통한 조선의 군비강화 노력은 조선의 반청의식을 의심한 청에 의해 좌절되지만, 대일본 사안을 대청사안에 접목하여 외교적으로 활용하고자 하였던 조선의 외교활동은 조선시대 외교사안의 다양한 연계성을 보여주는 사례이다.

罰銀事例는 조·청관계의 일면을 보여주는 것으로 국내적인 징계사항에 대해 처벌의 의미로 부과되는 것이 별은이다.⁴⁴⁾ 물론 명대에도 별은제도가 있었지만, 조선인과 조선국왕에 대해서 별은을 부과한 사례는 없었다. 이에 반하여 청은 다음과 같은 다양한 사례에 걸쳐 조선에 별은을 부과하여 독립된 번국으로 인정하면서도 직접적인 통치의 영역으로 일부 인식하였던 것으로 보인다.

1685년(숙종 11) 韓得完 등 三水郡 사람 28명이 강의 건너 산삼을 채취하고 청나라 관리 등을 상해시킨 사건이 발생하자 護軍總領 修保 등이 조선에 와서 숙종과 동석하여 한득완 등 해당자 6명을 斬刑에 처하고 金太成 등 22명을 처벌하였다.⁴⁵⁾ 이에 숙종에게 罰銀 2만냥을 부과하였다.⁴⁶⁾ 진주사 鄭載崙이 별은조치의 부당함을 아뢰는 辨解書를 예부에 제출하였다가 청 조정의 반감을 사기도 하였다. 1690년(숙종 16) 4월 조선 鐘城人 林戒先 등 6명이 두만강 北岸에서 청나라 探蓼人과 馬匹을 살해하고 산삼을 훔친 사건이 발생하자 청나라에서는 內閣學士兼禮部侍郎 西安一을 파견하여 관련자를 참수하고, 妻子는 노비로 삼았다. 또한, 관련 관리는 革職·流刑되었으며, 숙종에게 별은 1만냥이 부과되었다.⁴⁷⁾

進賀사안의 경우, 아래 표와 같이 청의 건국이후 중국대륙을 완전히 장악하는 과정에서 다양하게 조서가 반포되었다. 이 가운데 경축의 의미가 있을 경우, 조선은 진하사안으로 인식하고 進賀使를 파견하였다. 인조대에서 숙종 초반까지 진하사안은 대체로 討平, 追崇(追尊號), 冊立 등이었다. 또한, 청 건국 초기의 혼란한 정치상황을 반영하는 섭정왕의 권력, 강희제의 친정조서 반포 등을 살펴볼 수 있다. 특히, 청의 중국대륙 평정에 관련한 오삼계의 항복, 南明의 平定, 三藩의 난 진압 등과 같은 토평내용과 각종 추송사업을 대대적으로 조선에 전달한 것은 천자국으로 청의 권위를 표방하여 조·청관계를 명실상부한 조공체제로 전환하려는 의미가 있었다.

44) 『皇清開國方略』 卷14, 太宗文皇帝; 『欽定大清會典則例』卷32, 戶部.

45) 『同文彙考』 原編, 卷51, 犯越. 禮部知會犯越人等嚴查候審咨.

46) 『청세조실록』 권124, 강희 25년 2월 정해; 권125, 강희 25년 4월 을축; 권126, 강희 25년 윤4월 을축; 권127, 강희 25년 9월 을해

47) 『동문휘고』 원편, 범월, 「馳報慶興民犯越咨」

<표 6> 仁祖~肅宗初期 對淸 進賀事案

구분	연도	문서명
1	1644년(인조22)	頒吳三桂出降勅, 頒入燕勅, 賀入燕京表, 兼賀入關入燕緣由咨
2	1644년(인조22)	頒建國號定都紀元詔, 賜緞勅, 頒尊諡崇德皇帝詔, 頒崇德皇帝崩逝詔, 賀建國號及尊諡表
3	1648년(인조26)	頒追尊四世詔, 賜緞勅, 賀追尊表, 謝賜緞表
4	1650년(효종1)	頒追尊攝政王母皇后祔廟詔, 賜緞勅, 賀追尊祔廟表, 謝賜緞表, 攝政王前賀追尊祔廟表, 攝政王前謝賜緞表
5	1651년(효종2)	頒躬親大政詔, 賜緞勅, 頒皇太后尊諡祔廟詔, 賜緞勅, 頒尊號皇太后詔, 賜緞勅, 頒追討攝政王詔, 賀親政表, 謝降勅兼賜緞表, 賀諡祔表, 謝賜緞表, 賀尊號表, 謝頒詔賜緞減貢表, 謝頒追討攝政王詔表
6	1651년(효종2)	頒冊立皇后詔, 頒尊號皇太后詔, 賜緞勅, 賀冊立表, 賀尊號表, 謝頒詔賜緞表
7	1654년(효종5)	頒繼立皇后詔, 頒廢后詔, 頒尊號皇太后詔, 賜緞勅(文闕), 賀冊立表, 賀尊號表, 謝頒詔賜緞表
8	1656년(효종7)	頒尊號皇太后詔, 賜緞勅, 賀尊號表, 謝頒詔賜緞表
9	1657년(효종8)	頒太祖太宗配祀天地詔, 賜緞勅, 賀配祀表, 謝頒詔賜緞表
10	1657년(효종8)	頒生皇子詔, 頒皇太后平復詔, 賜緞勅, 賀生皇子表, 謝頒詔表, 賀平復表, 謝頒詔賜緞表
11	1661년(현종2)	頒康熙皇帝登極詔, 賜緞勅, 賀登極表, 謝頒詔賜緞表
12	1661년(현종2)	頒尊諡順治皇帝詔, 頒順治皇帝崩逝詔, 賀尊諡表
13	1662년(현종3)	頒平定南方詔, 賀捷表
14	1662년(현종3)	頒尊號太皇太后皇太后皇太妃詔, 賜緞勅, 賀尊號表, 謝頒詔賜緞表
15	1665년(현종6)	頒冊立皇后詔, 頒尊號太皇太后皇太后詔, 賜緞勅, 賀冊立表, 賀尊號表, 謝頒詔賜緞表
16	1667년(현종8)	頒躬親大政詔, 賜緞勅, 賀親政表, 謝賜緞表
17	1667년(현종8)	頒順治皇帝配祀及尊號太皇太后皇太后詔, 賜緞勅, 賀配祀尊號表, 謝頒詔賜緞表
18	1669년(현종10)	頒太和殿告成詔, 賜緞勅, 賀宮殿告成表, 謝頒詔賜緞表
19	1670년(현종11)	頒尊諡皇妣祔廟詔, 賜緞勅
20	1671년(현종12)	頒展謁園陵詔, 賀展謁園陵表
21	1674년(현종15)	頒冊諡皇后詔, 賀冊諡表
22	1675년(숙종1)	賀捷蒙古表進呈緣由咨, 賀捷表
23	1675년(숙종1)	頒冊立皇太子詔, 賜緞勅, 頒尊號太皇太后皇太后詔, 賜緞勅, 賀冊立表, 賀冊立箋, 謝頒詔賜緞表, 謝頒詔賜緞箋, 賀尊號表, 賀尊號箋, 謝頒詔賜緞表, 謝頒詔賜緞箋
24	1677년(숙종3)	賀逋臣歸命表, 賀逋臣歸命箋
25	1677년(숙종3)	頒冊立皇后詔
26	1678년(숙종4)	頒冊諡皇后詔, 賀冊諡表, 賀冊諡箋(文闕)
27	1678년(숙종4)	頒皇太子平復詔, 賀平復表, 賀平復箋(文闕)
28	1681년(숙종7)	頒討平吳世璠詔, 頒尊號大皇太后皇太后詔, 賜緞勅, 賀捷表, 賀捷箋(文闕), 賀尊號表, 賀尊號箋(文闕), 謝頒詔賜緞表, 謝頒詔賜緞箋
29	1684년(숙종10)	頒世際昇平詔, 謝頒詔表, 謝頒詔箋

* 근거 : 『同文彙考』 原編, 卷7~10, 進賀1~4

광해군의 ‘背明通胡’를 懲治한다는 명분으로 집권한 인조정권은 병자호란과 새로운 조·청관계의 성립으로 정치적 권위를 상실하게 되었으며, 조선은 정치적 공백상황을 맞이하였다. 이는 국내적으로 主和·主戰세력의 대립, 沈器遠의 모반사건, 소현세자의 죽음 등과 같은 정치적 혼란과 전쟁의 피해로 인한 贖還·刷還 문제가 정치·사회·경제적 어려움과 동요를 가져왔다. 국외적으로 청의 助兵요구, 과도한 세폐요구 등 강압적인 조·청관계의 전개에 영향을 받아 조선은 조·일관계에 주도적인 영향력을 행사하지 못하게 되어 탈중화의 교린체제를 형성하게 되었다.⁴⁸⁾ 조선은 이념적 공황상태를 극복하기 위하여 효종대 북벌을 기치로 내걸고 금군 등 중앙군의 강화, 지방군 강화를 위한 영장의 파견, 노비추쇄를 통한 군비 확보 등을 추진하였지만 민심의 이반과 재정적 어려움으로 중단하게 되었다.⁴⁹⁾

명·청의 왕조교체는 있었지만, 조공체제라는 동아시아 국제체제 자체는 유지되었다. 조·청관계는 조·명관계와 동일하게 조공체제에 입각한 외교관계를 형성하였다. 이는 형식상으로 천자국의 청에 대해 조공국으로 조선이 엄격한 상하·서열관계를 이룬 것으로 불평등한 관계였지만, 그 이면에는 中華로서 조·명관계와 달리 大國으로서 조·청관계를 형성한 측면과 조공체제의 현실 정치적 측면이라는 분명한 이중성이 있었다. 이러한 이중성은 상호관계(상호관련성)을 강제하는 것으로 청의 對朝鮮 인식과 정책에 대해 조선은 반드시 외교적 입장을 표명해야 하며, 반대로 조선의 對淸 인식과 정책에 대해 淸도 이에 대응하는 외교적 반응이 있어야 한다. 이러한 상호관련성은 대외인식과 외교정책을 잘 반영한 외교문서와 외교문서의 분류체계를 통하여 확인할 수 있다. 앞에서 살펴본 進賀사안처럼 천자국으로서 위상을 강화하고자 하는 청과 외교적인 형식에서 이에 속하지만, 내면적인 인식체계에서는 반청의식을 바탕으로 전통적인 중화로서 인정하지 않는 이중성이다.

청을 중화가 아닌 단순 강대국으로 인식하고 대응한 점은 조공체제의 중요한 외교 형식이었던 사행과 사신접대에서 파악할 수 있다. 사행의 명칭에 있어 물론 공식적인 명칭은 사행목적에 부합되는 정조사, 동지사 등을 사용하였지만, 조선의 지배층은 비공식적으로 반청 또는 가치를 낮춘 ‘燕行’이란 용어를 사용하였다. 명·청의 공통된 수도였던 북경을 명대에는 ‘京師’로 부르고, 경사에 간다는 의미로 ‘赴京’ 내지 ‘朝天’이라 하였다. 경사는 명의 수도라는 의미도 있지만, 근본적으로 四方, 四國 등의

48) 손승철, 『조선시대 한일관계사연구』 지성의 샘, 1994. 199~206쪽.

49) 차문섭, 『조선시대군제연구』 단대출판부, 1995. 8장 조선후기의 영장, 9장 효종조의 군비확충. 참조.

대청개념으로서 단순한 도움을 의미뿐만 아니라 중화로서 중국 자체의 개념이 있다.⁵⁰⁾ 조전은 天朝에 朝覲·獻貢한다는 의미이다. 즉, 중화의 현실적 존재로 천조에 조공한다는 인식이었다. 이에 비하여 연행은 燕京에 사행한다는 의미로 연경은 단순 도움으로서 공간적인 의미만 지닌다.

조선의 대중국 사행뿐만 아니라 중국의 대조선 사행에 대한 명칭에 있어서도 명의 사신을 ‘天使’, ‘明使’ 등으로 부르고 청의 사신을 ‘淸使’, ‘勅使’ 등으로 불러 차별적인 인식을 보여준다. 특히, 조선은 문서체계에 대한 명확한 인식을 지녔던 국가이다. 대중국 외교문서의 중요성을 충분히 인지하였던 조선에서 공식적인 기록에 詔書와 勅書의 차이를 무시하고 일괄적으로 기재한 것은 조선의 다른 의도를 짐작하게 한다. 조서와 칙서는 동일한 황제 명의로 발행되는 문서였지만, 격에 있어 조서가 월등하였다. 단일 사안에 대해 구체적인 명령 및 효유하는 칙서와 달리 조서는 천하를 대상으로 기본적인 통치이념과 사상을 전파하는 것으로 중국에서 조서와 칙서는 담당 사신의 등급을 달리할 정도로 엄격히 구분되었다.⁵¹⁾

조·청관계는 병자호란이후 청의 지속적인 국제질서의 강화와 조선의 반청의식 및 국가안보의 유지노력으로 청 중심의 새로운 조공체제로 형성되었으며, 시기적으로 인조대에서 숙종 초반의 17세기에 해당한다.

4. 숙종대이후 전형적 조공체제의 성립과 변화

1683년(숙종 9, 강희 22), 三藩의 난을 진압하고 대만을 복속시킨 청은 중국 통일을 종결하고 조선을 비롯한 주변 국가에 대해 외교체제의 완성을 의도하였다. 청의 수립에서 전성기라 할 건륭시기까지 청의 외교정책은 外患의 제거와 天朝의 유지에 중점을 두었다. 청의 지배에 방해가 되는 주변 세력의 위협을 제거함으로써 영토와 주권을 보호하는 한편, 전통적인 조공체제에서 종주의 지위와 천조의 위엄을 유지함으로써 국제질서의 중심으로 존재하고자 하였다.⁵²⁾

초기의 강압적인 대조선정책을 시행하던 청은 삼번의 난 이후 조선의 외교정책이 변화없음을 확인하고 점차 온건한 외교정책으로 전환하였다. 조선과 국경으로 연결된

50) 이성규, 「중화사상과 민족주의」, 『동아시아 문제와 시각』 문학과 지성사, 1995. 111~114쪽.

51) 김경록, 「조선후기 사대문서의 종류와 성격」 『한국문화』 35, 2005. 186~188쪽.

52) 楊岩, 『清代前期外交研究』 遼寧師範大學碩士學位論文, 2002. 4쪽.

요동지역은 조·청간의 외교문제를 많이 발생시키는 지역이었다. 요동은 후금시기의 잦은 전쟁으로 대부분 폐쇄해지고, 청의 入關으로 인한 대규모 인구의 유출로 황량한 상태였다. 특히, 압록강과 백두산의 이북지역은 조선인이 월경하여 인삼을 깨고, 사냥을 하여 조·청간에 외교문제가 되었던 지역이다. 청은 이 지역을 ‘龍興之地’로 인식하고 封禁정책을 시행하여 유랑민의 유입을 엄격히 금지하였다.⁵³⁾ 초기에 봉금정책은 한인의 왕래를 금지하고, 몽고족의 남하를 저지하기 위한 목적이었지만,⁵⁴⁾ 점차 조·청간의 범월문제와 연관되어 복잡하게 전개되었다. 청은 요동의 황무지를 대대적으로 개간하기 위하여 1653년 ‘遼東招民尋荒授官條例’를 반포하여 개간하는 이에게 관직을 수여하였다.⁵⁵⁾ 또한, 瀋陽을 部都의 성격을 부여하여 盛京으로 확대함으로써 정치·경제적 영향력을 확대하고, 東北八旗駐防을 강화하여 군사적 역량도 강화하였다.⁵⁶⁾ 이러한 청의 요동지역에 대한 관심고조는 지리적으로 인접한 조·청간의 외교문제로 확대되었다.

이 시기 범월에 관련한 조·청간의 외교문제는 왕래한 외교문서를 통해 확인할 수 있다. 아래 표에서 확인할 수 있듯이 1646년(인조 24) 이후 지속적으로 범월에 관련한 외교문서를 조선은 접수하고 이의 재발을 방지하겠다는 약속을 하였다. 그러나 경제적인 이익이 큰 문제였기 때문에 조선 정부의 단속에도 불구하고 범월의 사례는 지속되었다.

<표 7> 『同文彙考』 原編 犯越1(我國人)사안의 외교문서

순번	시기	문서명	비고
1	1646년(인조24) 4-3	刷還逃人慶源完市及究問越境空蓼人咨	
	1646년(인조24) 8-3	戶部回咨	
	1646년(인조24) 10-16	科斷犯人咨	
2	1648년(인조26) 1-15	戶部拿送犯越人咨	
	1648년(인조26) 4-25	查審各犯處決咨	
3	1649년(인조27) 1-10	戶部放回越境人咨	
	1649년(인조27) 3-	回咨	

53) 劉智文, 「清代東北封禁政策芻議」, 『學習與探索』2003-6期, 133쪽.

54) 黃松筠, 「論清代東北封禁與流人文化」, 『中國邊疆史地研究』12卷4期, 2002. 99~101쪽.

55) 『盛京通志』卷23, 戶口.

56) 杜家驥, 「清改瀋陽爲盛京考述」, 『滿族研究』1997-4期, 36쪽; 刁書仁, 「論清朝對東北邊疆各族的管理體制」, 『史學集刊』2002-4期, 30~31쪽; 丁海斌, 「論清朝陪都盛京的政治制度」, 『遼寧大學學報』(哲學社會科學版)34卷4期, 2006. 60~61쪽.

4	1652년(효종3) 11-7	遣官查審犯越入劉春立勅(互飭諭)	內院學士 蘇納海
	1653년(효종4) 1-22	謝降勅表	使 麟坪大君 滄
	1653년(효종4) 1-22	陳查擬犯人及疏防官奏(互陳奏)	
	1653년(효종4) 4-26	刑部知會犯人減等疏防官寬免咨	
	1653년(효종4)	各犯科罪咨	
	1653년(효종4) 10-17	刑部回咨	
5	1653년(효종4) 5-10	禮部知會起解上國逃人查明義州人越境停查勅及出送金印咨(互封典 飭諭)	
	1653년(효종4) 7-27	謝停勅表	使 洪柱元
	1653년(효종4) 7-27	陳查擬逃人奏(互陳奏)	
	1653년(효종4) 11-3	禮部回咨	
6	1654년(효종5) 12-	禮部知會金忠一等犯殺咨	
	1655년(효종6) 4-	報犯人監候處斷咨	
	1655년(효종6) 4-12	陳犯人等取供監候奏(互陳奏)	使 柳廷亮
	1655년(효종6) 6-26	禮部知會謝降勅表及查擬奏已經具題咨	
	1655년(효종6) 7-8	遣官詳確擬議勅(互飭諭)	內大臣 吳拜
	1655년(효종6) 10-28	謝降勅表	使 錦林君 愷胤
	1655년(효종6) 10-28	陳公同勅使擬律各犯奏(互陳奏)	
	1656년(효종7) 3-14	遣官再按原查各官勅(互飭諭)	太學士 額色黑
	1656년(효종7) 3-15	禮部知會免議及遣官更查各官咨	
	1656년(효종7) 7-17	回咨	
	1656년(효종7) 8-3	謝免議及降勅表	使 麟坪大君 滄
		陳審擬原查各官奏(互陳奏)	
	1656년(효종7) 10-26	禮部知會各官寬免咨	
	1657년(효종8) 5-6	回咨	
	謝各官寬免表	使 元斗杓	
7	1660년(현종1) 12-	報朴風等越境挖蔘咨	
	1661년(현종2) 1-17	禮部回咨	
		禮部知會犯買硫黃及挖蔘盜買馬銅各犯查擬具奏咨(見犯禁)	

* 전거 : 『동문회고』 원편, 권49, 범월1(아국인)

이에 반하여 청국인의 범월사례는 아래 표와 같이 시기적으로 숙종대에 해당되는데, 청의 盛京강화와 요동지역의 개간을 장려하는 가운데 인구가 증가되어 가능하였다. 1682년(숙종 8)에 들어와 청인의 범월이 보고되고 이를 해결하기 위한 외교적

노력이 시행되었다.

<표 8> 『同文彙考』 原編 犯越12(上國人)사안의 외교문서

순번	시기	문서명
1	1646년(인조24)	報天津人越境請糴咨
	1646년(인조24)	戶部回咨
2	1682년(숙종8) 5-18	押還逃來人張三等咨
	1682년(숙종8) 6-29	禮部回咨
3	1694년(숙종20) 윤5-8	禮部知會越境人馬同中路見失押解官治罪咨
	1694년(숙종20) 8-2	回咨
4	1701년(숙종27) 6-21	查報金州李柱等越境漁採申請禁斷咨
	1701년(숙종27) 9-25	禮部知會行文奉天等地嚴查咨
	1702년(숙종28) 3-3	禮部知會查治漁採人及該管官咨
	1702년(숙종28) 5-10	禮部知會查治地方官咨
	1702년(숙종28) 8-6	謝查治各犯咨
	1703년(숙종29) 9-21	禮部回咨
	1704년(숙종29) 2-15	禮部知會行飭該撫等官咨
5	1710년(숙종36) 10-29	請申禁漁採船咨
	1711년(숙종37) 2-18	禮部知會該管禁斷咨

* 전거 : 『동문회고』 원편, 권60, 범월12(상국인)

조선은 병자호란이후 청에 대한 위기의식과 『盛京志』를 비롯한 지리정보를 취득하여 북방영토에 대한 인식을 확대하였다.⁵⁷⁾ 이는 평안도와 압록강 유역 등 북방지역에 대한 관방 강화의 노력으로 이어졌다. 관방은 단순한 주민 이주를 통해 이루어지는 것이 아니라 실질적인 주민거주가 가능한 지역개발이 선행되어야 했다. 이에 조선은 강역 확보 노력의 일환으로 서북 변경 지역을 중점적으로 개발하였다. 이 과정에서 1685년(숙종 11)에 採蓼의 근거지로 범월이 수시로 발생하는 廢四郡지역에 주민거주를 전면 허용하여 읍·진을 설치하는 문제를 논의하였으나 조·청간의 분쟁발생을 우려하여 실현되지 못하였다. 그러나 1796년(정조 20)에 厚州鎭을 설치하여 관방 강화와 주민통제를 시행하였다.⁵⁸⁾

국경을 접한 조·청간의 이러한 경향성으로 단순히 경계를 넘는 越境행위로 인식되는 것이 법률적으로 범법의 의미가 강화된 犯越로 점차 인식되게 되었다.⁵⁹⁾ 초기부터 조선과 중국 사이에는 명확한 국경선의 개념이 미약하고, 국가간에는 일정한 무

57) 배우성, 「17·18세기 청에 대한 인식과 북방영토의식의 변화」 『한국사연구』 99·100, 1997. 307~313쪽.

58) 강석화, 「조선후기의 북방영토인식」 『한국사연구』 129, 2005. 102~105쪽.

59) 정혜중, 「청대 조선인과 청국인 범월의 특징」 『명청사연구』 26, 2006. 73~79쪽.

인지대가 묵시적으로 존재하였기 때문에 월경이나 범월의 개념마저 미약하였다.⁶⁰⁾ 그러나 위에서 살펴본 바와 같은 조·청간의 국경지역 개발과 관심이 고조되면서 국경을 넘는 행위에 대한 제재가 강화되었다. 특히, 양국간에 채삼과 경제적 이해관계가 고조되면서 보다 적극적인 제재가 시행되었는데, 양국간의 제재는 일정한 차이가 있다. 조선은 조선인의 청 지역으로 범월을 적극적으로 제재하지 않는 반면에 청은 보다 철저히 청국인의 조선지역으로 범월과 조선인의 범월을 제재하였다. 『동문회고』 범월사안에서 지속적인 조선인의 범월사례는 이러한 경향성을 반영하며, 청의 강력한 요구에 비하여 조선의 적극적인 제재노력은 시행되지 않았다. 오히려 청에서 봉금지대를 개발하거나 책문과 압록강 사이를 경작하려면 이를 적극적으로 반대하여 저지하였다.⁶¹⁾

이 과정에서 조선은 점차 월경을 보다 체계적이고 법률적인 범월사안으로 인식하여 이를 조선인과 중국인으로 세분하고, 기존에 미약하였던 국경개념을 강화하여 강계사안으로 인식하였다. 조선이 인식한 강계사안은 채삼을 중심으로 한 범월이 빈번하였던 지역을 대상으로 한 것으로 범월에 대한 적극적 제재를 강조하던 청의 요구로 백두산 정계가 실시되기에 이른다. 『동문회고』의 강계사안에서 대상으로 한 토문강, 백두산(백산), 莽牛哨 등은 모두 범월의 주 대상지역임을 확인할 수 있다. 이는 조선이 범월사안과 강계사안이 밀접하게 연관되어 있으며, 동일 지역에서 발생하는 외교문제를 보다 체계적으로 분류하여 인식하였음을 보여준다.

<표 9> 『同文彙考』 原編 疆界사안의 외교문서

순번	시기	문서명	비고
1	1691년(현종17) 10-22	禮部知會土門江巡審時令本國指路咨	
	1691년(현종17) 12-15	沿江一帶道險難通咨	
	1692년(현종18) 1-30	驛站支得預先定奪咨	
	1692년(현종18) 2-2	禮部知會巡審道路不由本國咨	
	1692년(현종18) 4-9	回咨	
2	1712년(숙종38) 2-7	禮部知會白山查境令本國照管咨	
	1712년(숙종38) 5-7	接伴使請偕行白山帖	
	1712년(숙종38) 5-8	勅使回帖	

60) 김혜자, 「조선후기 북변월경문제 연구」 『이대사원』 18·19, 1982. 58~59쪽. 고려시대 여진족과 혼거하던 주거형태에서 부터 이 지역은 명대의 여진족 거주지로 명은 1469년(성화5)에 邊柵을 쌓고 邊門을 세워 변책과 압록강 사이를 空間地로 構舍墾田을 금지하였다. 이러한 역사적 경험으로 조선은 조·청관계 초기에 명확한 국경개념을 두지 않았다.

61) 강석화, 「1712년의 朝淸 定界와 18세기 조선의 북방경략」 『진단학보』 79, 1995. 153쪽.

	1712년(숙종38) 5-28	勅使問議立柵便否咨	
	1712년(숙종38) 6-2	設柵便宜呈文	
	1712년(숙종38) 11-3	謝定界表	使 金昌集
	1712년(숙종38) 11-3	禮部查收補進方物移准謝定界減幣移准免議方物咨	見節使
3	1714년(숙종40) 12-15	請撤毀訓戎鎮越邊房屋咨	
	1715년(숙종41) 2-21	禮部知會令該管查明後再議咨	
	1715년(숙종41) 10-25	禮部知會撤毀咨	
	1715년(숙종41) 12-17	回撤毀咨	
	1716년(숙종42) 2-15	禮部回咨	
4	1731년(영조 7) 5-7	禮部知會詢問設汎便否上諭咨	
	1731년(영조 7) 6-23	請寢莽牛哨設汎咨	
	1731년(영조 7) 9-14	禮部知會不設汎汎上諭咨	
	1732년(영조 8) 7-28	謝寢汎汎表	使 李宜顯
	1732년(영조 8) 10-29	禮部知會謝寢汎汎表知道咨	
5	1746년(영조22) 7-24	禮部知會莽牛哨添駐官兵防守咨	
	1746년(영조22) 4-19	請寢添兵屯田奏	使 驪善君 學
	1746년(영조22) 7-26	禮部抄錄更察設汎許停展柵上諭及兵部原題咨	
		粘單	
		禮部知會請停退柵陳奏知道及移准方物咨	
	1746년(영조22) 8-15	禮部頒賞使臣咨	
	1746년(영조22) 9-4	禮部知會奉旨寢退柵添汎咨	
	1746년(영조22) 11-6	謝寢退柵添汎表	
1747년(영조23) 2-13	禮部知會謝停退柵表知道咨		
	禮部移准謝停退柵方物咨		
6	1748년(영조24) 7-9	請禁訓戎對境造舍墾田咨	
	1748년(영조24) 9-18	禮部知會准請咨	
		禮部頒賞咨官咨	
	1748년(영조24) 12-24	回禁止造舍墾田咨	
	1749년(영조25) 9-4	謝禁造舍墾田表	
	1749년(영조25) 12-6	禮部知會謝禁造舍墾田表知道咨	

* 전거 : 『동문회고』 원편, 권48, 疆界

숙종초반 이후 조·청관계는 보다 경제적인 문제와 밀접하게 연관되어 전개되었다. 그 가운데 국가차원에서 중요하였던 것은 공식적인 歲幣와 국경무역이었다. 먼저 세폐의 경우는 조공국 조선에서 천자국 청에 전달하는 것으로 황제, 황후 등을 대상으로 한 방물과는 차이가 있었다. 조·청관계에서 세폐는 병자호란이후 전쟁배상금의 성격으로 과중하게 조선에 부과되었다. 세폐는 인조 15년에 정해진 이후 영조 4년에 이르기까지 지속적으로 감소 내지 면제되었지만, 일부는 다른 물품으로 대체되거나 감소되지 않고 남는 경우도 있다.

<표 10> 조선후기 세폐의 감소경향

물목	인조15	인조19	인조21	인조23	인조25	효종2	효종5	숙종18	숙종37	경종3	영조4
黃金	100兩							免			
白銀	1,000냥							免			
水牛角 弓面	200副				100		代以好大 紙1000 ·好小紙 1500				
豹皮	100張								免		
茶	1,000包			免							
水皮	400장									100	
靑黍皮	300장									免	
胡椒	10斗										
好腰刀	26把		6	10							
蘇木	200斤			免							
好大紙	1,000권										
順刀	20과			10	10						
好小紙	1,500권										
五爪龍 席	4領		2								
雜彩花 席	40령		20								
白苧布	200匹										
각색綿 紬	2,000필		600	700	200	100, 紅綠綿紬 各100, 白綿紬200					
각색細 麻布	400필		300	100							
각색 細布	10,000 필		200	生木綿 2000· 三色木 棉700	生木綿1 600·白 木綿400 ·兩色 木棉100	生木綿 600		三色木棉 600, 白木綿 1000, 生木綿 2800		800	
布	1,400필			免							
쌀	10,000 包	9000			900, 本白米30, 添米4包6 斗, 粘白米70, 添米10包 4斗						白米30 ·粘白 米30

* 전거 : 『통문관지』

최종까지 남은 세폐는 胡椒, 水皮, 好腰刀, 好大紙, 好小紙, 五爪龍席, 雜彩花席, 白苧布, 各色細布 등이며, 이들 세폐는 年貢使가 전달하였다. 물론 인조, 효종대에 다수의 물품이 감면되었지만, 감면의 시기가 영조대에 이르기까지 조선후기 내내 지속되었으며, 최종적으로 감면되지 않은 수량이 있어 조선의 대청사행에 있어 중요 사행으로 인식되었다. 명대 공물과 물품의 종류만 비교하면 유사한 수준이다.⁶²⁾ 그러나 조·청관계에서 세폐는 병자호란이후 결정되어 조선후기 지속되었다는 점에서 조·청관계의 중요한 성격을 보여준다. 즉, 청은 조선에 있어 병자호란이후 지속적으로 전승국으로 존재한 것이다. 전승국으로 점차 패전국에 대해 전쟁배상금을 줄여주는 형식을 취한 것이다. 이는 인조대이후 영조대에 이르기까지 청은 조선에 대한 감시와 경계를 지속하였음을 보여준다.

세폐와 별개로 表文과 箋文, 奏文과 같은 對淸제문서의 경우는 반드시 方物이 지참되어야 하는데,⁶³⁾ 조선후기 개별 사행이 지참하였던 방물은 다음 표와 같다.

<표 11> 조선후기 使行別 方物數目

使行名	對象	數目
冬至使	御前	黃細苧布10, 白細苧布20, 黑麻布40: 숙종23(1697)代以黃細綿紬20, 白細綿紬20, 龍紋簾席2, 黃花席20, 滿花席20, 滿花方席20, 雜彩花席20, 豹皮10: 숙종37(1711)免, 人蔘50: 亂後代以白綿紙2000, 雜色馬30: 海路後亭 *경종3(1723) 白綿紙1300
	皇太后前 (皇后)	螺鈿梳函1, 紅細苧布10, 白細苧布20, 黑麻布30(代紫細綿紬20), 白細綿紬10, 黃花席10, 滿花席10, 雜彩花席10 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
	皇太子前	白細苧布15, 黑麻布15(亂後減), 白細綿紬10, 黃花席10, 滿花席10, 雜彩花席10, 豹皮6: 숙종37(1711)免, 人蔘40(代白綿紙500), 雜色馬4(停)
正朝使	御前	黃細苧布10, 白細苧布20, 黑麻布40: 숙종23(1697)代以黃細綿紬20, 白細綿紬20, 龍紋簾席2, 黃花席15, 滿花席15, 滿花方席15, 雜彩花席15, 豹皮10: 숙종37(1711)免, 人蔘50: 亂後代以白綿紙2000, 雜色馬30: 海路後亭 *경종3(1723) 白綿紙1300
	皇太后前 (皇后)	螺鈿梳函1, 紅細苧布10, 白細苧布20, 黑麻布30(代紫細綿紬20), 白細綿紬10, 黃花席10, 滿花席10, 雜彩花席10 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
	皇太子前	白細苧布15, 黑麻布15(亂後減), 白細綿紬10, 黃花席10, 滿花席10, 雜彩花席10, 豹皮6: 숙종37(1711)免, 人蔘40(代白綿紙500), 雜色馬4(停)
聖節使	御前	黃細苧布10, 白細苧布20, 黑麻布70(代黃細綿紬30·紫細綿紬20), 白細綿紬20, 龍紋簾席2, 黃花席20, 滿花席20, 雜彩花席20, 豹皮10: 숙종37(1711)免, 水獺皮20, 人蔘

62) 『大明會典』卷105, 禮部63, 主客清吏司, 朝貢1. 朝鮮. 공물의 물품은 金銀器皿, 螺鈿梳函, 白綿紬, 各色苧布, 龍文簾席, 各色細花席, 豹皮, 獺皮, 黃毛筆, 白綿紙, 人蔘, 種馬(每三年五十四)이지만, 종마는 16세기에 들면서 제외되었다.

63) 『同文彙考』原編, 卷21, 節使4, 丙辰 冬至箋.

		50(代白綿紙2000), 苧布·麻布·兼織布10(亂後代以粘六張厚油紙10), 雜色馬40(停) *경종3(1723) 白綿紙1400 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
	皇太后前 (皇后)	紅細苧布10, 白細苧布20, 黑麻布40(代紫細綿紬20), 白細綿紬10, 黃花席10, 滿花席10, 雜彩花席10
謝恩使 陳慰使	御前	黃細苧布30, 白細苧布30, 黃細綿紬20, 紫細綿紬20, 白細綿紬30, 龍紋簾席2, 黃花席15, 滿花席15, 雜彩花席15, 豹皮5: 숙종38(1712)免, 白綿紙2000
	皇太后前 (皇后)	紅細苧布10, 白細苧布10, 白細綿紬20, 滿花席10, 雜彩花席10 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
	皇太子前	白細苧布20, 滿花席10, 雜彩花席10, 白綿紙500, 黃毛筆50, 油煤墨50
奏請使 陳奏使	御前	黃細苧布20, 白細苧布30, 白細綿紬20, 龍紋簾席2, 黃花席20, 滿花席20, 滿花方席10, 雜彩花席20, 豹皮6, 水獺皮10, 粘六張厚油紙10 *黃細苧布20, 白細苧布20, 黃細綿紬20, 紫細綿紬20, 白細綿紬30, 龍紋簾席2, 黃花席10, 滿花席20, 雜彩花席10, 水獺皮20, 青黍皮30, 白綿紙2000, 黃毛筆100, 油煤墨50
	皇太后前 (皇后)	紅細苧布20, 白細苧布20, 紫細綿紬20, 滿花席20, 雜彩花席10 *紅細苧布10, 白細苧布10, 白細綿紬20, 滿花席10, 雜彩花席10 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
	皇太子前	白細苧布20, 黃花席15, 滿花席15, 雜彩花席15, 白綿紙500, 虎皮2 *白細苧布20, 白細綿紬20, 滿花席10, 雜彩花席10, 豹皮2, 白綿紙500, 黃毛筆40, 油煤墨40
進賀使	御前	黃細苧布20, 白細苧布50, 紫細綿紬20, 黃細綿紬20, 黃花席20, 滿花席20, 滿花方席20, 雜彩花席20, 白綿紙2000, 豹皮20
	皇太后前 (皇后)	紅細苧布20, 白細苧布20, 紫細綿紬20, 黃花席10, 滿花席10, 雜彩花席10 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
進香使	御前·祭幣 皇太后·皇后	白細苧布100, 白細綿紬200, 銀子300, 白綿紙1000, 白紙1000, 沈束香3, 芙蓉香20, 清蜜15, 乾柿10, 生梨300, 胡桃10, 生栗10, 大棗10, 銀香盒1, 畫龍燭1, 大燭臺1
問安使	御前	豹皮20, 鹿皮30, 水獺皮50, 青黍皮100, 倭長劍2, 浮椒15, 全鰓20, 文魚20, 大口魚200, 海蔘200, 紅蛤200, 海帶200, 白蜜15, 栢子15, 乾柿20, 榛子10, 廣魚100
	皇太后前 (皇后)	*영조19(1743)始有方物 白細苧布20, 紫細綿紬20, 浮椒10, 全鰓10, 大口魚100, 海蔘100, 紅蛤100, 文魚15, 海帶100, 廣魚50, 栢子10, 榛子10, 白蜜10, 乾柿10 *영조25(1749)禮部咨(攝六宮事·皇貴妃前:同皇后禮物)
	잔존분량	*好大紙2000(豫備10), 好小紙3000(豫備30), 水獺皮300, 鹿皮100, 好腰刀10, 五爪龍文簾席2, 雜彩花席20, 白苧布200(豫備2), 紅綠綿紬200, 白綿紬200(豫備三色各2), 白木綿1000(豫備5), 生木綿2000(豫備10), 粘米40, 添米5石13斗

* 전거 : 『通文館志』

세폐와 방물이 전달되면 청은 조선국왕에게 回賜품을 주는데, 비교하면 1/10 수준으로 전형적인 조공체제의 貢獻형식을 보인다.⁶⁴⁾ 방물의 경우는 수량의 문제 뿐만

64) 전해중, 『한중관계사연구』 일조각, 1970. 82~85쪽.

아니라 사행과정에서 발생하는 각종 파손에 대한 책임추궁도 심하여 조선의 외교적 부담으로 작용하였다. 방물 가운데 수준이 낮은 경우에는 조선에 자문을 전달하여 查對결과를 통보하여 벌은을 부과하거나 赦免의 형식을 취하였다.⁶⁵⁾

<표 12> 조선후기 回送하는 조선사행의 賞賜物

使行	一行員	賞賜物
冬至使	承政院呈納	綵段5表裏, 銀子250兩(受領: 上通事) *銀子250兩 [영조5(1729) 禮部奉旨 銀子150兩(貂皮100장), 銀子100兩(內造粧緞4匹, 雲緞4匹)]
	正使·副使	大段紬2表裏, 銀子50兩, 黃絹1匹, 以黑靴子具毛清 숙종9(1683)代黃絹
	書狀官	大段紬1表裏, 銀子40兩, 黃絹1匹
	大通官3員	大段1表, 銀子20兩, 黃絹1匹
	押物官24員	小段1表, 銀子15兩, 靑布2匹
	從人30名	銀子4兩
正朝使	承政院呈納	綵段5表裏, 銀子 250兩, 駿馬1匹(玲瓏·鞍粘全備)
	正使·副使	大段紬3表裏, 銀子50兩, 鞍具馬1匹, 黃絹2匹
	書狀官	大段紬2表裏, 銀子50兩, 黃絹1匹
	大通官3員	大段紬1表裏, 銀子30兩, 黃絹1匹
	押物官24員	小段紬1表裏, 銀子20兩, 靑布2匹
	從人30名	銀子5兩
聖節使	承政院呈納	綵段5表裏, 銀子 250兩, 駿馬1匹(玲瓏·鞍粘全備)
	正使·副使	大段紬3表裏, 銀子50兩, 鞍具馬1匹, 黃絹2匹
	書狀官	大段紬2表裏, 銀子50兩, 黃絹1匹
	大通官3員	大段紬1表裏, 銀子30兩, 黃絹1匹
	押物官24員	小段紬1表裏, 銀子20兩, 靑布2匹
	從人30名	銀子5兩
年貢	承政院呈納	綵段5表裏, 銀子 250兩
	正使·副使	大段紬2表裏, 銀子50兩, 黃絹1匹
	書狀官	大段紬1表裏, 銀子40兩, 黃絹1匹
	大通官3員	大段1表, 銀子20兩, 黃絹1匹
	押物官24員	小段1表, 銀子15兩, 靑布2匹
	從人30名	銀子4兩
謝恩使 奏請使	正使·副使	大段紬2表裏, 小段1表, 銀子50兩, 鞍具馬1匹, 黃絹2匹
	宗班正使	大段5表, 貂皮10令, 大段團領·方紬單衫袴 各 1襲 加給
	書狀官	大段紬2表裏, 銀子50兩, 黃絹1匹
	大通官3員	大段紬1表裏, 銀子30兩, 黃絹1匹

65) 『동문회고』 원편, 권20, 節使3, 丙午 冬至表, 禮部飭斜皮紙張不堪使臣姑從寬免咨, 禮部知會貢紙不堪免罰及使臣著議奏咨. 사면을 받으면 사면에 대한 사은사를 다시 파견해야 하고, 이에 따른 방물이 추가되었다.

	押物官24員 從人30名	小段紬1表裏, 銀子20兩, 靑布2匹 銀子5兩
問安使	承政院呈納	貂皮100張, 紅粧緞·龍欄緞 各4匹, 大緞·紡紗 各5匹, 駿馬1匹(鞍粘全備)
	使	粧緞1, 大緞2, 小緞2, 靴襪1, 鞍具馬1, 銀子50
	書狀官	中緞2, 靴襪1, 銀子40
	大通官3員	中緞1, 靴襪1, 銀子30
	押物官15員	小緞1, 銀子20
	從人20名	銀子5
告訃使	使	大段紬·帽緞紬·彭緞紬 各1, 銀子50
	書狀官	大緞紬1, 銀子20
	大通官3員	彭緞紬 各1, 銀子15
	押物官18員	彭緞1, 銀子10
	從人23名	銀子4

* 전거: 『通文館志』

이러한 방물과 세폐에 관련한 외교문제를 조선은 節使, 錫幣, 請求, 錫賚 등의 외교사안으로 인식하고 보다 효과적인 외교정책을 수립하고 시행하기 위해 외교문서를 정리하였다. 1788년(정조 12) 60책으로 구성된 『동문회고』의 편찬은 조선후기 조·청관계를 ‘資考據’에 입각하여 각종 외교사건을 외교사안별로 체계화한 것이다. 조선은 조·청관계에서 발생하는 각종 외교사건에 대해 使行, 漂流民, 접수된 외교문서 등 다양한 경로를 통해 외교정보를 수집하고 이를 바탕으로 사건의 성격을 철저히 분석하였다. 해당 외교사건이 어떠한 외교사안에 해당하는지 분류한 뒤 적합한 전례를 상고하여 외교목적에 수립하고 외교정책을 시행하였다. 이러한 외교정책의 수립과정은 체계적인 외교문서의 정리과정을 통해 가능하며, 외교문서의 분류체계는 조·청관계의 인식체계를 반영한다.

5. 맺음말

이상으로 인조대에서 정조대까지 조선의 대청인식과 외교체계에 대해 외교문서의 정리를 중심으로 살펴보았다. 간략히 내용을 요약하고 청사공정에 관련한 필자의 생각을 언급하는 것으로 맺음말을 대신한다.

조선초기 『이문』, 중기 『괴원등록』, 후기 『동문회고』로 이어지는 외교문서의 정리는 조선의 대중국관계를 보다 체계적으로 대응하기 위해 외교적 노력이었다. 시간 순

서에 입각한 정리방식과 문서종류별 방식을 거쳐 외교사안별 분류를 통한 외교문서 정리는 조선의 외교체계가 보다 정밀해지는 과정을 반영한다. 외교문서 뿐만 아니라 외교형식에 관련한 사항은 『동문관지』로 정리하고, 외교문서는 25개의 체계적인 외교사안별로 『동문회고』에 정리하였다. 이러한 외교사안은 필연적 외교사안과 실질적 외교사안으로 구분할 수 있다.

정묘호란으로 강도약서, 평양약서를 체결하고, 병자호란이후 정축약조를 체결하여 청 중심의 조공체제에 편입되었다. 청은 강압적인 대조선정책을 시행하여 심양관 통제를 통해 조선의 분열을 시도하고, 속환·쇄환으로 경제적·군사적 이익을 추구하였다. 조선은 형식적으로 조공체제의 외교형식을 준행하여 국가안보를 유지하였지만, 반청의식을 바탕으로 효종대 북벌론을 전개하였다. 대일사안이었던 대청사안으로 연계시킨 왜정사안을 거론하여 세자의 귀국과 군비강화를 시도하기도 하였다.

청의 완전한 중국장악은 청 중심 조공체제의 완성을 의미하며, 청은 조선에 대해 천자국으로 위엄을 과시하였다. 전쟁배상금의 성격이 있던 세폐를 견감하였으며, 봉금정책의 진행과 함께 범월을 단속하도록 조선에 요구하였다. 조선은 강국으로 청의 존재를 현실적으로 인정하고, 단순 월경사건을 범월사안으로 인식하여 강계사안으로 발전시킴으로써 북방개척을 추진하였다. 외교문서 자체의 외교사건화 경향 속에서 정조대 25개 외교사안으로 대청관계를 인식하고, 정보수집에서 외교정책의 시행에 이르는 유기적인 외교체계를 형성하였다.

청사공정은 분명 중국의 자국사 정리이므로 학술적인 관점에서 이루어졌으면 하는 바람이다. 청사의 정리는 물론 다양한 분야사로 분류하여 진행되었지만, 청의 대외관계에서 조·청관계는 매우 비중이 크다. 청의 발생단계에서 입관, 중국 대륙의 완전한 통치에 이르기까지 조·청관계는 핵심사항이었기에 청의 대조선관계에 대한 학술적인 연구가 진행되어야 할 것이다.

또한, 청사공정과 관련하여 무엇보다 조·청관계의 체계적인 연구와 자료정리가 필요한 시점이다. 조·청관계에 관련된 자료는 조선왕조실록, 승정원일기, 비변사등록 등을 비롯한 관찬자료의 대외관계사 관련 자료, 실질적으로 조·청간에 왕래한 외교문서를 체계적으로 정리한 『동문회고』, 『동문고략』, 청의 정치·사회·경제·군사 상황을 생생하게 기록한 통상 연행록이라 부르는 사적 사행기록 등 광범위하게 존재한다. 이들 자료 이외에 새로운 자료의 발굴도 중요하지만, 기존 자료의 정확하고 새로운 해석이 필요하다.

조·청관계에서 최근 외교문서의 적극적인 활용이 늘어나는 경향성은 고무적이다. 특히, 『동문회고』를 체계적으로 분석하고 정리할 필요성이 있다. 대외관계사 연구에 있어 실록을 비롯한 연대기 자료는 필수적이지만, 연대기 자료에 앞서 실제 외교상황을 생생하게 보여주는 외교문서에 대한 연구가 선행되어야 할 것이다.

最近十年（1998—2008年）臺灣清史研究的動向

葉高樹(國立臺灣師範大學歷史學系)

一、前言

最近十年以來，國際清史學界有兩件值得注意的大事：一是一九九六至九八年間，主張「重新衡量那些居住或統治中國領土的許多民族的貢獻」的美國學者羅友枝（Evelyn S. Rawski），對長期主導清史解釋的「漢化」觀點進行檢討，¹而堅持捍衛「漢化」立場的何炳棣，則以犀利的措辭為文予以駁斥。²雖然這場被稱為「沒有交集的對話」，迄今仍持續進行著，³但是將研究視角聚焦於非漢民族的「新清史」，儼然已躍居主流的地位。二是基於「易代修史」、「盛世修史」的思考，在中國醞釀已久的編纂清史的計畫，於二〇〇二年年末正式啓動。這個涵蓋以纂修清史為主體，以整理檔案、文獻為基礎的「清史工程」，⁴帶動清史研究與出版的熱潮。身為國際學術社群的一員，臺灣的清史研究者自然感受到並關注這些新的脈動。

就臺灣而言，早在一九五〇、六〇年代，清史曾是研究人口相對多數的領域，也培養出陳捷先、⁵莊吉發等舉足輕重的學者。⁶然而，七〇、八〇年代中國近現

¹ Evelyn S. Rawski, "Presidential Address: Reenvisioning the Qing: The Significance of the Qing Period in Chinese History." *The Journal of Asian Studies*, 55:4 (1996), pp. 829-850.

² Ping-ti Ho, "In Defense of Sinicization: A Rebuttal of Evelyn Rawski's 'Reenvisioning the Qing'." *The Journal of Asian Studies*, 57:1 (1998), pp. 123-155.

³ 參見王成勉，〈沒有交集的對話——論近年來學界對「滿族漢化」之爭議〉，收入汪榮祖、林冠群主編，《胡人漢化與漢人胡化》（嘉義：國立中正大學臺灣人文研究中心，2006年），頁80-81。

⁴ 參見戴逸，〈談清史纂修〉，陳捷先、成崇德、李紀祥主編，《清史論集》（北京：中國人民出版社，2006年），上冊，頁6。

⁵ 參見〈附錄一·文獻足徵：陳捷先教授與故宮檔案的整理與出版〉，收入馮明珠主編，《文獻與史學：恭賀陳捷先教授七十壽慶論文集》（臺北：遠流出版公司，2002年），頁492-495；〈附錄二·陳捷先教授與聯合報國學文獻館〉，收入同書，頁496-502。

代史的研究蔚為風潮，以及八〇年代以降臺灣史研究的崛起，這兩個與清史在時間上部分重疊的新範疇，吸引不少研究者的投入。在學術分工與專精深入的要求下，清代前期或嘉、道以前清代史的研究，則一度趨於沉寂。惟歷史學的研究畢竟植基於史料，國立故宮博物院、中央研究院歷史語言研究所豐富的典藏，已為研究清史的學術環境奠基；而近年清代檔案數位資料庫的建置，提供使用上的便利，也提高新進的研究者加入清史研究行列的意願。

由於資料取得的方便，以及「新清史」的影響與「清史工程」的展開，在在對臺灣的清史研究產生激勵作用，直接反映在研究成果上，則為論著數量的增多。藉由《中華民國期刊論文索引 WWW 版》等檢索工具的查詢，⁷最近十年之間在臺灣發表以清代為範圍的歷史論著，超過五百種以上；若不計中國近代史、清代臺灣史，僅就清代前期史的研究論著而言，亦有二百多篇。然面對為數可觀的研究業績，即便擇要評介，亦非一篇短文所能涵括。是以本文僅就檔案資料數位化的成果、「新清史」引發研究重點的轉向，以及學界對「清史工程」的看法等方面，略加析論，期能呈現出臺灣近年來清史研究的趨勢。

二、清代檔案資料的數位化

拜資訊科技日新月異之賜，資料的整理、典藏與利用的方法不斷推陳出新，使原本浩如煙海的檔案、文獻，得以簡便的方式取得。自一九八四年起，中央研究院歷史語言研究所（以下簡稱史語所）與計算中心合作，推動文獻資料數位化的工作，於一九九〇年首先完成「廿五史資料庫」，並逐步擴充成為「漢籍電子文

⁶ 參見葉高樹，〈久著十全贏樹績：莊吉發教授的滿文教學與研究〉，《國文天地》，22 卷 7 期（2006 年 12 月），頁 107-111。

⁷ 另有兩種工具書可供查閱，參見吳智和、賴福順編著，高明士主編，《戰後臺灣的歷史學研究，1945—2000·第五冊·明清史》（臺北：行政院國家科學委員會，2004 年），收錄的論著不包括中國近代史與清代臺灣史；周惠民主編，《1945—2005 年臺灣地區清史論著目錄》（北京：人民出版

獻資料庫」，使文史資料的蒐集更加快速，給予研究者莫大的方便。⁸該資料庫中的「漢籍全文資料庫」，⁹按經、史、子、集四部分類，目前收錄與清代相關的史部典籍包括：《清史稿》（正史類）、《四庫全書總目提要》（目錄類）、《廣東新語》、《北游錄》、《揚州畫舫錄》、《蓑楚齋隨筆、續筆、三筆、四筆、五筆》（以上地理類）、《清朝通志》（別史類）、《清朝通典》、《清朝文獻通考》、《清朝續文獻通考》、《大清會典事例》（以上政書類）、《清實錄》（編年類）、《樞垣紀略》（職官類）、《遼海叢書》、《永憲錄》（以上雜史類）等；另與治史關係密切的子部筆記類，則涵蓋原北京中華書局刊印的《清代史料筆記叢刊》四十餘種，以及類書類的《清稗類鈔》。同樣見於中央研究院「漢籍電子文獻資料庫」，由其他單位製作，而與清史研究相關者，尚有：近代史研究所「清代經世文編資料庫」，¹⁰臺灣史研究所「台灣文獻叢刊資料庫」，¹¹以及國史館清史組「新清史·本紀資料庫」。

其次，史語所藏「內閣大庫檔案」約三十一萬餘件，自一九二九年著手整理以來，幾經波折，曾以紙本形式先後出版《明清史料》、《明清檔案存真選輯》、《明清史料：國立中央研究院歷史語言研究所編刊明清內閣大庫殘餘檔案》，以及《明清檔案》。¹²從一九九五年開始，史語所將整理計畫調整為：以影像掃描

社，2007年），收錄的內容則以清代研究為範圍。

⁸ 參見黃寬重、劉增貴，〈中央研究院人文計算的回顧與前瞻〉，《漢學研究通訊》，17卷2期（1998年5月），頁145-146。該資料庫的特點為：一、品質最佳，失誤率低於千分之一；二、規模最大，開發及完成的合計超過三億字；三、資料經過一定規模的組織；四、軟體設計最佳。「漢籍電子文獻資料庫」網址為：<http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>。

⁹ 「漢籍全文資料庫」網址為：<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/>。

¹⁰ 「清代經世文編資料庫」收錄：賀長齡《皇朝經世文編》、饒玉成《皇朝經世文編續集》、葛士濬《皇朝經世文續編》、康盛《皇朝經世文續編》、陳忠倚《皇朝經世文三編》、麥仲華《皇朝經世文新編》、邵之棠《皇朝經世文統編》、何良棟《皇朝經世文四編》、求是齋《皇朝經世文編五集》、甘韓《皇朝經世文新編續集》等十種。

¹¹ 《臺灣文獻叢刊》三〇九種，係研究清代臺灣史的基本史料，其中不乏明末清初、南明的筆記文集，以及清朝的官書、檔案，亦與清史研究相關。雖然《臺灣文獻叢刊》的點校頗有瑕疵，且常以「選輯」的方式刊行，但是資料庫的建立，仍能提供使用上的便利。

¹² 中研院史語所編《明清史料》共十編一百冊，其中甲、乙、丙等三編，於一九三〇年至三六年出版；丁編於一九五一年出版；戊、己、庚、辛、壬、癸等六編，於一九五三年至七五年出版；另《明清史料：國立中央研究院歷史語言研究所編刊明清內閣大庫殘餘檔案》，於一九七二年出版。李光濤編《明清檔案存真選輯》初集、二集、三集，分別於一九五九年、七三年、七五年出版。張偉仁主

或數位照像的方式保存檔案，並為每件檔案撰寫提要，再配合現代的電子檢索工具，建立「內閣大庫檔案資料庫」，迄今已建入超過二十一萬筆資料。研究者可以利用電子檢索系統，檢得所要的檔案出處或登錄號，再去翻閱《明清史料》、《明清檔案》等原出版品，或申請調閱原件；亦可在電腦螢幕前直接閱讀所檢得的檔案，或透過印表機直接列印。¹³

又故宮博物院藏清代宮中內府、軍機處、內閣、史館檔案，約四十萬餘件，其中以「宮中檔奏摺」（約十五萬件）、「軍機處月摺包摺件」（約十九萬件）數量最多。自一九六九年以來，故宮檔案陸續整理出版，舉其要者，包括：《舊滿洲檔》十冊（經再次整理後，於二〇〇六年重新出版，並定名為《滿文原檔》十冊）、《宮中檔康熙朝奏摺》九冊、《宮中檔雍正朝奏摺》三十二冊、《宮中檔乾隆朝奏摺》七十五冊、《宮中檔光緒朝奏摺》二十六冊、道咸同光四朝《清代起居注冊》二百八十冊等，今日故宮推動的檔案數位化工作，可說是在此基礎上發展而來的。¹⁴至一九九六年，「宮中檔奏摺」編輯影印出版完成後，故宮博物院圖書文獻處即著手整理出版「軍機處月摺包摺件」，並展開數位化作業，建立「清代軍機處檔摺件全文影像資料庫」、「清代軍機處檔摺件目錄資料庫」。迨二〇〇三年，再逐漸加入「宮中檔奏摺」全文影像與目錄，名稱更定為「清代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫」。¹⁵其目錄索引以關聯式資料庫建置，

編《明清檔案》共三百二十四冊，於一九八六年至九五年出版。關於《內閣大庫檔案》的流出、整理、出版的過程，參見劉錚雲，〈舊檔案、新材料——中研院史語所藏內閣大庫檔案現況〉，《新史學》，9卷3期（1998年9月），頁136-144。

¹³ 參見劉錚雲，〈舊檔案、新材料——中研院史語所藏內閣大庫檔案現況〉，頁144-147。檔案提要的內容，包括：「事由」，檔案內容的摘要；「時間」，檔案發下、進呈、或移會的時間；「職官」：檔案上奏人的官銜與姓名；「冊別件號」，檔案全文收錄之所在；「登錄號」，一九八一年以後登錄檔案的流水號；「文件別」，檔案的類別，如題本、奏本、奏摺、史書等；「備註」，檔案整殘狀況以及以上各項的補充說明。「內閣大庫檔案」資料庫網址為：<http://www.saturn.ihp.sinica.edu.tw/~mct/html/newpage1.htm>。

¹⁴ 關於國立故宮博物院藏清代各種檔案的數量、類別、整理過程，以及主要的出版情形，參見陳捷先，〈回顧與展望：故宮檔案與清史研究〉，《文獻足徵：第二屆清代檔案國際學術研討會·專題演講》（臺北：國立故宮博物院主辦，2005年11月3-5日），頁6-11。
〈<http://npmhost.npm.gov.tw/tts/ching/0500all.pdf>〉（2008/10/9）。

¹⁵ 參見馮明珠、許玉純，〈國立故宮博物院「清代宮中檔奏摺籍軍機處檔摺件全文影像資料庫」數位化流程與使用〉，頁3。見《國立故宮博物院國家型數位計畫·經驗交流》，

建檔項目包括：文獻編號、題奏人姓名、題奏人官職、具奏日期、事由、硃批內容、硃批日期、箱號等欄位；當使用者在線上查到相關目錄資料，可據以瀏覽原件影像。¹⁶

另一方面，自二〇〇一年起，圖書文獻處加入「國家典藏數位計畫」，由於故宮博物院所藏清代檔案的年代、性質及來源，與史語所「內閣大庫檔案」極為近似與相關，雙方遂開始合作「清代檔案人名權威資料庫」的開發與建置。使用者在檢索清代檔案的同時，亦能透過系統連結此資料庫，了解具奏官員（傳主）的生卒年、傳略、籍貫、履歷、親屬關係、異名字號等基本資料，可解決使用者在研究過程中，遇到查閱歷史人物背景的種種困難。¹⁷在「清代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫」告葺，以及「清代檔案人名權威資料庫」奠定的基礎，圖書文獻處復於二〇〇七年展開「史館檔清人傳記全文影像資料庫」的目錄檢索檔與數位影像檔的建置，¹⁸目前已逐步開放「大清國史人物列傳及史館檔傳包傳稿全文影像資料庫」的使用。¹⁹

〈<http://www.npm.gov.tw/uploads/2006042102413934644/intro-9.pdf>〉（2008/10/9）。據該文整理，故宮博物院的「宮中檔奏摺」，依出版時間先後，計有：《袁世凱奏摺專輯》（1970年，8輯8冊，全漢文本）、《年羹堯奏摺專輯》（1971年，3輯3冊，滿漢文合璧本）、《宮中檔光緒朝奏摺》（1973年，26輯26冊，滿文附於各輯漢文之後）、《宮中檔康熙朝奏摺》（1976年，9輯9冊，8-9輯為滿文）、《宮中檔雍正朝奏摺》（1978年，32輯32冊，28-32輯為滿文）、《宮中檔乾隆朝奏摺》（1982年，75輯75冊，75輯為滿文）、《宮中檔咸豐朝奏摺》（1991年，32輯48冊，全漢文本）、《宮中檔補遺》（1993年，1輯1冊，全漢文本）《宮中檔嘉慶朝奏摺》（1993年，34輯51冊，滿文附於各輯漢文之後）、《宮中檔道光朝奏摺》（1996年，20輯30冊，全漢文本），其中《嘉慶》、《道光》、《咸豐》、《補遺》等四種未正式出版，僅製作三套置於故宮博物院圖書館提供查閱，而少數同治、宣統朝「宮中檔奏摺」附於其中。又「清代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫」網址為：<http://npmhost.npm.gov.tw/tts/npmmeta/GC/indexcg.html>。

¹⁶ 參見馮明珠、許玉純，〈國立故宮博物院「清代宮中檔奏摺籍軍機處檔摺件全文影像資料庫」數位化流程與使用〉，頁5-13，文中以圖示的方式詳述使用方法。

¹⁷ 參見楊士朋、楊慶平、黎裕權，〈「清代檔案人名權威資料庫」的檢索與應用〉，《國家數位典藏通訊·電子報》（2006年8月1日），頁1-17，對檢索流程、欄位定義有詳細說明。
〈http://www2.ndap.org.tw/newsletter06/news/read_news.php?nid=1504〉（2008/10/6）。又「清代檔案人名權威資料庫」原計畫建置六千位具奏人，目前所見資料已超過一萬二千筆，網址為：<http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttsweb?@0:0:1:mctauac::/tts/npmmeta/dblist.htm>。

¹⁸ 參見《國立故宮博物院國家型數位計畫·計畫簡介·數位典藏·2007年—2008年》，〈<http://www.npm.gov.tw/digitization/introductions/archives.htm>〉（2008/10/6）。

¹⁹ 「大清國史人物列傳及史館檔傳包傳稿全文影像資料庫」目前提供線上免付費目錄檢索，網址為：<http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttsweb?@0:0:1:npmmeta7::/tts/npmmeta/metamain.htm>。

當檔案典藏機構大規模整理資料、建置資料庫的同時，建立檔案術語規範的共識，有助於學者的查閱利用，更能促進館際合作。莊吉發〈回顧與前瞻——清宮檔案的整理出版與檔案術語的規範〉指出，今日經故宮博物院定名並重印的《滿文原檔》，過去有《滿文老檔》、《滿洲老檔》、《老滿文原檔》、《舊滿洲檔》、《滿文舊檔》、《老滿文檔》等名稱；奏摺中含有硃批、墨批等，還有未奉御批者，故宮博物院題為「宮中檔奏摺」，北京中國第一歷史檔案館編印的「宮中檔」，卻統稱為「硃批奏摺」，並不妥當；「軍機處檔·月摺包」內文書種類頗多，除奏摺錄副外，還有咨呈、知會、照會、稟文，以及未奉御批的原摺，將「月摺包」統稱為「錄副」奏摺，實有待商榷；「起居注」是官名，其所記載的檔冊稱為「起居注冊」，近年所出版者或稱「起居注」，或稱「起居注冊」，名稱並未規範；清代官稱、人名之中，同音異譯、一人二名的例子，更不勝枚舉。因此，檔案術語權威控制的工作做得好，不但有效掌握檔案資訊，能提高檢索的準確度，而且可以在資源共享的基礎上，提供良好的館藏服務，建立跨地區合作。²⁰薛理桂〈兩岸清代檔案數位資料庫之建置與合作芻議〉，則基於檔案學的學理，「尊重來源原則」，建議故宮博物院、史語所、北京中國第一歷史檔案館、遼寧省檔案館分別在各自的網頁上註明對方的網址，並將已建檔的資料庫與數位化的成果彼此交換，以及共同研議適用的清代檔案內容描述的規則，進而合作建置「清代人名權威檔」，再建置共同的「清代檔案聯合目錄」，以達到檔案資源分享的目標，可提供所有使用者最大的便利。²¹

珍貴的史料原件，經過數位化處理之後，可以減少因調閱而造成的損傷，亦能真實呈現檔案資料的面貌；當電子資料庫相繼建置之後，更標誌出學術資源共享的時代來臨。以往研究者在蒐集文獻資料時，通常是先閱讀相關文獻，從中摘錄

²⁰ 參見莊吉發，〈回顧與前瞻——清宮檔案的整理出版與檔案術語的規範〉，收入莊吉發，《清史論集（十七）》（臺北：文史哲出版社，2006年），頁89-130。又莊文曾於《清代檔案整理與館際合作：第三屆清代檔案國際學術研討會》（臺北：國立故宮博物院主辦，2006年11月2-3日）中宣讀。

²¹ 參見薛理桂，〈兩岸清代檔案數位資料庫之建置與合作芻議〉，《檔案季刊》，6卷2期（2007年6月），頁71-72。又薛文曾於《清代檔案整理與館際合作：第三屆清代檔案國際學術研討會·專題演講》中宣讀。

有用的部分，再抄錄到文章之中。資料庫的設立，最方便之處，在於強大的檢索能力，使文獻資料的蒐集更加快速，給予研究者極大的方便。²²莊吉發〈知道了——奏摺硃批論旨常見的詞彙〉，利用影印出版的《宮中檔康熙朝奏摺》漢文本二千多件檔案為例，以人工統計的方式，說明「知道了」係臣工奏摺所奉硃批出現頻率最高的詞彙，並據以分析「知道了」隱含的旨意及其轉變。²³邱怡靜〈從奏摺硃批看清前期君臣一體之關係〉，借用莊吉發的概念，透過「清代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫」的檢索，將討論範圍進一步擴及留存件數更多的雍正、乾隆二朝滿、漢文奏摺，呈現出更精細的分類與更多樣的量化。²⁴暫且不論二者的成果如何，茲比較二人對康熙三十五年至四十年(1678-1701年)的統計，再輔以中國第一歷史檔案館編《康熙朝漢文硃批奏摺彙編》，表列如下：

康熙三十五年至四十年間漢文奏摺奉硃批「知道了」件數統計比較表

來源 時間	宮中檔康熙朝奏摺		宮中檔奏摺資料庫		康熙朝漢文硃批奏摺	
	現刊件數	硃批件數	現刊件數	硃批件數	現刊件數	硃批件數
康熙 35.	2	0	—	1	3	0
康熙 36.	2	2	—	1	8	6
康熙 37.	1	1	—	1	5	4
康熙 38.	4	4	—	4	6	5
康熙 39.	0	0	—	0	5	0
康熙 40.	2	2	—	0	9	8
合計	11	9	—	7	36	23

資料來源：莊吉發，〈知道了——奏摺硃批論旨常見的詞彙〉，收入《文獻與史學：恭賀陳捷先教授七十壽壽論文集》，臺北：遠流出版公司，2002年，頁184。

邱怡靜，〈從奏摺硃批看清前期君臣一體之關係〉，臺北：東吳大學歷史研究所碩士論文，2007年，頁48。

中國第一歷史檔案館編，《康熙朝漢文硃批奏摺彙編》，北京：檔案出版社，1984年，第1冊，

²² 參見黃寬重、劉增貴，〈中央研究院人文計算的回顧與前瞻〉，頁146。

²³ 參見莊吉發，〈知道了——奏摺硃批論旨常見的詞彙〉，收入《文獻與史學：恭賀陳捷先教授七十壽壽論文集》，頁183-194。

²⁴ 邱怡靜，〈從奏摺硃批看清前期君臣一體之關係〉（臺北：東吳大學歷史研究所碩士論文，2007年），頁47-74。

在莊、邱二人的研究中，統計件數的多少，並不會影響討論的結果。但是從人工統計所得的數據較資料庫檢索為多來看，說明回歸檔案原件的檢視仍有其必要，且資料庫檢索亦有其侷限。《康熙朝漢文硃批奏摺彙編》係中國第一歷史檔案館就其所藏，再整合《宮中檔康熙朝奏摺》而成，故收錄的件數較多，就學術研究的角度而言，前述薛理桂主張檔案資源分享的目標，或為日後應嘗試的方向。

近十年來，清代檔案資料數位化的快速進展，對擅長使用電腦的新世代而言，在運用上自然駕輕就熟，而資料庫省時、省力的特點，更對他們產生莫大的吸引力。反映在清史研究方面，研究人口似有回升之勢，以清史為主題的學位論文，在資料的引證上較以往更為豐富、精密，這或許是臺灣清史研究再興的契機。然而，「周全的資料不必然帶來好的研究作品」。²⁵回顧前輩學者的業績，李光濤長年埋首於《內閣大庫檔案》的「故紙」堆中，開創明清檔案研究的天地；陳捷先、莊吉發在指導、參與故宮檔案整理的過程中，奠定二人在清史學界的地位，當歸功於他們辛勤地逐件、逐頁翻閱史料，進而建立對史事宏觀的認知，即便資料偶有關漏，猶能提出不易動搖的見解。今日的研究者挾資料庫的優勢，若未能將節省下來的寶貴時間，從事史料的解讀與史實的解釋，而僅滿足於「讓史料自己說話」的史料堆砌與史事排比的層次，則資料庫對學術研究進展的助益將極為有限。

三、「新清史」的研究取向

過去的二十多年來，美國清史學者透過「族群性」理論的角度，注意到滿洲族群的自我認同與族群意識，形成從「滿洲中心」的立場探討清朝的歷史，而這種

²⁵ 參見黃寬重、劉增貴，〈中央研究院人文計算的回顧與前瞻〉，頁 146。

切入的方式，自然無法與傳統的「漢化」觀點並存。王成勉〈沒有交集的對話——論近年來學界對「滿族漢化」之爭議〉，對於「滿族漢化」此一議題的正、反雙方的論述，有完整且清晰的評介，也指出這場爭論的學術意義在於：「如何論述過去非漢民族與漢族之間的文化互動，又如何去衡量這些文化影響，則為日後重要的課題」。²⁶先是，羅友枝歸納以往清史研究的成果，認為中國歷史上的非漢民族征服政權，始終存在著抵制漢化的意識；滿洲統治者融合了內陸亞洲與漢人思想意識，形成新的統治政權，從而建構多民族的帝國，新的研究趨勢顯示的是「滿洲中心」觀，這也是清朝統治中國成功的關鍵。她提醒研究者必須重新思考八旗統治集團對帝國的重要性，清朝對邊疆地區社會經濟造成的影響，以及多民族帝國體系的建立及其成就，²⁷從而構成「新清史」的基調。歐立德(Mark C. Elliot)〈滿文檔案與新清史〉進一步指出，從「新清史」的視野去了解清朝，有兩個基本的核心問題：一、滿洲人如何以少數的人口達到如此的成就？二、清朝統治對現代中國有何影響？並強調研究者直接使用滿文檔案的能力，將是重建清朝政治、社會、經濟、文化等各種不同層面更完整的圖像的重要途徑。²⁸

所謂的「核心問題」，是對滿洲統治中國的評價，而其發想的源頭，即是滿洲入主中國的史實。歷史上每當改朝換代之際，新政權不可避免的要設法論證其得天下的正當性，這對統治中國的非漢民族而言，尤其重要。張振陽〈「天命靡常」與「夷夏之防」——談清初支配正當性的建立〉認為，清初君主在建立政權的過程中，先以民族傳統的天命思想來鞏固自身的地位，當面對漢人夷夏觀的質疑時，既將天命思想逐步儒家化，又採取提倡儒學的方式以為因應。²⁹潘志群〈清

²⁶ 參見王成勉，〈沒有交集的對話——論近年來學界對「滿族漢化」之爭議〉，頁 57-81。又有關「滿族漢化」的爭議，另涉及研究者在界定滿洲主體性時，有強弱程度的差異，而造成解釋模式的不同，參見葉高樹，〈「參漢酌金」：清朝統治中國成功原因的再思考〉，《臺灣師大歷史學報》，第 36 期（2006 年 12 月），頁 155-165。

²⁷ Evelyn S. Rawski, "Presidential Address: Reenvisioning the Qing: The Significance of the Qing Period in Chinese History." pp.829-838.

²⁸ 參見歐立德(Mark C. Elliot)，〈滿文檔案與新清史〉，《故宮學術季刊》，24 卷 2 期（2006 年 12 月），頁 2-15。

²⁹ 參見張振陽，〈「天命靡常」與「夷夏之防」——談清初支配正當性的建立〉（臺北：政治大學民族研究所碩士論文，2001 年），頁 78-136。

初的統治正當性問題〉進一步指出，順治朝以暴力威嚇與制度儀式的雙重壓制，樹立君臣關係的絕對化；康熙皇帝更進行儒家經典詮釋的改造工程，從而強化統治正當性的理論基礎。³⁰清朝建立「正當性」呈現的論述手段，與儒家學說關係密切，是否即可視之為「漢化」？又讓問題回歸到「滿族漢化」的爭議之中。康、雍、乾三帝重視滿洲文化，積極提倡國語振興騎射，整理滿洲歷史與傳統，以及維持八旗制度的運作，蔡偉傑〈論清朝前期的滿洲文化復興運動〉主張，這些措施不僅是皇帝擔心滿洲人被漢人同化而失去統治的特權，更是透過文化與身分的界定來團結本民族，並維護自身的統治與優勢地位；³¹他又將觸動滿洲文化復興運動的意識淵源，上溯自努爾哈齊時代對女真本位主義的堅持，以及皇太極時代受滿漢二元文化結構的影響。³²黃麗君〈孝治天下：入關前後滿族孝道觀念之轉化及其影響〉則對「孝道」的觀察呼應「滿族漢化」的議題：滿族即便認同、接受中國式的孝道，卻不代表他們失去對自己民族的認同感。因此，以文化而言，滿洲統治者推行的政策，的確使得滿族「漢化」；但以心態而論，直到二十世紀改朝換代，滿族仍認為自己與漢族有所區別。³³

歐立德提出的第一個核心問題的「答案」，過去學界深受何炳棣的「早期的滿洲統治者採行有系統的漢化政策」的見解所影響。³⁴羅友枝則從滿洲主體性切入，力倡「滿洲中心」觀；在招致何炳棣的批判之後，歐立德另調整為：滿洲人「一

³⁰ 參見潘志群，〈清初的統治正當性問題〉（臺北：臺灣大學歷史研究所碩士論文，2004年），頁73-188。另參見潘志群，〈「夷狄之有君」：清初統治正當性問題與康熙帝《日講四書解義》的經典詮釋改造〉，收入黃寬重主編，《基調與變奏：七至二十世紀的中國（三）》（臺北：國立政治大學歷史學系，2008年），頁253-265。

³¹ 參見蔡偉傑，〈論清朝前期的滿洲文化復興運動〉（臺北：政治大學民族研究所碩士論文，2005年），頁101-169。

³² 參見蔡偉傑，〈論金國初期滿洲文化制度化與女真本位主義的形成〉，《中國邊政》，第168期（2006年12月），頁57-71；〈論清朝滿漢二元文化結構的形成及其意義〉，《中國邊政》，第170期（2007年6月），頁82-108。

³³ 參見黃麗君〈孝治天下：入關前後滿族孝道觀念之轉化及其影響〉（嘉義：中正大學歷史研究所碩士論文，2006年），頁144-146。

³⁴ Ping-ti Ho, "The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History." *The Journal of Asian Studies*, 26:2 (1967), pp. 191-192.

方面運用中國政治傳統，一方面又同時維持其獨特之認同」。³⁵在「漢化」、「滿洲中心」或「二元文化」之外，葉高樹〈「參漢酌金」：清朝統治中國成功原因的再思考〉認為，滿洲在接觸、引進外來文化時，是以「參漢酌金」為前提。「參漢酌金」蘊含的概念可理解為：對外來文化的選擇與以滿洲為中心的調適，而選擇的權力與調適的方式，滿洲統治者始終居於主導的地位，而且是一個持續進行與不斷檢驗的過程。滿洲即憑藉著靈活的「參漢酌金」策略，由文化弱勢、武力有限的蕞爾小邦，而能征服中國，並拓展為多民族帝國。³⁶這個解釋模式是否能夠成立，還有待討論，然或可作為重新評估清朝統治中國的特徵及其成功原因的線索之一。

關於第二個核心問題，無論是何炳棣所說的：自一六〇〇年至一八〇〇年間，滿洲統治者在治理邊疆的同時，也將帝國凝聚成地理的與種族的實體，締造現代中國的基本形態；³⁷或是歐立德主張的：滿洲統治中國期間，在「疆域」與「多民族性」兩方面呈現的特點，都為後來的中國政權所接收，³⁸實與羅友枝提示的多民族帝國的概念一致。清朝是由多元族群與多元文化構成的帝國，統治者的整

³⁵ 參見歐立德，〈滿文檔案與新清史〉，頁 12。歐立德對此主題較詳細的論述，參見歐立德著，華立譯，〈清代滿洲人的民族主體意識與滿洲人的中國統治〉，《清史研究》，2002 年第 4 期（2002 年 11 月），頁 87-90。

³⁶ 參見葉高樹，〈「參漢酌金」：清朝統治中國成功原因的再思考〉，頁 165-190。「參漢酌金」一詞，見於羅振玉編，〈天聰朝臣工奏議〉，收入潘喆等編，〈清入關前史料選輯〉，第 2 輯（北京：中國人民大學出版社，1989 年），頁 82，〈寧完我請變通《大明會典》設六部通事奏〉，天聰七年八月初九日。由於清朝政權是由民族共同體逐步擴大為多民族帝國，始終具有多元民族、多元文化的形態，而影響滿洲文化形成的因素，並非只有漢文化而已，滿文的創製深受蒙古文化的影響，即為著例。故「參漢」的「漢」，對滿洲而言，似可擴大解釋為「外來文化」的代名詞。至於「酌金」，則是在面對文化選擇時，以滿洲主體意識為前提，進行追求可用性與建立獨特性的文化調適的歷程。又最早從「參漢酌金」角度來解釋滿洲君主的文化選擇者，參見陳捷先，〈從清初中央建置看滿洲漢化〉，收入中央研究院近代史研究所編，〈近代中國初期歷史研討會論文集〉（臺北：中央研究院近代史研究所，1989 年），上冊，頁 190-191。

³⁷ Ping-ti Ho, "The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History." p.189.

³⁸ 參見歐立德，〈清代滿洲人的民族主體意識與滿洲人的中國統治〉，頁 91-93。在疆域方面，清朝將地理上屬於內陸亞洲的許多地區，都編入帝國的版圖，而為一九一二年以後的中國政權所繼承；滿洲人更將漢人傳統以長城劃分的內、外統為一體，使「中國」的概念得以重新定義。在多民族性方面，滿洲統治者標榜的「滿漢一體」或「五族一體」說，也為後來的中國政權所採用；在清朝的統治下，促使由各個不同民族所組成的「中華民族」一詞，可以與「曾經過去是清朝疆域內的人們」同義。

合能力，關係著帝國的穩定。葉高樹《清朝前期的文化政策》，借用費孝通「多元一體格局」的架構，說明清朝統治中國，係兼具滿洲意識的「征服政權」與漢文化內涵的「中原政權」二重特徵，並論述滿洲從民族共同體到多民族帝國的演進歷程中，無論是語文政策或治理方式，始終都具有「多元一體」的特徵。³⁹林士鉉〈清朝前期的滿洲政治文化與蒙古〉，側重滿洲政治文化脈絡中的蒙古因素，論述滿洲統治者藉由滿蒙聯姻、宗教信仰、八旗組織等，建立「滿蒙一體」的基礎，再透過纂修蒙古歷史、引進蒙古音樂舞蹈、控制藏傳佛教、利用佛教理論建構族群意識，以及發揮滿文拼音特性推動「同文」政策，使滿、蒙能真正融為「一體」，並促進滿洲與北亞文化的交流。⁴⁰清朝常以貢馬活動作為與外藩、屬國之間的政治交流，在〈乾隆時代的貢馬與滿洲政治文化〉一文，林士鉉延續上述觀點，從貢馬的圖像、命名取向、引進蒙文中有關馬的辭彙，以及宮廷祭馬神儀式，分析蒙古文化的作用力。⁴¹將研究多民族帝國的視角從中國本土轉移到內陸亞洲，是「新清史」的重要訴求，也是值得繼續深化的領域。

多民族帝國採取「因俗而治」的統治策略，尤其在宗教政策方面，運用得最為成功。從整體來看，莊吉發〈清朝宗教政策的探討〉指出，在清朝在「黜邪崇正」的方針下，對正信宗教有條件的接受，將新興教派與外來宗教視為邪教，護持正教與取締異端，成為制訂宗教政策的指導原則。面對帝國內部多元族群的多元信仰，統治者對異端邪教固然嚴加查禁，但對佛、道正信宗教的接受，或對黃教的護持，也都是在有利於鞏固政權前提下的權宜措施。⁴²對帝國而言，維護藏傳佛

³⁹ 參見葉高樹，《清朝前期的文化政策》（臺北：稻鄉出版社，2002年），頁6-7、頁45-52。由於「多元一體」政權的形成，並非清朝統治中國期間所獨有，而是整個中國歷史文化搏成過程中呈現的特徵；加以費孝通的「多元一體格局」，傾向於以中原或漢族為中心，若運用在滿洲關外時期歷史的討論，較難論定滿洲政權已具備中國王朝的特徵，遂認為有必要將解釋架構修正為「參漢酌金」模式。參見葉高樹，〈「參漢酌金」：清朝統治中國成功原因的再思考〉，頁182-183。

⁴⁰ 參見林士鉉，〈清朝前期的滿洲政治文化與蒙古〉（臺北：政治大學歷史研究所博士論文，2006年），頁2-5、頁10-11。

⁴¹ 參見林士鉉，〈乾隆時代的貢馬與滿洲政治文化〉，《故宮學術季刊》，24卷2期（2006年12月），頁52-56、頁96-97。

⁴² 參見莊吉發，〈清朝宗教政策的探討〉，收入王成勉主編，《明清文化新論》（臺北：文津出版社，2000年），頁31-35、頁80-82。關於清朝對各宗教的正統與異端的界定，略為：內地漢族普遍信奉

教係穩定蒙古、西藏的重要手段，所謂「興黃教，即所以安眾蒙古」，⁴³劉家駒〈康熙皇帝的振興法教與平定西藏〉、⁴⁴林秋燕〈盛清諸帝治蒙宗教政策之研究〉，⁴⁵皆據以論證清初諸帝以尊崇黃教、表明護法的立場，達到綏服蒙古諸部，以及解決西北準噶爾威脅的目的，並用以加強對西藏的控制，使蒙、藏民族認同清朝的宗主地位。滿洲統治者又出資在北京等地廣建藏傳佛寺，以官銀、內帑供養喇嘛，賴惠敏〈清政府對北京藏傳佛寺之財政支出及其意義〉認為，清朝扶持漠南、甘肅、青海地區駐京呼圖克圖的寺廟經濟，不但阻隔蒙藏、勢力的勾結，也促使其他寺廟設法依附皇權，遂達到利用藏傳佛教銷蝕蒙古力量的目的。⁴⁶儘管清朝的統治手段具有相當的彈性，然統治者為謀鞏固政權，實有必要製造認同的途徑、建立認同的論述，以凝聚內部成員的向心力。葉高樹〈滿洲君主塑造政權認同的論述〉以為，努爾哈齊創製滿文、建立八旗制度，為統治下的各族群提供認同的基礎，並整合成為擬民族的共同體；皇太極又定族稱為「滿洲」，為共同體成員標識出認同的主體。迨入關之後，滿洲君主進一步確認「旗人」等同於「滿洲人」，並將認同的兩大要項深化為「根本」，使共同體的成員願意為鞏固政權與維護「根本」而努力。滿洲統治者面對關外漢人，標舉「滿漢一體」為號召；面對內地漢人，擬定「崇儒重道」的大政方針。在邊疆開拓階段，則使各族群融

的佛、道二教，係舊有的正信宗教，由佛、道世俗化衍生而來的民間秘密宗教，則為新起邪教；蒙、藏民族敬奉的藏傳佛教中，由於黃教與清朝統治者的關係密切，故以黃教為正教，以紅教、本教為邪教；西北民族的回教教派，有舊教、新教之分，朝廷扶持舊教，以新教為邪教；至於天主教，是外來新宗教，也被視為邪教，凡屬異端邪教，必施以嚴厲的打擊。

⁴³ 清高宗御製，《清高宗（乾隆）御製詩文全集·御製文三集》（北京：中國人民大學出版社，1993年），卷4，〈說·喇嘛說〉，頁10。

⁴⁴ 參見劉家駒，〈康熙皇帝的振興法教與平定西藏〉，收入《中華民國史專題論文集：第五屆討論會》（臺北：國史館，2000年），頁1029-1056。

⁴⁵ 參見林秋燕，〈盛清諸帝治蒙宗教政策之研究〉（臺北：臺灣師範大學歷史研究所碩士論文，2000年），頁45-54、頁98-103。

⁴⁶ 參見賴惠敏，〈清政府對北京藏傳佛寺之財政支出及其意義〉，《中央研究院近代史研究所集刊》，第58期（2007年12月），頁28-39。又乾隆皇帝大力推廣藏傳佛教，將雍和宮改建為藏傳佛教的寺院，並贊助大量的經費；加上「金瓶掣籤」制度的實施，使雍和宮成為藏傳佛教的信仰中心，乾隆皇帝也成為蒙古、西藏政教合一的領袖。由於北京藏傳佛教的宗教活動頻繁，帶動達官貴人的信仰風氣，雖招致漢人的負面批評，卻促成北京下層民眾與藏傳佛教文化間的互動。參見賴惠敏、張淑雅，〈清乾隆時代的雍和宮——一個經濟文化層面的觀察〉，《故宮學術季刊》，23卷4期（2006年6月），頁132-159。

為「一體」，並以認同滿洲統治為中心，再透過「同文之治」的施行，來強化認同的論述。⁴⁷所謂現代中國的形成，亦當與此有關。

其次，在「新清史」影響臺灣之前，學者較少從事旗人與八旗統治集團的相關研究，而能有系統地進行者，當推賴惠敏在一九九七年出版的《天潢貴胄——清皇族的階層結構與經濟生活》。⁴⁸同時，她也分別從經濟史、法制史的角度，運用豐富的檔案史料，對與皇室關係密切的內務府，以及旗人的法律與社會，發表一系列的研究論著。在內務府方面，〈乾隆朝內務府的當舖與發商生息（1736-1795）〉，探討乾隆朝對內帑的運用，為確保利潤，而從經營當舖改為發商生息的轉變；雖然鹽商承借的利息不高，卻因長期借貸累積巨額利息，捐輸報效的負擔沉重，以及鹽業產銷環境的變化，終至破產。⁴⁹〈從高樸案看乾隆朝的內務府與商人〉，藉由乾隆皇帝懲治新疆葉爾羌辦事大臣高樸貪污案，分析在皇權高漲之下，皇帝端正與內務府包衣間主僕名分的手段，以及政府統制經濟與商人自由經濟間消長的過程。⁵⁰〈乾隆朝內務府的皮貨買賣與京城時尚〉，從內務府採辦皮貨說明宮廷對毛皮服飾的需求，及其變賣皮張對旗人仿效宮廷服飾、北京衣著時尚的影響。⁵¹〈鐵杆莊稼？清末內務府辛者庫人的家戶與生計〉，清初內務府辛者庫人一般認為是最低賤的奴僕，但透過對嘉慶朝以降三個管領的人丁

⁴⁷ 參見葉高樹，〈滿洲君主塑造政權認同的論述〉，收入《基調與變奏：七至二十世紀的中國（三）》，頁 268-291。清朝推行多元並行的語文政策，雖能展現帝國對多元文化的尊重與開放的態度，卻不足以有效達成凝聚多元民族的目的，故而有「同文之治」的提出。所謂「同文之治」，是以滿洲政權為中心的「並呈」，此一特徵在清朝稱之為「合璧」，自入關以來，舉凡冊書、誥書、錢幣、宗室黃冊、覺羅紅冊等都是兼書滿、漢文，亦兼及其他民族文字，此種呈現的形式，具有族群融合的象徵意義。

⁴⁸ 是書以《玉牒》為基礎，並利用大量中國第一歷史檔案館的檔案，從家族史、經濟史、法制史三個面向，探討皇族的組織與階層流動、公產與官莊、財產分配與經濟生活等議題。參見賴惠敏，《天潢貴胄——清皇族的階層結構與經濟生活》（臺北：中央研究院近代史研究所，1997年），頁 12-19。

⁴⁹ 參見賴惠敏，〈乾隆朝內務府的當舖與發商生息（1736-1795）〉，《中央研究院近代史研究所集刊》，第 28 期（1997 年 12 月），頁 137-175。

⁵⁰ 參見賴惠敏，〈從高樸案看乾隆朝的內務府與商人〉，《新史學》，13 卷 1 期（2002 年 3 月），頁 72-125。

⁵¹ 參見賴惠敏，〈乾隆朝內務府的皮貨買賣與京城時尚〉，《故宮學術季刊》，21 卷 1 期（2003 年 9 月），頁 102-129。

的家庭結構、當差任職、經濟收入的分析，他們的身分地位出現明顯的流動，⁵²這是過去的研究所忽略的。

在旗人的法律與社會方面，賴惠敏將主要的成果集結為《但問旗民：清代的法律與社會》，由於管理旗、漢的行政組織不同，法律對族群、性別的處理也有差異，故書中依旗、漢分為兩篇。其中上篇專論旗人，包括：〈清代皇族婦女的家庭地位〉，指出多數皇族婦女依存在男性世界中，法律除保障她基本的生活條件外，不承認她合法的權益；婦女在家庭中未獲得尊重，本身也未負啓教養子女的責任，以致皇族漸趨腐化。〈清代旗人婦女財產權之淺析〉，討論婦女的生活保障與獨立產權、寡婦的財產權與立嗣權、婦女妝奩支配與女兒財產繼承諸問題。〈從清代檔案看旗人的家庭糾紛(1644-1795)〉，分析旗人家庭糾紛案件的類型，因大家庭引起的內部糾紛，以及旗人婦女矜持自重的道德觀。〈婦女無知？——清代內務府旗婦的法律地位〉，旗人家庭遵守傳統禮教，從司法檔案來看，旗人重禮教背後另有一套法律運作，使不守禮法者受到制裁，用以維繫旗人社會秩序。〈清代內務府官莊的家戶及其人口行爲〉，係就前述篇章討論的旗人家戶型態進行量化研究，證明旗人社會中富有的家族維持大家族型態，而且為繁衍家族，旗人繼承財產亦發展出獨特的策略。⁵³以上各議題的設定，亦與作者長期關注婦女史研究有關，頗能反映出不同階層的旗人婦女的法律地位。另〈從契約文書看清前期的旗地政策與典賣(1644-1820)〉一文，則探討因旗地典賣所導致旗人與奴僕間關係的變化，奴僕透過贖身、開戶、出戶等方式，逐漸取得改為民籍的機會，許多旗人奴僕遂成為國家子民。⁵⁴

與八旗統治集團相關者，又有對皇族婚姻的研究。馮國華〈清代宗室婚姻政策

⁵² 參見賴惠敏，〈鐵杆莊稼？清末內務府辛者庫人的家戶與生計〉，《中央研究院近代史研究所集刊》，第38期（2002年12月），頁73-105。

⁵³ 參見賴惠敏，《但問旗民：清代的法律與社會》（臺北：五南圖書出版公司，2007年），頁1-205。書中下篇探討漢人的法律與社會，包括：〈從命案看清前期的國家與社會(1644-1795)〉、〈婦女、家庭與社會——雍乾時期拐逃案的分析〉、〈情慾與刑罰——清前期犯姦案件的歷史解讀(1644-1795)〉。

⁵⁴ 參見賴惠敏，〈從契約文書看清前期的旗地政策與典賣(1644-1820)〉，《中央研究院近代史研究所集刊》，第32期（1999年12月），頁127-161。

研究），選定宗室中人口比例最大、經濟基礎薄弱的四品宗室為研究對象，表現在婚姻上呈現晚婚、少妻妾、單身比例高；由於俸祿決定婚姻的規模與對象，而婚姻的形態又與日益低落的社會經濟地位交互影響，故只能延續愛新覺羅家族既成的人際網絡，後期更僅限於與小姓婚配。⁵⁵陳孟惠〈清代皇室女性婚姻之研究——以后妃、公主為例〉，以《清史稿》〈后妃傳〉、〈公主表〉的記載為對象，說明統治者擁有指配其他成員婚姻的最大權力，再配合閱選秀女制度、備指額駙制度，構成皇室成員的婚姻網絡；皇后與公主的婚姻固然是由政治力決定，惟閱選秀女制度形成後，由此進入後宮的后妃，受政治力的影響則較小。⁵⁶

由八旗制度衍生而來的，另有旗務、駐防諸問題。在旗務方面，清朝統治者視「八旗人員乃國家根本」，⁵⁷自入關以來，卻因旗、漢接觸頻繁，誘使旗人逐漸拋棄「國語騎射」的傳統，日益背離儉約淳樸的習性，雍正皇帝在位期間，對旗務問題多所留意。葉高樹〈深維根本之重：雍正皇帝整飭旗務初探〉，就八旗人等廢弛本習、生計困難、沾染漢俗等項，探討雍正皇帝整飭旗務的措施，然以成效而論，官員常不能認真落實政策，而旗人也不能確實守法自律，反映出整飭工作被動、消極的一面。⁵⁸事實上，八旗人等遭遇的種種困境，係長時間累積的結果，並非雍正朝短短十餘年所能徹底扭轉，而官書對此卻少有負面的記載。〈清雍乾時期的旗務問題：以雍正十三年滿、漢文「條陳奏摺」為中心〉，利用乾隆皇帝繼位之初八旗官員進呈有關旗務的一百三十五件「條陳奏摺」，分析他們對雍正朝以來有關人事陞遷、教育訓練、生計維持、人心風俗等整飭旗務措施的檢討，以及對乾隆朝初期推動革新旗務政策的影響。⁵⁹學習清語、專精騎射，以及保持

⁵⁵ 參見馮國華，〈清代宗室婚姻政策研究〉（臺北：臺灣師範大學歷史研究所碩士論文，2001年），頁1-28、頁323-326。

⁵⁶ 參見陳孟惠，〈清代皇室女性婚姻之研究——以后妃、公主為例〉（臺中：東海大學歷史研究所碩士論文，2006年），頁1-17、頁167-174。

⁵⁷ 《清實錄·世宗憲皇帝實錄》（北京：中華書局，1985年），卷60，頁26，雍正五年八月庚戌條。

⁵⁸ 參見葉高樹，〈深維根本之重：雍正皇帝整飭旗務初探〉，《臺灣師大歷史學報》，第32期（2004年6月），頁90-119。

⁵⁹ 參見葉高樹，〈清雍乾時期的旗務問題：以雍正十三年滿、漢文「條陳奏摺」為中心〉，《臺灣師大歷史學報》，第38期（2007年12月），頁70-141。文引中用《宮中檔雍正朝奏摺·滿文諭摺》的部分，雖然可以參照中國第一歷史檔案館編譯，《雍正朝滿文硃批奏摺全譯》（合肥：黃山書社，

「淳樸」，是身為旗人應具備的基本條件，也是國家據以教養與考核八旗人等的標準。〈習染既深，風俗難移：清初旗人「漸染漢習」之風〉則指出，雍、乾二帝將清語、騎射深化為旗人的「根本」，將高尚的行為內化為滿洲「淳樸」的傳統，當八旗人等的清語、騎射流於生疏與人心風俗日趨沉淪之時，亦即「根本」發生鬆動與「淳樸」面臨挑戰之際，統治者雖將之歸咎於「漸染漢習」所致，亦不得不承認有政策上的疏失，是以即便加以勸誡、禁止或懲罰，其勢實無法遏止，也難以挽回。⁶⁰

在駐防方面，駐防八旗相對於在京八旗，與漢人的互動較為密切，受漢文化的衝擊更加明顯。林承誌〈分鎮巖疆·駐衛內裏——清朝駐防八旗問題研究〉，探討在駐防體系形成的過程中，八旗官員與直省督撫、綠營將領間的協調與齟齬，朝廷給予駐防官兵的待遇與賞恤，以及駐防旗人逐漸沾染漢俗時，朝廷採取的因應措施。⁶¹有關八旗駐防的討論，已有任桂淳《清朝八旗駐防興衰史》、定宜庄《清代八旗駐防研究》兩種評價甚佳的專書，⁶²林承誌的研究架構雖未能超越前人，但內容上頗有補充，仍可供參考。八旗駐防的城市中，均劃出特定的區域作為軍隊駐防之用，並修築城牆以分隔旗、民，稱為「滿城」或「駐防城」。許富翔〈清代江寧滿城研究〉，以個案研究的方式，討論江寧滿城的建制、經費的來源與運用、旗人生活形態與認同意識的轉變，並分析其崩潰的原因；對滿城內部空間佈局的重建，著墨甚多，足以彌補現存文獻記載不詳之處。⁶³賴惠敏〈從杭州滿城看清代的滿漢關係〉，以杭州駐防滿城為例，從漢軍出旗卻增加恩養旗人

1998年），仍逐句重譯；在繙譯的過程中，發現不少《奏摺全譯》的譯文欠精準甚至錯誤之處，可見歐立德主張研究者在使用滿文檔案時，必須親自進行解讀的必要。參見歐立德，〈滿文檔案與新清史〉，頁11。

⁶⁰ 參見葉高樹，〈習染既深，風俗難移：清初旗人「漸染漢習」之風〉，收入國立臺灣師範大學歷史學系編，《近世中國的社會與文化（1960—1800）論文集》（台北：國立臺灣師範大學歷史學系，2007年），頁247-275。

⁶¹ 參見林承誌，〈分鎮巖疆·駐衛內裏——清朝駐防八旗問題研究〉（臺中：東海大學歷史研究所碩士論文，2007年），頁1-18、頁263-270。

⁶² 參見任桂淳，《清朝八旗駐防興衰史》（北京：三聯書店，1993年）；定宜庄，《清代八旗駐防研究》（瀋陽：遼寧民族出版社，2003年）。

⁶³ 參見許富翔，〈清代江寧滿城研究〉（臺北：東吳大學歷史研究所碩士論文，2008年），頁1-22、

的項目、由八旗滿洲、蒙古控制重要火器，說明乾隆朝以實質利益保障滿洲人，以及強化滿洲本位主義；從檔案記載反映的旗人日常生活，說明駐防旗人仍保留原本居住在北京的習俗風尚，來維持滿洲民族認同。比較特別的，是從法律的角度來觀察族群認同問題，舉出駐防兵丁搶奪民物、三藩之亂期間劫掠婦女、杭州城內的集體鬥毆等案件，朝廷對滿、漢集體犯罪懲處的差別待遇，係刻意保障旗人的司法特權以達到目的。⁶⁴

再次，關於清朝對邊疆地區社會經濟的影響，東北為「龍興之地」，⁶⁵滿洲入關之初，為防止漢人進入開墾，乃採取消極的保護措施，許倩倫〈清代東北封禁政策之研究〉，綜述封禁政策從形成、鬆弛到開放的歷程，由於政策執行時鬆時嚴，加以清中葉內地人口激增、天災頻仍，流民私自越界盜採、盜獵、佔種的案件層出不窮，反而造成東北社會的動盪；降及晚清，朝廷為因應帝國主義勢力進入，乃逐步調整為移民實邊的積極政策。⁶⁶林士鉉〈清季東北移民實邊政策之研究〉，將討論的重點置於東北移墾社會的發展與邊疆危機的擴大，從辦理旗屯，開放旗招民佃，進而旗民兼招、籌款招墾，最後達到「實邊在闢地，闢地在聚民，防邊必先置戍」的目的，反映出邊政的變化，⁶⁷可與許倩倫的論文互相參照。

清朝對待蒙古諸部，早在關外時期即已採取善為撫馭的態度，並確立分化、利用、限制等政策，⁶⁸然又懼怕蒙古諸部的壯大，因而在蒙古地區實施多元化、多層次的封禁政策。羅運治〈清代對蒙古地區的封禁政策〉指出，政策的內容可分為：一、在蒙古各旗之間的封禁，嚴禁各旗越界與私下往來；二、在蒙古各部之

頁 203-208。。

⁶⁴ 參見賴惠敏，〈從杭州滿城看清代的滿漢關係〉，《兩岸發展史研究》，第 5 期（2008 年 6 月），頁 37-89。

⁶⁵ 《清實錄·高宗純皇帝實錄》（北京：中華書局，1985 年），卷 1023，頁 8，乾隆四十一年十二月丁巳條。

⁶⁶ 參見許倩倫，〈清代東北封禁政策之研究〉（臺北：臺灣師範大學歷史研究所碩士論文，1999 年），頁 1-6、頁 245-248。

⁶⁷ 參見林士鉉，〈清季東北移民實邊政策之研究〉（臺北：政治大學歷史研究所碩士論文，1999 年），頁 1-10、頁 260-263。

⁶⁸ 參見王鍾翰，〈清代民族宗教政策〉，收入王鍾翰，《王鍾翰學術論著自選集》（北京：中央民族大學出版社，1999 年），頁 230-231。

間的封禁，禁止漠南蒙古與喀爾喀、厄魯特蒙古間的互通；三、在蒙古族與漢、藏二族間的封禁，不准蒙漢、蒙藏民族間的交往。⁶⁹溫浩堅〈清朝蒙古的封禁隔離政策〉的討論架構與羅運治近似而較為詳盡，文中對治蒙政策、封禁隔離政策的形成背景，民族隔離政策的內涵，以及政策的檢討等，有較深入的分析，認為在此政策之下，造成蒙古族的弱化，製造蒙、漢隔閡，以及導致邊疆危機與領土喪失。⁷⁰封禁政策對蒙古的經濟形態也產生衝擊，孔拉普〈清代蒙古游牧經濟〉歸納其影響，包括：由於盟旗制度的建立，大規模、遠距離的移牧現象消失，個別家族的定地放牧成爲主要的游牧形態；隨著手工業者、商人、農民的出現，使得原本單一的經濟體系朝向多元化的經濟體系轉變，加以商品經濟的發展，促使自給自足的大型游牧經濟解體；驛站制度的建立，促進蒙古與內地漢族的經濟聯繫，但驛站也造成蒙古牧民的經濟負擔，而經濟的變遷，最終導致蒙古王公與人民間的社會衝突日益升高。⁷¹

對於西北，當地民族成分複雜，尤其位處天山南、北路的回部與準噶爾，長年以來屢爲邊患，清朝始終堅持武力征伐的策略，迨乾隆二十四年（1759年）始底定新疆，進行統治。⁷²林恩顯〈清朝在新疆的政策制度分析初探〉，認為清朝吸收中國歷代王朝的民族政策與制度經驗，掌握傳統華夷觀、因俗而治、懷柔羈縻、牽制分化、民族隔離、邊防治安等原則，透過政策與制度在新疆推動具多元、整合色彩和功能的支配統治；在法制上以維護地方上層階級權益，達到由多元趨向整合統一的目的。⁷³作者選定符合「新清史」特徵的議題，且嘗試運用社會科學理論建立解釋模式，惟不時顯露漢文化中心的意識。對於西藏，雖然達賴喇嘛須向清朝履行名義上的封貢關係，但朝廷視西藏乃「極邊之地，非內地可比，其生

⁶⁹ 參見羅運治，〈清代對蒙古地區的封禁政策〉，收入《中華民國史專題論文集：第五屆討論會》，頁 851-877。

⁷⁰ 參見溫浩堅，〈清朝蒙古的封禁隔離政策〉（臺北：政治大學歷史研究所碩士論文，2003年），頁 1-6、頁 190-208。

⁷¹ 參見孔拉普，〈清代蒙古游牧經濟〉（臺北：政治大學歷史研究所碩士論文，1999年），頁 119-124。

⁷² 參見莊吉發，《清高宗十全武功研究》（臺北：國立故宮博物院，1982年），頁 9-22、頁 65-72。

⁷³ 參見林恩顯，〈清朝在新疆的政策制度分析初探〉，收入《中華民國史專題論文集：第五屆討論會》，頁 889-925。

計風俗，自當聽其相沿舊習，毋庸代為經理」。⁷⁴陳又新〈清朝前期經營西藏之研究〉，分別從滿、蒙、藏關係，清初諸帝對藏傳佛教及其宗教領袖的態度，達賴喇嘛與班禪額爾德尼的互動，清朝管理西藏事務機構的建置與各種章程的訂定，清朝在西藏的軍事活動與疆界的劃分，以及西藏的經濟發展與社會流動等項目，說明清朝與西藏的關係，⁷⁵通篇詳於史實的重建，而作者個人觀點的表述，及其對歷史事件的分析，則略顯薄弱。

清朝治理邊疆地區的策略，雖然呈現多元的形態，但是對確立主權地位的態度則始終如一。鄭永昌〈政軍基礎的延續力量——論清代乾隆年間對新疆與西藏實施的貨幣政策〉，論述清朝在對新疆、西藏進行控制的過程中，一方面為穩定邊陲社會，而沿用當地固有貨幣；一方面為建立新政權的統治基礎，而在南、北疆分別實施舊普爾錢與制錢二元貨幣體制，在西藏則推行自鑄銀元的制度；更透過舊幣回收的政策，有效提高朝廷在邊疆的政治地位，也促進當地社會經濟的發展。⁷⁶又自康熙皇帝在熱河營建避暑山莊起，即成為諸帝塞外巡幸之所，也是接見蒙古、回部、西藏等外藩使臣之處。彭嘉楨〈清代熱河地區巡幸活動的區域發展關係之研究〉，指出在熱河地區成為統攝邊疆的政治中心的過程中，因管理的需要，出現從軍事性的臨時組織到州縣化的轉變；因人員的流動，產生土地、糧食、商品的供需問題；因人口的移入，在帶動經濟發展的同時，也引發社會衝突。⁷⁷從邊疆開發的角度來看，熱河的變遷與當時許多邊疆地區的演進有相似之處，惟其因巡幸活動所帶來的強烈政治性，則非其他地區可比擬。

至於滿文史料的運用，莊吉發〈清史研究的前景——新史料的發現與新清史研究〉，揭示滿文對清初史事、薩滿信仰、滿族家譜等研究的重要性，⁷⁸惟其先決

⁷⁴ 《清實錄·高宗純皇帝實錄》，卷 261，頁 23，乾隆十一年三月壬辰條。

⁷⁵ 參見陳又新，〈清朝前期經營西藏之研究〉（臺北：臺灣師範大學歷史研究所博士論文，1998 年），頁 1-6、頁 407-411。

⁷⁶ 參見鄭永昌，〈政軍基礎的延續力量——論清代乾隆年間對新疆與西藏實施的貨幣政策〉，《故宮學術季刊》，21 卷 1 期（2003 年 9 月），頁 136-177。

⁷⁷ 參見彭嘉楨，〈清代熱河地區巡幸活動的區域發展關係之研究〉（臺北：臺灣師範大學歷史研究所碩士論文，2000 年），頁 1-15、頁 223-225。

⁷⁸ 參見莊吉發，〈清史研究的前景——新史料的發現與新清史研究〉，收入《清史論集（十七）》，

條件在於研究者必須具備閱讀滿文的能力。莊吉發從事滿文教學長達三十餘年，先後在政治大學邊政研究所（現改為民族學系）、臺灣師範大學歷史學系、故宮博物院開設滿文課程；⁷⁹基於教學的需要，也編譯出版一系列滿語教材，⁸⁰對滿洲語文人才的培育貢獻卓著，從近年發表的論著來看，能使用滿文史料的研究者漸多，即可為證。滿文之於清史研究，誠如歐立德所言，「使用翻譯過的滿文檔案並不等於使用滿文檔案，除非這些翻譯出自你自己。這不只是因為翻譯可能出錯，更是因為沒有一種翻譯可以傳達自己親身閱讀檔案所得到的那種感覺」；「致力於提出新穎而重要的問題，引導出原創而吸引人的歷史，以此說服下一代史家，新清史有其收穫，而閱讀滿文檔案更可得到其獨特的收穫」，⁸¹值得研究者深思。

「新清史」的內涵，或可視為是整合以往的研究成果之後，所提出的一種趨勢。在此之前，「新清史」標舉的研究方向，在日本、臺灣或中國，已有部分學者持續對此相關議題發表論著。⁸²但是經由美國學者將「新清史」的概念加以系統化、理論化之後，對清史學界造成極大的影響，在臺灣也吸引不少新進的研究者的投入，遂成為最近十年，乃至往後清史研究的主要走向。

四、對「清史工程」的回應

中國歷代的官修正史，從史學的角度來看，具有保存與公開史料的意義，是維

頁 159-198。

⁷⁹ 參見葉高樹，〈久著十全贏樹績：莊吉發教授的滿文教學與研究〉，頁 107-110。此外，中正大學歷史學系自二〇〇四年開始，亦開設滿文課程，由甘德星擔任；又故宮博物院的「滿文資料研讀班」，在二〇〇七年以後，由莊吉發的學生林士鉉接任。

⁸⁰ 莊吉發編譯的滿語教材取材多元、種類甚多，均由臺北文史哲出版社出版，以近十年為例，包括：《御門聽政——滿語對話選譯》（1999年）、《滿語童話故事》（2004年）；《滿語歷史故事》（2005年）、《滿語常用會話》（2006年）、《滿漢西遊記會話》（2007年）。

⁸¹ 參見歐立德，〈滿文檔案與新清史〉，頁 11。

⁸² 參見歐立德，〈滿文檔案與新清史〉，頁 4-5、頁 15。

持千餘年不變的史學傳統；就政治的作用而言，又有標誌政權正統地位的深層寓意，也是政權闡述其正當性的重要途徑。清朝修《明史》，自順治二年（1645年）首次下詔開《明史》館起，迄乾隆四年（1739年）刻成，前後歷時九十五年，是傳統中國耗時最久的一部官修正史，官方因而累積豐富的修史經驗，⁸³後世也給予甚高的評價。民國建立後，民國政府自一九一四年開清史館纂修清史，在時局動盪、未遑審訂之際，即於一九二七年以未定本的《清史稿》名義付梓，雖然完成「易代修史」的階段性任務，卻遭致種種責難，乃至查禁的命運。隨後，由於政治局勢的劇變，纂修一部足以取代《清史稿》的史書的工作，遲遲未見進展。

一九四九年國民政府遷臺後，由官方出資進行大規模整修《清史》的工作，共有三次：一、一九六〇至六一年，由國防研究院主持，將關內本《清史稿》重新整理出版，定名為《清史》，作為中華民國開國五十週年紀念。二、一九七八年至九一年，在錢穆的倡議下，由國史館、故宮博物院合作，採「不動原文，以稿校稿，以卷校卷」的方法，就關外本《清史稿》進行校註，完成《清史稿校註》。三、一九九一年以後，國史館擬依據《清史稿校註》，以及清代國史館檔案與清史館檔案，繼續推動纂修《新清史》的計畫，也完成〈本紀〉及部分的〈志〉，並印製成書，保存館中。⁸⁴前述「漢籍電子文獻資料庫」中的「新清史·本紀資料庫」，即屬《新清史》計畫的成果。迨二〇〇〇年以後，政府對國史的內涵重新定位，將國史館的工作重心轉移至臺灣史，新修清史的計畫遂遭擱置。

從校註《清史稿》到推動《新清史》計畫的過程中，參與工作的學者們，也相繼提出若干修史意見。早在一九八〇年，由故宮博物院圖書文獻處調派執行校註的莊吉發，即發表〈清代國史館的傳記資料及列傳的編纂〉一文，介紹故宮博物院現藏清代國史館的列傳資料的類別、史料來源及其價值，包括：朱絲欄寫本列

⁸³ 史學界探討《明史》纂修問題者甚多，可參見喬治忠，《清朝官方史學研究》（臺北：文津出版社，1994年），頁177-196；另早期的論著可參見黃雲眉，〈《明史》編纂考略〉，收入包遵彭主編，《明史編纂考》（臺北：臺灣學生書局，1968年）頁9-52；李晉華，〈《明史》纂修考〉，收入同書，頁53-179；陳守實，〈《明史》抉微〉，收入包遵彭主編，《明史考證抉微》（臺北：臺灣學生書局，1968年），頁1-34。

⁸⁴ 參見馮明珠，〈從《清史》到《清史稿校註》——中華民國政府遷臺後整編《清史》之經過〉，收

傳、纂修各種列傳原稿與為修傳所咨取的各種傳記資料的傳包，以及為纂輯列傳而彙鈔的長編檔冊等，並說明傳稿的纂輯與進呈的流程，進而指出清代國史館纂輯的列傳，一方面可以校正《清史稿》的錯誤，一方面可以補充《清史稿》的疏漏。⁸⁵其次，在《新清史》計畫研議的階段，莊吉發認為，《清史稿》流傳已廣，確有參閱價值，如欲重修清史，限於人力、資料，非短期內所能完成；即以《清史稿》為底本重修清史，基本上只是屬於增訂版的《清史稿》，仍未澈底擺脫其架構，遂主張應在《清史稿校註》的基礎上，以清代國史館紀、志、表、傳稿本為藍本，進一步整修清史。所謂的「整修」，其構想略為：由於清代國史館稿本符合傳統紀傳體史書的體例、筆法，故以之為藍本；清史館稿本與《清史稿》含有部分新史料，不應捨棄；《清史稿校註》已查對過官書，史料既經甄別，仍應參閱，結合此三者，當為可行。⁸⁶「整修」清史的理念，或可說是脫胎自「以稿校稿」並加以擴大，似為當時的工作團隊所接受，且具體呈現在王恢〈整修《清史稿·地理志》之商榷〉、⁸⁷王宇清〈《清史稿·輿服志》整修記〉，⁸⁸以及莊吉發〈整修清史芻議——以清史本紀為例〉諸文之中。⁸⁹

另一方面，在國史館負責《清史稿》校讀、標點以及校閱註釋等工作的胡健國，鑑於近年來中國第一歷史檔案館館藏檔案陸續整理出版，以及部分關外時期滿文檔案亦已翻譯成漢文，認為有必要用以重新檢視《清史稿校註》，乃撰就〈《清史稿校註》補——太祖本紀〉、〈《清史稿校註》補——太宗本紀一〉、〈《清史稿校註》補——太宗本紀二〉等文，⁹⁰增列若干校註條目，說明新史料的公佈，

入《清史論集》，下冊，頁 1101-1130。

⁸⁵ 參見莊吉發，〈清代國史館的傳記資料及列傳的編纂〉，《幼獅學誌》16卷1期（1980年6月），頁 153-182。

⁸⁶ 參見莊吉發，〈整修清史芻議——以清史本紀為例〉，《國史館館刊》，第14期（1993年6月），頁 225-226、頁 239-240。

⁸⁷ 參見王恢，〈整修《清史稿·地理志》之商榷〉，《國史館館刊》，第11期（1991年12月），頁 179-220。

⁸⁸ 參見王宇清，〈《清史稿·輿服志》整修記〉，《國史館館刊》，第13期（1992年12月），頁 225-238。

⁸⁹ 參見莊吉發，〈整修清史芻議——以清史本紀為例〉，頁 225-240。

⁹⁰ 參見胡健國，〈《清史稿校註》補——太祖本紀〉，《國史館館刊》，第27期（1999年12月），頁 21-47；〈《清史稿校註》補——太宗本紀一〉，《國史館館刊》，第29期（2000年12月），

對校註工作的助益，也反映出《清史稿校註》仍有繼續發展的空間，始能臻於完善。對於整修清史，胡健國根據以往執行《清史稿校註》的經驗，在〈由本紀看清國史到《清史稿校註》——官修正史的省思〉一文，指出《清史稿·本紀》係以《清國史館黃綾本·本紀》為底本，《黃綾本》則輯自歷朝《實錄》，對照的結果，通常《黃綾本》對，《清史稿》未必對；《黃綾本》錯，《清史稿》必錯，且《黃綾本》並未忠於《實錄》原意。可見清代國史館與清史館坐擁豐富的史料，卻因史官缺乏敬業精神，未善盡查證的責任，以致官修史書無法達到內容正確的基本要求，⁹¹日後從事修史者自應有所惕勵。

對清史研究者而言，國防研究院僅以一年的時間完成《清史》，對解決《清史稿》既有的問題，極為有限；《清史稿校註》加列註釋二萬餘條，成果固然可觀，畢竟不脫未定本的地位；加以《新清史》計畫的中止，面對清朝始終欠缺一部官修正史的事實，不免令人感到遺憾。當中國「清史工程」計畫定案時，自然備受矚目與期待。

關於臺灣學者對「清史工程」的看法，先是，二〇〇三年八月廿五至廿七日，中國國家清史編纂委員會在北京召開「兩岸學者清史纂修研討會」，陳捷先等十三位與會，雙方對修史初步交換意見。同年十月廿七至廿九日，「第一屆清史學術研討會」在宜蘭佛光大學舉行，出席者除臺灣五十餘人之外，另有日本、韓國、美國學者六人，以及中國學者二十餘人，其中包括清史編纂委員會的成員十四人；會中發表論文六十餘篇，⁹²主辦單位並於廿八日安排「兩岸學者清史纂修座談會」。會後，清史編纂委員會於十一月二日，在臺北福華國際文教會館再次舉行「兩岸學者清史纂修座談會」。在幾次座談會中，與會者對纂修清史的意見，

頁 21-50；〈《清史稿校註》補——太宗本紀二〉，《國史館學術集刊》，第 2 期（2002 年 12 月）1-22。

⁹¹ 參見胡健國，〈由本紀看清國史到清史稿校註——官修正史的省思〉，收入《中華民國史專題論文集：第四屆討論會》（臺北：國史館，1998 年），頁 925-958。與此相關，而針對《清史稿》記載不確的討論，另可參見胡健國，〈《清史稿·本紀》記事繫日之商榷——以順治八至十年、同治七年為例〉，《國史館館刊》，第 18 期（1995 年 6 月），頁 59-76。

⁹² 會議論文共六十四篇，會後依論文內容分為清代史、清代臺灣、旗人旗地、清代學術與藝術、清代制度與財經、清代邊疆與外交、清代史料、清史纂修等主題，編成論文集兩冊，見陳捷先、成崇德、李紀祥主編，《清史論集》（北京：人民出版社出版，2006 年）。

可歸納爲：一、在體裁、體例方面，有主張順應潮流，將傳統紀傳體與現代章節體結合者；也有認爲此次纂修清史是爲取代《清史稿》，應採用傳統正史體裁者。二、在史料的整理與運用方面，應充分利用現存而分散在各處的檔案與文獻資料，尤其應注意臺灣所藏的清國史館與清史館檔案。三、在纂修步驟、方法方面，可考慮先從史料長編著手，作爲纂修的預備工作，並對記載分歧的史事進行考異，以彌補史書無法備載史實的缺憾；完稿前的審查、修訂與統整的流程尤應留心，以維護史書的品質。四、在編纂人員的培養方面，由於纂修與研究畢竟不同，需要有專門的寫史技巧與才能，培養編修清史的人才亦刻不容緩。⁹³儘管臺灣清史學界關心「清史工程」的進行，也有部分學者加入纂修清史的行列，但各方見解，尤其在體裁、體例方面仍頗爲分歧，其中大多數的意見，中國學者也在其國內各種場合中表達過；⁹⁴主其事者在廣泛徵詢各方意見之餘，從纂修清史目前正在進行的項目來看，似已有定見。⁹⁵

從「第一屆清史學術研討會」以來，馮明珠、莊吉發各自就史學史與史料學的角度，發表數篇有關編修清史的論文。會議中，馮明珠〈從《清史》到《清史稿校註》——中華民國政府遷臺後整編《清史》之經過〉，對國防研究院《清史》整編的緣由、體例和內容的增補、訂正、調整的狀況，以及推動《清史稿校註》的背景，舉實例說明紀、志、表、傳的校註方法與徵引資料的來源，並以「時間是對《清史稿》有利的，前人對《清史稿》的批判，如今看來多已不成問題；《清史稿校註》的出現，或可爲傳統紀傳體纂修清史的工作畫下了句號」作爲結論。⁹⁶言下之意，往後纂修清史，實不必拘泥於官修正史的體裁、體例。之後，在〈故

⁹³ 由於座談會似未見完整的會議紀錄公布，故引用張永江的「會議報導」。參見張永江，〈蘭陽論清史——佛光大學第一屆清史學術研討會綜述〉，《清史研究》，2004年第2期（2004年5月），頁115-116。

⁹⁴ 關於中國學者對纂修清史的意見，可參見國家清史編纂委員會體裁體例工作小組編《清史編纂體裁體例討論集》（北京：中國人民大學出版社，2004年）一書。

⁹⁵ 參見戴逸，〈在臺北清史纂修座談會上的講話（2003年11月2日）〉，收入《清史編纂體裁體例討論集》，頁108-111。

⁹⁶ 參見馮明珠，〈從《清史》到《清史稿校註》——中華民國政府遷臺後整編《清史》之經過〉，收入《清史論集》，下冊，頁1101-1130。

宮博物院與《清史稿》》一文，利用《國民政府檔案》、故宮博物院院內「會議紀錄」等資料，藉由北平故宮博物院接收清史館及其館藏，一九七〇至八二年間臺北國立故宮博物院纂修「清代通鑑長編」，以及與國史館合作校註《清史稿》等工作的進展，說明故宮博物院與官修清史間的關係。⁹⁷由於馮明珠曾參加校註《清史稿》，又任職於故宮博物院，故對這段歷史及其相關史料知之甚明、敘之甚詳。史書年表的良否，端視繫時是否準確、繫事是否劃一，〈清國史館人表屬辭則例——兼介國立故宮博物院所藏清國史館檔大臣年表〉，介紹清國史館纂修的十四種文武大臣年表、論述年表的修纂方法、定義表中對官員任免陞鷺所用的「屬辭」等，並與《清史稿·大臣年表》進行比較；⁹⁸文中有關方法的論介、「屬辭」使用的原則，可供有意纂修年表者參考。〈巨編零簡 匯為淵藪——「史館檔」的滄桑與展望〉，則說明清國史館與清史館為修史所遺留下來的檔冊史稿的淵源與內容，並敘述在戰亂影響下，史館檔的流向與現在可能貯藏的地點，以及介紹現存國立故宮博物院史館檔的內容與出版計畫，⁹⁹提供搜尋史料的線索。

有關史館檔的由來及其史料價值，莊吉發《故宮檔案述要》一書已有詳盡的討論，¹⁰⁰他又藉由〈從現存史館檔看清史的纂修〉一文，分就清代與民國纂修的紀、志、表、傳舉出實例，繼續闡述他以往所提出的「整修」清史的構想，認為清國

⁹⁷ 參見馮明珠，〈故宮博物院與《清史稿》〉，《故宮學術季刊》，23卷1期（2005年9月），頁574-600。文中指出，「清代通鑑長編」由陳捷先指導，具體的作法是：將當時所能查考的滿、漢文清代各種史料，依年月日編排，先抄錄成「清代通鑑長編資料卡」，再排比資料卡，辨其異同，各作考證，經核稿後，按時間先後謄寫成冊，前後共完成六百四十一冊「清代通鑑長編初稿」，時間範圍為自滿洲開國以來至順治年間。

⁹⁸ 參見馮明珠，〈清國史館人表屬辭則例——兼介國立故宮博物院所藏清國史館檔大臣年表〉，《故宮學術季刊》，22卷3期（2005年3月），頁92-126。文中介紹的史表包括：〈直省總兵大臣年表〉、〈直省提督大臣年表〉、〈直省駐防將軍年表〉、〈直省駐防副都統年表〉、〈滿洲八旗都統副都統大臣年表〉、〈護軍統領大臣年表〉、〈前鋒步軍統領大臣年表〉、〈侍衛處鑾儀衛大臣年表〉、〈漢軍八旗都統副都統大臣年表〉、〈蒙古八旗都統副都統大臣年表〉、〈內閣大臣年表〉、〈直省總督大臣年表〉、〈直省巡撫大臣年表〉、〈部院大臣年表〉等十四種。

⁹⁹ 參見馮明珠，〈巨編零簡 匯為淵藪——「史館檔」的滄桑與展望〉，《故宮學術季刊》，24卷4期（2007年6月），頁120-132。目前國立故宮博物院除進行史館檔的數位典藏計畫外，二〇〇五年十一月，故宮博物院主辦的「文獻足徵：第二屆清代檔案與清史研究國際學術研討會·綜合討論」中，因莊吉發建議、陳捷先附議，為院方接納，遂展開《國立故宮博物院典藏清史館未刊紀志表傳稿本專輯》出版計畫。

¹⁰⁰ 參見莊吉發，《故宮檔案述要》（臺北：國立故宮博物院，1983年），頁375-446。

史館與清史館藏有豐富的稿本及相關資料，無論重修清史或整修清史，都不能忽視史館檔案，在清國史館與清史館纂修清朝國史、《清史稿》的基礎上整修清史，似乎較符合纂修正史的要求，也較易完成修史工程。¹⁰¹〈清史館與清史稿——清史館未刊紀志表傳的纂修及其史料價值〉進一步指出，「清史稿」有已刊的《清史稿》與清史館檔中未刊的清史稿之分，清史館中的稿本因出自多人之手，其中不乏可信度較高者，可以整理出版，作為《清史稿》的補編，稱為《清史稿補編》，可與《清史稿校註》相輔而行，掌握豐富的原始稿本，有助於大型清史的纂修。¹⁰²〈傳統與創新——清朝國史館暨民初清史館纂修列傳體例初探〉強調，清代與民初官方纂修的清史，都繼承中國歷代纂修正史的傳統，重視修史體例，有傳承也有創新。其中列傳的纂輯，係將歷史人物分類集中編排，一方面將大臣列傳按時代先後，以類相從立傳；一方面沿襲歷代正史合傳體例，分門別類纂輯彙傳。表傳並列者，可知其人的善惡瑕瑜；有傳無表者，乃因其人有事蹟，實可表彰；有表無傳者，乃因其人無足置議。清國史館纂輯列傳，講求體例、尤重書法，惟

¹⁰¹ 參見莊吉發，〈從現存史館檔看清史的纂修〉，收入《清史論集》，下冊，頁1057-1081。

¹⁰² 參見莊吉發，〈清史館與清史稿——清史館未刊紀志表傳的纂修及其史料價值〉，《故宮學術季刊》，23卷2期（2005年12月），頁162-193。文中對《清史稿補編》提出具體的做法：整體而言，先行說明出版緣起，條列凡例，說明本編所收，以清史館未刊稿本為限。全書編次，悉依紀、志、表、傳為序，先編總目，次編分冊目錄，斷句標點，排版刊行；至於清史館所保存的清國史館紀、志、表、傳初輯本、覆輯本、進呈本、黃綾定本，包含滿、漢文本，應另行出版，與嘉業堂鈔本《清國史》相輔而行。分項而言，一、本紀，已刊《清史稿》多取爽良覆勘本排印，以致謬誤百出，《補編》改取金兆蕃、鄧邦述等人纂輯的呈閱本。二、志，清史館志書數量甚多，除《清史稿》已刊十六類之外，其餘未刊本中，除〈儀衛志〉稿本（已併於〈輿服志〉）、〈國語志〉稿本（所收詞彙多與《清文鑑》相近，不符合志書纂修體例）外，俱收入《補編》。至於〈國語志〉則應重修，可以奎善〈滿文源流〉列於卷首，並就文獻資料，首述滿文源流大略，次述十二字頭，次述滿文字書，次述滿文譯本，按經、史、子、集分類，庶使後世徵文者有所稽考。三、表，除《清史稿》已刊十三種之外，舉凡〈建州表〉、〈宰輔表〉、〈總理各國通商事務大臣表〉、〈恩封宗室王公表〉、〈宗室王公功績表〉、〈外藩蒙古回部王公表〉、〈外藩蒙古回部王公表傳〉、〈蒙古諸部表〉、〈疆臣表〉、〈督撫表〉、〈滿洲管旗大臣年表〉、〈領侍衛內大臣表〉、〈侍衛處鑾儀衛表〉、〈前鋒步軍統領表〉、〈各省提督表〉、〈各省總兵表〉、〈八旗護軍統領表〉、〈八旗滿洲都統副都統表〉、〈八旗蒙古都統副都統表〉、〈八旗漢軍都統副都統表〉、〈各省駐防將軍都統表〉等，俱應收入《補編》。四、傳，除《清史稿》已刊十五類外，現藏清史館未經選刊者，包括〈宰輔列傳〉、〈疆臣列傳〉、〈儒學列傳〉、〈孝友列傳〉、〈隱逸列傳〉、〈逸民列傳〉、〈卓行列傳〉、〈醫術列傳〉、〈貨殖列傳〉、〈叛臣列傳〉、〈逆臣列傳〉、〈叛逆列傳〉、〈四王列傳〉、〈臺灣列傳〉等，收入《補編》，可補已刊《清史稿》的不足。《補編》的構想，後來即落實為二〇〇七年開始執行的《國立故宮博物院典藏清史館未刊紀志表

自乾隆朝始，不復更用論贊，只將各臣工事實詳晰臚敘，其人功罪自明；《清史稿》則補撰論贊，言簡意賅，以為結論，有得也有失。¹⁰³探討修史體例，有助於了解清史的特色。莊吉發秉持「整修」的一貫理念，多年來不憚勞苦，詳介各類史料，期能對纂修清史有所助益，但在修史的體例與方法方面則有所堅持，主張清朝既然是中國歷代以來最後一個朝代，「延續歷代正史紀傳體的修史傳統，纂修清史，纔是正確的途徑」。¹⁰⁴

早在一九五〇年代後期，中國官方已提出纂修清史的構想，究其原因，是基於「迄今為止，清代還沒有正史，只有一個《清史稿》。而這個《清史稿》是站不住腳的，因為當年寫時沒有看到檔案，大量檔案當時是保密的」；「《清史稿》的觀點也經不起推敲，因為它是清代遺老修的」，「總之這部書的問題比較多，不能作為一部正史流傳下去，所以有必要修清史」。¹⁰⁵這項修「正史」的重大計畫，幾經波折，終於在四十多年之後，有實現的機會，但不再以「正史」稱之，而改為「大型清史」。¹⁰⁶正因為對纂修清史的定位的轉向，遂引發有關體裁、體例的熱烈論辯，而國家清史編纂委員會似乎刻意迴避這個問題。如將這部新修的清史定位為「官修正史」，按照中國的傳統，紀傳體是唯一的選擇，毋須議論紛紛，需要討論的是在紀、志、表、傳的架構下，「該寫什麼」。若是「大型清史」或所謂「國家修史」，則無論紀傳、編年、紀事本末或章節體任憑選擇，毋須大費周章地尋求支持或整齊言論，主其事者需要思考的，是下決心之後，「想寫什麼」或「要寫什麼」。

從「清史工程」並舉的「易代修史」與「盛世修史」來看，「易代修史」是朝代更迭下，政權正統思想的產物，而紀傳體「官修正史」是其標誌；「盛世修史」是統治者為彰顯文治，以各種形式、體裁的「官修史書」，作為裝點昇平的業績，

傳稿本專輯》出版計畫。

¹⁰³ 參見莊吉發，〈傳統與創新——清朝國史館暨民初清史館纂修列傳體例初探〉，《故宮學術季刊》，25卷3期（2008年3月），頁70-121。

¹⁰⁴ 參見莊吉發，〈傳統與創新——清朝國史館暨民初清史館纂修列傳體例初探〉，頁120。

¹⁰⁵ 參見戴逸，〈纂修清史·此其時也〉，收入《清史編纂體裁體例討論集》，上冊，頁6-9。

¹⁰⁶ 參見〈季羨林教授等十三位專家關於纂修大型清史致李嵐清副總理的信（2001年4月6日）〉，收

兩者同屬「官修」，但其蘊含的政治意義與使用的場合有所不同。¹⁰⁷當然，這不意味著「易代」與「盛世」必須截然兩分，而是在強調「盛世修史」之餘，又刻意去聯繫「易代修史」，實自陷於「官修正史」紀傳體的羅網之中。再就「主體工程」與「基礎工程」而言，屬於「主體工程」的「大型清史」，因定位的模糊，不免令人有所疑慮；惟其內容架構已經底定，並正積極展開中，已毋庸外人置喙，在成果尚未問世之前，也不必急於評斷。屬於「基礎工程」的檔案、文獻整理，在計畫之初，已確定充分利用清代各種檔案的原則，¹⁰⁸並擴及史籍與論著的整理，是以近年以國家清史編纂委員會領銜出版的各種《檔案叢刊》、《文獻叢刊》、《圖錄叢刊》、《研究叢刊》、《成果匯編》、《清史論著目錄系列》等約三百種，對清史研究的推展，貢獻良多，已值得肯定。

對臺灣清史研究者而言，「清史工程」僅在二〇〇三年的座談會中激起些許火花；之後，無論是否參加此一計畫，彼此間似未見熱烈的公開討論。另以莊吉發為例，他的研究成果備受國際清史學界的重視，卻選擇不加入此項被視為「盛事」的工程，關鍵即在於他對史書的體裁與定位的堅持，實具有指標性的意義。凡讀史者、治史者皆知，掌握歷史情境，亦即時代特徵的重要。就過去三、四千年中國歷史演進過程中的政體而言，歷經封建、帝制、共和三個階段的演變，司馬遷《史記》上起五帝下迄漢初，開創本紀、世家、書、表、列傳的體例，書寫從封建時代過渡到帝制時代的歷史；班固《漢書》專記西漢一朝史事，由於封建諸侯

入《清史編纂體裁體例討論集》，上冊，頁 26-28。

¹⁰⁷ 余英時對「盛世修史」、「易代修史」曾提出尖銳的批判：「所謂盛世就是自己因為最近經濟上發展很好，就已經是進入盛世了。到底是不是盛世，國內學者也懷疑，說這是你自己跟自己比的盛世。所謂自己比的盛世是你比文革、大躍進時代要好一些，究竟中國是不是已經進入盛世很成問題」；「這就表示他已經是新的朝代，而且是站穩了的朝代了，所以敢於修前代的歷史了，至於是不是情況如此，這是政治領域的問題，我就不談了。但是我想，第一他是變身份，想把自己變成一代王朝的繼承者，這觀念本身就是很荒謬的，也可以說是非馬克思主義的」。另外，文中也指出《清史稿》當然不能令人滿意，但畢竟是一種資料的彙集，而進行中的清史，因受政治性歷史觀點的鉗制、修史人才短缺的限制，以及篇幅過大的影響，乃斷言就是廢紙，不會有人真正去看的。參見余英時，〈重修清史 沒必要且荒謬〉，〈<http://www.epochtimes.com/b5/4/10/13/n688785p.htm>〉（2004/10/13）。

¹⁰⁸ 參見中國第一歷史檔案館，〈清代檔案與清史修撰〉，《清史研究》，2002 年第 3 期（2002 年 8 月），頁 1-10；鄒愛蓮，〈清史纂修工程與檔案的整理利用〉，收入《清史論集》，下冊，頁 1093-1100。

退出歷史舞台，遂改以紀、志、表、傳標誌帝制時代的來臨；《清史稿》的纂修，面臨從帝制到共和的遽變，以傳統紀傳體為舊時代寫下休止符，實無可厚非，只是其成果不被時人所接受而已。至於所謂史書體裁的創新，應是一九一二年及其以後的共和政體、民主政體，乃至人民民主專政政體修史時的課題。

在《清史編纂體裁體例討論集》中發表意見者，動輒暢言「中國修史的傳統」，卻又處處充斥「打破封建帝王思想」，反映出中國學者在傳統思想與意識形態間的矛盾。或許從歷史脈絡進行思考，《清史稿校註》為官修清史的整理畫上「分號」；如果學術界仍不滿意，則不妨考慮以莊吉發提出的「整修」的方式，為「官修正史」的清史正式畫下「句號」。

五、結 論

最近十年以來，臺灣的清史研究，由於本身擁有收藏豐富的原始史料，加上檔案、史籍數位化的進展，吸引不少新進研究者的投入，研究成果在數量上迅速累積。在質的方面，雖然需要進行深入的評估，但是在研究人數基礎擴大的前提下，量多而質精的表現，當指日可待。然而，功能強大的全文資料庫的不斷擴充，也不免令人憂心，部分研究者將史料的根基，建立在虛浮的關鍵詞檢索之上，或只在意大量的史料堆砌，而忽視解讀與解釋能力的培養，其中的利弊得失，尚待後續的觀察。

其次，美國學者提倡的「新清史」研究，也引發若干迴響。研究者一方面嘗試與「新清史」提出的問題進行對話，一方面則按照「新清史」提示的方向，繼續予以深化；至於對滿文檔案閱讀能力的強調，臺灣的研究者並不落後，而紮根的工作也持續進行著。不過，必須說明的是，「新清史」的研究取向，主要集中在政治史、民族史，而且只佔研究成果的一部分，經濟史、社會史、文化史仍居主流，而新興的法制史亦不容忽視。（參見「附錄 最近十年（1998—2008年）臺

灣清史論著目錄」)

再次，長期為臺灣中國史研究者所關心的纂修清史問題，在《清史稿校註》完成之後，原本已暫告一段落，惟當中國「清史工程」啓動，又引起一番討論。值得注意的是，著文發表修史意見者，都曾經參與校註《清史稿》工作，他們的看法自然有其參考價值。在體裁、體例爭論聲中，莊吉發力主的「整修」理念，係簡易可行且保證品質的良法，惟中國既定的十年計畫時程，業已進行過半，似無變更的餘地。所幸，其「基礎工程」中的大規模出版計畫，仍對清史研究有一定的貢獻。

以上所論，看似各自獨立，實則有其內在的聯繫。清代檔案全文資料庫的建置，使研究者能便利取得材料；「新清史」強調利用檔案進行研究，尤其是滿文檔案；「清史工程」既欲在纂修清史時將檔案大量地納入，又積極地整理出版檔案，三者皆聚焦於歷史檔案。因此，過去十年之間，不論在臺灣，或是國際清史學界，在各自發展而彼此互動的過程中，凝聚出研究的共識，亦即以歷史檔案作為研究清史的基礎，將是此後清史研究不可取代的趨勢。

최근 십년(1998-2008년) 대만 淸史연구의 동향

葉高樹(국립대만사범대학 역사학과)

1. 前言

최근 십년동안, 국제淸史학계에 주목할 만한 일이 둘 있었다. 첫 번째로는 1996년과 98년 사이에 기존의 淸史해석을 장기간 주도해온 漢化의 시각을 검토, 중국에 거주 혹은 중국영토를 통치한 여러 민족의 공헌을 다시 평가해야한다고 주장하는 Evelyn S. Rawski¹⁾와 漢化를 견지하는 何炳棣의 첨예한 논박이었다.²⁾ 비록 이 토론은 ‘점점없는 대화’로 평가되며 지금도 여전히 지속되고 있지만³⁾, 연구시각의 초점을 非漢族에 둔 ‘新淸史’는 의외로 단번에 주류로 등장했다. 두 번째로는 ‘易代修史’·‘盛世修史’의 사고에 기반한, 중국에서 장기간 준비된 淸史편찬이 2002년 말 정식으로 시작된 것이다. 淸史撰修가 주가 되고 檔案과 문헌을 정리하는 것을 기초로 한 ‘淸史工程’⁴⁾은 淸史의 연구와 출판 열기를 이끌었다. 대만의 淸史연구자들은 국제학술사회의 일원으로서 자연히 이 새로운 박동을 느끼고 주목했다.

대만으로 말할 것 같으면, 이미 1950, 60년대에 淸史會는 상대적으로 연구인구가 많은 영역이었다⁵⁾. 陳捷先, 莊吉發등의 중요한 학자를 배출해냈다.⁶⁾ 그러나 70, 80년대에 중국 근현대사연구가 성황을 이루고 80년대 대만사연구가 성장하면서, 淸史와

1) Evelyn S. Rawski, "Presidential Address: Reenvisioning the Qing: The Significance of the Qing Period in Chinese History." *The Journal of Asian Studies*, 55:4 (1996), pp. 829-850.

2) Ping-ti Ho, "In Defense of Sinicization: A Rebuttal of Evelyn Rawski's 'Reenvisioning the Qing'." *The Journal of Asian Studies*, 57:1 (1998), pp. 123-155.

3) 王成勉, 〈沒有交集的對話——論近年來學界對「滿族漢化」之爭議〉, 汪榮祖、林冠群主編, 《胡人漢化與漢人胡化》(嘉義:國立中正大學臺灣人文研究中心, 2006年), 頁80-81.

4) 戴逸, 〈談淸史纂修〉, 陳捷先、成崇德、李紀祥主編, 《淸史論集》(北京:中國人民出版社, 2006年), 上冊, 頁6.

5) 〈附錄一·文獻足徵: 陳捷先教授與故宮檔案的整理與出版〉, 馮明珠 主編, 《文獻與史學: 恭賀陳捷先教授七十崙壽論文集》(臺北:遠流出版公司, 2002年), 頁492-495; 〈附錄二·陳捷先教授與聯合報國學文獻館〉, 收入同書, 頁496-502.

6) 葉高樹, 〈久著十全贏樹績: 莊吉發教授的滿文教學與研究〉, 《國文天地》, 22卷7期(2006年12月), 頁107-111.

시간적으로 중첩되는 새로운 영역이 많은 연구자들을 흡수했다. 학술상의 분업과 심화가 요구되면서 清代前期 혹은 嘉慶帝, 道光帝 이전 清代史의 연구는 더욱 침체되었다. 그렇지만 역사학의 연구는 결국 사료에 기초한 것이기 때문에, 國立故宮博物院, 中央研究院 歷史語言研究所의 풍부한 소장자료는 清史연구를 위한 학술환경의 기초가 되었을 따름이다. 그런데 금년 清代 檔案디지털데이터베이스가 설치되어 사용상의 편리를 제공하면서 더 많은 신진연구자들이 清史 연구에 관심을 갖게 되었다.

자료취득이 편리해지고, ‘新清史’의 영향과 ‘清史工程’의 진행되면서 대만의 清史연구가 고무되었다. 이는 연구성과에 직접 반영되어 논자들이 수적으로 증가했다. 《中華民國期刊論文索引WWW版》등 검색도구를 조회하면, 최근 10년 사이 대만에서 발표한 清代의 역사논저는, 오백종을 넘는다; 만약 중국근대사, 清代대만사를 계산하지 않고, 清代전기사의 연구논저에 대해서만 말한다고 하더라도 이백여편이 있다. 그러니 훌륭한 연구업적을 세자면, 평론을 요약한 것만 선택하더라도, 여기서 짧은 글로 설명할 수 없다. 본문은 檔案디지털화의 성과만으로, ‘新清史’가 일으킨 연구중점의 변화 및 ‘清史工程’에 대한 학계의 관점 등에 분석을 보탠 것이다. 이를 통해 최근 몇 해 사이 대만 清史연구의 추세를 보일 수 있을 것이라 기대한다.

2. 清代檔案자료의 디지털화

나날이 빠르게 진보하는 정보과학기술의 혜택으로 자료의 정리 · 보관 · 이용 방법이 향상되어 방대한 檔案원본과 문헌을 간편하게 취득할 수 있게 되었다. 1984년부터 中央研究院 歷史語言研究所(이하 史語所로 약칭)는 計算中心和 합작하여 문헌 자료 데이터베이스 디지털화 작업을 추진, 1990년 ‘二十五史資料庫’를 완성하였다. 이를 점차 확충하여 ‘漢籍電子文獻資料庫’를 완성, 더 빠른 문사자료 수집이 가능해져, 연구자에게 막대한 편리를 제공했다.⁸⁾ 資料庫 중의 ‘漢籍全文資料庫’는⁹⁾, 經 ·

7) 이 외에도 참고할 만한 공구서 두 종이 있다. 吳智和、賴福順編著, 高明士主編, 《戰後臺灣的歷史學研究, 1945-2000·第五冊·明清史》(臺北: 行政院國家科學委員會, 2004年), 수록된 논저는 中國近代史와 清代臺灣史를 포함하지 않는다. 周惠民主編, 《1945-2005年臺灣地區清史論著目錄》(北京: 人民出版社, 2007年), 수록된 내용은 清代研究를 範圍로 한다.

8) 黃寬重、劉增貴, 〈中央研究院人文計算的回顧與前瞻〉, 《漢學研究通訊》, 17卷2期(1998年5月), 頁145-146. 資料庫의 특징은 1. 최고의 퀄리티로 오류가 0.001%로 적고 2. 최대의 규모로 개발 및 완성된 합계가 3億 字를 초과한다. 3. 자료는 일정규모로 조직되어 있다. 4. 가장 우수한 소프트웨어 설계. ‘漢籍電子文獻資料庫’ 웹 페이지 주소: <http://www.sinica.edu.tw/ftms-bin/ftmsw3>

史·子·集에 따른 4부로 분류되었다. 현재 수록되어 있는 것과 淸代 淸史 관련사부 전적은 다음을 포함한다: 《淸史稿》(정사류)/《四庫全書總目提要》(목록류)/《廣東新語》, 《北游錄》, 《揚州畫舫錄》, 《蓑楚齋隨筆, 續筆, 三筆, 四筆, 五筆》(이상 지리류)/《淸朝通志》(별사류)/《淸朝通典》, 《淸朝文獻通考》, 《淸朝續文獻通考》, 《大清會典事例》(이상 정서류)/《淸實錄》(편년류)/《樞垣紀略》(직관류), 《遼海叢書》, 《永憲錄》(이상 잡사류); 그밖에 정치사관계와 밀접한 子部筆記類는, 원래 北京中華書局에서 간행한 《淸代史料筆記叢刊》사십여종 및 비슷한 종류의 《淸稗類鈔》를 포함한다. 中央研究院의 ‘漢籍電子文獻資料庫’에서 볼수 있는 것처럼, 다른 기관에서 제작한 淸史연구관련 資料庫도 있다; 近代史研究所 ‘淸代經世文編資料庫’¹⁰⁾, 臺灣史研究所 ‘台灣文獻叢刊資料庫’¹¹⁾, 및 國史館淸史組 ‘新淸史·本紀資料庫’.

그 다음으로 史語所는 ‘內閣大庫檔案’ 약 31만여건을 보관, 1929년 정리에 착수해서 《淸史史料》, 《淸史檔案存真選輯》, 《淸史史料: 國立中央研究院歷史語言研究所編刊淸代內閣大庫殘餘檔案》 및 《淸史檔案》을 우여곡절 끝에 紙本형식으로 출판했다.¹²⁾ 史語所는 1995년서부터 다음과 같은 정리계획을 세웠다: 영상스캐닝 혹은 디지털촬영의 방식으로 檔案을 보존함과 동시에 매 檔案의 개요를 쓰고 이를 다시 전자검색도구에 매치시켜, ‘內閣大庫檔案資料庫’를 구축했다. 이 資料庫에는 이미 지금까지 21만필을 초과하는 자료를 기재했다. 연구자는 전자검색시스템을 이용하여 필요한 檔案출처 혹은 등록처를 검색할 수 있고, 《淸史史料》, 《淸史檔案》등 原출판물을 일독하거나, 원문열람을 신청할 수 있다; 또한 컴퓨터모니터 앞에서 검색한

9) ‘漢籍全文資料庫’ 웹페이지 주소: <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/>.

10) ‘淸代經世文編資料庫’가 수록하고 있는 것은 賀長齡《皇朝經世文編》, 饒玉成《皇朝經世文編續集》, 葛士澐《皇朝經世文續編》, 康盛《皇朝經世文續編》, 陳忠倚《皇朝經世文三編》, 麥仲華《皇朝經世文新編》, 邵之棠《皇朝經世文統編》, 何良棟《皇朝經世文四編》, 求是齋《皇朝經世文編五集》, 甘韓《皇朝經世文新編續集》 등 10종이다.

11) 《臺灣文獻叢刊》 39종, 研究淸代臺灣史의 기본자료로, 그 중 빠지지 않은 것은 明末淸初, 南明의 기록 문집 및 淸朝의 官書, 檔案, 또, 淸史研究와 관련된 것이다. 비록 《臺灣文獻叢刊》의 點校는 상당히 많이 흠이 있고 게다가 ‘선집’의 방식으로 간행되었지만 資料庫의 설립은 여전히 사용상의 편리를 제공한다.

12) 中研院史語所에서 편찬한 《淸史史料》는 모두 10編으로 100권이 있다. 그중 甲、乙、丙등 세 편은 1930년부터 36년까지 출판되었고 丁편은 1951년에 출판되었다. 戊、己、庚、辛、壬、癸등의 6편은 1953년부터 75년까지 출판되었다. 그 밖에도 《淸史史料: 國立中央研究院歷史語言研究所編刊淸代內閣大庫殘餘檔案》은 1972년 출판되었다. 李光濤가 편찬한 《淸史檔案存真選輯》 初集、二集、三集은 각각 1955년, 73년, 75년에 출판되었다. 張偉仁 주편의 《淸史檔案》는 모두 324권으로 1986년부터 95년까지 출판되었다. 《內閣大庫檔案》의 유출, 정리, 출판의 과정에 관해서는 劉錚雲, 〈舊檔案、新材料——中研院史語所藏內閣大庫檔案現況〉, 《新史學》, 9卷3期(1998年9月), 頁136-144. 을 참조.

檔案를 직접 읽거나 인쇄할 수 있다.¹³⁾

故宮博物院이 소장한 清代宮中內府, 軍機處, 內閣, 史館 檔案은 약 40만여 건이며, 그 가운데 가장 수량이 많은 것은 ‘宮中檔奏摺(약 50만건)’과 ‘軍機處月摺包摺件(약 90만건)’이다. 1969년 이래로, 故宮檔案은 지속적으로 정리출판되었다. 그 가운데 중요한 것들은 다음과 같다: 《舊滿洲檔》 10권(이미 재차 정리후에 2006년 《滿文原檔》으로 개정 출판되었음), 《宮中檔康熙朝奏摺》 9권, 《宮中檔雍正朝奏摺》 32권, 《宮中檔乾隆朝奏摺》 75권, 《宮中檔光緒朝奏摺》 26권, 道咸同光四朝 《清代起居注冊》 280권 등. 현재 故宮이 추진하고 있는 檔案디지털화 작업은 이 기초위에 발전해왔다고 할 수 있다.¹⁴⁾故宮博物院圖書文獻處는 1996년에 ‘宮中檔奏摺’ 편집 영인 출판이 완료되자, 곧 ‘軍機處月摺包摺件’ 정리출판에 착수함과 동시에 디지털화 작업을 전개, ‘清代軍機處檔摺件全文影像資料庫’, ‘清代軍機處檔摺件目錄資料庫’를 구축했다. 다시 점차 ‘宮中檔奏摺’전문영상과 목록을 첨가하여 2003년에 ‘清代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫’로 명칭을 개정했다.¹⁵⁾ 그 목록색인은 관련식資料庫로, 다음의 檔항목을 포함한다: 文헌번호, 題奏人성명, 題奏人관직, 具奏일자, 사유, 硃批내용, 硃批일자, 번호등 欄位; 檔사용자가 온라인상으로 관련 목록을 찾아냈

13) 劉錚雲 〈舊檔案、新材料——中研院史語所藏內閣大庫檔案現況〉, 頁144-147. 檔案요지(개요?)는 다음을 포함한다: ‘사유’- 檔案내용의 요지/ ‘시간’ - 檔案의 발하(내려옴), 진행과정, 혹은 회의로 간 시간/ ‘직관’ - 檔案 上奏人의 官銜와 姓名/ ‘권별 견호’ - 案 전문 수록 / ‘등록호’ - 1981년 이후 등록된 檔案의 流水號 / ‘문건별’- 檔案의 유형 예를 들어 題本, 奏本, 奏摺, 史書등/ ‘備註’, 檔案 정리 상황 및 상기 사항들의 보충 설명. ‘內閣大庫檔案’資料庫웹 페이지 주소: <http://www.saturn.ihp.sinica.edu.tw/~mct/html/newpage1.htm>.

14) 國立故宮博物院이 소장한 清代 각종 檔案의 수량, 유형, 정리과정 및 주요 출판상황에 관해서는 다음을 참고 陳捷先 〈回顧與展望：故宮檔案與清史研究〉, 《文獻足徵：第二屆清代檔案國際學術研討會·專題演講》(臺北：國立故宮博物院主辦, 2005年11月3-5日), 頁6-11. <<http://npmhost.npm.gov.tw/tts/ching/0500all.pdf>> (2008/10/9).

15) 馮明珠、許玉純 〈國立故宮博物院「清代宮中檔奏摺籍軍機處檔摺件全文影像資料庫」數位化流程與使用〉, 頁3. 《國立故宮博物院國家型數位計畫·經驗交流》을 참고. <<http://www.npm.gov.tw/uploads/2006042102413934644/intro-9.pdf>> (2008/10/9). 據該文整理, 故宮博物院的 ‘宮中檔奏摺’, 출판순서에 따르면 모두 다음과 같다. 《袁世凱奏摺專輯》(1970年, 8輯8冊, 全漢文本), 《年羹堯奏摺專輯》(1971年, 3輯3冊, 滿漢文合璧本), 《宮中檔光緒朝奏摺》(1973年, 26輯26冊, 滿文附於各輯漢文之後), 《宮中檔康熙朝奏摺》(1976年, 9輯9冊, 8-9輯為滿文), 《宮中檔雍正朝奏摺》(1978年, 32輯32冊, 28-32輯為滿文), 《宮中檔乾隆朝奏摺》(1982年, 75輯75冊, 75輯為滿文), 《宮中檔咸豐朝奏摺》(1991年, 32輯48冊, 全漢文本), 《宮中檔補遺》(1993年, 1輯1冊, 全漢文本) 《宮中檔嘉慶朝奏摺》(1993年, 34輯51冊, 滿文附於各輯漢文之後), 《宮中檔道光朝奏摺》(1996年, 20輯30冊, 全漢文本), 그중 《嘉慶》, 《道光》, 《咸豐》, 《補遺》 등 4종은 정식으로 출판되지 않았고 3질만을 제작, 이 故宮博物院圖書館 제공의 열람으로 있고 소수인 同治、宣統朝의 ‘宮中檔奏摺’은 그 중에 부록으로 있다. ‘清代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫’의 웹페이지주소: <http://npmhost.npm.gov.tw/tts/npmmeta/GC/indexcg.html>

을 때 본 원문영상에 의거할 수 있다.¹⁶⁾

한편, 2001년에 圖書文獻處가 ‘國家典藏數位計畫’에 가입하였다. 圖書文獻處는 故宮博物院이 보관하고 있는 淸代檔案의 연대, 성질 및 기원에 기초해서, 史語所와 합작하여 史語所의 ‘內閣大庫檔案’와 유사하거나 관련된 것을 통합하여 ‘淸代檔案人名權威資料庫’를 구축하기 시작했다. 사용자는 淸代檔案를 검색하는 동시에 資料庫 시스템 연결을 통해서 具奏관원(傳主)의 생몰년, 약력, 본적, 이력, 친족관계, 異名字號 등 기본자료를 이해할 수 있게 되었다. 이를 통해 사용자가 연구과정 중에 역사인물 배경을 찾을 때 부딪히는 어려움을 해결할 수 있게 된 것이다.¹⁷⁾ ‘淸代宮中檔奏摺及軍機處檔摺件全文影像資料庫’의 완성 및 ‘淸代檔案人名權威資料庫’의 다져진 기초위에, 圖書文獻處는 2007년에 다시 史館檔淸人傳記全文影像資料庫의 목록검색檔과 디지털영상檔을 설치하기 시작했다.¹⁸⁾ 현재 이미 점차적으로 ‘大清國史人物列傳及史館檔傳包傳稿全文影像資料庫’의 사용을 개방하고 있다.¹⁹⁾

檔案소장기구가 대규모로 자료를 정리할 때, 資料庫 설립과 동시에, 檔案 술어규범을 공통적으로 인식하여, 학자의 열람이용을 도움과 동시에 관계협동을 더욱 촉진할 수 있었다. 莊吉發은 〈回顧與前瞻—淸宮檔案的整理出版與檔案術語的規範〉에서 다음과 같이 지적한다. 현재 이미 故宮博物院이 명명하고 재인쇄한 《滿文原檔》은 과거에는 《滿文老檔》, 《滿洲老檔》, 《老滿文原檔》, 《舊滿洲檔》, 《滿文舊檔》, 《老滿文檔》 등의 여러 명칭이 있었다; 奏摺 중에 硃批, 墨批 등을 포함하고 있고, 제출하지 않은 硃批도 있는데, 故宮博物院은 ‘宮中檔奏摺’으로 제목을 지었고, 北京中國第一歷史檔案館에서 편찬한 ‘宮中檔’은 오히려 ‘硃批奏摺’으로 통칭되는데 이는 부적합하다; ‘軍機處檔·月摺包’ 안의 문서는 종류가 많아, 奏摺錄副외에도, 咨呈·知會·照會·稟文 및 제출되지 않은 原摺도 있다. ‘月摺包’를 ‘錄副’ 奏摺으로

16) 馮明珠、許玉純 〈國立故宮博物院「淸代宮中檔奏摺籍軍機處檔摺件全文影像資料庫」數位化流程與使用〉, 頁5-13, 본문에는 도표나 그림으로 사용방법이 상술되어 있다.

17) 楊士朋、楊慶平、黎裕權 〈「淸代檔案人名權威資料」的檢索與應用〉, 《國家數位典藏通訊·電子報》(2006年8月1日), 頁1-17, 검색과정과 欄位정의에 대해 상세한 설명이 있다. 〈http://www2.nda.gov.tw/newsletter06/news/read_news.php?nid=1504〉(2008/10/6). 또 ‘淸代檔案人名權威資料庫’는 원래 6천의 具奏人을 설치하려 했다. 지금 보는 자료들은 이미 1만 2천 필을 초과했다. 웹페이지 주소: <http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttsweb?@0:0:1:mctauac::/ts/npmmeta/dblist.htm>.

18) 《國立故宮博物院國家型數位計畫·計畫簡介·數位典藏·2007年—2008年》 〈<http://www.npm.gov.tw/digitization/introductions/archives.htm>〉(2008/10/6).

19) ‘大清國史人物列傳 및 史館檔傳包傳稿 全文影像資料庫’는 현재 온라인 무료 목록검색을 제공한다. 웹페이지 주소: <http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttsweb?@0:0:1:npmmeta7::/ts/npmmeta/metamain.htm>.

통칭하고 있지만 사실, 기준을 상의해야 할 필요가 있다; ‘起居注’는 관명인데 그 기재된 당책은 ‘起居注冊’으로 통칭하고, 요 몇 해 사이에 출판된 것은 ‘起居注’로 칭하거나, ‘起居注冊’으로 칭하여 명칭에 규범이 없다; 淸代의 관칭, 인명 가운데 同音異譯、同名異人의 예는 너무 많아 일일이 헤아릴 수 없다. 따라서, 檔案術語權威 작업은 매우 잘된 일이다. 檔案정보를 파악하는데 유효하고 검색의 정확도를 향상시킬 뿐만 아니라, 자원을 함께 누릴 수 있는 기초 위에서 훌륭한 관장서비스를 제공, 경계를 초월한 합작을 이룩한 것이다.²⁰⁾ 薛理桂는 〈兩岸淸代檔案數位資料庫之建置與合作芻議〉에서 檔案學의 학리에 기초하여 ‘기원원칙을 존중’, 故宮博物院, 史語所, 北京中國第一歷史檔案館, 遼寧省檔案館에 각각 독립적인 사이트 항목에 상대 웹 사이트 주소를 상세히 설명할 것, 아울러 기존에 구축된 檔案 資料庫와 디지털화의 성과를 상호 교환하여 적합한 淸代檔案내용묘사의 규칙을 공동연구논의하며, 더 나아가 ‘淸代人名權威檔’을 합동으로 구축하여 공통된 ‘淸代檔案聯合目錄’을 설치하여 檔案 자원을 함께 누리는, 모든 사용자에게 최대의 편리를 제공하도록 하는 내용을 담고 있다. ²¹⁾

진귀한 사료원문은 디지털화 처리를 거치면서 기존에 열람으로 발생했던 손상을 감소시킬 수 있게 되었고, 또한 檔案자료의 면모를 제대로 보일 수 있게 되었다; 電子資料庫相를 연이어 구축한 이후, 더욱 학술자원을 함께 누릴 수 있는 시대가 임박했음을 알리고 있다. 연구자가 문헌자료를 수집할 때, 기존에는 일반적으로 일단 관련문헌을 읽어보고 나서 그 가운데 유용한 부분을 다시 베껴쓰곤 했었다. 資料庫의 설립으로 가장 편리해진 것은 강력한 검색능력이다. 이는 문헌자료의 수집을 더욱 빠르게 하여 연구자에게 엄청난 편리함을 주었다.²²⁾ 莊吉發은 〈知道了——奏摺硃批諭旨常見的詞彙〉에서, 영인출판된 《宮中檔康熙朝奏摺》 漢文本 2천여건檔案을 이용한 것이 예가 된다. 인공통계의 방식으로 ‘알았다’는 奏摺이 가장 많이 출현한 詞彙를 설명하고, 동시에 ‘알았다’의 함의 및 그 변화 분석을 근거로 삼고 있다.²³⁾ 邱怡靜

20) 莊吉發 〈回顧與前瞻——淸宮檔案的整理出版與檔案術語的規範〉는 莊吉發, 《淸史論集(十七)》(臺北:文史哲出版社, 2006年), 頁89-130. 에 수록. 또 《淸代檔案整理與館際合作: 第三屆淸代檔案國際學術研討會》(臺北:國立故宮博物院主辦, 2006年11月2-3日)에도 발표했다.

21) 薛理桂, 〈兩岸淸代檔案數位資料庫之建置與合作芻議〉, 《檔案季刊》, 6卷2期(2007年6月), 頁71-72. 또 《淸代檔案整理與館際合作: 第三屆淸代檔案國際學術研討會·專題演講》에도 발표했다.

22) 黃寬重、劉增貴, 〈中央研究院人文計算的回顧與前瞻〉, 頁146.

23) 莊吉發. 〈知道了——奏摺硃批諭旨常見的詞彙〉, 《文獻與史學: 恭賀陳捷先教授七十壽壽論文集》, 頁183-194.

는 〈從奏摺硃批看清前期君臣一體之關係〉에서 莊吉發의 개념을 차용하여 ‘清代宮中檔奏摺 및 軍機處檔摺件全文影像資料庫’의 검색을 통해 유존건수가 더 많은 雍正, 乾隆 두 朝의 滿 · 漢文 奏摺으로 토론범위를 더 확장시켜 더 세밀한 분류와 더 다양한 수량화를 나타냈다.²⁴⁾ 이 두 사람의 성과가 어떠한가를 잠시 제쳐두고, 두 사람의 康熙 35년서부터 40년(1678-1701)에 대한 통계를 비교하고 中國第一歷史檔案館에서 편찬한 《康熙朝漢文硃批奏摺彙編》로 보충하면 표는 다음과 같다.

康熙35년부터 40年 사이 漢文奏摺奉硃批 ‘알았다’ 건수 통계 비교표

來源 時間	宮中檔康熙朝奏摺		宮中檔奏摺資料庫		康熙朝漢文硃批奏摺	
	現刊件數	硃批件數	現刊件數	硃批件數	現刊件數	硃批件數
康熙35.	2	0	-	1	3	0
康熙36.	2	2	-	1	8	6
康熙37.	1	1	-	1	5	4
康熙38.	4	4	-	4	6	5
康熙39.	0	0	-	0	5	0
康熙40.	2	2	-	0	9	8
合計	11	9	-	7	36	23

자료출처: 莊吉發, 〈知道了——奏摺硃批諭旨常見的詞彙〉, 《文獻與史學: 恭賀陳捷先教授七十壽壽論文集》, 臺北: 遠流出版公司, 2002年, 頁184.

邱怡靜, 〈從奏摺硃批看清前期君臣一體之關係〉, 臺北: 東吳大學歷史研究所碩士論文, 2007年, 頁48.

中國第一歷史檔案館編, 《康熙朝漢文硃批奏摺彙編》, 北京: 檔案出版社, 1984年, 第1冊, 頁15-69.

莊、邱 이 두 사람의 연구 중, 통계 건수의 다소는 토론의 결과에 영향을 주지 않는다. 그러나 인공통계로부터 얻은 수가 유효한 資料庫검색에 근거한 것이 많은 것을 볼 때, 여전히 檔案원건의 확인으로 돌아갈 필요가 있다. 게다가 資料庫검색 또한 그 한계가 있다. 《康熙朝漢文硃批奏摺彙編》은 中國第一歷史檔案館이 보관하고 있는데, 《宮中檔康熙朝奏摺》를 다시 정합해 완성하여, 수록한 건수가 비교적 많다. 학술연구의 시각으로 말하자면 전술한 薛理桂가 주장한 檔案자원을 함께 누리는 목표는 아마도 이후 나아가야 할 방향일 것이다.

24) 邱怡靜, 〈從奏摺硃批看清前期君臣一體之關係〉(臺北: 東吳大學歷史研究所碩士論文, 2007年), 頁47-74.

근 십년동안, 清代檔案資料디지털화의 빠른 진전으로 컴퓨터를 사용하는 신세대들에게는 운용이 매우 쉬워졌다. 따라서 시간과 노력을 절약할 수 있다는 資料庫의 장점은 이들에게 강력한 흡인력이 있다. 清史연구분야에 반영된 것만 보면 연구인구가 반등할 기세가 거의 없는 듯하다. 그러나 清史를 주제로 하는 학위논문의 인용증거자료가 풍부하고 정밀하여 아마도 대만清史연구가 부흥하는 계기가 될지도 모른다. 그러나 ‘완전한 자료가 반드시 좋은 연구 작품을 가져오진 않는다.’²⁵⁾ 선배학자들의 업적을 돌이켜 보면, 李光濤가 장년에 《內閣大庫檔案》에 몰두한 故紙를 쌓아놓은 중에, 明清檔案연구의 세계를 열었다; 陳捷先、莊吉發은 故宮檔案정리에 지도, 참여한 과정 중에, 清史학계의 위치를 다졌다. 그들이 근면하게 한건 한건 사료를 조사한 것에 공로를 넘긴다. 또한 더 나아가 이들은 史實에 대해 거시적인 인식을 만들었다. 간혹 자료가 결루된 것이 있었음에도 불구하고, 오히려 동요되지 않는 견해를 제시하였다. 오늘날의 연구자가 資料庫의 우세에 기대고 있다. 만약 귀중한 시간을 절약할 수 없었다면, 사료의 해독과 사실의 해석에 몰두하여 ‘사료로 하여금 스스로 말하게 한다’는 사료쌓기와 사실을 배열하는 차원에 滿族했을 것이다. 즉 학술연구진전에 대한 資料庫의 도움과 이익에 뚜렷한 한계가 있었을 것이다.

3. ‘신清史’의 연구추세

과거 이십여년동안, 미국 清史학자들은 집단이론의 시각을 통해, 滿洲집단의 자아 동일시와 집단의식에 주목했다. ‘滿洲중심’에서 형성된 입장으로 清朝의 역사를 토론하며 이와 같이 몰두하는 방식은 당연히 전통적인 ‘漢化’의 관점과 양립할 수 없다. 王成勉은 〈沒有交集的對話——論近年來學界對「滿族漢化」之爭議〉에서, ‘漢族문화’에 대한 이 의제의 찬반 쌍방의 논술에 대해 명석하게 소개하고 있다. 즉 이 논쟁의 학술의의가 다음에 있음을 지적하고 있다. ‘과거 非漢族과 漢族간의 문화상호 이동을 어떻게 논술하고, 또한 이러한 문화영향을 어떻게 평가할 것인지는 향후의 중대한 과제이다.’²⁶⁾ 우선 羅友枝는 기존 清史연구의 성과로써 결론 짓기를, 중국역사상의 非漢

25) 黃寬重、劉增貴, 〈中央研究院人文計算的回顧與前瞻〉, 頁146.

26) 王成勉 〈沒有交集的對話——論近年來學界對「滿族漢化」之爭議〉, 頁57-81. 또 ‘滿族漢化’의 논쟁과 관련된 것은, 연구자가 滿洲주체성을 정의할 때를 언급한 것 외에도, 강약정도의 차이는 있다. 해석유형의 차이를 조성한 것에 대해서는, 다음을 참고 葉高樹, 〈「參漢酌金」: 清朝統治中國成功原因的再思考〉, 《臺灣師大歷史學報》, 第36期(2006年12月), 頁155-165.

族 정복정권은 항상 漢化를 저지하려는 의식이 있었다 ; 滿洲통치자가 내륙아시아와 漢人 사상과 의식을 융합하여 새로운 통치정권을 형성, 다민족의 제국을 건설하였다. 새로운 연구추세가 뚜렷하게 보여주는 것은 ‘滿洲中心’관으로, 이 역시 淸朝가 중국 통치에 성공한 관건이다. 그녀는 연구자가 반드시 제국에 대한 八旗통치집단의 중요성, 新疆지역에 대한 淸朝의 사회경제조성의 영향 및 다민족 제국시스템의 건립과 성취²⁷⁾를 다시 생각함으로써 ‘新淸史’의 기초를 구성해야 함을 환기시키고 있다. Mark C. Elliot 은 〈滿文檔案與新淸史〉에서 더 나아가 ‘新淸史’의 관점으로 淸朝를 이해하는 것에는 두 가지 기본적인 핵심문제가 있음을 지적한다. 첫째, 滿洲人は 소수의 인구로 어떻게 이와 같은 성취를 이룩했는가. 둘째, 淸朝통치가 현대중국에 어떠한 영향이 있는가. 동시에, 연구자의 직접 滿文檔案 사용능력을 강조하고 있는데, 이는 장차 淸朝정치, 사회, 경제, 문화 등 각종 여러 부분에서 더욱 완전한 형상을 재건하려는 중요한 수단이 되기 때문이다.²⁸⁾

‘핵심문제’라는 것은, 滿洲의 중국통치에 대한 평가이며 그 발상의 원천은 滿洲가 중국에 들어와 살게 된 사실이다. 역사상 왕조 교체기에 新정권은 得天下의 정당성을 논증해야만 한다. 이는 중국을 통치하는 非漢族에 대해서 더욱 중요하다. 張振陽은 〈「天命靡常」與「夷夏之防」——談淸初支配正當性的建立〉에서 다음과 같이 인식한다. 淸初 군주가 정권을 세우는 과정 중, 먼저 민족전통의 천명사상으로써 자신의 지위를 공고히 하고, 漢人夷夏觀의 위협에는 천명사상을 점차 유가화하고 유학을 제창하는 방식으로 대응한다.²⁹⁾ 潘志群은 〈淸初의統治正當性問題〉에서 더 나아가 다음과 같이 지적한다. 順治朝는 폭력위협과 제도의식의 이중압제로 군신관계의 절대화를 수립했고, 康熙帝는 유가경전 전역의 개조를 통해 통치정당성의 이론기초를 강화했다.³⁰⁾ 淸朝건립의 ‘정당성’을 나타내는 논술수단과 유가학설관계는 밀접하다고 해서 이것을 ‘漢化’로 볼 수 있는가? 또다시 문제가 ‘滿族漢化’의 논쟁으로 회귀된다. 康熙帝, 雍

27) Evelyn S. Rawski, “Presidential Address: Reenvisioning the Qing: The Significance of the Qing Period in Chinese History.” pp.829-838.

28) 歐立德(Mark C. Elliot), 〈滿文檔案與新淸史〉, 《故宮學術季刊》, 24卷2期(2006年12月), 頁2-15.

29) 張振陽, 〈「天命靡常」與「夷夏之防」——談淸初支配正當性的建立〉(臺北: 政治大學民族研究所碩士論文, 2001年), 頁78-136.

30) 潘志群, 〈淸初의統治正當性問題〉(臺北: 臺灣大學歷史研究所碩士論文, 2004年), 頁73-188. 另參見潘志群, 〈「夷狄之有君」: 淸初統治正當性問題與康熙帝《日講四書解義》的經典詮釋改造〉는 다음에 수록되어 있다. 黃寬重 主編, 《基調與變奏: 七至二十世紀的中國(三)》(臺北: 國立政治大學歷史學系, 2008年), 頁253-265.

正帝, 乾隆帝 세 황제는 滿族문화를 중시하였다. 국어진흥과 마술 · 궁술을 적극 권장하고 滿洲역사 전통 정리 및 八旗제도의 운용을 유지했다. 蔡偉傑는 〈論清朝前期的滿洲文化復興運動〉에서 주장하기를, 이러한 시행은 황제가 滿洲인이 漢人에 의해 동화되고 통치의 특권을 잃는 것을 염려해서뿐만이 아니다. 이는 문화와 신분의 경계로 本 민족을 단결함과 동시에 자신의 통치와 우세한 지위를 보호하고자 하는 목적이 더 강하다고 보는 것이다.³¹⁾ 그는 또 滿洲문화부흥운동을 자극하는 의식의 연원은, 누르하치시대의 女眞 중심주의의 견지로 거슬러 올라간다고 본다. 이는 또한 홍타이 지시대에 받은 滿漢 이원문화구조의 영향인 것이기도 하다.³²⁾ 黃麗君는 〈孝治天下：入關前後滿族孝道觀念之轉化及其影響〉에서 ‘孝道’에 대한 ‘滿族漢化’의 관찰호응의 의제: 滿族이 동일하다고 여겼을지라도, 중국식의 효도를 수용하는 것이 자기민족의 동질감을 잃어버린 것을 나타낼 수는 없다. 따라서, 문화적으로는 滿洲통치자가 추진한 정책은 확실히 滿族을 ‘漢化’되게 했지만 심리상태로는 30세기 정권교체기에도 滿族은 여전히 자기와 漢族이 다르다고 여겼다.³³⁾

Elliot이 제기한 첫째 핵심문제의 ‘답안’은, 과거 학계에선 何炳棣의 ‘이른 시기의 滿洲통치자가 시행한 체계적 漢化정책’이라는 견해의 영향을 받은 것이었다.³⁴⁾ 羅友枝는 滿洲주체성으로, 滿洲중심관을 강력히 제창했다; 何炳棣의 비판을 취합한 이후, Elliot은 滿洲인이 ‘한편으로는 중국정치전통을 운용, 다른 한편으로는 또 동시에 그 독자의 동질감을 유지했다’고 견해를 조정했다.³⁵⁾ ‘漢化’, ‘滿洲중심’ 혹은 ‘二元文化’ 외에도 다음과 같은 견해가 있다. 葉高樹는 〈「參漢酌金」：清朝統治中國成功原因的再思考〉에서 다음과 같이 인식한다. ‘滿洲가 외래문화와 접촉, 도입한 것은 參漢酌金を 전제로 한 것이다. 參漢酌金이 내포한 개념은 다음과 같이 이해될 수 있다: 외래문화의 선택과 滿洲중심의 적응, 선택하는 권력과 적응하는 방식에 대해서, 滿洲통치

31) 蔡偉傑, 〈論清朝前期的滿洲文化復興運動〉(臺北: 政治大學民族研究所碩士論文, 2005年), 頁101-169.

32) 蔡偉傑, 〈論金國初期滿洲文化制度化與女真本位主義的形成〉, 《中國邊政》, 第168期(2006年12月), 頁57-71; 〈論清朝滿漢二元文化結構的形成及其意義〉, 《中國邊政》, 第170期(2007年6月), 頁82-108.

33) 黃麗君, 〈孝治天下：入關前後滿族孝道觀念之轉化及其影響〉(嘉義: 中正大學歷史研究所碩士論文, 2006年), 頁144-146.

34) Ping-ti Ho, "The Significance of the Ch'ing Period in Chinese History." *The Journal of Asian Studies*, 26:2 (1967), pp. 191-192.

35) 歐立德, 〈滿文檔案與新清史〉, 頁12. 歐立德對此主題較詳細的論述, 參見歐立德著, 華立譯, 〈清代滿洲人的民族主體意識與滿洲人的中國統治〉, 《清史研究》, 2002年第4期(2002年11月), 頁87-90.

자는 항상 주도적 지위에 있었을 뿐만 아니라 진행을 지속하고 끊임없이 검색하는 과정에 있었다. 滿洲는 곧 융통성을 빙자한 ‘參漢酌金’책략으로 문화약세, 한계가 있는 무력의 비좁은 소국에서부터 중국을 정복하여 다민족제국으로 확장될 수 있었다.³⁶⁾ 이 해석유형이 성립할 수 있는지의 여부는 아직도 논의해야 하지만, 새로운 淸朝의 중국통치의 특징 및 그 성공원인의 단서 중 하나가 될 수 있을 것이다.

둘째 핵심문제에 관해서는 다음과 같다. 何炳棣가 말한 것과 무관하게도 滿洲통치자는 1600년부터 1800년 사이에 변강을 통치하는 동시에, 제국을 지리적·종족적 실체로 응집시켜 현대중국의 기본형태를 세웠다³⁷⁾; 혹은 아마도 Elliot이 주장한 것처럼: 滿洲의 중국통치기간, 강역과 다민족성 양 방면에 나타난 특징은 모두 후대의 중국정권이 받아들였다는 것이다.³⁸⁾ 이는 사실 羅友枝가 제시한 다민족제국의 개념과 일치한다. 淸朝는 다원족집단과 다원문화로 구성된 제국으로, 통치자의 조율능력은 제국의 안정과 관계된다.

葉高樹은 《淸朝前期的文化政策》에서 費孝通的 ‘多元一體상황’의 구도를 차용하여 淸朝의 중국통치를 설명한다. 淸王朝는 滿洲의식의 정복정권과 漢文化가 내포한 중원정권의 두 가지 특징을 겸비한다. 아울러 滿洲가 민족공동체에서 다민족제국으로 진보하는 역사과정 가운데, 어문정책 혹은 통치방식과 관계없이, 모두 ‘多元一體’의 특성을 갖추고 있음을 논술한다.³⁹⁾ 林士鉉은 〈淸朝前期的滿洲政治文化與蒙古〉에서, 滿

36) 葉高樹, 〈「參漢酌金」: 淸朝統治中國成功原因的再思考〉, 頁165-190. 「參漢酌金」一詞, 羅振玉編, 《天聰朝臣工奏議》, 에 수록. 潘喆等編, 《淸入關前史料選輯》, 第2輯(北京: 中國人民大學出版社, 1989年), 頁82, 〈寧完我請變通《大明會典》設六部通事奏〉, 天聰七年八月初九日. 淸朝정권은 민족공동체에서 점차 다민족제국으로 확장된 것이기 때문에, 시종일관 다원민족, 다원문화의 형태를 취했다. 그러나 滿洲문화의 형성에 영향을 준 요소는 한문화만 있었던 것이 아니다. 만문의 창제는 蒙古문화의 영향을 깊이 받은 예 가운데 하나이다. 그래서 參漢의 漢은 滿洲에 대해서 ‘외래문화’의 대명사로 확장되어 해석될 수 있다. 酌金은 문화를 선별해 수용할 때, 滿洲주체의식을 전제로 한 상태에서 가용성을 추구하고 독자성을 세우는 문화적응 과정이었다. 또 초창기의 ‘參漢酌金’관점으로 滿洲군주의 문화선별을 해석한 것은 다음을 참고. 陳捷先, 〈從淸初中央建置看滿洲漢化〉, 다음에 수록되어 있다. 中央研究院近代史研究所 編, 《近代中國初期歷史研討會論文集》(臺北: 中央研究院近代史研究所, 1989年), 上冊, 頁190-191.

37) Ping-ti Ho, “The Significance of the Ch’ing Period in Chinese History.”p.189.

38) 歐立德, 〈清代滿洲人的民族主體意識與滿洲人的中國統治〉, 頁91-93. 疆域방면에 대해 淸朝가 지리상의 내륙아시아에 속해있는 많은 지역을 모두 제국의 판도에 편입시키고 1913년 이후의 중국정권이 이를 계승했다; 滿洲인이 한인전통으로 구분된 장성의 안과 밖을 하나로 통일하고 中國의 개념이 새롭게 정의되었다. ; 다민족성 부분에 있어서, 滿洲통치자가 표방한 ‘滿漢一體’ 혹은 ‘五族一體’설 역시 이후의 중국정권이 채용한 것이다. ; 淸朝의 통치하에서 각각 여러 다른 민족들이 조성한 ‘中華民族’이 단어는 ‘이미 淸朝 강역내에 있던 사람들’과 같은 뜻이라고 할 수 있다.

39) 葉高樹, 《淸朝前期的文化政策》(臺北: 稻鄉出版社, 2002年), 頁6-7, 頁45-52.

‘多元一體’에 기초한 정권의 형성은 淸朝통치기간에만 있었던 것은 결코 아니며, 전체 중국역사

洲정치문화맥락중의 蒙古 요인에 치중하여 논술하였다. 滿洲통치자는 滿蒙혼인, 종교 신앙, 八旗조직 등을 통하여 滿蒙一體의 기초를 세웠다. 또한 蒙古역사찬수 · 蒙古 음악 무도 도입 · 티벳불교 통제 · 불교이론 이용을 통해 집단 의식을 구축하였다. 아울러 滿文拼音특성을 발휘하여 ‘同文’정책을 추진, 滿蒙으로 하여금 진정으로 ‘일체’로 융합함과 동시에 滿洲와 북아시아문화의 교류를 추진했다.⁴⁰⁾ 淸朝는 자주 貢馬 활동을 외번과 속국간의 정치교류로 삼았다. 〈乾隆時代的貢馬與滿洲政治文化〉에 의하면 林士鉉는 상술한 관점을 연장해, 공마의 도상에서 命名추세, 蒙文 중 말과 관련된 詞彙 및 宮廷祭馬神儀式을 도입하여 蒙古문화의 영향력을 분석했다.⁴¹⁾ 다민족 제국의 시각을 중국본토에서 내륙아시아로 전이한 것은, ‘新淸史’의 중요한 주제이자 심화시킬 가치가 있는 영역이다.

다민족제국이 채택한 ‘풍속으로 통치한다’는 통치책략은 특히 종교정책방면에 있어서 가장 성공적으로 운용되었다. 이는 전체적으로 볼 때, 莊吉發이 〈淸朝宗教政策的探討〉에서 지적한 바와 같다. 淸朝가 ‘黜邪崇正’의 방침하에 正心宗教에 대해 조건적으로 수용, 신흥교파와 외래종교는 邪教로 간주, 정교수호와 단속은 종교정책을 제정하는 지도원칙이 되었다. 제국내부다원군족의 다원신앙에 대하여, 통치자는 異端邪教는 당연히 엄금했지만 불교와 도교 正信宗教의 수용, 혹은 黃敎의 수호는 모두 정권을 공고히 한다는 전제하에 임시 방편이었다.⁴²⁾ 제국의 입장에서는 티벳불교를 수호하는 것은 蒙古와 西藏을 안정시키는 중요수단으로, ‘黃敎를 흥하게 함으로써 蒙古를 안정시킨다’는 것이었다.⁴³⁾ 劉家駒의 〈康熙皇帝的振興法敎與平定西藏〉⁴⁴⁾, 林秋燕

문화가 뭉쳐지는 과정 중 나타난 특징이다: 費孝通은 이에 더해, ‘多元一體의 구조는, 증원혹은 漢族이 중심의 경향을 띠고 있는데, 만약 滿洲의 입관 전 시기의 역사토론에 운용한다면, 滿洲정권이 이미 중국왕조의 특징을 갖고 있었다고 단정할 수는 없다. 즉 해석구조를 ‘參漢酌金’ 유형으로 수정해야 할 필요가 있다. 葉高樹, 〈「參漢酌金」: 淸朝統治中國成功原因的再思考〉, 頁182-183.

- 40) 林士鉉, 〈淸朝前期的滿洲政治文化與蒙古〉(臺北: 政治大學歷史研究所博士論文, 2006年), 頁2-5、頁10-11.
- 41) 林士鉉, 〈乾隆時代的貢馬與滿洲政治文化〉, 《故宮學術季刊》, 24卷2期(2006年12月), 頁52-56、頁96-97.
- 42) 莊吉發, 〈淸朝宗教政策的探討〉, 다음에 수록. 王成勉 主編, 《明清文化新論》(臺北: 文津出版社, 2000年), 頁31-35、頁80-82. 淸朝의 각 종교의 정통과 異端을 정의하는 것에 관해서, 대략 다음과 같다: 내지 漢族의 일반적인 신앙인 불교, 도교 양대 종교는 예부터 있었던 正信宗教, 불교와 도교의 세속화로 생겨난 민간 비밀종교는 신흥 邪教로 규정: 蒙古族, 藏族이 섬기는 藏傳佛教 중, 黃敎는 淸朝통치자와 관계가 밀접했기 때문에 정교가 되었고, 紅敎, 본교는 邪教가 되었다: 서북민족의 회교교파는 구교와 신교의 구별이 있었는데, 조정에선 구교를 지원했기 때문에 신교는 邪教가 되었다: 천주교는, 외래신종교로 邪教로 간주되어 모두 異端邪教에 속해 심각한 타격을 받았다.

의 〈盛淸諸帝治蒙宗教政策之研究〉⁴⁵⁾ 모두 淸初 여러 황제들이 黃敎를 숭상하고 護法의 입장을 표명하는 것을 논증했는데 이에 따르면, 淸初 황제들은 蒙古 諸部를 평정하고, 서북 준가르부를 위협하는 목적을 해결함과 동시에 西藏에 대한 통제를 강화함으로써 蒙古와 장족으로 하여금 淸朝의 종주지위를 인정하게 했다. 滿洲통치자는 또 북경등지에서 출자하여 티벳불교사원을 건축, 官銀, 內帑으로 라마를 봉양했다. 賴惠敏은 〈淸政府對北京藏傳佛寺之財政支出及其意義〉에서 다음과 같이 인식하고 있다. 淸朝는 漠南, 甘肅, 青海 지구의 駐京 호토티의 사원경제를 지원하고 있었고 蒙藏 세력의 결탁을 가로막아 격리할 뿐만 아니라 다른 사원이 황권에 귀부하도록 촉진했다. 티벳불교를 이용해 蒙古의 힘을 없애는 목적을 마침내 달성했다.⁴⁶⁾ 淸朝통치방식이 상당히 탄력적이었음에도 불구하고 통치자는 정권을 공고히 하기 위해서는 내부성원을 응집할 수 있는 동질감을 제조할 방법과 동질감을 형성할 논술이 필요했다. 葉高樹는 〈滿洲君主塑造政權認同的論述〉에서 인식하기를, 누르하치가 滿文을 창제하고 八旗제도를 설치한 것이, 통치하의 각 집단에 동질감을 제공하기 위한 기초인 동시에 이민족 공동체를 통합하기 위한 것이라 본다; 홍타이지는 또 族을 ‘滿洲’라고 칭했는데 이는 공동체 성원에게 동질적 주체를 상징해내기 위한 것이었다. 입관 후에, 滿洲 군주는 진일보하여 ‘旗人’ 등이 ‘滿洲人’과 같다는 것을 확인함과 동시에 동질적인 양대 중요 항목을 ‘근본’으로 심화시켰다. 이로써 공동체의 성원으로 하여금 안정된 정권을 원하게 하고 ‘근본’ 수호를 위해 노력하도록 했다. 滿洲통치자가 대면하게 된 관외한인에게는 ‘滿漢一體’를 호소하고; 내지한인에 대해서는, ‘崇儒重道’의 대정방침을 입안하게 했다. 또한 변강을 개척하는 단계에서, 각족군이 ‘일체’로 융합되게 하고, 동시에 동일시하는 滿洲통치가 중심이 되게 하여, ‘동문지치’의 시행을 통해 동일시하는 논술을 강화했다.⁴⁷⁾ 현대중국의 형성이라는 것이 이것과 관련되는 것이다.

43) 淸高宗御製, 《淸高宗(乾隆)御製詩文全集·御製文三集》(北京: 中國人民大學出版社, 1993年), 卷4. 〈說·喇嘛說〉. 頁10.

44) 劉家駒, 〈康熙皇帝的振興法敎與平定西藏〉, 《中華民國史專題論文集: 第五屆討論會》(臺北: 國史館, 2000年), 頁1029-1056.

45) 林秋燕, 〈盛淸諸帝治蒙宗教政策之研究〉(臺北: 臺灣師範大學歷史研究所碩士論文, 2000年), 頁45-54, 頁98-103.

46) 賴惠敏, 〈淸政府對北京藏傳佛寺之財政支出及其意義〉, 《中央研究院近代史研究所集刊》, 第58期(2007年12月), 頁28-39. 乾隆皇帝가 藏傳佛敎를 적극 보급, 雍和宮을 藏傳佛敎사원으로 개축하고, 거액의 경비를 찬조하였다. 게다가 金瓶掣籤제도를 실시하여 雍和宮을 藏傳佛敎의 신앙중심으로 만들었다. 乾隆皇帝역시 蒙古, 西藏 정교합일의 영수가 되었다. 北京 藏傳佛敎의 종교활동이 빈번해서 고관 귀인들의 신앙분위기를 대동했고, 비록 한인들의 비판을 받았지만 오히려 북경 하층민중과 藏傳佛敎문화사이의 상호 활동을 촉진했다. 賴惠敏, 張淑雅, 〈淸乾隆時代的雍和宮——一個經濟文化層面的觀察〉, 《故宮學術季刊》, 23卷4期(2006年6月), 頁132-159.

다음으로, ‘新淸史’가 대만에 영향을 주기 전, 旗人과 八旗통치집단 관련 연구 종사자들은 상대적으로 적었지만 체계적으로 진행한 것이 있었다. 바로 惠敏在가 1997년에 출판한 《天潢貴胄——淸皇族的階層結構與經濟生活》이다.⁴⁸⁾ 그녀는 동시에 따로 경제사에 종사, 법제사적 시각으로 풍부한 檔案사료를 운용하여 황실관계가 밀접한 內務府 및 旗人の 법률과 사회에 대해 연속적으로 연구논저를 발표했다. 內務府 분야에서는 〈乾隆朝內務府的當舖與發商生息(1736-1795)〉에서, 乾隆朝의 內帑의 운용에 대해 심도있게 연구하고 있다. 이윤확보를 위한 당포 경영에서 상인들이 성장하게 되는 변화; 비록 傭상들이 받은 변리가 높지는 않았지만, 장기 대출이 거액의 이자로 누적되고, 기부의 부담이 심했다. 이 외에도 傭업의 생산 소비 환경의 변화로 파산에 이르렀다.⁴⁹⁾ 〈從高樸案看乾隆朝的內務府與商人〉에서는, 乾隆황제가 新疆葉爾羌辦事大臣 高樸을 貪污案으로 처벌하는 과정을 통해, 황권의 강화 아래 황제의 엄단과 內務府 포의 사이 主僕명분의 수단, 정부 통제경제와 상인자유경제간의 성쇠의 과정⁵⁰⁾을 보여준다. 〈乾隆朝內務府的皮貨買賣與京城時尚〉를 보면, 內務部에서 구입한 피혁을 통해 모피복식에 대한 궁정의 수요를 설명하고 있다. 아울러, 그 旗人들이 궁정복식과 북경의착유형을 모방하는 것에 대한 變賣皮張의 영향을 설명하고 있다.⁵¹⁾ 〈鐵杆莊稼清末內務府辛者庫人的家戶與生計〉를 보면, 청초의 內務府 행자와 고인은 가장 비천한 노예로 여겨졌었다. 그러나 嘉慶朝 이후의 세 관령의 인정의 가정구조, 하인, 경제수입에 대한 분석으로 그들의 신분지위에 뚜렷한 유동이 있음을 알 수 있게 되었는데,⁵²⁾ 이 역시 과거의 연구가 간과했던 부분이다.

47) 葉高樹, 〈滿洲君主塑造政權認同的論述〉, 《基調與變奏：七至二十世紀的中國(三)》, 頁268-291. 淸朝가 추진한 다원문화와 병행한 어문정책은 비록 다원문화에 대한 제국의 존중과 개방적 태도를 전시하려는 것이었지만 다원민족을 응집시키는 목적을 달성하는 데에는 부족했다. 그래서 ‘同文之治’가 제시된 것이다. ‘同文之治’란, 滿洲정권이 중심이 된 ‘並呈’(통합을 드러내는 것)으로, 이 특징은 淸朝가 ‘合璧’(절충, 서로 다른 것을 잘 배합)이라고 칭한 것에 있는데, 임관 이래로 모든 서책, 조서, 화폐, 종실황책, 각라홍책 등이 모두 滿漢文과 기타민족문자를 겸하고 있는데, 이런 표현형식은 융합의 상징적 의미를 갖고 있었다.

48) 이는 《玉牒》를 기초로, 아울러 中國第一歷史檔案館의 檔案의 자료를 대량 이용하여, 가족사에서부터 경제사, 법제사 세 방향에서 황족의 조직과 계층이동, 공공재산과 관 장원, 재산분배와 경제생활 등의 주제를 심도있게 논의하고 있다. 賴惠敏, 《天潢貴胄——淸皇族的階層結構與經濟生活》(臺北：中央研究院近代史研究所, 1997年), 頁12-19.

49) 賴惠敏, 〈乾隆朝內務府的當舖與發商生息(1736-1795)〉, 《中央研究院近代史研究所集刊》, 第28期(1997年12月), 頁137-175.

50) 賴惠敏, 〈從高樸案看乾隆朝的內務府與商人〉, 《新史學》, 13卷1期(2002年3月), 頁72-125.

51) 賴惠敏, 〈乾隆朝內務府的皮貨買賣與京城時尚〉, 《故宮學術季刊》, 21卷1期(2003年9月), 頁102-129.

52) 賴惠敏, 〈鐵杆莊稼？清末內務府辛者庫人的家戶與生計〉, 《中央研究院近代史研究所集刊》, 第38期(2002年12月), 頁73-105.

기인의 법률과 사회 방면에 관해 賴惠敏은 주요한 연구 성과를 『但問旗民：清代的法律與社會』에 수록하였다. 기인과 한인을 관리하는 행정조직이 다르고 종족과 성별에 따라 법률적 처리에 차이가 있었기 때문에 기인과 한인 두 편으로 나누어 책을 서술하였다. 그 가운데 상편은 기인을 다루고 있는데 〈清代皇族婦女的家庭地位〉가 포함되어 있다. 이에 따르면 다수의 황족 여성들은 남성의 세계에 의존하였으며 법률이 그들의 기본적인 생활조건을 보장하는 것을 제외하고 합법적 권익을 승인받지 못하였다; 가정에서 여성들은 존중받지 못하였고 그들 자신 또한 자녀를 깨우치고 敎養할 책임을 짊어지지 않아 황족이 점차 타락하기에 이르렀다고 지적하였다. 〈清代旗人婦女財產權之淺析〉은 여성의 생활 보장과 독립적인 재산권, 과부의 재산권과 양자입양권, 여성의 혼수에 대한 지배권과 여자아이의 재산계승권의 문제에 대해 토론하였다. 〈從清代檔案看旗人的家庭糾紛(1644-1795)〉은 기인 가정의 분규 사건의 유형, 大家庭으로 인해 일어난 내부 분규 및 기인 여성이 自重한 도덕관을 분석하였다. 〈婦女無知? -清代內務府旗婦的法律地位〉에 따르면 기인 가정은 전통 예교를 준수하였는데, 사법관련 당안 자료에 의하면 기인이 예교를 중시한 배후에는, 별도로 법률을 통해 예법을 준수하지 않는 자에 대해 제재를 가하여, 기인 사회의 질서를 유지하였던 측면이 있었다. 〈清代內務府官莊的家戶及其人口行爲〉은 앞서 토론한 기인의 家戶형태에 관해 수량화 연구를 진행하여 기인 사회에서 부유한 가족이 대가족형태를 유지하였고, 가족의 번영을 위해 기인은 재산 계승에 대한 독특한 전략을 발전시켰음을 밝혔다.⁵³⁾ 이상 각 주제를 연구대상으로 설정한 것은 필자가 장기간 여성사 연구에 관심을 가졌던 것과 관련이 있으며, 이를 통해 상이한 계층의 기인 여성들의 법적 지위를 파악할 수 있다. 별도로 〈從契約文書看清前期的旗地政策與典賣(1644-1820)〉는 旗地 典賣로 인해 야기된 기인과 노복의 관계 변화를 탐구하여 노복이 贖身, 開戶, 出戶 등의 방식을 통해 점차 民籍을 취득할 수 있는 기회를 얻었기 때문에 많은 기인의 노복들이 점차 국가의 백성이 되었다는 점을 탐구하였다.⁵⁴⁾

팔기 통치 집단과 관련해서 또한 황족혼인에 대한 연구가 있다. 馮國華는 〈清代宗室婚姻政策研究〉에서 종실 가운데 인구 비율이 가장 높고 경제 기초가 가장 박약

53) 賴惠敏 《但問旗民：清代的法律與社會》(臺北：五南圖書出版公司，2007年)，pp.1-205 참조. 책의 하편은 한인의 법률과 사회에 대해 분석하였는데, 〈從命案看清前期的國家與社會(1644-1795)〉; 〈婦女、家庭與社會-雍乾時期拐逃案的分析〉; 〈情慾與刑罰-清前期犯姦案件的歷史解讀(1644-1795)〉가 포함되어 있다.

54) 賴惠敏 〈從契約文書看清前期的旗地政策與典賣(1644-1820)〉 《中央研究院近代史研究所集刊》，第32期(1999年12月)，pp.127-161.

한 四品宗室을 선정하여 연구대상으로 삼아 혼인에서 만혼, 少妻妾, 독신의 비율이 높았음을 밝혔다; 녹봉이 혼인의 규모와 대상을 결정했기 때문에 혼인의 형태도 나날이 하락하는 사회경제적 지위와 서로 영향을 미쳐 단지 愛新覺羅 家族 만이 기존의 인적인 네트워크를 유지할 수 있었고, 후기에 결혼은 小姓에 한정되었다고 지적하였다.⁵⁵⁾ 陳孟惠의 〈清代皇室女性婚姻之研究-以后妃, 公主爲例〉는 《清史稿》 〈后妃傳〉, 〈公主表〉의 기재내용을 분석대상으로 삼아 통치자가 배우자를 지명하여 기타 성원 혼인에 대해 최대의 권력을 지녔고 秀女 선발제도와 부마 지명 제도를 配合하여 황실성원의 혼인 네트워크를 구성하였음을 설명하였다; 황후와 공주의 혼인은 정치력으로 결정되고 다만 秀女 선발제도가 형성된 후 이를 통해 後宮으로 들어간 후비는 정치력의 영향의 비교적 적게 받았다고 한다.⁵⁶⁾ 팔기제도에서 파생된 다른 문제로 旗務, 駐防에 관한 것들이 있다. 기무 방면에서 청조의 통치자는 <팔기인을 국가의 근본>으로 간주하였다.⁵⁷⁾ 入關 이후 기인과 한인의 접촉이 빈번하여 기인이 핏에 빠져 <國語騎射>의 전통을 폐기하고 나날이 검약하고 순박한 습성을 위배하였기 때문에 옹정제는 제위기간에 기무 문제에 대해 매우 주의하였다. 葉高樹의 〈深維根本之重：雍正皇帝整飭旗務初探〉에서는 본래의 습성을 잃고, 생계가 곤란하게 되었으며, 한족의 풍습에 물들었다는 등의 사항으로 인해 옹정제가 기무를 정돈하는 조치를 분석하였다. 그러한 조치의 효과로 논하자면 관원들이 항상 열성적으로 정책을 집행할 수 없었고, 기인 역시 확실하게 법을 지키고 스스로를 억제할 수 없어서 정돈 작업이 피동적이고 소극적이었던 측면이 있었다고 지적하였다.⁵⁸⁾ 사실상 팔기인들이 직면한 여러 가지 곤경은 오랜 기간 누적된 결과로 결코 옹정조 10여 년 동안 철저히 시정할 수 없었다. 그래서 官書에는 이에 대해 부정적인 서술이 드물다. 〈清雍乾時期的旗務問題：以雍正十三年滿，漢文「條陳奏摺」爲中心〉은 건륭제 즉위 초 팔기 관원들이 기무와 관련하여 올린 135건의 <條陳奏摺>를 이용하여 옹정 조 이래 人事 승진, 교육 훈련, 생계 유지, 인심 풍속 등에서 그들이 기무를 정돈한 조치와 건륭제 즉위 초 추진된 혁신적인 기무정책의 영향을 분석하였다.⁵⁹⁾ 이에 따르면 만주어를

55) 馮國華, 〈清代宗室婚姻政策研究〉(臺北：臺灣師範大學歷史研究所碩士論文, 2001年), pp.1-28, pp. 323-326 참조.

56) 陳孟惠, 「清代皇室女性婚姻之研究-以后妃·公主爲例」(臺中：東海大學歷史研究所碩士論文, 2006年), pp.1-17, pp.167-174.

57) 『實錄·世宗憲皇帝實錄』(北京：中華書局, 1985年), 卷60. p.26, 雍正五年八月庚戌條

58) 葉高樹, 〈深維根本之重：雍正皇帝整飭旗務初探〉, 《臺灣師大歷史學報》, 第32期, 2004年6月, pp. 90-119. 참조

59) 葉高樹, 〈清雍乾時期的旗務問題：以雍正十三年滿，漢文「條陳奏摺」爲中心〉《臺灣師大歷史學報》,

학습하고 말타기와 활쏘기에 전념하며 순박함을 유지하는 것이 기인이 갖추어야 할 기본 조건이었다. 또한 그것은 국가가 팔기인을 敎養하고 심사하는 표준이었다. 〈習染既深, 風俗難移; 淸初旗人「漸染漢習」之風〉은 팔기인 등이 만주어와 騎射를 낮설어 하고 인심과 풍속이 나날이 타락해 갈 때, 또한 근본이 흔들리고 순박함이 도전받았던 상황에서, 옹정제와 건륭제가 만주어와 騎射의 숙련을 기인의 근본으로 삼고, 고상한 행위를 만주의 淳樸한 전통이라 체화시킨 것은, 통치자가 문제의 원인을 「漸染漢習」의 탓이라 돌린 것이지만, 정책상의 실수를 인정해야 하고, 설사 권계, 금지, 징벌을 가한다고 할지라도 저지할 방법이 없어서 만회하기 어려웠다고 지적하였다.⁶⁰⁾

駐防 방면에 관해서는, 駐防八旗는 상대적으로 在京八旗 보다 비교적 한인과의 상호작용이 긴밀하여 한문화의 충격이 더욱 심하였다. 林承誌는 〈分鎮巖疆·駐衛內裏-淸朝駐防八旗問題研究〉에서 주방체계가 형성되는 과정에서 팔기관원과 직성 독무, 녹영의 장령 간에 협조와 불협화음, 조정이 주방에 부여한 대우와 賞恤 및 주방 기인이 점차 한인의 풍속에 물들어갈 때 조정이 취한 임기응변적인 조치를 심도 있게 분석하였다.⁶¹⁾ 팔기 주방과 관련된 논의로는 이미 높은 평가를 받고 있는 任桂淳의 《淸朝八旗駐防興衰史》와 定宜庄의 《淸代八旗駐防研究》가 있다.⁶²⁾ 林承誌의 연구 해석 틀은 아직 이전 학자들을 넘어서지는 못하였지만 보충하는 내용이 있어 참고할 만하다. 八旗駐防의 도시 가운데 특정 구역을 군대 주방의 용도로 획정하였고 또한 성벽을 건축하여 旗·民을 격리시켜 「滿城」혹은 「駐防城」이라 일컬었다. 許富翔의 〈淸代江寧滿城研究〉는 사례 연구를 통해 江寧 滿城의 설치와 경비의 출처 및 운용, 기인의 생활 형태와 정체성의 변화 등을 논의하고 그 붕괴원인을 분석하였다; 滿城 내부의 공간 구조를 재구성하여 현존 문헌 기재가 상세하지 못한 곳을 보충하고 있다.⁶³⁾ 賴惠敏의 〈從杭州滿城看淸代的滿漢關係〉는 杭州 駐防滿城을 예로 들어 漢軍

第38期, 2007年12月, pp. 70-141. 참조. 논문에서 《宮中檔雍正朝奏摺·滿文諭摺》을 사용한 부분은 비록 中國第一歷史檔案館이 편역한 《雍正朝滿文硃批奏摺全譯》(合肥: 黃山書社, 1998年)을 참조할 수 있지만, 문장 하나 하나를 重譯하였다; 《奏摺全譯》의 번역 가운데 적지 않은 부분이 정확하지 않고 심지어 오역된 곳까지 있다. 歐立德이 연구자가 만문당안을 사용할 때 반드시 직접 해독할 필요가 있다고 주장한 것을 참고할 만하다. 歐立德, 〈滿文檔案與淸史〉, p. 11.

60) 葉高樹, 〈習染既深, 風俗難移: 淸初旗人「漸染漢習」之風〉, 國立臺灣師範大學歷史學系編, 《近世中國的社會與文化(960-1800)論文集》(台北: 國立臺灣師範大學歷史學系, 2007年), pp.247-275. 참조

61) 林承誌, 〈分鎮巖疆·駐衛內裏-淸朝駐防八旗問題研究〉(臺中: 東海大學歷史研究所碩士論文, 2007年), pp.1-18, pp.263-270. 참조

62) 任桂淳, 《淸朝八旗駐防興衰史》(北京: 三聯書店, 1993年); 定宜庄, 《淸代八旗駐防研究》(瀋陽: 遼寧民族出版社, 2003年)

63) 許富翔, 〈淸代江寧滿城研究〉(臺北: 東吳大學歷史研究所碩士論文, 2008年), pp. 1-22, pp.

에서 八旗를 배출한 것이 오히려 기인 양성의 항목을 증가시켰고, 만주팔기, 몽고 팔기에게 중요 화기를 통제하도록 함으로써, 乾隆 朝는 만주인의 실질적인 이익을 보장하였으며 만주 본위주의를 강화시켰다고 설명하였다; 당안에 나타난 기인의 일상생활에 관한 기록을 이용해 주방 기인이 북경에서 여전히 원 거주지의 습관과 풍습을 보존하여 만주의 민족적 정체성을 유지하고 있었음을 설명하였다. 비교적 특별하다고 볼 수 있는 것은 법률적 관점에서 종족의 정체성 문제를 관찰한 것이다. 駐防兵丁이 민간의 재물을 약탈한 사건, 三藩의 亂이 발생한 시기 여성을 겁탈한 것, 항주 성내에서 집단 구타한 사건 등을 제시하여, 조정이 집단적 범죄 처벌에 만환을 차별한 것은 기인의 사법적 특권 보장하려는 목적에 도달하기 위해 고심했던 것과 관련이 있다고 지적하였다.⁶⁴⁾

다음으로 청조가 변경지구의 사회 경제에 끼친 영향에 대해서는, 동북은 「龍興之地」⁶⁵⁾로 입관 초기 한인이 들어와 개간하는 것을 방지하기 위해 소극적인 보호조치를 취하였다. 許倩倫의 〈清代東北封禁政策之研究〉는 封禁政策의 형성, 이완, 개방까지의 역사적 과정을 서술하고 정책의 집행이 때로는 이완되고 때로는 엄격하였기 때문에, 淸 중기 내지 인구가 급증하고 자연재해가 빈발하자 유민이 불법으로 월경하여 몰래 수렵, 채취하고 토지를 점거하여 농사짓는 사건이 빈발하여 동북사회가 동요하였다고 지적하였다; 청 말에 이르러 조정은 제국주의 세력이 동북에 진출함에 따라 移民實邊이라는 적극 정책을 취하였다.⁶⁶⁾ 林士鉉의 〈淸季東北移民實邊政策之研究〉는 논의의 중점을 동북 이민 개간 사회의 발전과 변경의 위기 상황 심화에 두고, 旗屯 처리와 旗招民佃을 개방하고 더 나아가 旗·民을 함께 모집하며, 개간 자금 마련으로부터 「實邊은 토지를 개간하는데 있고, 토지 개간은 백성을 모으는데 있으며 변경을 防備하는 데는 반드시 먼저 군사구역(戍)을 설치해야 한다」는 최종 목적에 도달하기까지의 변강정책의 변화를 서술하였다.⁶⁷⁾ 許倩倫의 논문과 함께 참고할 가치가 있다.

몽고 제 부족에 대한 청조의 대처방식은 관외 시기에는 어루만져서 부리는 태도를

203-208. 참조

- 64) 賴惠敏, 〈從杭州滿城看清代的滿漢關係〉, 《兩岸發展史研究》, 第5期, 2008年6月, pp.37-89. 참조
- 65) 《淸實錄·高宗純皇帝實錄》(北京: 中華書局, 1985年), 卷1023, p. 8. 乾隆四十一年十二月丁巳條.
- 66) 許倩倫, 〈清代東北封禁政策之研究〉(臺北: 臺灣師範大學歷史研究所碩士論文, 1999年), pp. 1-6, pp. 245-248. 참조
- 67) 林士鉉, 〈淸季東北移民實邊政策之研究〉(臺北: 政治大學歷史研究所碩士論文, 1999年), pp. 1-10, pp. 260-263. 참조

취하여 분화, 이용, 제한 등의 정책을 확립하였다.⁶⁸⁾ 그러나 몽고 제 부족이 강성해지는 것을 두려워하여 몽고지구에 다원적이고 다단계의 봉금정책을 실시하였다. 羅運治의 〈清代對蒙古地區的封禁政策〉은 정책 내용을 다음과 같이 분류할 수 있다고 지적하였다. 1. 몽고팔기 간의 봉금으로 팔기 간에 월경하여 몰래 왕래하는 것을 엄금하였다; 2. 몽고 각 부족 간의 봉금으로 漠南 몽고와 喀爾喀, 厄魯特蒙古 사이에서 서로 교환하는 것을 금지하였다; 3. 몽고족과 한족·장족 간의 봉금으로 蒙漢, 蒙藏民族 간의 교류를 허락하지 않았다.⁶⁹⁾ 溫浩堅의 〈清朝蒙古的封禁隔離政策〉의 연구 분석들은 羅運治와 유사하지만 비교적 더 상세하다. 논문은 治蒙政策, 封禁 격리 정책의 형성 배경과 민족 격리 정책의 함의 및 정책에 대한 검토 등에 대해 심도 있게 분석하였다. 溫은 이러한 정책 하에서 몽고족의 약화와 더불어 몽고족과 한족이 격리되어 변강의 위기와 영토상실을 야기하였다고 인식하였다.⁷⁰⁾ 봉금정책은 몽고의 경제 형태에도 충격을 주었다. 孔拉普의 〈清代蒙古游牧經濟〉는 그 영향을 귀납하였는데 내용은 다음과 같다: 盟旗制度의 건립으로 대규모 그리고 원거리의 이목현상이 소실되고 개별 가족이 정해진 토지에서 방목하는 것이 주요한 유목형태가 되었다; 수공업자와 상인, 농민의 출현에 따라 원래 단일한 경제체계가 다원화된 경제체계로 변화하게 되어 상품경제가 발전하고 자급자족의 대형 유목 경제가 해체되었다; 역참제도의 건립은 몽고와 내지 한족의 경제적 연계를 촉진하였으나 역참은 몽고 유목민에게 경제적 부담을 주었고, 경제적 변화는 최종적으로 몽고의 王公과 인민 사이의 사회적 충돌을 낳아 격화시켰다.⁷¹⁾

서북 지역에 대해서는 그 지역의 민족 구성이 복잡하고, 천산남·북로에 위치한 回部와 準가르부는 일 년 내내 변경지역의 걱정거리였기 때문에 청조는 시종 무력 정벌 정책을 견지하였다. 건륭 24년(1759년)비로소 신강을 평정하고 통치하였다.⁷²⁾ 林恩顯의 〈清朝在新疆的政策制度分析初探〉은 청조가 중국 역대 왕조의 민족 정책과 제도에 관한 경험을 흡수하고 전통적 華夷觀, 해당 지역의 습속으로 통치하는 방식, 회유와 속박, 견제와 분화, 민족 격리, 변경 치안 등의 원칙을 습득하여 신강에서

68) 王鍾翰, 〈清代民族宗教政策〉, 王鍾翰, 《王鍾翰學術論著自選集》(北京: 中央民族大學出版社, 1999年), pp. 230-231. 참조

69) 羅運治, 〈清代對蒙古地區的封禁政策〉, 《中華民國史專題論文集: 第五屆討論會》, pp.851-877. 참조

70) 溫浩堅, 〈清朝蒙古的封禁隔離政策〉(臺北: 政治大學歷史研究所碩士論文, 2003年), pp. 1-6, pp. 190-208. 참조

71) 孔拉普, 〈清代蒙古游牧經濟〉(臺北: 政治大學歷史研究所碩士論文, 1999年), pp. 119-124. 참조

72) 莊吉發, 《清高宗十全武功研究》(臺北: 國立故宮博物院, 1982年), pp.9-22, pp.65-72. 참조

정책과 제도를 통해 다원적이고 정합적 색채와 기능을 지닌 통치를 실시하였다고 인식하였다; 법제적인 측면에서 지방 상층계급의 권익을 보호하여 다원화에서 정합 통일로 나아가려는 목적을 달성하였다고 파악하였다.⁷³⁾ 林은 「新清史」의 특징에 부합하는 의제를 선정하고 사회과학 이론을 운용하여 해석 패턴을 수립하려고 시도하였다. 다만 때때로 한문화 중심의 의식을 드러내고 있다. 西藏에 대해서는 비록 달라이라마가 청에 대해 명의상 조공·책봉관계를 이행하였으나, 청조는 서장을 「極邊之地로 내지와 비교할 수 없으며 그 생계와 풍속은 당연히 구습을 답습하고 대신 경영, 관리할 필요가 없다」고 보았다.⁷⁴⁾ 陳又新의 〈清朝前期經營西藏之研究〉는 滿, 蒙, 藏의 관계, 청조 초기 황제들의 티벳 불교 및 그 종교 영수에 대한 태도, 달라이라마와 班禪額爾德尼(판첸 라마?)의 상호작용, 청조의 西藏에 대한 사무 관리 기구의 설치와 각종 장정의 제정, 서장에서 청조의 군사 활동과 국경의 구획 및 서장의 경제 발전과 사회적 流動 등의 항목으로 나누어 청조와 서장의 관계를 설명하였다.⁷⁵⁾ 논문에서 역사적 사실의 재구성에 치중하여 필자 개인의 관점이나 역사적 사건에 대한 분석이 미흡하다.

청조의 변강지구 통치 정책은 비록 다원적 형태를 나타내지만 주권적 지위를 확립하려는 태도는 한결 같았다. 鄭永昌의 〈政軍基礎的延續力量-論清代乾隆年間對新疆與西藏實施的貨幣政策〉은 신강과 서장을 지배해가는 과정에서 청조는 일면으로 변경 사회를 안정시키기 위하여, 해당 지역 고유의 화폐를 계속 사용하도록 하고, 또 다른 일면으로는 새로운 정권의 통치 기초를 건립하기 위하여 남쪽과 북쪽의 변경지역에 舊普爾錢과 制錢(동전?)의 이원적 화폐제도로 나누어 실시하고 西藏에는 스스로 주조한 銀元 제도를 시행하였다; 더욱이 舊幣 회수 정책을 통해 효율적으로 변경지역에서 청조의 정치적 지위를 제고하고 해당 지역의 경제 발전을 촉진하였다고 논술했다.⁷⁶⁾ 또한 강희제가 열하에 피서산장을 건립한 이후부터 이곳은 황제들의 변경지역 巡幸所가 되었고 또한 蒙古, 回部, 西藏 등의 外藩使臣을 접견하는 곳이 되었다. 彭嘉楨의 〈清代熱河地區巡幸活動的區域發展關係之研究〉에 따르면 열하지구가 변강을

73) 林恩顯, 〈清朝在新疆的政策制度分析初探〉, 《中華民國史專題論文集: 第五屆討論會》, pp. 889-925. 참조

74) 《清實錄·高宗純皇帝實錄》, 卷261, p.23, 乾隆十一年三月壬辰條.

75) 陳又新, 〈清朝前期經營西藏之研究〉(臺北: 臺灣師範大學歷史研究所博士論文, 1998年), pp. 1-6, pp. 407-411. 참조

76) 鄭永昌, 〈政軍基礎的延續力量-論清代乾隆年間對新疆與西藏實施的貨幣政策〉, 《故宮學術季刊》, 21卷1期, 2003年 9月, pp. 136-177. 참조

총괄하는 정치중심이 되는 과정에서 관리의 필요성으로 인해 군사적 성격의 임시조직이 州縣이 되는 변화가 출현하였다; 인원의 유동, 토지 생산, 식량, 상품의 공급 문제 때문에; 인구의 이입으로 인해 경제가 발전하는 동시에 사회적 충돌을 야기하였다.⁷⁷⁾ 변강 개발이라는 측면에서 보면 열하의 변천과 당시 다른 변강지구의 진보와 유사한 점이 있지만 순행활동이 지닌 강렬한 정치성은 기타 지구에 비할 바가 아니라는 것이다.

만문사료의 이용에 있어 莊吉發은 〈淸史研究的前景-新史料의發現與新淸史研究〉에서 만문이 淸 초기의 역사적 사실, 薩滿信仰, 滿族家譜 등의 연구에 중요성을 지니고 있으며⁷⁸⁾ 이를 이용하기 위한 선결조건은 연구자가 반드시 만문 해독 능력을 가져야 한다는 것임을 지적하였다. 莊吉發은 滿文 敎學에 30여 년간 종사하였고, 政治大學 邊政研究所(현재 민족학과로 개조), 臺灣師範大學 역사학과, 故宮博物院에 滿文 課程을 개설하였다;⁷⁹⁾ 敎學하는데 필요한 만문교재 시리즈를 編譯, 출판하였다.⁸⁰⁾ 만주어 해독 능력을 지닌 인재 배양에 탁월한 공헌을 하였는데, 이 점은 근래 발표된 논저들에서 만문 사료를 이용한 연구자가 점점 많아지고 있다는 사실에서도 확인할 수 있다. 청사연구에서 滿文은 歐立德이 말한 것처럼 「번역된 만문 당안을 사용하는 것은 만문당안을 사용하는 것과 같을 수가 없고 오직 이러한 번역은 스스로 해야만 한다. 이는 번역이 잘못되었을 가능성이 있기 때문만이 아니라 자기가 직접 당안을 해독하여 느낄 수 있는 감각을 전달할 수 있는 번역이 없기 때문이다»; 「참신하고 중요한 문제를 제기하는데 힘쓰고 창조적이고 흡인력 있는 역사를 서술하여 다음 세대 역사가를 설득할 수 있어야 新淸史는 성과를 거둘 수 있으며, 만문 당안을 해독할 수 있어야 그 독특한 수확을 얻을 수 있다」⁸¹⁾는 점을 연구자들이 심사숙고 할 가치가 있다.

「新淸史」의 함의는 기존의 연구 성과를 정합한 후 제기된 일종의 추세라 간주할

77) 彭嘉楨, 〈清代熱河地區巡幸活動的區域發展關係之研究〉(臺北:臺灣師範大學歷史研究所碩士論文, 2000年), pp. 1-15, pp. 223-225. 참조

78) 莊吉發, 〈淸史研究的前景-新史料의發現與新淸史研究〉, 《淸史論集(十七)》, pp. 159-198. 참조

79) 葉高樹, 〈久著十全贏樹績: 莊吉發敎授의 滿文敎學與研究〉, pp. 107-110. 이 외에 中正大學 역사학과는 2004년부터 滿文課程을 개설하였다. 甘德星이 담당하고 있다; 또 故宮博物院의 「滿文資料研讀班」은 2007년 이후 莊吉發의 학생 林士鉉이 담당하고 있다.

80) 莊吉發이 편역한 滿語敎材는 다원적이고 다양한 종류의 소재를 이용하였으며 臺北文史哲出版社에서 출판되었는데 최근 십년 간 출판된 서적은 《御門聽政-滿語對話選譯》(1999年), 《滿語童話故事》(2004年); 《滿語歷史故事》(2005年), 《滿語常用會話》(2006年), 《滿漢西遊記會話》(2007年)가 있다.

81) 歐立德, 〈滿文檔案與新淸史〉, p. 11.

수 있다. 이에 앞서 신청사가 제기한 연구 방향은 일본, 대만 혹은 중국에서 이미 일부 학자들이 이와 관련된 주제로 논저를 지속적으로 발표하였다.⁸²⁾ 그러나 미국 학자들이 「新淸史」 개념을 계통화, 이론화한 이후에야 청사학계에 커다란 영향을 미쳤다. 대만에서도 적지 않는 신진 연구자들이 최근 10년 간 신청사 연구에 종사하였으며 이후 청사 연구의 주요한 방향이 될 것이다.

4. 「淸史工程」에 대한 반응

중국의 역대 官撰正史는 역사학의 측면에서 보면 사료를 보존하고 공개하며, 천여 년 간 불변한 사학 전통을 유지한다는 의의가 있다; 정치적 작용의 차원에서 말하자면 정권의 정통적인 지위를 나타내는 심층적인 의미가 함축되어 있으며, 정권이 그 정당성을 논술하는 중요한 수단이다. 청조의 《明史》 편찬은 順治2년(1645)먼저 《明史》館을 설치하는 詔를 내린 것에서부터 乾隆4年(1739)완성되기까지 95년의 시간이 걸렸다. 전통 중국에서 가장 시간이 많이 소모된 관찬 정사였고, 그로 인해 官方은 풍부한 사서 편찬의 경험을 축적하였으며⁸³⁾ 후세에 또한 매우 높은 평가를 받았다. 중화민국이 건립된 후 民國 정부는 1914년 淸史館을 설치하고 淸史를 편찬하였으나 시국이 동요하여 審訂을 하지 못한 시기, 즉 1927년에 未定本을 《淸史稿》의 명의로 출간하였다. 비록 「易代修史」라는 단계적 임무는 완성하였으나 여러 가지로 비난을 받아 금지당하는 운명을 맞이하였다. 그 후 정치국면이 급변하였기 때문에 청사고를 대체하는 사서 편찬 작업은 지체되어 진전을 보지 못하였다.

1949년 국민정부가 대만으로 이전한 후 官方은 자금을 마련하여 대규모로 《淸史》를 손질하는 작업을 진행하였다. 모두 세 차례에 걸쳐 진행되었다; 1960년에서 61년까지 국방연구원이 주재하여 關內本 《淸史稿》를 다시 새로 정리하여 《淸史》라는 이름으로 출판하였다. 이는 중화민국 건국 50주년을 기념하기 위한 것이었다. 2. 1978년에서 91년까지 錢穆의 제안에 따라 國史館과 故宮博物院이 합작하여 「原文을

82) 歐立德, 〈滿文檔案與新淸史〉, pp. 4-5, p. 15.

83) 역사학계에서 《明史》 편찬 문제를 심도있게 논의한 학자는 많다. 喬治忠, 《淸朝官方史學研究》(臺北: 文津出版社, 1994), pp. 177-196 참조; 별도로 초기의 논저에 관해서는 黃雲眉, 〈《明史》編纂考略〉, 包遵彭主編, 《明史編纂考》(臺北: 臺灣學生書局, 1968), pp. 9-52; 李晉華, 〈《明史》纂修考〉, 同書, pp. 53-179; 陳守實, 〈《明史》抉微〉 包遵彭主編, 《明史考證抉微》(臺北: 臺灣學生書局, 1968), pp. 1-34.

이동하지 않고, 원본으로 원본을 교정하며 卷으로 卷을 교정하는」方法을 채택하고, 關外本 《淸史稿》에 校註를 부가하여 《淸史稿校註》를 완성하였다. 3. 1991년 이후 國史館은 《淸史稿校註》 및 淸의 國史館 檔案과 淸史館 檔案에 의거하여 《新淸史》 편찬 계획을 계속 추진하여 〈本紀〉와 〈志〉의 일부를 완성하고, 인쇄 제작하여 국사관에 보존하였다.⁸⁴⁾ 전술한 「漢籍電子文獻資料庫」 가운데 「新淸史·本紀資料庫」는 바로 《新淸史》 계획의 성과에 속한다. 2000년 이후 대만 정부가 국사에 대한 함의를 새로 定位하여, 國史館의 작업 중심은 대만사로 옮겨갔고 청사를 새로 편찬하는 계획은 보류되었다.

《淸史稿》校註 작업에서부터 《新淸史》에 관한 계획을 추진하는 과정까지 편찬 작업에 참여했던 학자들은 사서 편찬에 관한 의견들을 지속적으로 개진하였다. 1980년 故宮博物院의 圖書文獻處는 校註를 담당했던 莊吉發을 인사 이동시켜 〈清代國史館的傳記資料及列傳的編纂〉을 발표하도록 하였는데, 故宮博物院이 현재 소장하고 있는 청대 國史館의 열전 자료의 분류와 사료의 출처 및 그 가치를 소개하였다. 그 내용은 다음과 같다: 朱絲欄에 본기와 열전을 서술하였고 각종 열전을 편집한 원고와 열전 편찬을 위해 취한 각종 傳記 資料의 傳包 및 열전을 편집하기 위해 彙鈔한 長編 檔冊 등은 또한 열전 원고의 편집과 進上 과정을 설명하고 있으며, 나아가 청대 國史館이 편집한 열전은 한편으로는 《淸史稿》의 오류를 교정할 수 있고 한편으로는 《淸史稿》에서 누락된 부분을 보충할 수 있다고 지적하였다.⁸⁵⁾ 다음으로 《新淸史》 계획이 연구, 토론되는 단계에서 莊吉發은 《淸史稿》가 이미 널리 퍼져있고 참고할 가치가 있다고 보고, 만약 청사를 다시 편찬한다면 인력과 자료 수집의 한계로 인해 단기간에 완성할 수 없다고 인식하였다; 《淸史稿》를 底本으로 삼아 청사를 다시 편찬하면 기본적으로 《淸史稿》 증정판에 불과하여, 여전히 그 구조에서 철저히 벗어날 수 없다고 보고 《淸史稿校註》를 기초로 청대 國史館의 紀·志·表·傳의 稿本을 저본으로 삼아야 보다 나은 차원에서 청사를 보완하여 편찬할 수 있을 것이라 주장하였다. 소위「整修」라는 구상은 다음과 같다: 淸代 國史館의 초고본은 傳統 紀傳體 史書의 體例, 筆法에 부합하기 때문에 그것을 저본으로 삼아야 하고; 淸史館의 稿本과 《淸史稿》에 포함된 새로운 사료를 폐기해서는 안되며; 《淸史稿校註》는 이미 官書와 대조·조사했기 때문에 사료가 이미 선별되어 있으니 참

84) 馮明珠, 〈從《淸史》到《淸史稿校註》-中華民國政府遷臺後整編《淸史》之經過〉, 《淸史論集》, 下冊, pp. 1101-1130.

85) 莊吉發, 〈清代國史館的傳記資料及列傳的編纂〉 《幼獅學誌》, 16卷1期, 1980年 6月, pp. 153-182.

조해야 한다. 이 세 가지 방법을 모두 이용해야 실행 가능하다.⁸⁶⁾ 清史의「整修」이념은 「以稿校稿」 방법을 확대한 것을 모방하여 다시 만든 것이라 할 수 있는데, 당시 편찬 작업에 참여한 집단이 받아들인 것 같다. 이는 또한 王恢의 〈整修《清史稿·地理志》之商榷〉,⁸⁷⁾ 王宇清的 〈《清史稿·輿服志》整修記〉,⁸⁸⁾ 및 莊吉發의 〈整修清史芻議-以清史本紀爲例〉 속에 구체적으로 나타나 있다.⁸⁹⁾

한편 국사관에서 《清史稿》의 校讀, 標點 및 校閱, 註釋 등의 작업을 책임졌던 胡健國은 근래 中國의 第一歷史檔案館 館藏의 檔案이 연속 출판되고 入關 이전 시기 일부 滿文檔案이 한문으로 번역된 점을 감안하여 다시 《清史稿校註》를 검토하여 사용할 필요가 있다고 인식하였다. 이에 〈《清史稿校註》補-太祖本紀〉, 〈《清史稿校註》補-太宗本紀一〉, 〈《清史稿校註》補-太宗本紀二〉 등의 논문을 저술하여⁹⁰⁾ 일부 校註 항목을 부가하고, 새로운 사료의 공표가 校註 작업에 도움이 된다는 점을 설명하면서 《清史稿校註》가 지속적으로 발전할 공간이 있기 때문에 완벽하게 만들어 질 수 있다는 점을 보고하였다. 청사 整修에 대해 胡健國은 이전의 《清史稿校註》 작업에 참여한 경험에 근거하여 〈由本紀看清國史到《清史稿校註》-官修正史的省思〉에서 《清史稿·本紀》가 《清國史館黃綾本·本紀》를 저본으로 삼았고 《黃綾本》은 歷朝《實錄》에서 편집한 관계로 대조의 결과 통상 《黃綾本》은 맞아도, 《清史稿》가 반드시 맞는 것은 아니고; 《黃綾本》이 틀리면 《清史稿》는 반드시 틀리며, 《黃綾本》역시 《實錄》의 원뜻에 충실하지 못함을 지적하였다. 청대 國史館과 清史館이 풍부한 자료를 소장하였으나 사관이 전력을 기울이지 않았고, 조사·입증해야 하는 책임을 다하지 못하여 관찬 사서의 내용이 정확해야 한다는 기본적인 요구를 충족시킬 방법이 없었음을 볼 수 있다.⁹¹⁾ 이후 사서 편찬에 종사하는 자가 반드시 경계해야 할 것이다.

86) 莊吉發 〈整修清史芻議-以清史本紀爲例〉 《國史館館刊》, 第14期, 1993年 6月, pp. 225-226, pp. 239-240.

87) 王恢 〈整修《清史稿·地理志》之商榷〉 《國史館館刊》, 第11期, 1991年 12月, pp. 179-220.

88) 王宇清 〈《清史稿·輿服志》整修記〉 《國史館館刊》, 第13期, 1992年 12月, pp. 225-238.

89) 莊吉發 〈整修清史芻議-以清史本紀爲例〉, pp. 225-240.

90) 胡健國 〈《清史稿校註》補-太祖本紀〉 《國史館館刊》, 第27期, 1999年 12月, pp. 21-47; 〈《清史稿校註》補-太宗本紀一〉 《國史館館刊》, 第29期, 2000年 12月, pp. 21-50; 〈《清史稿校註》補-太宗本紀二〉 《國史館學術集刊》, 第2期, 2002年 12月, pp. 1-22

91) 胡健國 〈由本紀看清國史到清史稿校註-官修正史的省思〉 《中華民國史專題論文集：第四屆討論會》(臺北：國史館, 1998年), pp. 925-958. 이와 관련된 것으로 《清史稿》의 기재가 부정확하다는 논의는 胡健國 〈《清史稿·本紀》記事繫日之商榷-以順治八至十年, 同治七年爲例〉 《國史館館刊》, 第18期, 1995年 6月, pp. 59-76.

淸사 연구자에 대해 말하자면 국방연구원은 일 년의 시간을 들여 《淸史》를 완성하였으나 《淸史稿》가 지닌 문제점 해결은 매우 국한적인 차원에 머물렀다. ; 《淸史稿校註》에 주석 2만여 조항을 첨가하는 성과가 있었으나 未定本의 지위에서 벗어나지 못하였다 ; 《新淸史》 계획이 중지되면서 청조에 대한 관찬 정사가 없다는 사실은 사람들에게 유감스러운 것이어서 中國의 「淸史工程」 계획이 결정되었을 때, 연구자들이 주목하고 기대한 것은 자연스러운 일이었다.

「淸史工程」에 대한 대만학자들의 시각에 관해서는, 우선 2003년 8월 25일에서 27일에 걸쳐 中國의 國家淸史編纂委員會가 북경에서 개최한 「兩岸學者淸史纂修研討會」에 陳捷先 등 13명이 참여하여 대륙학자들과 초보적인 차원에서 의견 교환이 이루어졌다. 같은 해 12월 27일에서 29일까지 宜蘭의 佛光大學에서 「第一屆淸史學術研討會」가 개최되었는데 대만학자 50여 명 과 일본·한국·미국의 학자 6명, 중국학자 20여 명이 참석하였다. 이들 학자 가운데 청사편찬위원회의 구성원은 14명이 참석하였다; 회의에서는 60여 편의 논문이 발표되었고,⁹²⁾ 회의 주최 측에서는 28일에 「兩岸學者淸史纂修座談會」를 마련하였다. 회의가 끝난 후 淸史編纂委員會는 11월 2일 臺北의 福華國際文教會館에서 재차 「兩岸學者淸史纂修座談會」를 개최하였다. 청사 편찬과 관련하여 몇 차례에 걸친 좌담회에서 참석한 학자들의 견해를 다음과 같이 귀납할 수 있다 : 1. 體裁, 體例方面에서 현재의 추세에 순응하여 전통 기전체와 현대의 章節體를 결합해야 한다 ; 또한 이번 청사 편찬은 《淸史稿》를 대체하는 것이므로 전통적인 正史 體裁를 채용해야 한다. 2. 사료의 정리와 운용에 있어 각처에 분산되어 있는 현존하는 당안과 문헌자료를 충분히 이용해야 하고, 더욱이 대만이 소장한 淸의 國史館과 淸史館 檔案에 주의해야 한다. 3. 편찬 단계와 방법 면에서는 먼저 史料長編에서 착수하여 사서 편찬의 예비 작업으로 삼고, 아울러 기재가 불일치한 역사 사실은 考異를 통해 사서가 사실을 기재할 수 없다는 불충분함을 보완해야 한다; 원고를 완성하기 전에 심의, 수정, 총괄 정리의 과정에 더욱 유의해서 사서의 품질을 유지해야 한다. 4. 사서 편찬 인원의 배양에 있어, 사서 편찬과 연구는 다르기 때문에 전문적으로 역사를 서술하는 기교와 재능이 필요하다. 청사를 編修하는 인재를 양성하는 것은 지체할 수 없다.⁹³⁾ 대만 사학계가 「淸史工程」의 진행에 관심을 가지고

92) 회의에 발표된 논문은 모두 64편이고 회의 종료 후 논문 내용에 따라 淸代史, 淸代臺灣, 旗人旗地, 淸代學術과 藝術, 淸代制度和 財經, 淸代 邊疆과 外交, 淸代史料, 淸史纂修 등의 주제로 분류하여 두권의 논문집으로 편성하였다. 陳捷先·成崇德·李紀祥 主編의 《淸史論集》(北京:人民出版社出版, 2006年).

93) 좌담회에서 아직 완성된 회의기록을 공개하지 않았다. 따라서 張永江의 「會議報導」를 인용한다.

있고 일부 학자들이 청사 편찬에 참여하고 있지만, 특히 體裁, 體例方面에 여전히 의견이 불일치하고 그중 대다수의 의견은 중국학자들도 국내의 각종 회합에서 표현한 적이 있다 ; 94) 사서 편찬을 주관하는 자가 각 방면의 의견을 광범위하게 수집한 후 여서, 청사 편찬을 위해 지금 진행하고 있는 항목을 보면 이미 정해진 견해가 있는 것 같다. 95)

「第一屆清史學術研討會」가 개최된 이후 馮明珠·莊吉發은 각자 사학사와 사료학의 측면에서 청사 편찬과 유관한 논문 수편을 발표하였다. 회의에서 발표된 馮明珠의 〈從《清史》到《清史稿校註》-中華民國政府遷臺後整編《清史》之經過〉는 국방연구원이 《清史》를 정리 편집한 이유, 體例과 내용 增補, 訂正, 調整의 상황 및 《清史稿校註》 추진 배경에 대해 실례를 들어 紀·志·表·傳의 校註方法和 인용한 자료의 출처를 설명하였다. 아울러 「時間은 《清史稿》에 대해 유리하여 前人の 《清史稿》에 대한 비판은 지금 보기에 문제가 되지 않는 것이 많다; 《清史稿校註》의 출현은 혹 전통적인 기전제로 청사를 편찬하려는 작업에 마침표를 찍었다」는 결론을 내렸다. 96) 이 말이 암시하는 뜻은 이후 청사 편찬에 관한 정사의 體裁, 體例에 구애 받을 필요가 없다는 것이다. 그 후 〈故宮博物院與《清史稿》〉에서는 《國民政府檔案》·故宮博物院的「會議紀錄」등의 자료를 이용하고, 北平故宮博物院이 접수한 清史館 및 그에 소장된 자료, 1970년에서 1983년까지 臺北의 國立故宮博物院의 「清代通鑑長編」편찬과 國史館과 합작한 《清史稿》校註 작업의 진전되었음을 지적하여 故宮博物院과 청사 편찬 간의 관계를 설명하였다. 97) 馮明珠는 《清史稿》校註 작업에 참가한 적이 있고 故宮博物院에 근무하였기 때문에 이러한 작업의 역사와 그 관련 사료에 대해 명확히 알고 있어 상세하게 서술하였다. 史書의 年表가 좋고 나쁜은 시

張永江, 〈蘭陽論清史-佛光大學第一屆清史學術研討會綜述〉, 《清史研究》, 2004年 第2期, 2004年 5月, pp. 115-116. 참조.

94) 청사 편찬에 관한 중국 학자의 의견은 國家清史編纂委員會體裁體例工作小組編의 《清史編纂體裁體例討論集》(北京:中國人民大學出版社, 2004年)참조.

95) 戴逸, 〈在臺北清史纂修座談會上的講話(2003年11月2日)〉 《清史編纂體裁體例討論集》, pp. 108-111.

96) 馮明珠, 〈從《清史》到《清史稿校註》-中華民國政府遷臺後整編《清史》之經過〉 《清史論集》, 下冊, pp. 1101-1130.

97) 馮明珠, 〈故宮博物院與《清史稿》〉 《故宮學術季刊》, 23卷1期, 2005年 9月, pp. 574-600. 이 글에서는 「清代通鑑長編」은 陳捷先이 지도하였고 구체적인 방법은 : 당시 조사하여 고증할 수 있는 滿·漢文으로 된 各種 史料는 年, 月, 日에 따라 편성되어 있어 먼저 초록하여 「清代通鑑長編資料卡」를 만들고 다시 순서에 따라 자료카드를 배열하여 그 異同을 판별하였다. 그리고 각각 고증하여 원고를 심사한 후 시간의 전후에 따라 옮겨 적고 冊을 만들어 전후 모두 641冊의 「清代通鑑長編初稿」를 완성하였다. 시간 범위는 滿洲 開國이후 順治年間까지이다.

간의 연결이 정확한지 여부와 일의 연계가 확실적인지 여부를 자세히 따져보아야 한다. 〈淸國史館人表屬辭則例-兼介國立故宮博物院所藏淸國史館檔大臣年表〉는 청의 국사관이 편찬한 14종의 문무 대신 연표와 연표를 논술하는 편찬 방법 및 연표에서 관원의 任免을 정할 때 사용한 「屬辭」의 정의 등을 소개하고 그와 더불어 《淸史稿·大臣年表》와 비교하였다 ; 98) 논문에 언급된 방법과 관련된 논의와 「屬辭」사용의 원칙은 연표 편찬자가 참고할 만하다. 〈巨編零簡, 匯爲淵藪-「史館檔」的滄桑與展望〉은 청의 國史館과 淸史館이 사서 편찬을 위해 남겨 놓은 檔冊史稿의 유래와 내용을 설명하고, 더불어 전란의 영향으로 인한 史館 檔案의 이동과 소장되어 있을 가능성이 있는 지점 및 현존하는 國立 故宮博物院의 史館 檔案의 내용과 출판계획을 서술하여 99) 사료 수집의 단서를 제공하였다.

史館檔案의 유래 및 그 사료적 가치에 관해서 莊吉發은 《故宮檔案述要》에서 이미 상세하게 논의하였다.100) 그는 또한 〈從現存史館檔看淸史的纂修〉에서 실례를 들어 淸代와 民國시기 찬술된 紀·志·表·傳을 분류하고, 그가 이전에 제기한 청사의 「整修」구상을 계속 서술하였다. 그리고 淸의 國史館과 淸史館이 풍부한 원본 및 관련 자료들을 소장하고 있으므로, 다시 청사를 편찬하던 혹은 청사를 보완하던 간에 모두 史館檔案을 소홀히 할 수 없고, 청의 國史館과 淸史館이 편찬한 淸朝國史와 《淸史稿》의 기초 위에서 청사를 보완해야 正史 편찬의 요구에 부합하고 비교적 쉽게 사서 편찬 공정을 완성할 수 있다고 인식하였다.101) 더 나아가 〈淸史館與淸史稿-淸史館未刊紀志表傳的纂修及其史料價值〉에서는 「淸史稿」에 이미 간행된 《淸史稿》와 淸史館 檔案 가운데 미간된 淸史稿 부분이 있고, 淸史館의 원본은 많은 사람의 손에서 나온 것이기 때문에 그 가운데 신뢰도가 높은 자료가 매우 많다고 지적하였다. 이를 정리하여 출판하고 《淸史稿》의 補編으로 간주해서 《淸史稿補編》으로

98) 馮明珠, 〈淸國史館人表屬辭則例-兼介國立故宮博物院所藏淸國史館檔大臣年表〉 《故宮學術季刊》, 22卷 3期, 2005年 3月 참조, pp. 92-126. 논문에서 소개된 史表는 〈直省總兵大臣年表〉, 〈直省提督大臣年表〉, 〈直省駐防將軍年表〉, 〈直省駐防副都統年表〉, 〈滿洲八旗都統副都統大臣年表〉, 〈護軍統領大臣年表〉, 〈前鋒步軍統領大臣年表〉, 〈侍衛處?儀衛大臣年表〉, 〈漢軍八旗都統副都統大臣年表〉, 〈蒙古八旗都統副都統大臣年表〉, 〈內閣大臣年表〉, 〈直省總督大臣年表〉, 〈直省巡撫大臣年表〉, 〈部院大臣年表〉 등 14종이다.

99) 馮明珠, 〈巨編零簡 匯爲淵藪-「史館檔」的滄桑與展望〉 《故宮學術季刊》, 24卷 4期, 2007年 6月, pp. 120-132. 현재 國立故宮博物院은 史館檔案의 數位典藏計劃을 진행하는 것 외에 2005년 11월 故宮博物院이 주최한 「文獻足徵: 第二屆淸代檔案與淸史研究國際學術研討會·綜合討論」에서 莊吉發이 건의하고 陳捷先이 附議하였으며 博物院 측이 수용하여 《國立故宮博物院典藏淸史館未刊紀志表傳稿本專輯》의 출판 계획을 추진하였다.

100) 莊吉發, 《故宮檔案述要》(臺北: 國立故宮博物院, 1983年), pp. 375-446.

101) 莊吉發, 〈從現存史館檔看淸史的纂修〉 《淸史論集》, 下冊, pp. 1057-1081.

명명하여 《清史稿校註》와 함께 이용하면, 풍부한 원시자료를 습득할 수 있어 대형 청사 편찬에 도움이 될 것이라고 주장하였다.¹⁰²⁾ 〈傳統與創新-清朝國史館暨民初清史館纂修列傳體例初探〉은 청대와 민국 초기 官方이 편찬한 청사는 모두 중국 역대의 정사 편찬 전통을 계승하였으며, 사서 편찬의 體例를 중시하여 전통을 계승한 측면도 있고 창조적인 측면도 있었음을 강조하였다. 그 가운데 열전의 편집은 역사 인물의 분류 편성에 집중하여 한편으로 大臣列傳은 시대의 선후와 유사한 유형에 따라 傳을 편찬하였다; 한편으로는 歷代 正史의 合傳 體例를 답습하여 부문 별로 나누어 彙傳을 편집하였다. 表·傳 모두가 있는 자는 그 사람의 선악과 장단점을 알 수 있도록 하고; 傳은 있으나 表가 없는 자는 事蹟 있기 때문에 표창할 수 있으며; 表는 있으나 傳이 없는 자는 취조할 만한 가치가 없기 때문이라고 하였다. 淸의 國史館이 편집한 열전은 體例를 강구하고 書法을 중시하였다. 건륭 조부터 논란을 다시 쓰지 않았지만 각 군신 백관의 사실을 명확하게 서술하고 차례로 배치하여 그 사람의 功罪를 분명하게 밝혔다; 《清史稿》의 論贊을 보충·서술하여 요점을 취하였는데 이는 장점도 있지만 단점도 있다.¹⁰³⁾ 사서 편찬의 體例를 탐구하는 것은 淸史의 특색을

102) 莊吉發 〈清史館與清史稿-清史館未刊紀志表傳的纂修及其史料價值〉 《故宮學術季刊》, 23卷 2期, 2005年 12月, pp. 162-193. 莊은 여기서 《清史稿補編》에 대해 구체적인 방법을 제기하였다: 전체적으로 말하자면 먼저 출판동기, 條列와 凡例에 대해 설명하고 본편에 수록할 것으로는 淸史館의 미간 원본으로 국한한다고 설명하였다. 全書의 배열 순서는 紀·志·表·傳의 순서로 하고 먼저 總目을, 다음으로는 分冊目錄을 편집하고 표점을 찍어서 조판하여 간행한다; 淸史館가 보존한 淸 國史館의 紀·志·表·傳의 初輯本, 覆輯本, 進呈本, 黃綾定本은 滿·漢文本을 포함하고 있어 별도로 출판하여 嘉業堂鈔本의 《淸國史》와 함께 이용해야 한다. 항목 구분에 대해 말하면 1. 本紀의 경우 이미 출간된 《淸史稿》이 爽良覆勘本의 인쇄본을 이용하여 오류가 백출하여 《補編》은 金兆蕃, 鄧邦述 등이 纂輯한 呈閱本을 이용하였다. 2. 志의 경우, 淸史館 志書의 수량이 매우 많아 《淸史稿》의 이미 간행된 16종류 이외에 그 나머지 미간본 가운데 〈儀衛志〉稿本(이미 〈輿服志〉에 통합되었다)·〈國語志〉稿本(수록된 어휘가 많고 《淸文鑑》과 유사하여 志書 편찬 體例에 부합하지 않는다)이외의 부분은 모두 《補編》에 포함한다. 〈國語志〉는 다시 서술해야 하고 〈滿文源流〉를 奎善하여 권의 첫머리에 놓을 수 있다. 또한 문헌 자료는 滿文源流大略, 十二字頭, 滿文字書, 滿文譯本의 순으로 서술하고 經·史·子·集에 따라 분류해야 후세에 글을 수집하는 자가 고찰할 수 있다. 3. 表의 경우 이미 간행된 《淸史稿》의 13종 이외에 〈建州表〉·〈宰輔表〉·〈總理各國通商事務大臣表〉·〈恩封宗室王公表〉·〈宗室王公功績表〉·〈外藩蒙古回部王公表〉·〈外藩蒙古回部王公表傳〉·〈蒙古諸部表〉·〈疆臣表〉·〈督撫表〉·〈滿洲管旗大臣年表〉·〈領侍衛內大臣表〉·〈侍衛處鑾儀衛表〉·〈前鋒步軍統領表〉·〈各省提督表〉·〈各省總兵表〉·〈八旗護軍統領表〉·〈八期滿洲都統副都統表〉·〈八旗蒙古都統副都統表〉·〈八旗漢軍都統副都統表〉·〈各省駐防將軍都統表〉 등은 《補編》 속에 포함시킨다. 4. 傳의 경우 이미 간행된 《淸史稿》의 15종 이외에 현재 소장된 淸史館의 선별하여 등재하지 않은 〈宰輔列傳〉·〈疆臣列傳〉·〈儒學列傳〉·〈孝友列傳〉·〈隱逸列傳〉·〈逸民列傳〉·〈卓行列傳〉·〈醫術列傳〉·〈貨殖列傳〉·〈叛臣列傳〉·〈逆臣列傳〉·〈叛逆列傳〉·〈四王列傳〉·〈臺灣列傳〉 등은 포괄하여 《補編》에 수록해서 이미 간행된 《淸史稿》의 부족함을 보충한다. 《補編》의 구상은 2007년 집행하기 시작한 《國立故宮博物院典藏淸史館未刊紀志表傳稿本專輯》 출판계획으로 실현한다.

이해하는 데 도움이 된다. 莊吉發은 「整修」라는 일관된 이념을 견지하여 여러 해 동안 노고를 아끼지 않고, 각종 자료를 상세히 소개하여 청사 편찬에 도움이 될 수 있기를 기대하였다. 그러나 사서 편찬의 體例과 方法 면에 대해서는 청조가 중국 역대 최후의 왕조인 이상 「역대 기전체 정사 편찬의 전통을 이어서 청사를 편찬하는 것이 정확한 순서이다」라고 주장하였다.¹⁰⁴⁾

일찍이 1950년대 후반 중국 정부는 이미 청사 편찬의 구상을 제기하였는데 그 원인은 요컨대 다음과 같다. 지금까지 청대에는 아직 정사가 없고 《淸史稿》가 있을 뿐이다. 《淸史稿》는 확고한 것이 아니다. 편찬할 당시 당안을 보지 못했기 때문인데 당시 대량의 당안은 극비문서로 분류되어 있었다 ; 「《淸史稿》의 관점 또한 문제가 많다. 왜냐면 그것은 청의 유신들이 편찬한 것이기 때문이다」, 「총괄하면 이 사서는 비교적 문제가 많아 정사로 남길 수 없기 때문에 청사 편찬이 필요하다」.¹⁰⁵⁾ 「正史」편찬이라는 중대한 계획은 여러 차례 풍파를 겪어 40여 년이 지난 후에야 실현될 기회가 있었다. 그러나 다시 「正史」라고 명명하지 않고 「大型淸史」로 개명하였다.¹⁰⁶⁾ 청사 편찬의 定位가 바뀌었기 때문에 體裁, 體例에 관해 격렬한 논쟁이 야기되었다. 國家淸史編纂委員會는 이 문제를 회피하기 위해 고심한 것 같다. 만약 새로 편찬한 청사를 「官修正史」로 定位하면 중국의 전통에 따라 紀傳體가 유일한 선택이므로 논의가 분분해서는 안된다. 토론이 필요한 것은 紀·志·表·傳의 구조 아래 「무엇을 서술해야 하는가?」이다. 만약 「大型淸史」 혹은 소위 「國家修史」라고 하면 紀傳體·編年體·紀事本末體 혹은 章節體를 막론하고 임의로 선택해야지 지지를 구하거나 언론을 정돈하는 것에 고심하지 말아야 한다. 일을 주관하는 자가 생각해야 하는 것은 결심을 내린 후 「무엇을 서술하려고 하는가?」 혹은 「무엇을 써야만 하는가?」라는 것이다.

「淸史工程」에서 함께 사용하고 있는 「易代修史」와 「盛世修史」를 보면 「易代修史」는 왕조 교체 후 정권에 정통성을 부여하려는 사상의 산물이다. 紀傳體의 「관찬정사」가 그 표지이다 ; 「盛世修史」는 통치자가 文治를 행함을 부각하기 위한 것으로, 각종 형식과 體裁의 「관찬정사」는 昇平의 단계에 도달하게 한 업적을 장식하는 것이 된다.

103) 莊吉發, 〈傳統與創新-淸朝國史館暨民初淸史館纂修列傳體例初探〉 《故宮學術季刊》, 25卷 3期, 2008年 3月, pp. 70-121

104) 莊吉發, 〈傳統與創新-淸朝國史館暨民初淸史館纂修列傳體例初探〉, pp. 120.

105) 戴逸, 〈纂修淸史·此其時也〉 《淸史編纂體裁體例討論集》, 上冊, pp. 6-9.

106) 〈季羨林教授等十三位專家關於纂修大型淸史致李嵐淸副總理的信(2001年4月6日)〉, 《淸史編纂體裁體例討論集》, 上冊, pp. 26-28. 참조

양자는 모두 「관찬」에 속하지만 그가 내포한 정치적 의의와 용도가 다르다.¹⁰⁷⁾ 당연히 이것은 「易代」와 「盛世」를 분명하게 양분해야 한다는 것을 의미하지 않는다. 게다가 「盛世修史」를 강조한 나머지 「易代修史」와 연계하려고 고심하면 「관찬정사」는 紀傳體라는 함정에 빠질 것이다. 또 「主體工程」과 「基礎工程」에 대해 말하면, 「主體工程」에 속하는 「大型清史」는 定位가 모호하기 때문에 사람들이 의심하고 염려하도록 만들었다; 다만 그 내용 의 구조가 이미 확정되어 적극적으로 진행되고 있기 때문에 외부인이 말참견을 할 필요가 없고, 성과가 아직 출판되지 않았기 때문에 비판하는데 치중 할 필요는 없다. 「基礎工程」에 속하는 檔案, 文獻整理는 계획 초기에 이미 충분히 청대의 각종 당안을 이용한다는 원칙을 확정하였다.¹⁰⁸⁾ 아울러 史籍과 논저의 정리에까지 확대되어 근래 國家清史編纂委員會가 서명하고 출판한 《檔案叢刊》, 《文獻叢刊》, 《圖錄叢刊》, 《研究叢刊》, 《成果匯編》, 《清史論著目錄系列》 등 300종은 청사 연구의 진전에 공헌하고 있어 긍정할 만한 가치가 있다.

대만의 청사 연구자에 대해 말하면 「清史工程」에 대한 논의는 2003년의 좌담회에서 촉발되었다; 그 후 이 계획에 참가 여부를 막론하고 피차간에 아직 공개적인 토론은 없는 것 같다. 별도로 莊吉發을 예로 들면 그의 연구 성과는 국제 청사학계에서 중시되고 있지만 「盛事」의 工程으로 간주되는 이 작업에 참가하지 않는 것을 선택하였다. 관건은 사서의 體裁와 定位에 대해 그가 견지했던 것에 있었는데, 실제 指標性적 의의를 지니고 있다. 讀史者나 治史者 모두가 알고 있듯이 역사적 상황 파악에는 시대의 특징이 중요하다. 과거 3·4천년의 중국역사 진보과정에서 政體는 封建·帝制·共和 세단계로 변천하였다. 司馬遷의 《史記》는 위로 五帝에서 아래로

107) 余英時는 「盛世修史」와 「易代修史」에 대해 일찍이 예리한 비판을 가하였다: 「소위 盛世라는 것은 바로 스스로 최근 경제 발전 상태가 양호하기 때문에 盛世에 진입했다고 하는데, 도대체 盛世가 무엇인가? 국내의 학자들 또한 회의적이며 이것은 당신 자신이 스스로에 견주어 성세라고 말하는 것이다. 소위 스스로에 견주어 盛世라는 것은 文革과 大躍進時代에 비해 낫다는 것으로, 도대체 중국이 이미 盛世에 진입했는지의 여부에 대해서는 문제가 많다」: 「이것은 그가 이미 새로운 왕조이고 또한 확고한 왕조여서 前代의 역사를 편찬한다는 것을 표시한다. 상황이 이와 같은지의 여부는 정치 영역의 문제라서 나는 말하지 않겠다. 그러나 나는 맨처음 그가 신분을 변신하여 스스로를 一代 王朝의 계승자로 변화시키려는 것이고 이 관념 그 자체는 황당무계하고 또한 非마르크스주의적이라고 말할 수 있다». 그 외에 논문에서 《清史稿》는 당연히 만족할 수 없지만 일종의 자료 彙集라고 지적하고 진행 중인 청사는 역사관점이 정치적으로 제한을 받고, 사서 편찬의 인제가 한정적이고 편폭이 과대하기 때문에, 단언컨대 廢紙이고 진정으로 가서 보려고 하는 사람이 있을 리가 없다고 주장하였다. 余英時, 〈重修清史沒必要且荒謬〉, 〈<http://www.epochtimes.com/b5/4/10/13/n688785p.htm>〉, 2004, 10, 13. 참조

108) 中國第一歷史檔案館, 〈清代檔案與清史修撰〉 《清史研究》, 2002年 第3期, 2002年 8月, pp. 1-10; 鄒愛蓮, 〈清史纂修工程與檔案的整理利用〉, 《清史論集》, 下冊, pp. 1093-1100. 참조

漢初까지를 다루고 있으며 本紀·世家·書·表·列傳의 體例를 개창하여 封建時代 과도기에서 帝制時代까지의 역사를 서술하였다; 班固의 《漢書》는 오로지 西漢 왕 조만을 대상으로 역사적 사실을 기록하였다. 封建諸侯가 역사무대에서 퇴출당하였으므로 紀·志·表·傳을 고쳐 帝制時代가 도래하였음을 표시하였다; 《淸史稿》의 편찬은 帝制에서 공화제로 급변한 상황에서, 전통 기전체로 구시대의 종지부를 찍었으니 크게 비난할 수 없다. 다만 그 성과가 동시대인에 의해 받아들여지지 않았을 뿐이다. 史書의 體裁를 새로 만드는 것은 1912년 및 그 이후 共和政體·民主政體·人民民主專政政體에 관한 사서를 편찬할 때의 과제이다.

《淸史編纂體裁體例討論集》에 논문을 발표한 학자 가운데 걸핏하면「中國의 사서 편찬의 전통」을 말하면서도, 곳곳에서 「封建 帝王의 思想을 타파하자」고 주장하는 자가 있는데, 이는 중국학자들의 전통 사상과 의식 형태 사이의 모순을 반영한다. 어쩌면 역사적 맥락에서 사고하여 《淸史稿校註》를 관찬 청사를 정리한 것으로 간주하고 세미콜론을 찍어야 할 것 같다; 만약 학술계에서 만족하지 못하면 莊吉發이 제기한 「整修」의 방식을 고려하여 관찬 정사로서 청사에 정식으로 마침표를 찍어도 무방할 것 같다.

5. 결 론

최근 10년 이래 대만의 청사 연구는 대만에 소장되어 있는 풍부한 원시자료와 더불어 檔案·史籍의 디지털화의 진전과 적지 않은 신진 학자의 연구로 수적인 면에서 급속히 발전하였다. 질적인 면에서 비록 심도 있는 평가가 필요하지만, 연구자 층이 두터워졌다는 전제 하에서 양이 많아지면 질적인 수준이 향상된다는 상황이 머지않아 실현될 것이다. 그러나 기능이 훌륭한 全文資料庫가 부단히 확충되면서 걱정되는 문제는 일부 연구자들이 자료의 기초를 피상적인 주제의 검색에 두거나, 혹은 대량의 자료로 미사여구나 군더더기 말로 논문을 작성하는 것에 치중하여 해독과 해석 능력 배양을 소홀히 하는 것이다. 그의 利弊得失은 이후 계속 관찰해야 알 수 있을 것이다.

다음으로 미국 학자들이 제창한 「新淸史」연구도 약간의 반향을 불러일으켰다. 연구자들은 일면으로 「新淸史」가 제기한 문제에 대해 대화를 진행하면서, 일면으로는 「

新清史」가 제기한 방향에 따라 계속 연구를 심화시켜 나갔다; 滿文檔案 독해 능력을 강조하는 것은 대만학자들도 결코 뒤떨어지지 않는다. 든든한 근거를 마련하는 작업이 계속 진행 중이다. 그러나 설명이 필수적인 문제는 「新清史」의 연구 방향이다. 주로 정치사, 민족사에 집중되어 있고 단지 연구 성과의 일부분을 접할 뿐이다. 경제사, 사회사, 문화사가 여전히 주류이고 새로 연구되기 시작한 법제사 또한 홀시할 수 없다.(「附錄 最近十年(1998-2008年)臺灣清史論著目錄」 참조)

거듭 대만의 중국사 연구자가 장기적으로 관심을 가진 청사 편찬 문제는 《清史稿校註》가 완성된 후 底本에 대한 논쟁은 일단락을 고하였으나 중국이 「清史工程」을 시작하면서 한차례 토론이 전개되었다. 주의할 가치가 있는 것은 논문을 저술하여 사서 편찬에 의견을 개진한 학자들 모두 일찍이 《清史稿》校註工作에 참여했던 사람들이다. 따라서 그들의 시각도 참고할 가치가 있다. 體裁와 體例에 관한 논쟁에서 莊吉發이 강력히 주장한 「整修」理念은 간단하게 품질을 보증할 수 있는 좋은 방법이다. 다만 중국이 정한 10년 계획의 시간과 과정이 이미 과반이 지나 변경할 여지가 없는 것 같다. 다행인 것은 그 「基礎工程」가운데 대규모의 출판 계획이 있어서 청사 연구에 일정한 공헌을 할 것이다.

이상에서 논의한 바는 각자 독립적인 것 같이 보이지만 실은 내재적으로 연계되어 있다. 清代檔案全文資料庫의 설치로 연구자는 편리하게 자료를 얻을 수 있다; 「新清史」는 당안을 이용하여 연구를 진행할 것을 강조한다. 더욱이 그것은 滿文檔案이다; 「清史工程」은 청사를 편찬할 때 이미 당안을 대량으로 삼입하려고 하였고 또한 적극적으로 당안을 정리, 출판하였다. 이러한 세 가지 상황은 모두 역사 당안에 초점을 맞추고 있다. 이로 인해 과거 10년 간 대만 혹은 국제 청사학계를 막론하고 각자 발전하고 상호작용하는 과정에서 연구에 대한 공통의 인식을 응집해 내었다. 또한 역사 당안을 청사연구의 기초로 삼아야 한다. 이는 이후 청사연구에서 치환할 수 없는 추세이다.

1990년대 以後 中國 清史學界의 社會史 研究動向

俞長根(慶南大學校 人文學部 教授)

1. 문제의 제기: 社會史 研究의 背景

이 글은 1990년대 이후 중국의 청사학계에서 서서히 각광을 받기 시작한 사회사 연구 방법론과 그 성과들을 검토하기 위해 쓰여진 것이다. 왜 사회사이며, 또 왜 1990년대에 그것이 중국 역사학계의 관심을 끌게 되었을까. 1)

이는 먼저 중국 내부의 정치적 조건의 변화와 관련이 있다. 실제로 개혁개방의 학문적 목표를 ‘사상의 해방’과 방법론상에 있어서 실사구시를 강조하였지만, 이러한 정책 목표가 역사학계에 통용되는 것은 적지 않은 시간이 흐르기를 기다려야 했다. 그들이 먼저 해야 할 작업은 국가에 의해 현재 주어진 목표를 실행하는 것이 아니라 과거에 주어졌던 마르크스 모택동의 지도 원칙에 따라 진행되어온 역사학을 재검토하는 일이었기 때문이다. 우리에게 影射史學으로 알려진 과거의 지적 전통 속에 익숙한 학자들에게 새로운 과업을 다시 수행하기는 그만큼 어려웠던 것이다.

따라서 사회사적 연구 방법론과 그에 따른 세부 주제에 대한 검토는 먼저 정치사 중심의 청대사 연구에 대한 반성에서 출발해야 할 터였다. 사실, 사회사적 방법론에 대한 관심은 마르크스 마오주의 역사관에 대한 하나의 대안으로 제시된 바가 컸다. 개혁 개방 이후 중국의 역사학계에서 사회사 연구를 주도하여 온 南開大學의 ‘사회사연구중심’은 등급, 군체, 신분 문제를 다루면서 이 과제들의 복잡성을 인정하였고, 본격적으로 사회사 연구의 필요성을 자각하였다는 점에서 사회사 연구의 출발 의도를 읽을 수 있다. 쉽게 말해 계급 문제만 해도 단순히 토지 소유로 귀결시킬 주제는 아니었던 것이다.2)

게다가 1989년에 닥친 천안문 사건은 그간 개혁 개방의 성과를 긍정적으로 바라보

1) 이 글은 상당 부분, 俞長根, 「中華人民共和國의 清史 研究 動向과 滿洲族의 支配問題」, 『中國의 清史工程 研究』(東北亞歷史財團, 2008)에 의존하여 쓰여졌다.

2) 「南開大學中國社會史研究中心 學術歷程」, 『<http://ccsh.nankai.edu.cn/noscript/ccsh/zxgk/xslc/xslc.htm>』 참조

면 국내외 중국 역사학계에 충격을 주었다. 공산혁명이나 공산정부에 대해 품고 있던 일부 기대마저 무너뜨린 것이다. TV를 통해 현장 장면을 지켜본 필자에게도 그것은 이해하기도 또한 해결하기도 어려운 과제였던 것이다.

역사가들에게 개혁과 개방이 마냥 좋은 조건을 만들어 준 것도 아니었다. 말하자면, 역사학도 본인들의 의도하던 그렇지 않던 간에 시장이 만들어 놓은 상황에 점차 밀려들어갔다. 역사학 중에서 정치사는 점차 인기 없는 분야로 고정되어 갔고, 심지어 역사학 자체가 젊은 학생들에게 매력을 주지 못하였다.³⁾ 이른바 대삼학번에 해당하는 1978, 79, 80년에 대학의 문에 들어와 불타는 열정으로 역사학의 이상에 심취해있던 오늘날의 중견 역사가들에게 이러한 상황은 사실 더욱 견디기 어려웠을 것이다. 이들은 좀 더 사회적인 맥락에서 과거를 점검하면서 새로운 패러다임을 찾으려고 노력하였다.

1990년대는 또한 외국학계와의 교류가 활성화된 시기이기도 하였다. 중국학자들의 해외 학술대회 참가는 이미 1980년대 초반에 실시되었다. 1982년에 근대사가들인 胡繩, 章開沅 등이 시카고에서 개최된 미국 아시아학회(Association for Asian Studies)에 참가하면서 교류의 물길을 텃고, 일본학계와는 청대 동북사의 연합 연구를 위해 1987년 瀋陽에서 遼寧省社會科學院과 일본의 東洋文庫內 동아문화연구센터 사이에 주요한 협의 사항은 체결하였다. 이들은 청대 동북의 경제 개발, 청대 동북의 만주족과 기타 소수민족 연구, 청대 동북의 문화발전, 청초 동북을 통일하는 과정 중의 역사지리와 청대 동북과 관련한 문헌자료 조사 등의 작업을 공동으로 하기로 협의하였다.⁴⁾ 정치문제는 피해갔다는 느낌을 받는다.

또 중국인민대학 청사연구소에서 간행하는 『清史研究』에는 정기적으로 일본의 청사연구개황을 소개하였는데, 이는 일본의 『史學雜誌』에 실린 글을 번역하는 것이었다. 시기는 크게 청대와 근대로 구분하고 청대의 경우 예컨대 1994년의 경우 개발과 이민, 지역사회, 사상과 학술, 중외관계로 구분하여 소개하였다. 근대의 주요 과제로서는 아편전쟁-서양의 충격- 근대의 개시라는 모델에 대한 반성을 하면서 중외관계, 정치, 경제, 사상과 언론 등으로 나누어 일본 학계의 성과들을 적극적으로 소개하였다.⁵⁾

3) 이개석, 「현대중국의 역사학(1949-1999): 사회주의 역사학의 모색과 좌절, 그리고 새로운 지평」, 『동아시아역사연구』 6(1999), pp.71-90.

4) 青乙, 「中日學者達成聯合研究清代東北史協議」, 『清史研究』 1988년 1기, p.53.

5) 艾平 편역, 「日本1994年清史研究概況」, 『清史研究』 1996년 제2기, pp.112-118.

한국과의 교류는 민두기 교수가 1988년부터 학술회의 혹은 방문의 명목으로 중국에 왕래하면서 교류의 장을 열었고, 필자는 1993년에 남경대학에서 개최된 제1회 비밀결사 국제 학술대회에 처음으로 참가하였다.⁶⁾ 사회사 연구의 주요 부분이었던 비밀결사 연구가 국제화되었다는 점에서 이 회의는 의미가 있었다. 이 해에는 임계순 교수의 저술이⁷⁾ 중국에서 출간된 바, 중국학계에서는 이를 수준 높은 저작으로서 중국내의 청사 연구에 적극적인 영향을 줄 것이라고 평가하였다.⁸⁾ 또 전형권 교수의 책 『중국근대사회경제사연구』(중국사회과학출판사, 1997)도 출판되어 한국학계의 청사 연구 중에서 사회사와 관련된 연구 성과들이 중국에 소개되었다.

청대의 사회사 연구와 관련하여 중요한 교류는 1995년 6월에 인민대학 청사연구소가 주최한 『中國與世界國際學術討論會』일 것이다. 당시 조직된 패널은 경제(8개), 변강민족(7개), 사회와 정치(9개), 사상문화예술(8개), 중외관계 및 기타(6개) 등이었던 바, 정치 분야를 사회와 묶은 것이나 경제와 변강민족을 별도의 패널로 둔 것은 이 회의 자체가 사회경제와 변강분야를 집중적으로 논의하겠다는 의도를 드러낸 것이라고 할 수 있다. 물론 당시 중국내외의 학계에서 조금씩 논의되고 있던 ‘세계 속의 청대사’를 본격적으로 검토하려는 주최측과 참여자의 의도도 이 회의의 주요한 목표였다고 할 수 있다.

이 회의에는 당시 중국 내외의 저명한 청대사학자가 대거 참여하였는데, 재해 전문가인 이문해 총장을 비롯하여, 프랑스의 P.E. 빌(Will), 미국의 피터 퍼듀(Peter Perdue), 마크 엘리엇(Mark Elliott), 제임스 헤비아(James Hevia) 등이 참석하였는데, 특히 이 중 피터 퍼듀나 마크 엘리엇, 제임스 헤비아 등은 이른바 ‘알타이학파’(Altai School)의 주요 멤버로 활동하고 있다.⁹⁾ 이들의 연구는 사실상 사회사의 전통을 청대사에 접목하여 청대를 긴 시간 속에서 구조적으로 보고 있었다. 필자 또한 천지회를 사회사적으로 파악하려고 있던 연구자였으므로 당시 참석한 상당수의 중국내외의 학자들은 대부분 청대 역사를 사회사 속에서 검토하여 왔다는 특색이 있었다.

또한 이 시기에는 오늘날 중국에서 사회사 연구의 주요 거점으로 성장한 천진남개 대학 사회사연구 중심에서 1996년부터 2007년까지 매해 거행한 국제학술회의도 중

6) 이에 대해서는 유장근, 「중국근현대 비밀결사 연구의 현황과 과제」, 『창해 박병국교수 정년기념 사학논총』(공주: 기념간행위원회, 1994), pp.189-204 참조.

7) 임계순, 『清朝八旗駐防興衰史』(생활 독서 신지 삼련서점, 1993).

8) 徐凱, 「中韓文化交流的新成果」, 『清史研究』 1994년 1기, pp.103-104.

9) 유장근, 「중화인민공화국 시기의 청사 연구동향과 만주족의 지배문제」, p.182.

국내의 사회사 연구를 성장시킨 동력이었다고 할 수 있다.¹⁰⁾ 이곳에서는 물론 통사적으로 사회사를 검토하여 왔기 때문에 청대의 사회사라는 맥락은 약하지만, 반면 환경이나 가족, 인구와 같이 특정 주제를 긴 시기 동안에 바라볼 수 있게 해주었다는 특징이 있다.

이러한 성과들을 모두 왕성한 대외교류 탓이라고는 돌리기는 어렵지만, 이와 관련하여 흥미 있는 통계가 하나 있다. 곧 중국의 국가나 개인 사이의 대외 교류가 활발해지면서 대외 관계의 논문도 크게 증가하였다는 사실이다. 1994년에 발표된 청사관련 논문의 6분의 1 정도가 중외 관계사였으며, 그 중에서도 서방 문명과의 교류가 큰 비중을 차지하였고 일본과의 교류, 유구 관계, 러시아 관계 등에도 관심을 기울였다는 점이다.¹¹⁾

요컨대 중국의 청대사가들은 개혁 개방이라는 대세 속에서 세계학계와의 교류에 나서지 않을 수 없었고, 이는 그들 자신이 어떤 형식이든지 외국의 연구 성과를 의식하지 않을 수 없도록 만들었다. 곧 자신들의 지식생산물을 국내 뿐만 아니라 세계의 유통시장에 내맡긴 형식이었다.

2. 社會史 研究 主題의 多樣性과 그 意味

그렇다면 중국학계에서 사용되는 사회사는 어떤 개념인가? 중국학자들이 말하는 사회사적 연구 방법은 주로 프랑스의 아날학파의 개념이었으며, 이는 1930년대의 ‘사회사논전’ 시기에 논의되었던 마르크스주의적 사회경제사와 다른 점이었다. 곧 아날학파의 사회사는 종합적이고 整體的이며, 장기적인 요소를 중시하여 ‘정치에 의거해 사회를 보는 것이 아니라, 사회에 의거하여 정치를 본다’는 점에 있었다. 이에 따라 지역 사회의 내부 변화를 중시하고, 사회 상층부 뿐만 아니라 상하를 모두 중시하면서 종래의 혁명사 모델에서 사회사 모델로 전환하였다. 또 다른 하나의 범주는 전문 분야의 연구로서 사회사 개념인 데, 이는 정치 경제, 사회, 문화 등의 편의상으로 구분된 연구 분야로서의 사회사를 의미하기도 한다.

10) 天津南開大學 社會史研究 中心 사이트(<http://ccsh.nankai.edu.cn/noscript/ccsh/xsjl/jiaoliu.htm>) 참조. 최근의 국제학술회의 주제는 “宋以后宗族形态的演进与社会变迁”(2007), “社会文化视野下的中国疾病医疗史”(2006), “中国历史上的环境与社会”(2005)이다.

11) 李尚英, 「1994年清史研究概况」, 『清史研究』 1995年 제9기, p.9.

중요한 사실은 혁명적 사학으로부터 이탈하여 사회사적인 연구 방법을 도입한다고 하더라도 이것이 과연 중국 역사학의 발전에 어떻게 기여할 수 있겠는가 하는 근본적인 문제제기였다.¹²⁾ 엄밀하게 말하자면 유럽의 사회사적 연구 방법론은 영국의 E.P. Thompson처럼 사적 유물론에 입각해 있기 때문에¹³⁾ 사회사를 도입한다고 해서 유물사관을 극복할 수 있는 것도 아니다. 중국은 또한 유럽의 역사적 전통과 달리 국가의 존재가 계급 문제뿐만 아니라 일상에 이르기까지 구석구석에 영향을 미치고 있기 때문에 이로부터 벗어나기 어려웠다.¹⁴⁾ 다시 말해 사회사의 중요 성과인 시민 사회 혹은 공공영역을 연구하기에는 국가라는 거대한 장벽이 가로 놓여 있었던 것이다. 사회로부터 정치를 본다고 하더라도 ‘국가- 사회’라고 하는 패러다임이 작동하기 어려운 시스템인 셈이다.

사회사의 이론이나 주제에 대한 새로운 접근, 서술 방식 등 구체적인 문제도 여전히 논란거리였다. 예컨대 1990년대 중반에 사회사 연구의 주요 과제로 떠오른 지역 사회사 연구의 경우, 연구 대상 자체가 한없이 넓은 데다, 여러 분야의 학자들이 연구해야 하는 난점이 있었으며, 이런 이유 때문에 지역사회사 연구는 역사학과 인류학 등의 공동연구가 절실하였고, 그 대상만 하더라도 인구, 자원, 환경 등 중요한 문제가 산적해 있었다. 이를 해결하기 위해서는 특히 서북 지역에서 중요한 물 문제만 하더라도 도시사, 의식형태, 사회동원형태, 환경 등을 종합적으로 검토할 필요가 있었다.¹⁵⁾

이러한 기본적인 문제점과 초기의 난제에도 불구하고 청대사학계는 각 분야에서 조금씩 사회사연구의 성과들을 축적해 나아가고 있었다. 중요한 성과 중의 하나는 일상사였다. 예를 들면, 불우한 향신의 생활을 묘사한 行龍의 논문은 山西省 太原에 살던 劉大鵬의 『退想齋日記』를 기초로 하여 작성된 것이다.¹⁶⁾ 1891년부터 쓰기 시작하여 1942년에 끝난 이 일기에 따르면, 劉大鵬은 1894년에 거인이 된 이후 1903년까지 세 차례에 걸쳐 회시에 응시하였으나 결국 낙방의 고배를 마셨고, 거의 20여 년 동안 塾師로 생계를 도모하였지만, 만년에는 그것도 여의치 않아 농사와 장사로 힘든

12) 姜涇, 「社會史: 新的史學範式與新的通史觀念」, 『史學月刊』 2004년 제2기, p.95.

13) 안해균, 「E.P. Thompson의 사회사 방법론」, 『한성사학』 제16집(2003), p.57.

14) Susan Naquin and E.S. Rawski. *Chinese Society in the Eighteenth Century* (Yale: Yale University Press, 1987), pp.ix-xii. 아마 이 책은 필자가 접한 책 중에서 청대사를 사회사라는 틀을 통해 분석한 최초의 책이었다고 생각한다. 한국어판은 정철웅, 『18세기 중국사회』(신서원, 1998), 중국어판은 韓書瑞、羅友枝著, 『十八世紀中國社會』(江蘇人民出版社 2008年 8月 第一版).

15) 胡英澤, 郝平, 「“跨區域研究”的區域社會史」, 『清史研究』 2005년 제2기, pp.118-120.

16) 行龍, 「懷才不遇: 內地鄉紳劉大鵬的生活軌跡」, 『清史研究』 2005년 제2기, pp.69-80.

세월을 보냈다. 그의 일생에서 중요한 것은 개혁이나 혁명이 아니라 과거제의 운명이나 신사의 일상적 존재 방식 등이었다. 그렇기 때문에 행룡의 논문 서술 방식도 ‘문제의식’에 굳이 집착하기 보다, 일상생활을 편안하게 묘사할 수 있는 歷史敘事 방식을 채택하였다.

일상생활에서 개개인의 활동 범주가 되는 지역 사회 생활의 연구도 사회사가 낳은 성과일 것이다. 예컨대 劉小萌은 청대 北京에 거주하던 旗人들의 香會에 대한 연구에서 기인들의 향회 조직이나 회수, 회비 문제들을 검토하였는데, 이는 일반적 차원에서 기인들이 어떤 생활을 하면서 존재하고 있었던가를 잘 보여주고 있다.¹⁷⁾ 유감스럽게도 청말의 기인들의 삶에 대해 우리는 대체로 무지하다. 우리들은 기껏해야 관료체계의 상부에서 전개된 만한 관계라는 정치 구도 속에서 그들을 관찰하는데 익숙해 있기 때문이다. 실제로 청말 民國 초기에 북경 시민의 3분의 1이 넘는 만주 기인들이 어떻게 시대의 변화에 적응해 나갔는가를 이해하는 것은 여전히 큰 과제이다. 그 자신도 만주기인 출신이었던 소설가 老舍(1899-1966)는 중화민국 초기에 몰락한 기인들의 참담한 삶을 소설의 소재로 삼았다.¹⁸⁾ 이들 소설 속에서 몰락한 만주기인들 중 여성은 기녀나 하인으로, 남자는 집꾼 등으로 전락하여 근근이 연명해 가는 가련한 존재로 묘사되어 있다.

사회 조직에 대한 연구 중에서 비밀결사는 인민공화국 초기부터 그 계급적 민족적 성격 때문에 주목을 받아온 분야이다. 백련교와 같은 종교결사나 천지회 등의 회당이 이에 속한다. 이 때문에 사회사 연구 중에서도 중시되어왔으며, 그 전통은 지금도 이어지고 있다.¹⁹⁾ 반면 최근의 연구 중에서 흥미 있는 것은 예컨대 천지회의 기원 설화를 민간 이야기와 관련시켜 논의하는 논문들이 나오고 있다는 사실이다.²⁰⁾ 이는 천지회 연구의 탈정치화를 보여주는 사례이거나 전체적으로 결사를 민중의 삶과 조직 속에서 이해하려는 노력의 일환으로 생각된다. 최근 한국에서도 중국학계의 논쟁거리였던 천지회의 기원 문제를 그 판본과 내용 구성, 변화 등으로 나누어 검토한 연구가 있으므로²¹⁾ 기왕의 민간 결사 연구도 사회 전체의 맥락과 관련시켜 전개될

17) 劉小萌, 「清代北京旗人與香會」, 『燕京學報』 2002-12.

18) 김수진, 「라오서의 『正紅旗下』에 나타난 滿洲族旗人 의식 연구」, 『중국어문논역총간』, 20(2007.2), pp.355-377.

19) 이에 대해서는 이은자, 『중국민간 종교 결사, 전통과 현대의 만남』(책세상, 2005); 유장근, 『근대 중국의 비밀결사』(1996, 고려원) 참조.

20) 유장근, 「중화인민공화국시대의 청사 연구동향과 만주족의 지배문제」, pp.158-159.

21) 이평수, 「청대비밀결사 천지회 연구」(성균관대학교 대학원 사학과 박사학위 청구논문, 2008), pp.35-107.

것으로 생각하며, 이러한 연구 경향은 20세기 전반기의 결사 연구에서도 진전되고 있다.²²⁾

1990년대 중반 이후에 등장한 사회사 연구 중에서 주목할 만한 분야는 사회 복지 혹은 재해 구제 부분이다. 이 부분은 1980년대까지 역사가들의 손이 제대로 미치지 못하였다. 그 이유는 이 연구가 주로 인민공화국의 존재 의미와 그 역할에 대한 도전과 비판을 의미하였기 때문이다. 인민의 복지를 책임지고 있는 공산당 체제 아래 사회복지나 자선, 구제 등을 다루는 일이 쉽지 않았고, 특히 민간 종교 단체나 청말의 기독교 단체에 의한 자선 복지 활동에 대한 연구는 더 더욱 어려웠다. 이는 사회 구제에 대한 연구가 이미 1920년대에 시작되어 점차 흥성해지기 시작하였으나 1950년대부터 1970년대에 정체되었던 데에서도 그 점을 짐작할 수 있다.²³⁾ 재해와 구제 문제에 대한 접근이 어려운 이유는 또 있었다. 예컨대 재해는 단순히 정치 사회적인 문제가 아니라 천문, 지리, 기후, 지질, 수리, 농업, 생태 등 종합학문적 성격을 띠고 있었기 때문에 역사가들의 접근이 용이하지 않았던 것이다.²⁴⁾

그러나 이러한 제약 요소들은 사상 해방이라는 분위기와 국가와 사회의 필요에 따라 점차 견히어 갔다. 또한 재해와 자선 문제는 사회사가들에게 국가, 지역 사회, 엘리트, 네트워크 등 국가와 사회의 변화를 장기적으로 연계시켜 검토할 수 있다는 매력이었기 때문에 관심의 대상이 되고 있다. 좀 더 현실적인 이유는 끊임없는 재해의 증가와 국가의 복지 체제 미비에 따른 사회안전망의 결핍이다. 대약진 시기의 재앙도 그랬거니와 1990년대에 들어 급증한 자연 재해 및 개혁 개방에 따른 복지 부분의 개인적 부담 증가는 정부나 사회에 큰 과제였다. 예를 들면 1990년대에 들어 법륵공을 비롯한 기공이 크게 인기를 끈 이유는 도시 노년층의 증가, 국가복지 축소, 건강에 대한 관심의 증대 등에 있었으나, 이 과제는 과도한 비용 때문에 국가가 나서서 쉽게 해결할 수 없었다.²⁵⁾ 또한 많은 자료집의 편찬도 이 연구를 가능하게 하였다. 관방 문서 뿐만 아니라 각종 당안, 방지, 족보, 각종 자료 회편, 문집, 신문 등을 활용할 수 있게 되었던 것이다.²⁶⁾

22) 박상수, 『중국혁명과 비밀결사』(심산, 2006); 손승희, 『근대중국의 토비세계』(창작과비평사, 2008) 등 참조.

23) 张丽芬, 「近十年来国内明清社会救济史研究综述」, 『历史教学问题』, 2006年 第5期, pp.85-89

24) 朱澍, 「二十世紀清代災荒史研究述評」, 『清史研究』 2003년 제2기, pp.104-119. 이 논문에서는 약 150건의 논저를 분석하고 있다.

25) 俞長根, 「現代 中國에 있어서 法輪功의 發展 樣相」, 『中國史研究』 52(2008.2), pp.183-225.

26) 龍學工, 「清史研究正在走向社会深层 —— 陈桦、刘宗志著《救灾与济贫:中国封建时代的社会救助活动(1750-1911)》读后-」, 『安徽史学』 2006年 第6期, p.127.

18세기 중반기부터 신해혁명 무렵까지 약 160여년이라는 긴 시간 동안 단순한 荒政을 넘어 사회 救濟라는 체제가 지역사회에서 어떻게 구축되어 갔을까. 陳樺와 劉宗志는 이에 주목하여 국가의 구제 체제, 식량 비축제도, 방재 공정과 조치, 사회의 특수 집단에 대한 부조와 구제, 정부 주도하의 민간 활동 등에 대한 검토를 통하여, 사회 구제 활동이 근대화되어 가는 추세에 있었다고 논증하였다.²⁷⁾ 종래의 정치사적 시각에서 보면 이 시기는 청조가 쇠망의 조짐을 보였고, 아편전쟁에서 패배하였으며 개혁과 혁명의 소용돌이가 몰아치고 있던 때였다. 말하자면 그들의 연구는 우리가 학계의 통설로 받아들여 왔던 정치적 흐름과는 상이한 결론을 내리게 되었던 것이다.

장기적 사회변화라는 관점에서 서술된 사회구제 관련 논문으로서는 吳滔,²⁸⁾ 李文海·朱濤²⁹⁾ 등의 연구를 주목할 필요가 있다. 吳滔는 康熙 10년(1671)에 江南의 嘉定 寶山 지구에 기근 구호를 위해 임시로 설립된 粥廠, 곧 죽배급소가 청말에 이르러 鄉이나 鎮을 대체하여 ‘廠域’을 가지는 향진자치 기구 수준으로 변하여 간 사정을 검토하고 있다. 그것은 지역사회에서 빈민, 궁민, 재민들에게 나누어줄 죽창이 계속 필요하였던 상황을 반영한 것이고 이 수효는 점차 증가하면서 복수화 제도화하여 갔다는 것이다.

이문해 등의 논문은 종래 의화단 운동에 대한 분석 방법과 다르게 전쟁 난민과 구제 차원에서 검토하고 있다. 구제의 주체로서 강남 지방의 紳商을 설정한 필자들은 이들에 의한 활동이 서양의 홍십사회, 곧 적십자회의 구제 모델을 차용한 것이었고 이것이 바로 근대 공공사업의 중요한 특징이라고 규정하고 있다.

나아가 이 전쟁은 청정부와 전쟁 당사국만의 문제는 아니었다. 인근의 대한제국은 전쟁물자를 공급하는 바람에 물가가 폭등하였고, 일부 한국인이 인부로 팔려가 학대를 당하는가 하면, 북부 변경민은 의화단 세력과 만주에 진출한 러시아 세력으로부터 약탈과 살해를 당하였다. 한국인들의 청조에 대한 배외 운동은 피할 수 없는 것이었다.³⁰⁾ 다시 말해 의화단 전쟁은 청조내의 문제만이 아니라 동아시아 전역에 큰 영향을 끼친 재난이었으나, 중국이나 일본의 역사학자들의 시야에는 이런 부분이 잘 들어 오지 않는다.

27) 陳樺·劉宗志, 『救災與濟貧:中國封建時代的社會救助活動(1750-1911)』(중국인민대학출판사, 2005)

28) 吳滔, 「清至民初嘉定寶山地區分廠傳統之轉變- 從賑濟飢荒到鄉鎮自治」, 『청사연구』 2004-2, pp.1-16.

29) 李文海·朱濤, 「義和團運動時期江南紳商對戰爭難民的社會救助」, 『청사연구』, 2004-2, pp.17-33.

30) 차경애, 「의화단운동진압전쟁이 학구의 사회·경제에 미친 영향」, 『중국근현대사연구』 제23집 (2004.9), pp.53-93.

실상 의화단 연구는 그간 정치적인 사건이라는 범주를 크게 벗어나지 못하였다. 예컨대 기원문제, 성격문제, 청정부와의 관계 등이 연구의 중심이었고, 다시 이것이 향촌문화 혹은 지역의 특색과 연결되면서 외연을 확장하여 갔다. 그러나 재해와 구제라는 시각은 여전히 부족하였다. 그것은 분명히 근대기의 커다란 전쟁 재해였다는 사실을 상기해보면, 역사가의 시각은 이제껏 좁은 울타리에 갇혀 있던 셈이다.

사회 구제나 자선 활동에 대한 연구는 최근 중국에서 활발하게 논의되고 있는 ‘공공영역’ 혹은 ‘시민사회’론과 연계되면서 더욱 활기를 띠고 있다.³¹⁾ 이는 미국학계의 관련 연구를 소개하거나³²⁾ 일본³³⁾ 대만의³⁴⁾ 저술을 번역하여 소개하면서, 그것을 중심으로 명청시대나 청말 민국 초기의 자선조직이 내포하고 있는 공공성이나 국가와 사회에서 맡은 역할을 논의하는 데에서도 드러난다. 최근 들어 대학에 제출된 석박사 학위논문 중에도 청말 민국 시기에 중국인에 의해 발전된 구제, 자선 뿐만 아니라 홍십자회 등의 활동을 다룬 논문이 상당수에 달한다.³⁵⁾

환경사를 사회사의 범주에 넣을 것인가 혹은 별도의 독립 영역으로 다룰 것인가에 대한 논란도 있으나, 아날학파가 말한 바와 같이 환경 자체가 장기지속적이며 복합적인 영역이라는 점에서 사회사의 맥락에서 인구, 자원, 이동, 개발, 식량 등과 연계시켜 검토할 필요가 있다. 이런 점에서 환경사는 근대 역사학이 구축한 정치사적 서술 뿐만 아니라 민족과 국경까지도 초월하여 역사를 장기적이고 넓은 시·공간적 맥락에서 파악하도록 도와준다.³⁶⁾

중국의 역사가들도 환경사를 ‘대표적인 창신 분야이자 학문간 융합분야’라고 지적하고 있다.³⁷⁾ 1990년대 후반기부터 시작된 환경사 연구는 외국의 연구가 사실상 큰 영향을 미치고 있지만,³⁸⁾ 이에 대한 현실적인 관심은 아무래도 증대되는 생태환경의

31) 王笛, 「滿清長江上游地區公共領域的發展」, 『歷史研究』 1996-1; 許紀霖, 「近代中國的公共領域: 形態、功能與自我理解— 以上海為例」, 『史林』 2003-2; 朱英, 「試論近代市民社會產生的模式— 兼論中國近代市民社會雛形的生成特點」, 『開放時代』 1998-3 등 참조.

32) 于新忠, 「中國的民間力量與公共領域— 近年中美關於近世市民社會研究的回顧與思考」, 『學習與探索』 1999-4.

33) 小浜正子, 『近代上海的公共性與國家』(上海古籍出版社, 2003).

34) 梁其姿, 『施善與教化: 明清的慈善組織』(河北教育出版社, 2001).

35) 李國林, 『民國時期上海的慈善組織研究』(華東師範大學 博士學位論文, 2003) 등 일일이 매거하기 어렵다.

36) 한국의 東洋史學界에서도 이 분야의 중요성을 인식하여, 2006년 冬季研討會의 주제를 “동아시아에서의 環境과 歷史”로 정하였다. 이 당시의 發表文은 『東洋史學研究』 99(2007.6)에 特輯으로 실려 있다.

37) 張明富 · 張穎超, 「明清社會經濟史與生態環境史研究的力作 — 讀《生態環境與明清社會經濟》」, 『中國社會經濟史研究』 2005년 제4기, p.100.

중요성에 반비례하여 날로 악화되는 중국의 생태환경 탓에 있을 것이다.

초보적 연구인만큼 현재까지 논의되는 주제들은 생태환경사의 이론체계, 연구 내용, 방법 등이며³⁹⁾ 일부에서는 구체적인 현장을 대상으로 하여 연구를 진행시키고 있다.⁴⁰⁾ 그것은 예컨대 물부족, 사막화 등 환경 악화로 인해 고통 받는 서북지방에서 이를 더 중시하여 2006년 8월에 대학과 연구소 등이 공동으로 개최한 <清代生態環境特徵及其區域表現國際學術研討會>에서 알 수 있다. 여기서 논의된 것은 청대 생태환경 연구에 필요한 이론과 방법, 생태환경 과학의 이론체계 활용, 생태환경의 개념, 人地 관계 등이었다. 또한 학문적으로 다루어야 할 영역으로는 구역성, 유역성, 농업 개간과 관개, 삼림보호와 벌목, 토지의 사막화, 황사, 도시, 이민, 에너지, 민족문화, 소수민족, 관민의 환경보호 의식, 관리정책 등이었다.⁴¹⁾

반면 여기서 논의된 미국적 방법론이 중국의 생태환경사를 분석하는데 적절한지에 대한 문제제기도 있었다. 이미 마르크스나 엥겔스도 인간의 자연계에 대한 반작용을 경고하였으므로 이 역시 소홀히 할 수 없다는 것이다. 환경사도 역사학의 한 분과이므로 마르크스주의 사학의 지도에 따라 연구하는 것이 바람직하다는 주장이다.⁴²⁾

확실히 청대의 생태환경은 18세기 이래 물, 토지, 산림, 초원의 개발과 이용이 증가함에 따라 이전에 비해 크게 변화하였다. 이를 촉진한 요인은 비슷한 시기에 진전된 인구 증가 및 이주와 관련되어 있고, 이러한 상황은 20세기 초에 이르러 더욱 악화되었다. 산맥, 구릉지까지도 이용상의 임계점에 도달하였는데, 그것은 당연한 것이지만 이미, 개간, 신작물의 확대 등을 통해 인구와 식량문제를 돌파하려고 시도하였기 때문이다. 따라서 청대에 진행된 인구증가, 이동, 개간, 신작물의 확대, 자원의 결

38) 예를 들면 미국과 대만에서 각각 출간된 Peter Purdue, *Exhausting the Earth, State and Peasant in Hunan, 1500-1850* (Harvard University Press, 1987); Vaclav Smill, *China's Environmental Crisis: An Inquiry into the Limits of National Development* (M.E. Sharpe, 1993), 『積漸所至; 中國環境史論文集』, (臺北: 中央研究院經濟研究所, 民國84년 6월); Mark Elvin and Liu Ts'ui-yung ed., *Sediments of Time; Environment and Society in Chinese History*, (Cambridge University Press, 1998) 등이 중요한 연구서이다. 미국의 환경사학에 대한 이론적 분석은 包茂宏, 「Environmental History: History, Theories and Methods」, 『史學理論研究』 2000년 제4기,

39) Bao Maohong, "Environmental History in China," *Environment and History* 10-4(November 2004), pp.475-499.

40) 예컨대 鈔曉鴻, 『生態環境與明清社會經濟』(黃山書社, 2004)는 청대 漢中府 지방과 섬서 남부에서 진행된 생태환경의 변화와 사회경제적 변화에 초점을 맞추고 있다. 이곳은 秦嶺 산맥의 산간 경제 구역이다.

41) 趙珍, 「中國環境史研究的新亮點 - 清代生態環境特徵及其區域表現國際學術研討會綜述-」, 『清史研究』 2007년 제1기, pp.122-124.

42) 梅雪芹, 「马克思主义环境史学论纲」, 『史學月刊』 2004년 제3기, pp.10-15.

핍과 그에 따른 사회적 긴장의 증가, 변강사회에 미친 영향 등이 전반적으로 검토된다면 청대사에 대한 기왕의 서술내용도 상당히 바뀌리라 생각된다. 또한 이러한 연구는 장기적인 전망 속에서 현대 중국이 안고 있는 생태환경의 문제와 연계되어야 할 필요가 있다.⁴³⁾

환경사 연구가 일천한 점에 비한다면, 그 중요성은 날이 갈수록 더욱 커지고 있다는 사실을 청사편찬 작업에 이 분야가 포함된 것에서 확인할 수 있다. 청사편찬의 ‘志’ 분야에 ‘生態環境志’가 포함되고 있으며, 이 작업으로 인해 『史記』의 8書나 『漢書』의 10志가 실린 이래 역사 편찬에서 중대한 창신이 일어났다고 평가하고 있다.⁴⁴⁾ 그러나 명칭은 다르지만, 『사기』나 『한서』에도 관련 부분이 존재하고 있었으니 지리지와 하거지 등이 그것이다. 이에 따라 『清史稿』의 災異志가 다시 조명되고 있으며, 그 저본이 된 대만 고궁박물관 소장의 「사관당」 재이 부분 20여책의 당안도 편찬관련자나 역사가들의 관심을 받고 있다.⁴⁵⁾

이상에서 본 바와 같이 일상생활이나 사회구제, 생태환경 등을 중심으로 청대사를 검토하게 되면 근대라는 것이 1950년대에 구체화된 ‘중국근대사’처럼 단순 명쾌하게 설명될 수도 없고 갑자기 만들어질 수 있는 발명품도⁴⁶⁾ 아니라는 사실을 알게 된다. 또한 전쟁에 따른 재난이나 환경상의 변화 등은 국가의 경계 내부에서만 검토될 수 있는 분야는 아니다. 의화단 연구에서 그것이 드러났으며, 최근에 중국에서 나타난 환경변화가 인근 지역에 미치는 영향을 보면, 동아시아적 시각을 확보하는 것 역시 요긴하다는 사실을 깨닫게 된다.

3. 清代史의 長期的 展望

청대에 관한 사회사적 연구가 활기를 띠면서 그간 사건이나 정치적 주제를 중심으로 검토해 왔던 청대사를 장기적으로 전망할 수 있도록 이끌었다. 그 중에서 최근에 주요한 화두는 아편전쟁의 의미일 것이다. 곧 아편전쟁이 ‘근대와 봉건시대’ 혹은 ‘근대와 전근대’를 구분할 수 있을 만큼 ‘획기적’ 사건이었는가 하는데 있다.

43) 俞長根, 「中國 近代에 있어서 生態環境史 연구」, 『中國現代史研究』 제3집(1997.6), pp.137-151.

44) 趙珍, 「生態環境史研究的與『清史-生態環境志』編纂」, 『社會科學戰線』 2007-3, pp.176ff.

45) 張明富·張穎超, 앞의 논문, p.101.

46) 유장근, 「중화인민공화국 시기의 청사 연구동향」, pp.141-145.

이와 관련하여 李侃의 다음과 같은 지적은 해학적이기까지 하다.

‘성세가 지나가니 청사가 완결되고 대포소리가 한번 나니 근대가 열렸네. 청대 전기를 연구하는 사람들은 그 쪽 이야기를 하고, 근대사를 연구하는 사람들은 근대 쪽만 이야기해. 그리하여 청대가 두 조각이 났네. 머리는 있고, 꼬리는 없는 청대사네.’⁴⁷⁾

이는 청대사가 1840년으로 마무리되는가. 그 이후의 시기는 청사에 속하지 않는가. 중국근대사는 청대 후기의 역사를 대체할 수 있는가 등등의 문제가 제기되었다. 청왕조는 어찌되었든 1911년까지 중국을 통치한 역사적 실체이므로, 아편전쟁 이후의 근대사와 청대사는 어떤 형태로든 상호 관계 속에서 검토될 수 밖에 없다는 것이다.

사회사의 시각으로 볼 때, 아편전쟁 이후를 근대사로 파악하는 것 자체가 문제가 된다. 좀 더 엄밀하게 말하면, ‘아편전쟁 이후 근대사’라는 이 전제는 학문차원에서 먼저 논의된 것이 아니라 공산혁명의 와중에서 제기된 정치적인 구호였다. 저명한 사회사가인 馮爾康에 따르면, 아편전쟁이 근대사의 획기로 등장한 것은 역사학자의 우환의식과 역사적 사명감이었고, 범문란을 비롯한 마르크스주의 역사가들은 제국주의의 침략 만행을 폭로하면서 혁명으로 중국을 구하여야 한다고 주장하였고, 이에 따라 아편전쟁 이전은 고대, 이후는 근대라는 두 부분으로 분리되었다는 것이다.⁴⁸⁾

실제로 아편전쟁이 가져온 변화는 중국의 역사교과서에서 애써 강조하는 바와는 달리 국부적인 것이었다. 동남 연해나 개항장에 밀려온 변화는 청제국 전체에서 보면 극히 일부의 변화를 상징하고 있었을 뿐이다. 또한 ‘제국주의 침략’이나 그에 따른 ‘근대화’가 중국 근대의 모든 주제를 포함하는 것도 아니며, 근대 연구의 유일한 문제의식도 아니었던 것이다.

또 아편전쟁을 강조하는 사고의 배후에는 해양국 중심의 역사관이 개입되어 있다. 다시 말해 1840년 이후 ‘승자’가 된 영국이나 미국과 같은 해양세력들은 이 전쟁을 통해 구질서의 청조를 바꾸어 놓은 획기적 의미로서 전쟁이 가져다 준 ‘근대성’을 강조하고 싶었던 것이다. 거의 동일한 시기에 청과 러시아와 서북지방에서 진전된 교역이나 충돌에 대해서는 미미할 정도의 눈길만 주고 있다. 청과 러시아는 1801년 러시아의 카흐타에서 새로운 무역장정을 제정하였으며, 이 시기에 양국무역은 사실상 보

47) 李侃, 「對研究清史的一點意見」, 『清史研究集』 1(1980), pp.16-19.

48) 馮爾康, 「清史研究與政治」, 『史學月刊』, 2005-3, p.7.

편화되어 있었다. 19세기 초에 청은 차잎, 대황, 직물, 비단 등을, 러시아는 가죽제품, 면방품, 모직물, 모피, 일용잡품 등을 각각 상대방에게 수출하면서 무역을 확대해 나갔으며, 이상과 같은 무역 확대가 1851년의 ‘청러 이리 타얼바하타이 통상장정’으로 확정되었던 것이다.⁴⁹⁾

더구나 청제국 전체의 시각에서 보면, 동남연안과 서북부는 서로 연동되어 있어서 어느 한 지역에서 일어난 변화만을 극적으로 강조할 필요는 없다. 말하자면 영국과 청이라는 두 제국은 팽창 과정에서 조우한 것이었다.⁵⁰⁾ 청조에게 있어서 다소 불운했던 것은 준가르 제국을 정복한 뒤 지배체제를 확고히 하는데 많은 국력을 쏟아 붓던 바로 그 시기에 정반대편에 위치한 연안에서 영국이 접근해 왔다는 사실이며, 이 해양 강국에 대처할 만한 전략도 제대로 갖추지 못하였던 데 있다.⁵¹⁾ 이러한 조건은 예컨대 1870년대에 청 정부를 곤경에 몰아넣었던 해방과 육방론의 논쟁에서도 유사하게 반복되었다.

이 전쟁으로 인해 그동안 청조를 중심으로 작동하여 온 이른바 ‘조공질서’에 대해서도 다시 생각하게 된다. 왜냐하면 이 전쟁으로 인해 ‘조공질서’가 급격하게 무너진 것도 아니었기 때문이다. 류큐에서는 일본에 의해 1875년에, 베트남에서는 청불 전쟁 이후에, 조선에서는 청일 전쟁 이후에야 비로소 종결되면서 전통적인 중국 중심의 국제질서가 변화하여 갔던 것이다.

이런 까닭에 우리는 책봉과 조공 체제가 과연 전통시대의 중국의 대외관계를 서술해 주기에 충분한 외교적 표준이었는지에 대해서도 재검토해야 할 필요가 있다고 생각한다. 중국의 청대사 연구자들은 공을 들여 서구의 식민개념과 중국의 조공개념과의 차이를 심지어 법사학이라는 새로운 틀을 만들어 강조하고 있지만,⁵²⁾ 그것은 이러한 이상적인 체제가 실질적으로 작동한 적이 있었는가 하는 의문이 있기 때문이다. 예컨대 책봉과 조공의례도 조선, 류큐, 베트남, 미얀마 등이 저마다 달랐으며, 이 의례조차도 베트남과 같이 ‘지켜도 그만, 지키지 않아도 그만’인 느슨하기 짝이 없는 제도였으며, 심지어 전쟁에서 승리할 경우 황제의 임명도 무시되었다. 필자는 이 때

49) 厲聲, 『新疆對蘇(俄)貿易史, 1600-1990』(新疆人民出版社, 1993), pp.42-51.

50) James Hevia, *Cherishing Men from Afar: Qing guest ritual and the Macartney Embassy of 1793* (Duke University Press, 1995), p.24.

51) Perter Perdue, *China Marches West: the Qing Conquest of Central Eurasia* (Harvard University Press, 2005), pp.551-555.

52) 張世明, 「新歷史法學的趣向: 清代宗藩關係多維透視分析」, 楊念群 등 主編, 『新史學: 多學科對話的圖景』(下), pp.608-640.

문에 전통시기의 중월관계를 ‘邦交’관계라고 부르는 것이 더 적절하다는 견해를 제시한 바 있는데,⁵³⁾ 그것은 베트남 스스로가 자국과 청조의 관계를 大邦과 小邦의 관계라는 맥락 속에서 파악하였고, 중국역사학계에서도 이 개념을 타당성이 있다고 인정하기 때문이다.⁵⁴⁾ 너무나 많은 변수가 있는 책봉과 조공 대신 ‘방교’를 큰 틀로 보고, 그 내부의 다양성을 검토하는 것이 청대의 대외 관계를 이해하는데 더 적합하다고 생각되며, 이러한 복잡성 때문에 중국의 청사편찬 작업에서도 대외관계 분야인 ‘志’를 ‘방교지’로 확정하였다.⁵⁵⁾

사회사가들이 ‘만들어진 근대’에 대한 문제 제기를 하게 되면서 아편전쟁 이후 = 근대라는 도식도 많이 흔들리게 되었다. 이와 관련하여 나타난 중요한 변화는 2002년 무렵부터 ‘晚淸史’가 청사의 영역으로 ‘회귀’하였다는 사실이다. 아편전쟁 이후 신해혁명에 이르는 시기를 ‘만청 70년’이라고 불러 왔지만, 혁명사 혹은 정치사 중심의 ‘근대사’에 대한 반성과 더불어 이른바 ‘만청사’와 중국고대사의 범주였던 ‘청전기 중기’와의 내재적 연계성이 더 드러나게 되었고, 근대의 하한도 연장되어 1949년까지 내려왔다. 1919년은 이제 분기로서는 거의 잊혀진 시기나 마찬가지로 되었다. 특히 인구사의 시각에서 보면 아편전쟁은 별다른 의미가 없는 전쟁이었다. 청대 인구는 17세기 중엽부터 19세기 후반기까지 하나의 온전한 인구발전기였고, 1880년대부터 20세기 중엽까지 새로운 발전 단계 혹은 과도기였기 때문에 청사와 근대사는 합작하여 새로운 길을 모색하여야 할 것이라고 제안한다.⁵⁶⁾

이러한 문제 제기는 외국에서의 새로운 연구 성과들이 중국내에 소개되면서 더욱 활기를 띠었으며 ‘중국근대’에 대한 새로운 기준도 여러 유형으로 제시되었다. 이에 따라 오랫동안 아편전쟁 전에 청조가 쇠퇴단계에 들어섰다고 간주되어 온 18세기 후반기의 몰락론도 다른 시각에서 바라보게 되었다.

캘리포니아 학파의 한 멤버인 미국의 경제사가 왕(R. Bin Wong)이나 일본의 미야지마 히로시는 근대의 기준과 상한연도를 통상적인 중국 역사가들과는 다르게 파악한다. 왕에 따르면 18세기에 중국경제는 유럽 정도의 수준에 도달하였다는 것으로

53) 俞長根, 「18世紀末 越中關係의 一研究 -西山黨事件을 中心으로-」, 『慶大史論』 創刊號(1985.2), pp.95-131; 『近代中國의 地域社會와 國家權力』(신서원, 2004)에 재수록.

54) 김형중, 「중화인민공화국에서의 평사편수」, 정혜중 등 공저, 『중국의 청사공정 연구』(동북아역사재단, 2008), pp.105-106.

55) 정혜중, 「중국의 청대 대외관계에 대한 연구시각- 조선과의 관계를 중심으로」, 『중국 역사학계의 청사연구동향 - 한국관련 연구를 중심으로 -』 중간발표회 보고서(동북아역사재단, 2008.10), pp.8-9.

56) 姜濤, 「晚淸史研究向下處去」, 『淸史研究』 2002-2, pp.1-8.

기왕의 역사학과 고전 경제학의 중국 경제 정체론을 수정하려고 하였다. 시장 경제의 발달, 농업의 상업화, 프로토 공업화의 진전 등에서 유럽과 중국은 큰 차이가 없었다는 것이다.⁵⁷⁾

미야지마 히로시 역시 근대란 세계사 차원의 문제라는 관점에서 파악할 필요가 있다는 전제 아래, 유라시아 규모의 세계경제라는 틀 속에서 내실이 형성된 시기를 16세기로 보고 있다. 16세기 이후 중국의 경제 발전이 제1단계라면, 19세기 중엽 이후의 근대란 제2단계에 해당되었다. 이러한 긴 시기 동안에 중국에서는 근면혁명, 벼농사, 토지에 대한 투자, 종자개량 등 농업상의 획기적인 변화가 일어났으며, 이 변화가 사회의 존재 형태 자체에도 영향을 주었다는 것이다. 곧 사회적, 정치적, 문화적 분야에 대한 구조적 변화가 초래되었던 시기였으며, 변화의 주요인 중의 하나는 정치적으로 평화가 유지된 데 있었다.⁵⁸⁾

이렇게 보면, 명청대의 사회경제적 발전은 세계사적으로 그리고 현대와의 관계라는 맥락 속에서 큰 의미를 갖는다. 곧 현대 중국 경제의 발전은 긴 시간 속에서 발전해 온 결과이지, 단시간에 이룩한 성과는 아닌 셈이다. 19세기 중엽 이후에 나타난 침체는 일시적인 데 지나지 않는다.

중국의 사회경제사가 중에서도 위의 연구 성과와 문제의식을 공유하면서 근대를 새롭게 정의하려는 노력도 함께 진행하였다. 예를 들면, 唐力行은 16-20세기에 중국 경제는 이미 근대사회의 범주에 들어갔다고 언급하였다. 유통영역의 변화는 눈여겨 볼만한 부분인데, 그는 특히 해외 시장과 국내 시장과의 관계에 더 유의하였고, 상인 계층의 정합성과 신흥 자산 계급의 형성, 전국적 범위의 시장체계 형성과 발전 등이 그 증좌였다.⁵⁹⁾

인구사가인 李伯重은 청대 전기에 강남 인민은 몇 가지 방식으로 이미 인구를 조절하고 있었으며, 이것과 경제 성장 사이에는 일종의 동반 관계를 유지하고 있었다고 파악하였다. 그리고 그 배후에는 근대사상, 조직, 기술 등이 발전하고 있었기 때문에 중국사회는 이미 근대화가 진전되고 있었다는 것이다.⁶⁰⁾

이에서 더 나아가 張研에 따르면, ‘선진 서구, 낙후 중국’이라는 유럽 중심적 역사관이야말로 해체되어야 할 낡은 유물에 불과하다. 그에 따르면 서구가 선진도 아니었

57) 강진아, 「16-19세기 중국경제와 세계체제」, 『이화사학연구』 31(2004), pp.16-31.

58) 미야지마 히로시, 「근대를 다시 본다」, 『창작과 비평』 120(2003년 여름호), pp.280-279.

59) 唐力行, 『商人與中國近世社會』(商務印書館, 2003).

60) 李伯重, 「清代前中期江南人口的低速增長及其原因」, 『清史研究』, 1996-2, pp.10-19.

고, 중국도 낙후 국가가 아니었으며, 산업화의 격차도 크지 않았다고 주장한다. 당시 유럽사회가 산업사회로 진입하였다고는 하지만, 이들 국가의 전체적 통치는 말단에까지 미치고 있었으며, 중세기에 오랜 전통의 민주 자치적 교구제도 존재하고 있었기 때문에 서방의 역사 표준이 과연 정확한 것인가? 에 대한 논의가 먼저 논의되어야 한다는 것이다. 그는 심지어 최근에 청대 사회사가들이 즐겨 사용하고 있는 ‘공공영역, 시민사회’라는 개념도 서구와의 비교 속에서 출현한 만큼 이 역시 근본적으로 검토해야 할 필요가 있다고 본다.⁶¹⁾

夏明方은 이 때문에, 18세기를 전후해서 중국의 근대가 시작되었다는 18세기 근대론에 대해 근대의 기준이 너무 다양하여, ‘이것도 근대, 저것도 근대’라는 범근대론이 오히려 근대의 특성을 제대로 파악하지 못하게 하는 것이 아닌가 하는 우려를 하고 있다. 나아가 이 논리 역시 과거와 같이 유럽적 근대의 기준을 다시 중국사 연구에 도입하려는 것으로 인식하여 그에 따르는 부작용도 비판하고 있다.⁶²⁾

좀 더 중요하고도 장기적 전망을 필요로 하는 분야는 청대의 영토 확장과 다민족 국가의 형성이다. 오늘날의 중국 헌법 속에 명시된 다민족 통일국가론은 사실상 청왕조가 현대 중국에 남긴 중요한 유산이며, 오히려 이 요소가 중국 근대의 기준을 설정하는데 훨씬 더 의미있다고 생각되기 때문이다.

오늘날 중국의 청사학계와 외국 학계 사이에 전개되고 있는 ‘滿清 帝國主義’ 논쟁은 바로 신장, 티베트 지역에 대한 군사 정복과 그에 따른 지배 방식, 내지화와 한인의 이주, ‘한화’ 등을 둘러싸고 복잡한 양상으로 전개되고 있다.⁶³⁾

요컨대 사회사가들이 전통사회의 발전이 도광 20년, 곧 아편전쟁이 발발하면서 멈추어버렸는가라는 식으로 문제를 제기하고 있는 것은 매우 당연한 것이라고 생각한다. 이들은 나아가 예컨대 명청사는 있는데, 왜 원명사는 없는가 혹은 명청사와 근대사의 상호 이해와 접근은 정말로 어려운가라는 문제도 자연스럽게 제기하고 있다. 사실 명 전기의 제도는 많은 부분에서 元朝와 직접적으로 관계가 있으며, 원과 명의 군제 역시 상당한 연속성이 있었던 데 비해 명청의 군제는 매우 달랐기 때문이다. 그 뿐만 아니라 황제의 성격, 제국의 지배 방식, 민족의 구성 역시 명청대는 유사성 못지않게 상이성도 크다.⁶⁴⁾ 필자는 여기에 덧붙여 청대와 현대 중국과의 유사성과

61) 張研, 「对中国18—19世纪历史研究若干问题的思考」, 『史苑』 电子期刊, 创刊号(2004), pp.1-19.

62) 夏明方, 「十八世紀中國的“現代性建构”」, 『史林』 2006-6월, pp.137-139.

63) 유장근, 「중화인민공화국 시대의 청사 연구동향과 만주족의 지배문제」, pp.184-191.

64) 趙世瑜, 『明清史與近代史: 一個社會史視覺的反思』, 『學術月刊』 2005-12, p.107.

역사적 연속성에 더 주목할 필요가 있다고 생각한다.

4. 마무리

필자는 이상에서 1990년대 이후 중국의 청대사학계에 나타난 변화 중에서 사회사적 연구에 대해 주목하였다. 중국역사학계에서 사회사는 두 가지 의미를 내포하고 있는데, 하나는 아날학파에서 발전시킨 방법론과 그 특징을 중국사 연구에 적용시키는 것이고, 다른 하나는 인간 사회 전체를 구성하고 있는 분야 중 사회 분야를 집중적으로 연구하는 것을 의미하고 있다. 따라서 연구 동향도 그간 중국 역사학의 주요 이론들이었던 마르크스주의 마오주의적 도그마를 비판하면서 그에 대한 대안으로 아날학파의 틀을 도입하는 흐름이 있으며, 국부적으로 사회 연구의 범주 속에서 외연을 넓혀 청대사를 이해하려는 흐름도 있다. 그 결과 청대사에 대한 이해의 폭이 넓어지고 깊이 역시 심화되고 있음을 확인할 수 있었다. 또한 청대사를 양분하고 있던 종래의 경직된 시대구분, 곧 아편전쟁을 획기로 보는 근대와 전근대의 경계선도 예전보다 약해져가고 있었다. 이는 청대사를 장기적으로 전망하는 데에도 도움을 주어, 청대사를 당대의 세계사와 연계시켜 파악하려 한다든가, 청대사의 전 시기에서 근대성을 포착하려는 시도 역시 활발하게 논의되고 있다. 그렇다고 해서 사회를 국가로부터 자율성을 가진 단위로 보는 단계로까지 나아가지는 않고 있다. 그것은 중국사회사학회가 공식적으로 밝힌 바와 같이⁶⁵⁾, 사회사 연구도 결국 국가가 제시한 정책 목표를 이행한다는 전제 아래 진행되고 있기 때문이다. 이런 제도가 청대사를 세계사적 시야 속에서 또한 현대와의 관계 속에서 보는 데 제약을 주고 있을 것이다.

65) 중국사회사학회, 「中國社會史學會 2005年度工作總結」, <http://www.moe.edu.cn/edoas/website18/53/info14653.htm>에 제출한 문건.